茨城県教育財団文化財調査報告第68集

都市計画道路3・4・2鉾田環状線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

烟田川波遺跡

烟田城跡

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第68集

都市計画道路3・4・2鉾田環状線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

烟田川波遺跡
烟田城跡

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は，産業，経済の発展に伴い，交通量の著しい増加による交通渋滞の緩和と地域の活性化をはかるため，県内の道路の整備を進めております。都市計画道路3･4･2鉾田環状線道路改良工事もその一環として計画されたものです。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，平成元年４月から平成２年３月にかけて都市計画道路3･4･2鉾田環状線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，烟田川波遺跡，烟田城跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料として，また教育，文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査および整理にあたり，委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会，鉾田町教育委員会をはじめ，関係各機関および関係各位から御指導，御協力を賜わりましたことに対し，深く感謝の意を表します。

平成３年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成元年度に発掘調査を実施した茨城県鹿島郡鉾田町烟田字川波1,315番地ほかに所在する烟田川波遺跡，烟田城跡の発掘調査報告書である。

2　烟田川波遺跡，烟田城跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。平成2年度初めの組織替えにより，従来の調査課（企画管理班，調査第一・二・三班・整理班）は埋蔵文化財部となり，その下に企画管理課，調査課，整理課をおき，調査課には，調査第一・二・三班の三つの班をおくこととなった。

理事長		礒田　勇	昭和63年6月～
副理事長		小林　元	昭和63年4月～
常務理事		小林　洋	平成元年4月～
事務局長		一木邦彦	平成元年4月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成2年4月～
企画管理課	課長	北沢勝行	平成2年4月～
	課長代理	水飼敏夫	平成2年4月～（昭和62年4月～平成2年3月企画管理班長）
	主任調査員	小河邦男	（平成元年4月～平成2年3月　企画管理班）
	主任調査員	小山映一	平成2年4月～
	係長	園部昌俊	昭和63年4月～
	主事	大部　章	（昭和61年4月～平成2年3月　企画管理班）
	主事	吉井正明	平成元年4月～
	主事	大貫吉成	平成2年4月～
調査課	課長（部長兼務）	石井　毅	平成元年4月～
	調査第三班長	倉本冨美男	平成元年度
	主任調査員	久野俊度	平成元年度調査
	主任調査員	緑川　正實	平成元年度調査
整理課	課長	沼田　文夫	平成2年4月～
	主任調査員	緑川正實	平成2年度　整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第3章の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，出土遺物については茨城県立歴史館の川井正一氏に，烟田城跡の堀・縄張り等については中世城郭研究会の三島正之氏にご指導をいただいた。

目　　次

序

例言

第１章　調査経緯……1

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査方法……1

1　地区設定……1

2　基本土層の検討……2

3　遺構確認……2

4　遺構調査……3

第３節　調査経過……3

第２章　位置と環境……5

第１節　地理的環境……5

第２節　歴史的環境……6

第３章　遺構・遺物の記載方法……10

第１節　遺構・遺物の記載方法……10

第４章　烟田川波遺跡……15

第１節　遺跡の概要……15

第２節　遺構と遺物……15

1　竪穴住居跡と出土遺物……15

2　土坑……73

3　地下式壙……74

4　堀……80

5　溝……80

6　その他の出土遺物……89

第３節　考察……97

1　竪穴住居跡と出土土器について……97

第５章　烟田城跡……104

第１節　遺跡の概要……104

第２節　堀と出土遺物……104

1　堀 ……104
2　土坑 ……106
3　溝 ……109
4　出土遺物 ……114
第3節　考察 ……120
1　烟田城跡の地理的環境 ……120
2　烟田城跡について ……120
3　烟田城跡の歴史的環境 ……122
結語 ……125

挿図目次

第1図　調査区呼称方法概念図……1
第2図　基本土層図……2
第3図　烟田川波遺跡・烟田城跡周辺遺跡分布図……8
第4図　烟田川波遺跡・烟田城跡遺構配置図……13・14

烟田川波遺跡

第5図　第1号住居跡実測図……16
第6図　第1号住居跡出土遺物実測図……17
第7図　第2号住居跡実測図……19
第8図　第2号住居跡竈実測図……20
第9図　第2号住居跡出土遺物実測図(1)　21
第10図　第2号住居跡出土遺物実測図(2)　22
第11図　第3号住居跡実測図……23
第12図　第3号住居跡竈実測図……24
第13図　第3号住居跡出土遺物実測図(1)　25
第14図　第3号住居跡出土遺物実測図(2)　26
第15図　第4号住居跡実測図……28
第16図　第4号住居跡出土遺物実測図……29
第17図　第5号住居跡実測図……30
第18図　第5号住居跡竈実測図……31
第19図　第5号住居跡出土遺物実測図……32
第20図　第6号住居跡実測図……34
第21図　第6号住居跡出土遺物実測図(1)　35
第22図　第6号住居跡出土遺物実測図(2)　36
第23図　第7号住居跡実測図……39
第24図　第7号住居跡竈実測図……40
第25図　第7号住居跡出土遺物実測図(1)　41
第26図　第7号住居跡出土遺物実測図(2)　42
第27図　第8号住居跡実測図……44
第28図　第8号住居跡竈実測図……45
第29図　第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……46
第30図　第8号住居跡出土遺物実測図(2)　47
第31図　第9号住居跡実測図……48
第32図　第9号住居跡竈実測図……49
第33図　第9号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)……50
第34図　第9号住居跡出土遺物実測図(2)　51
第35図　第9号住居跡出土遺物実測図(3)　52
第36図　第10号住居跡実測図……55
第37図　第10号住居跡竈実測図……56
第38図　第10号住居跡出土遺物実測図……57
第39図　第11号住居跡実測図……60
第40図　第11号住居跡竈実測図……61
第41図　第11号住居跡出土遺物実測図……61
第42図　第12号住居跡実測図……63
第43図　第12号住居跡竈実測図……64
第44図　第12号住居跡出土遺物実測図……65
第45図　第13号住居跡実測図……66
第46図　第13号住居跡出土遺物実測図……67
第47図　第14号住居跡・竈実測図……68
第48図　第14号住居跡出土遺物実測図……69
第49図　第15号住居跡実測図(1)……71
第50図　第15号住居跡実測図(2)……72
第51図　第15号住居跡出土遺物実測図……72
第52図　土坑・地下式壙実測図(1)……76
第53図　土坑実測図(2)……77
第54図　土坑実測図(3)……78
第55図　土坑実測図(4)……79
第56図　土坑出土遺物実測・拓影図……79
第57図　第1号堀実測図……81
第58図　第1号溝実測図……83
第59図　第2号溝実測図……84
第60図　第3号溝実測図……85
第61図　第5号溝実測図……86
第62図　第6号溝実測図……87
第63図　溝出土遺物実測・拓影図……88
第64図　遺構外出土土器拓影図(1)……91
第65図　遺構外出土土器拓影図(2)……92
第66図　遺構外出土土器拓影図(3)……93
第67図　烟田川波遺跡出土土製品実測・拓影図……94
第68図　遺構外出土石器・石製品実測図…95
第69図　遺構外出土古銭拓影図……96
第70図　烟田川波遺跡住居跡分布図……98
第71図　第Ⅰ期遺物実測図(1)……99
第72図　第Ⅰ期遺物実測図(2)……100
第73図　烟田川波遺跡第Ⅰ期住居跡規模・主軸方向……100

第74図　第Ⅱ期遺物実測図 ……101
第75図　烟田川波遺跡第Ⅱ期住居跡
規模・主軸方向……102
烟田城跡
第76図　第１号堀実測図 ……105
第77図　土坑実測図(1)……107
第78図　土坑実測図(2)……108
第79図　第１号溝実測図 ……110
第80図　第３・４号溝実測図……111
第81図　烟田城跡出土遺物実測図(1)……112
第82図　烟田城跡出土遺物実測・拓影図(2)
……113
第83図　烟田城跡出土土製品・石器・石製
品実測・拓影図(1) ……116
第84図　烟田城跡出土石器・石製品実測・
拓影図(2)……117
第85図　烟田城跡出土古銭拓影図 ……117
第86図　烟田城跡概念図
(鉾田町教育委員会) ……121
第87図　館跡位置図 ……123

表　目　次

表１　烟田川波遺跡・烟田城跡周辺遺跡
一覧表……９
表２　烟田川波遺跡土坑一覧表……74
表３　住居跡一覧表……96
表４　住居跡内出土主要土器一覧表 ……103
表５　烟田城跡土坑一覧表 ……106

写真図版目次

ＰＬ１　烟田川波遺跡・烟田城跡全景
烟田川波遺跡
ＰＬ２　第1・2・3号住居跡
ＰＬ３　第4・5・6号住居跡
ＰＬ４　第7号住居跡・出土遺物状況
ＰＬ５　第8号住居跡，第9号住居跡・遺
物出土状況
ＰＬ６　第9号住居跡遺物出土状況，
第10号住居跡・遺物出土状況
ＰＬ７　第11・12・13号住居跡
ＰＬ８　第14号住居跡，第15号住居跡・遺
物出土状況
ＰＬ９　第2・8・9・10・18・22・29・31号土坑
ＰＬ10　第1・2号溝，第1号堀
ＰＬ11　出土遺物 (1)
ＰＬ12　出土遺物 (2)
ＰＬ13　出土遺物 (3)
ＰＬ14　出土遺物 (4)
ＰＬ15　出土遺物 (5)
ＰＬ16　出土遺物 (6)
ＰＬ17　出土遺物 (7)
ＰＬ18　出土遺物 (8)
ＰＬ19　出土遺物 (9)
ＰＬ20　出土遺物 (10)
ＰＬ21　出土遺物 (11)
ＰＬ22　出土遺物 (12)
烟田城跡
ＰＬ23　第1・7・9・11・12・15・16・
18～22号土坑
ＰＬ24　第1号溝遺物出土状況，第3・4号溝
ＰＬ25　出土遺物 (1)
ＰＬ26　出土遺物 (2)

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

主要地方道茨城･鹿島線と主要地方道水戸･鉾田･佐原線は，鉾田町内を通過して県央と鹿行地域を結ぶ重要な役割を果たす道路である。近年，交通量の増加で鉾田町内を通るときは，しばしば交通渋滞を引き起こしている。さらに，道路沿いには人家が密集し，幅員を拡張することは極めて困難である。そこで，茨城県は，交通量の緩和と道路網の整備を図るため鉾田町串挽を起点として烟田･塔ヶ崎を結ぶ約6.1kmの環状線道路の建設を計画した。

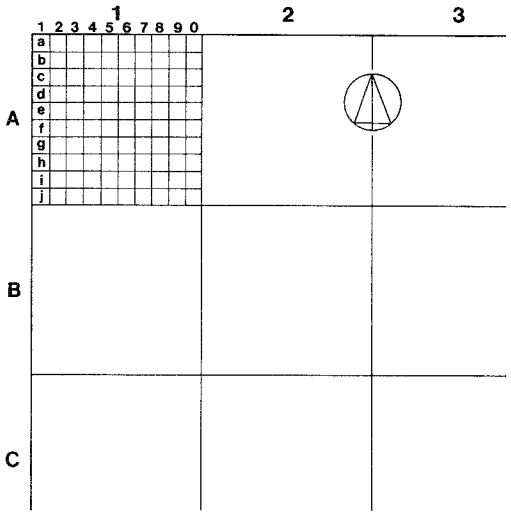
工事に先立ち，昭和61年7月21日，茨城県鉾田土木事務所は，鉾田町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し，鉾田町教育委員会は分布調査を実施し工事予定地内に烟田川波遺跡と烟田城跡の2遺跡の存在を確認し，同年9月2日，遺跡の取り扱いについては茨城県教育委員会（文化課）と協議されたい旨回答した。そこで，平成元年1月27日，茨城県教育委員会と茨城県（土木部都市施設課，鉾田土木事務所）は，文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果，現状保存が困難であることから記録保存の処置を講ずることとなり，調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は，茨城県土木部都市施設課と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し，平成元年4月1日から烟田川波遺跡（10,418㎡），烟田城跡（3,931㎡）の調査を実施することとなった。

第２節　調査方法

１　地区設定

発掘調査を実施するにあたり，遺跡および遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。なお，烟田川波遺跡，烟田城跡の2遺跡は，同一路線上に所在しており，また密接な関連が窺われるため地区設定にあたっては，2遺跡を一連の大調査区の方眼の中に組み入れることにした。

日本平面直角座標第Ⅸ系座標，Ｘ軸（南北）＋16,720m，Ｙ軸（東西）＋62,440mの交点を基準点として40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区（大グリッド）とした。



第１図　調査区呼称方法概念図

さらに，この大調査区を東西，南北に各々十等分して4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。

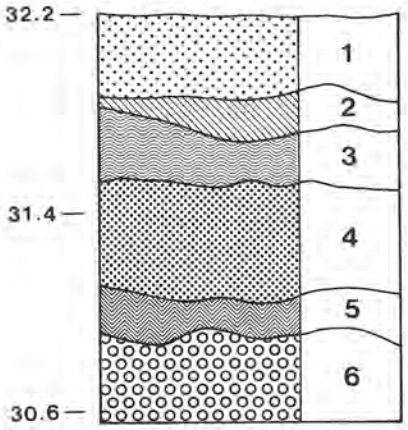
調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず，大調査区の名称は，北から南へ「A1区」，「B2区」のように呼称した。さらに，大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に，北から南へ「a」・「b」・「c」・・・「j」，西から東へ「1」・「2」・「3」・・・「9」・「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせて，「A1a1」区・「B2b2」区のように呼称した。

なお，基準点の測量杭打ちは，財団法人「茨城県建設技術公社」に委託した。

2　基本土層の検討

烟田川波遺跡の中央部，C3j4区内にテストピットを設定し，土層を観察した。烟田城跡においては，第5章の遺跡の概要で説明する。

第1層は表土（耕作土）で，25～35cmほどの厚さを有し，ローム粒子・炭化粒子を少量含む締まりの弱い褐色土であり，上層約10cmには腐植土も含まれている。第2層はローム粒子・炭化粒子を少量含む褐色土であるが，木の根などが入り込みやや軟らかく，締まり・粘性ともに弱い。第3層は，ソフトローム層で15～30cmの厚さを有する褐色土であり，ローム粒子・炭化粒子を少量含みやや軟らかく，少し粘性がある。第4層は，極めて締まりのあるハードローム層で40～50cmの厚さを有し，ローム粒子少量を含む褐色土である。第5層もハードローム層で，黄橙色や浅黄橙色の砂粒を含み硬くて締まりがある褐色土である。第6層も極めて締まりがあり，硬いハードローム層で，褐色を呈している。



第2図　基本土層図

3　遺構確認

遺構確認は調査区全域に幅1m，長さ約40mのトレンチを設定し，調査面積の16分の1，次いで8分の1の割合で試掘を行った。試掘の結果，東側から6か所目までは遺構が確認されなかったため，4分の1まで掘った。残りのトレンチからは，縄文式土器片，土師器，須恵器の破片とともに住居跡や溝の落ち込みが確認された。この結果をふまえて，重機による表土除去を実施したが，遺跡が東西に長く伸びていること，遺跡内にまだ耕作している畑が残っていることなどを考え，2回に

分けて実施した。重機で表土除去を実施したあと，人力による遺構確認を行い，住居跡や溝・土坑を確認した。なお，烟田城跡の堀は，重機による表土除去のあと，遺構確認を行った。

4　遺構調査

当遺跡における遺構の調査は，次の方法で行った。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け，4区に分けて掘り込む「四分割法」を基本とした。地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。堀・溝の調査は，適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し，掘り込みを実施した。土坑の調査は，長径で二分割して掘り込む「二分割法」で行った。

土層観察は，色相・含有物・混入物の種類や量，及び粘性・締まり具合等を観察して，分類の基準とした。色相の判定は，「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄　日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げについては，住居跡，堀，溝，土坑の各区と遺物番号，出土位置，レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の出土状況の平面実測は，水糸方眼地張り測量で行った。また，土層断面や遺構断面の実測は，標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の1を基本としたが，竈や部分的な微細図については10分の1の縮尺で作成した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては，野帳及び調査記録カードに記録し，さらに遺構カードに整理した。

第3節　調査経過

烟田川波遺跡・烟田城跡の発掘調査は，平成元年4月1日から平成2年3月31日までの1年にわたって実施された。以下，調査の経過について，その概要を月ごとに記述する。

4　月　　発掘調査に必要な事務所・現場倉庫の設置，調査器材搬入，作業員の雇用を行う。26日には，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って鍬入れ式を挙行した。早速，遺跡の一部にある山林伐開作業を行い，28日から試掘調査も平行して行った。なお，試掘は，遺跡面積の16分の1に相当する幅1mのトレンチを北側から設定し，遺構の検出を試みた。

5　月　　引き続き計6ケ所にトレンチを設け試掘を実施したが，北側斜面部には確認されず，4分の1まで試掘拡張をした。

6　月　　前月同様，西側に延長し試掘を行った。その結果，縄文式土器片や土師器・須恵器の破片，住居跡や溝の落ち込みが確認できたため，上旬より重機による表土除去を行って遺構確認作業を実施した。22日には遺構確認状況写真撮影を行い，住居跡の調査を開始した。

7　月　下旬までに住居跡10軒の調査が終了した。

8　月　住居跡の調査は，竈調査や平面図作成などの記録作業が中心となった。下旬からは，堀や溝や土坑の掘り込み作業に取りかかった。特に，人力による堀の掘り込みは，大変苦労した。

9　月　前月から引き続いて遺構調査を実施し，28日住居跡14軒をはじめとする畑田川波遺跡の航空写真撮影を行った。

10　月　残りの畑田川波遺跡の遺構調査を進めるとともに，3日より畑田城跡の試掘調査も行った。畑田城跡は一部竹林になっているため，伐開・残材処理等でかなりの時間を費やした。

11　月　畑田城跡でトレンチによる試掘を実施した結果，堀と土坑が確認された。

12　月　畑田川波遺跡は，残り半分の表土除去を行い，土坑の掘り込みにかかった。畑田城跡は，西側斜面部の表土除去とトレンチ試掘箇所の5か所の実測を行った。

1　月　畑田川波遺跡は，引き続き溝・土坑の調査を行った。畑田城跡は，中旬より重機による表土除去を行い，遺構の確認作業をした。

2　月　中旬までに畑田川波遺跡の調査は全て終了した。畑田城跡は，8日より重機による堀の掘り込みを開始し，並行して土坑の調査も行った。23日には，中世城郭研究会の三島正之先生を招き，堀の性格や畑田城の縄張りについて班内研修会を実施した。下旬から人力による堀の掘り込みを実施したが，降水等で水がたまるため排水ポンプをしばしば使用した。

3　月　3日には，現地説明会を開催し，遺構・遺物を一般公開した。9日には畑田城跡の航空写真撮影を実施した。その後，遺跡内の危険箇所(堀)の埋め戻しや補足調査，資料整理を行い，26日に作業員による作業を終了した。そして，調査器材類資料の搬出，事務所倉庫の撤去を行い，31日には一切の調査を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

烟田川波遺跡は，鹿島郡鉾田町大字烟田字川波1,315番地ほかに所在し，その南側に隣接して，烟田城跡が鹿島郡鉾田町大字烟田字川波1,305番地ほかに所在している。

鉾田町は，首都東京から北東約80km圏内に位置し，茨城県の南東部，鹿島灘に面して位置している。町域は，東西16km，南北13km，面積約170km²で，東西にやや長く，南東に向かって末広がりの形をしている。北は東茨城郡茨城町・鹿島郡旭村，東は鹿島灘，南は鹿島郡大洋村・行方郡北浦村，西は行方郡玉造町・東茨城郡小川町に接している。市街地は北浦の湖頭に位置し，古くから水陸交通の要衝の地として発達してきた。現在，当郡の太平洋岸を国道51号線が縦断し，市街地中央部を主要地方道茨城鹿島線，水戸鉾田佐原線が通っているほか，鹿島鉄道鉾田線・大洗鹿島線が運行しているなど鹿行地域北部の交通の要衝となっている。また，国・県等の公共機関が集中し，行政都市としての機能も有している。さらに，畑作を中心とした農業は，鉾田町の産業の中核をなしており，近年メロンをはじめとする施設園芸農業が急激に発達し，京浜市場を中心に全国に出荷されている。そして，鹿島灘沿岸は大竹海岸などの海水浴場や釣り場を有し，観光地へと発展している。

同町の地形は，巴川と北浦によって二分され，東部は鹿島台地，西部は行方台地がそれぞれ鹿島町・潮来町方面へ伸び，利根河口低地へと続いている。鹿島台地の西側には鉾田川が南流し，行方台地の東側に巴川が南東に流れて市街地で合流し，鉾田低地を形成している。両河川の支流がそれぞれの台地に樹枝状に入り込み複雑な地形を形成している。台地上は畑か平地林として利用され，両河川に接する低地部は水田に利用されている。鹿島台地の標高は20～44mであり，行方台地の標高は19～35mである。また，両河川との比高は7～31mである。

烟田川波遺跡は，鉾田町役場から南東に約1kmの地点にあり，南西に流れて巴川と合流し北浦に注ぐ長茂川と，同じく東西に流れて北浦の湖頭に注ぐ田中川に挟まれた標高25～33mの舌状台地の縁辺部に位置する。南西には沖積低地である鉾田低地が広がっている。当遺跡の位置する台地は，北側と南側に小支谷が入り東側には台地が延びている。標高は25～33mで，低地との比高は25～31mである。

烟田城跡は，烟田川波遺跡の南側に隣接しており，北から南にかけて谷津を形成している。標高9～25m，低地との比高は7～24mである。

第2節　歴史的環境

烟田川波遺跡・烟田城跡のある鉾田町には，古くから生活環境としての地形と水資源に恵まれていたため，先土器時代から近世にかけて多くの遺跡があり，「茨城県遺跡地図(1)」に記載されている。

先土器時代の遺跡は，鉾田川流域にある徳宿(とくしゅく)(2)遺跡から出土した尖頭器が報告されている以外，現在は確認されていない。

縄文時代になると，県内各地に貝塚が形成されるようになり，現在までに350か所ほど発見されている。当町においては14か所確認されているが，各貝塚とも発掘調査はほとんど確認されていない。この時代の遺跡は鉾田川と巴川によって開析された台地に広く分布している。

巴川流域には，早期～前期の串挽(くしひき)(3)貝塚があり，ハイガイ，マガキ，オキシジミ，ハマグリの貝類と胎土に繊維を含む土器片が出土している。中期では，ハマグリ等の貝類とか加曽利E式土器片が出土した烟田(かまた)(4)貝塚，ハマグリ・ウミニナ等の貝類と阿玉台式土器片，加曽利E式土器片が出土した権現平(ごんげんだいら)(5)貝塚，早期の沈線文系から中期の加曽利E式にかけての縄文式土器片が出土した梨ノ子木久保遺跡(なしのこきくぼ)(6)また坂戸(さかと)遺跡，青柳(あおやぎ)貝塚，中の宮遺跡，鳥栖(とりのす)遺跡等が存在する。

鉾田川流域では，中期の鉾田貝塚，飯名(いいな)貝塚，秋山遺跡，後期の石崎台遺跡，晩期の徳宿遺跡，鎌田遺跡等が存在する。

弥生時代の遺跡は，徳宿遺跡，塙(はなわ)遺跡，安塚(やすづか)遺跡，烟田遺跡(7)が確認されている。いずれも，鉾田川またはその支流に近い台地縁辺部に位置しており，集落を形成していたものと考えられる。出土遺物を見ると，徳宿遺跡と塙遺跡から中期の洗足式土器が，安塚遺跡からは洗足式土器と後期の土器(8)（十王台式土器に独特な附加条第二種による羽状縄文がほとんど見られないことから十王台式併行期と考えられる。）が，烟田遺跡からは後期の十王台式土器が，それぞれ出土している。

古墳時代の遺跡は，比較的多く確認され，古墳および古墳群が55か所ある。不二内(ふにうち)古墳群からは，高さ53cmの「跪座(きざ)する男」や高さ68.5cmの「壺をささげる女」などの人物埴輪(9)が出土している。野友権現峯(のともごんげんみね)古墳群，富士峯(ふじみね)古墳群，当間(とうま)二ツ塚古墳，氷川(ひかわ)古墳からは埴輪がそれぞれ出土し，二ツ塚古墳からは直刀・勾玉が出土している。また，安房(あんぼう)古墳群からは，7世紀中葉から8世紀初頭に位置づけられる須恵器・鉄鏃が出土している。古墳の形式としては，円墳がほとんどで，方墳，前方後円墳は少ない。集落跡では，鉾田川流域に中期から後期にかけて塙遺跡，烟田川波遺跡，西台遺跡等が存在している。割(わ)り塚(つか)古墳群(10)からは円墳10基が確認されている。

中世になると城館跡が中心となり，21か所確認されている。平安から戦国時代にかけて常陸大掾(だいじょう)氏の支族である鹿島氏一族の徳宿親幹が築いた徳宿城跡，鎌倉から戦国時代にかけて安房又太郎(あんぼうまたたろう)の築いた三階城(さんかいじょう)跡，同じく大掾氏一族の烟田幹秀(かまたもとひで)が築いた烟田城跡，そして烟田氏の家臣の館と伝えられている富士山館をはじめとする塙八館(11)や砦跡が残っている。巴川流域には，武田通(たけだみち)

信(のぶ)の築いた野友城跡や，郷土砦跡，蕨砦跡，堀の内砦跡等が存在している。

近世の遺跡としては，町北部の大川・紅葉地区に紅葉の勘十郎堀が存在している。1706年，水戸藩は大規模な藩営工事に着手し，松波勘十郎を中心として涸沼川から巴川河岸紅葉に至る堀割工事をしたものである。これは，北浦・巴川の水運を利用して奥州諸藩の物資を江戸に運ぶための中継地であったものと考えられ，内陸水路の要所としての位置を示している。(12)

以上のように，鉾田町は，鉾田川と巴川の水資源に恵まれた洪積台地上に，原始・古代から近世まで各時代にわたり多くの遺跡があり，この地に人々の生活が営まれてきたことが窺える。

注・参考文献

(1) 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1987年

(2) 「茨城県史料考古資料編」先土器・縄文時代 茨城県 1979年

(3)(4)(5) 斉藤弘道 「県内貝塚における動物遺存体の研究 (3) 学術調査概報３」 茨城県歴史館 1979年

(6)(10) 茨城県教育財団「梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳」茨城県教育財団文化財調査報告第47集 1988年

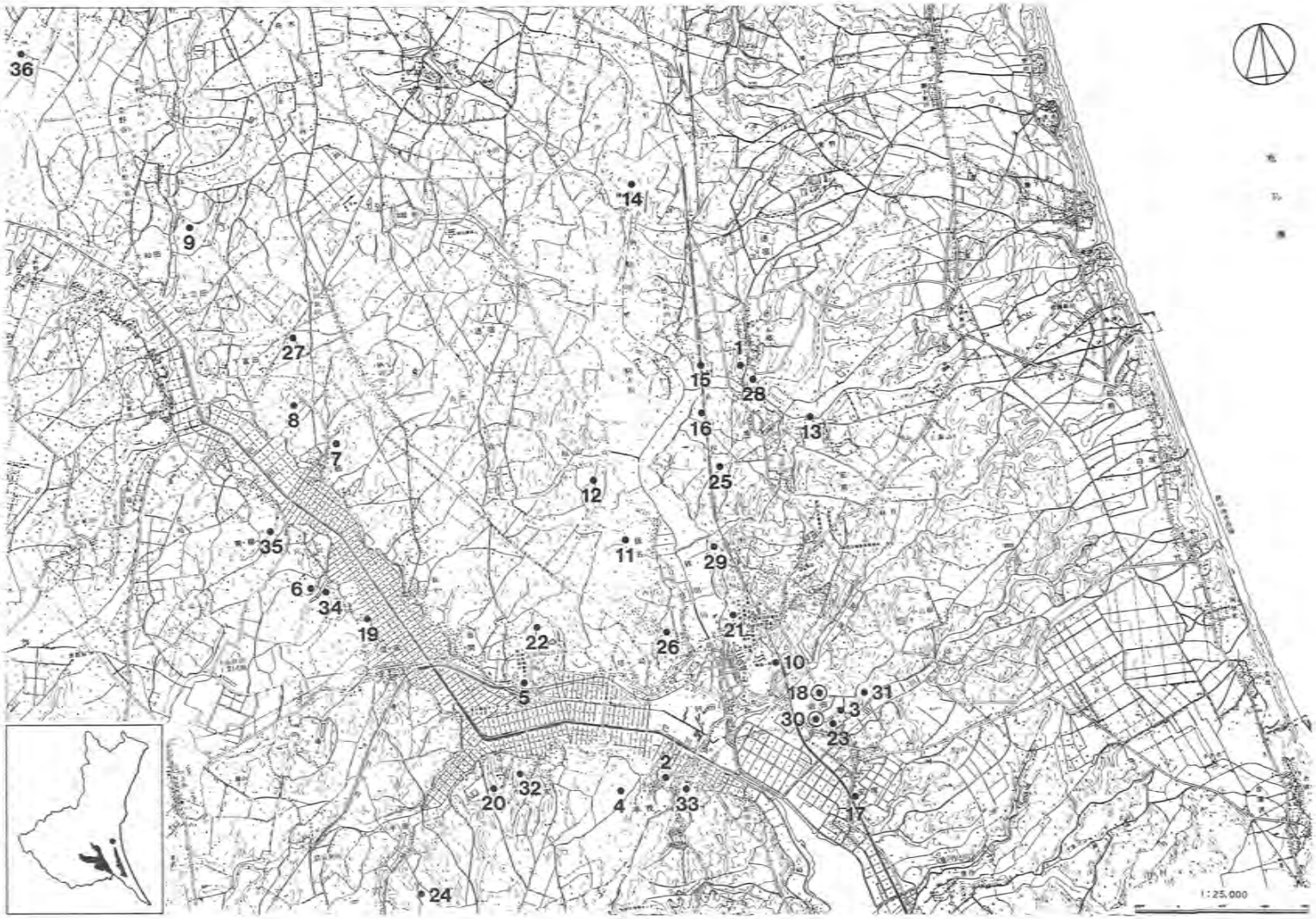
(7) 茨城県教育財団「烟田遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告Ⅵ 1980年

(8) 鈴木正博 「十王台式理解のために (1), (2)」 常総台地7, 8 1976年

(9) 「茨城県史料考古資料編 古墳時代」 茨城県 1974年

(11) 今瀬文也 「日本城郭大系 第4巻」 新人物往来社 1979年

(12) 「茨城県史近世編」 茨城県 1985年



第 3 図　畑田川波遺跡・畑田城跡周辺遺跡分布図

表1　畑田川波遺跡・畑田城跡周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	遺跡の時代						
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸
1	徳宿遺跡	○	○	○				
2	串挽貝塚		○					
3	畑田貝塚		○					
4	権現平貝塚		○					
5	坂戸遺跡		○					
6	青柳貝塚		○					
7	中の宮遺跡		○					
8	鳥栖遺跡		○					
9	梨ノ子木久保遺跡		○					
10	鉾田貝塚		○					
11	飯名貝塚		○					
12	秋山遺跡		○					
13	石崎台遺跡		○					
14	鎌田遺跡		○					
15	徳宿遺跡		○					
16	塙遺跡			○	○			
17	安塚遺跡			○				
18	畑田川波遺跡		当		遺		跡	
19	不二内古墳群				○			
20	野友権現峯古墳				○			
21	富士峯古墳群				○			
22	当間二ツ塚古墳				○			
23	氷川古墳				○			
24	二ツ塚古墳				○			
25	安房古墳群				○			
26	西台遺跡				○			
27	割り塚古墳				○			
28	徳宿城跡						○	
29	三階城跡						○	
30	畑田城跡		当		遺		跡	
31	富士山館						○	
32	野友城跡						○	
33	郷土砦跡						○	
34	蕨砦跡						○	
35	堀の内砦跡						○	
36	紅葉の勘十郎堀							○

第3章　遺構・遺物の記載方法

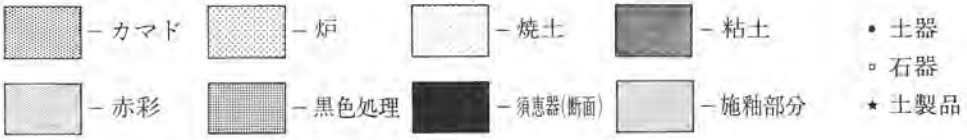
第1節　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は，下記の要領で統一した。

1　使用記号

名称	竪穴住居跡	土　坑	溝	ピット	土器	石器	土製品	金属製品
記号	ＳＩ	ＳＫ	ＳＤ	Ｐ	Ｐ	Ｑ	ＤＰ	Ｍ

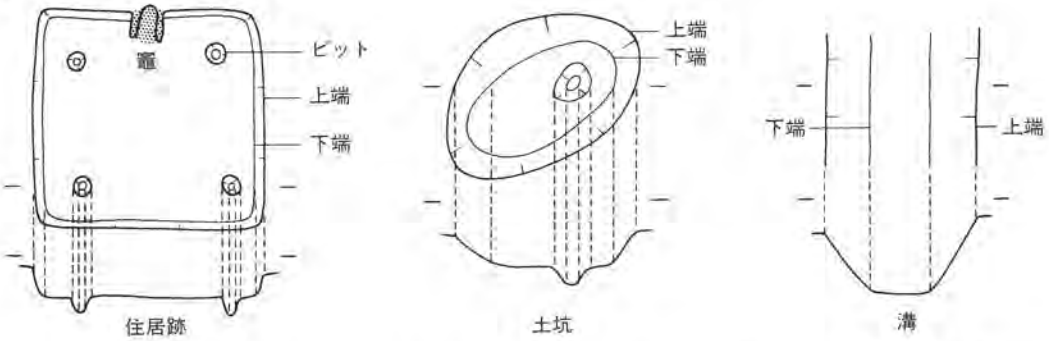
2　遺構・遺物の表示方法



3　土層の分類

各遺構における堆積土の土層については，調査時に，含有物，色調，粘性，締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。なお，色調については「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行)を使用し，図版実測図中に土層解説の番号を記載した。

4　遺構実測図の記載方法



○　住居跡は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1または4分の1に縮小して掲載した。

○　土坑は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1に縮小して掲載した。

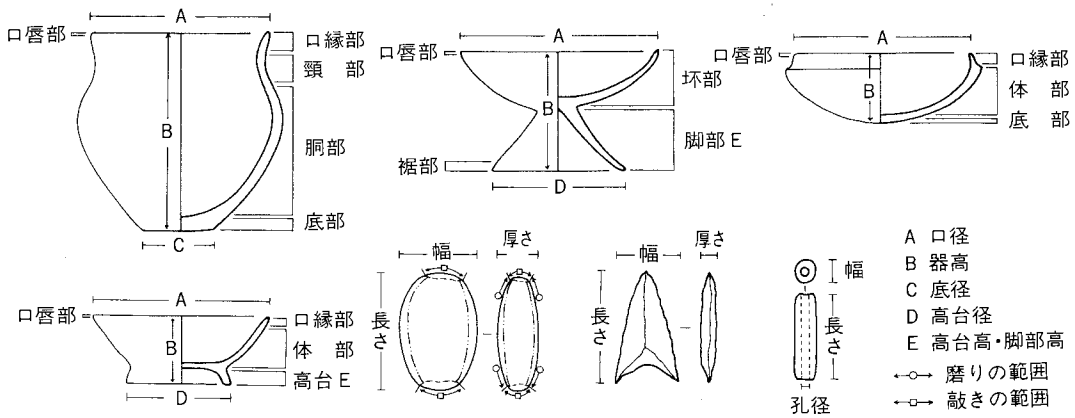
○　竈・炉は，10分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1に縮小して掲載した。

○　溝・堀は，縮尺20分の1，100分の1の原図をトレースして版組みし，それを適宜に縮小して掲載した。

○　実測図中のレベルは標高であり，m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し，標高が異なる場合は各々表示した。

5　遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については，実測図・拓影図・写真等により掲載した。



6　表の見方

(1)　住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	ピット	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)						

○　位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○　主軸方向は，座標北をN－0°とし，東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。

○　平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

○　規模の欄の長軸・短軸は，上端の計測値であり，壁高は残存壁高の計測値である。床面は，平坦・凹凸・皿状・緩い起伏に分類して表記した。

○　主柱穴は，平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。

○　その他は，貯蔵穴の有無等について記した。

○　炉・竈は，その種類を記した。

○　覆土は，自然堆積のものは「自然」，人為堆積のものは「人為」と表記し，不明のものは空欄とした。

○　出土遺物は，遺物の種類とその出土数を記した。

○　備考は，重複関係等について記した。

(2) 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	床面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						

○ 土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。なお墓壙として性格がわかるものは，備考欄に記した。

○ 平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

○ 壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

○ その他の項目については，住居跡一覧表の記載方法に準じた。

(3) 出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○ 図版番号は，実測図中の番号である。

○ 法量は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台径　E－高台高，単位はcmである。なお，推定値は（ ）で，残存高は〔 〕である。

○ 胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土，色調，焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，良好，普通，不良に分類し焼き締まって硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。

○ 備考の欄は，土器の残存率，実測(P)番号，出土位置，その他必要と思われる事項を記した。

(4) 土製品観察表

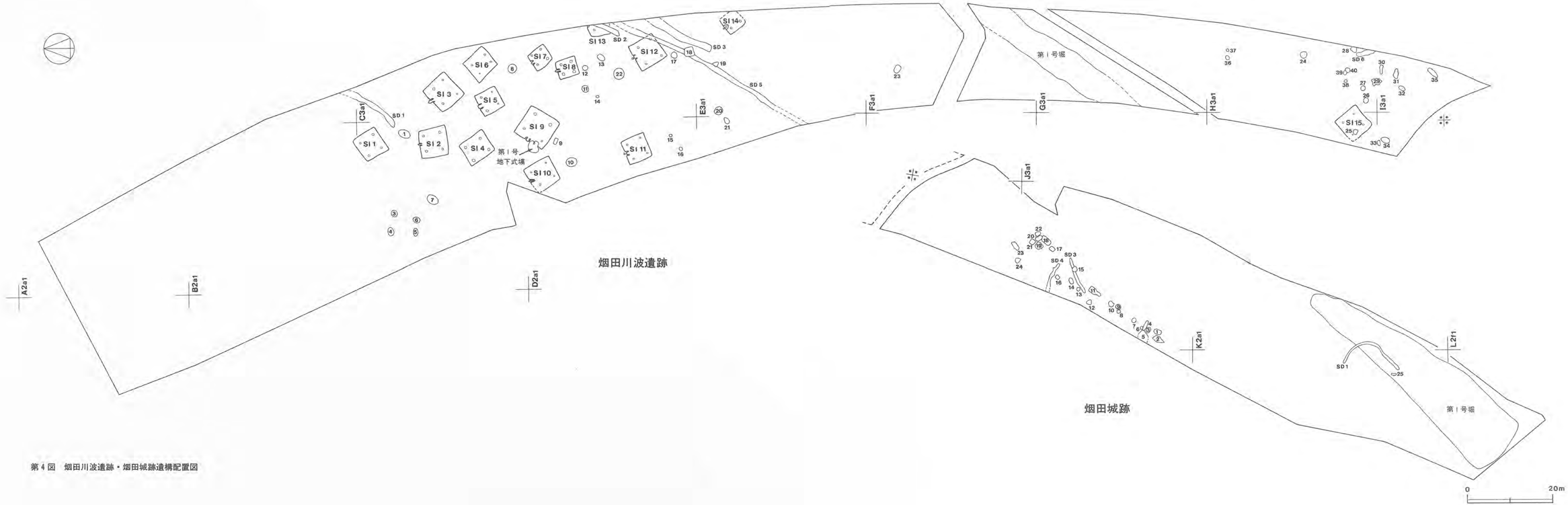
図版番号	名称	法量				出土位置	備考	台帳番号
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

(5) 石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

(6) 古銭一覧表

図版番号	銭名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	出土位置	備考



第4図　畑田川波遺跡・畑田城跡遺構配置図

第4章　烟田川波遺跡

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，鹿島郡鉾田町大字烟田字川波1,315番地ほかに所在し，鹿島臨海鉄道大洗鹿島線新鉾田駅から南東約0.3km，鉾田町役場から南東約1kmの台地縁辺部に位置している。調査面積は10,418m²で，現況は畑地である。調査区の北側は，鉾田川の支流である長茂川が北東から南西に向かって流れ，流域に広がる沖積低地は水田として利用されている。当調査区の北側斜面と水田の比高は約19mである。当調査区の南側は，田中川が北東から南西に向かって流れ，北浦の湖頭に注いでいる。田中川流域も水田として利用されている。当調査区はその両河川に挟まれた，舌状台地縁辺部の標高26.0～32.5m，南北に約350m，東西に約20～45mにわたる地域である。

遺構は，古墳時代に位置づけられる竪穴住居跡15軒で，14軒は遺跡の中央部の標高27.0～32.5mの台地の平坦部から緩い南斜面にかけて位置し，1軒は南端部の標高26mの平坦部に位置している。竪穴住居跡は炉をもつものが3軒，竈をもつものが11軒，不明のものが1軒である。その他，土坑40基，溝5条，堀1条が検出されている。土坑の中には，地下式壙や落し穴状のものが各1基あり，堀は薬研堀の形状を呈し，中世以降のものと思われる。

竪穴住居跡から出土した遺物は，土師器が主で，壺，甕，甑，坏，高坏等が出土している。須恵器では，鉢，坏，高坏等が出土している。土製品では勾玉，土玉，管状土錘等が出土し，石器・石製品では石鏃，双孔円板，砥石，紡錘車，磨石等が出土している。

土坑からは，少量の土師器片や弥生式土器片，紡錘車等の石製品が出土している。

溝からは，管状土錘等の土製品，磨石や敲石等の石器・石製品が出土している。そして，竪穴住居跡，土坑，溝の覆土からは多量の縄文式土器片が出土している。

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡と出土遺物

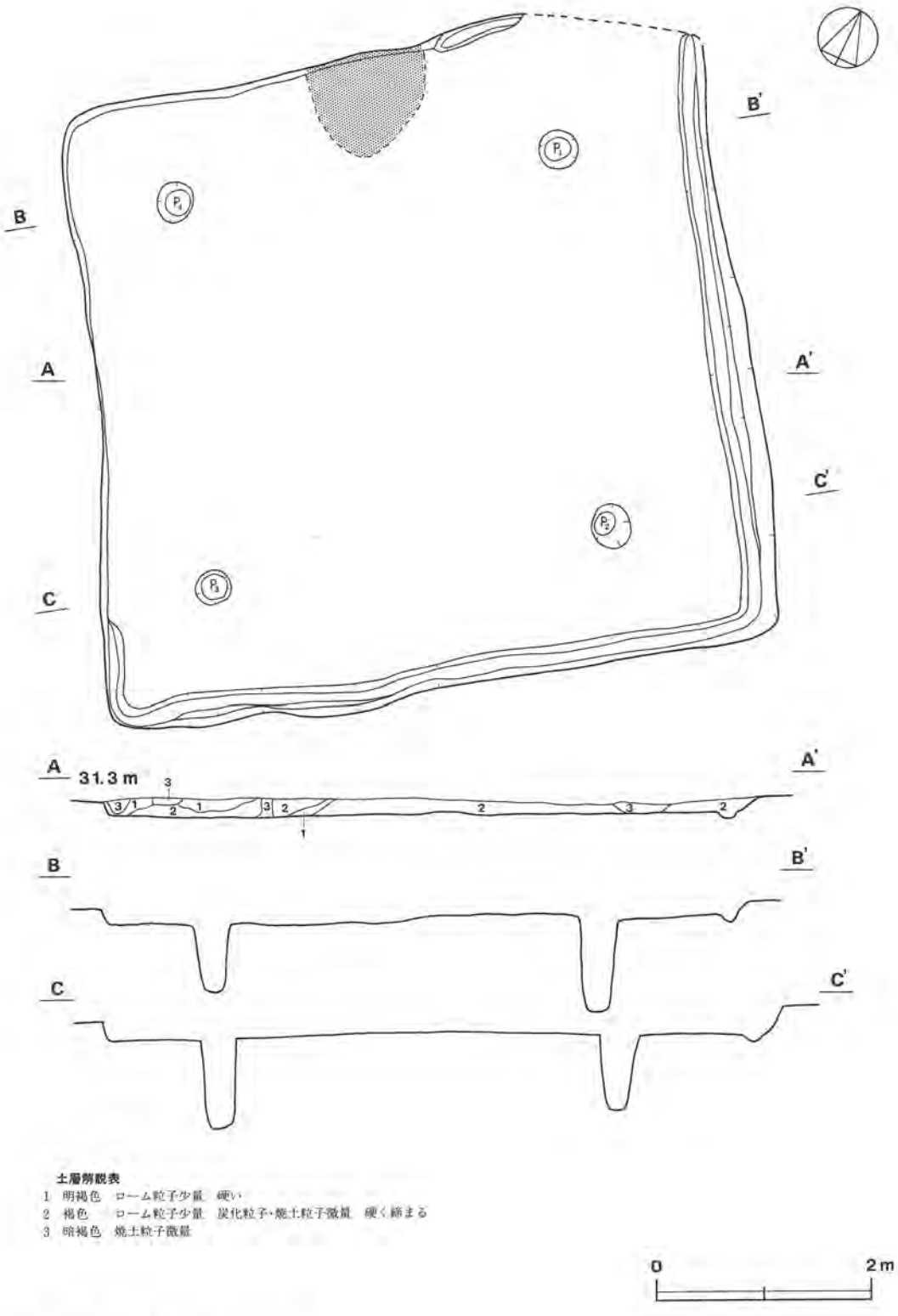
第1号住居跡（第5図）

位置　調査区の中央部C2a₉区を中心に確認された。

規模と平面形　一辺が6mの方形を呈している。

主軸方向　N－30°－W。

壁　壁高は北東壁で30cm，南東と南西壁で20cm，北西壁で16cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。



第5図　第1号住居跡実測図

壁溝　北東壁から南東壁にかけてと北西壁の一部に認められ，上幅6～12cm・深さ8cm前後である。

床　褐色土を固めて貼床としている。平坦で硬く，特にピットに囲まれた内側は非常に硬く締まっている。

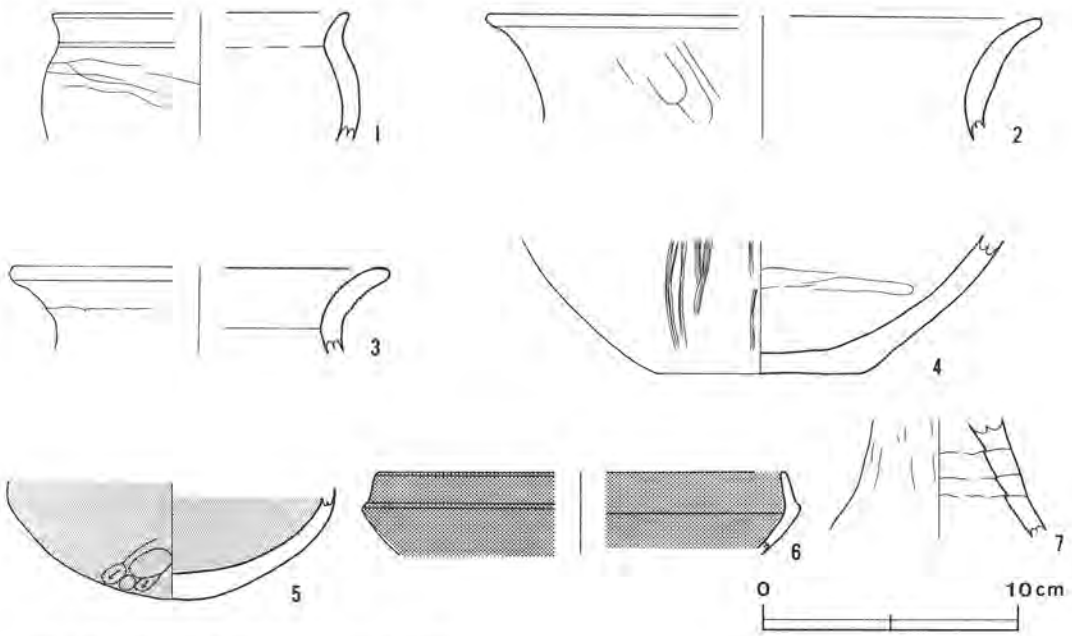
ピット　4か所検出され，径32～40cmの円形を呈し，深さ56～90cmで，いずれも主柱穴である。

竈　北西壁中央部に付設されているが，撹乱を受け袖部・煙道部共に確認できず，火床部がわずかに掘り込まれていた様子が，確認できたにとどまっている。

覆土　炭化粒子・焼土粒子を微量，ローム粒子を少量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（甕，坏，高坏）318点，土製品（勾玉）1点が本跡の中央部から南東部にかけて出土している。(4)の土師器の甕片（底部）が南東壁中央付近の床面から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から，古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第6図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	甕 土師器	A(11.8) B〔5.0〕	胴部は内彎気味に立ち上がり，上位に胴部最大径を有し，口縁部に至る。口縁部は短く外反して立ち上がる。口唇部は丸い。口縁部と胴部との境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ調整。胴部外面上位，横位のヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	15% P1 南西部覆土下層
2	甕 土師器	A(21.8) B〔4.8〕	胴部欠損。口縁部は緩やかに外反する。	器面は荒れているが，口縁部内外は横ナデ調整と思われる。胴部は斜位のヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	5% P2 南部覆土中層

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第6図 3	甕 土師器	A(15.0) B〔3.3〕	胴部欠損。口縁部は外反し頸部との境ににぶい稜を有する。器内面の頸部と胴部の境には明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	5％　P3 南東部覆土下層
4	甕 土師器	B〔5.4〕 C　8.2	平底。胴下半部は，外傾して立ち上がる。	胴部内面横位のヘラナデ，外面横ナデ整形後，縦位のヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	15％　P4 南東壁際床面直上
5	坏 土師器	B〔4.5〕	丸底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部はヘラ削り。器内面はナデ調整。外面はナデ調整後横位・斜位のヘラ削り。内・外面に赤彩痕あり。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	50％　P5 南東部覆土下層
6	坏 土師器	A(16.2) B〔3.3〕	口縁部と体部の境に稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。内・外面黒色処理。	砂粒 黒褐色 普通	10％　P6 南西部覆土
7	高　坏 土師器	E〔4.7〕	坏部欠損。脚部片は，外反して外下方に開く。	脚部外面ヘラナデ。内面に輪積痕が残る。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	20％　P7 南壁際覆土下層

第2号住居跡（第7図）

位置　調査区の中央部C2c9区を中心に確認された。

規模と平面形　一辺が6.7mの方形を呈している。

主軸方向　N－9°－W。

壁　壁高は20～45cmで，垂直に立ち上がっている。

壁溝　上幅5～11cm，深さ4～5cmで，全周している。

床　床面は平坦で硬く締まっている。東側から西側へかけて緩やかに傾斜し，比高は約8cmである。

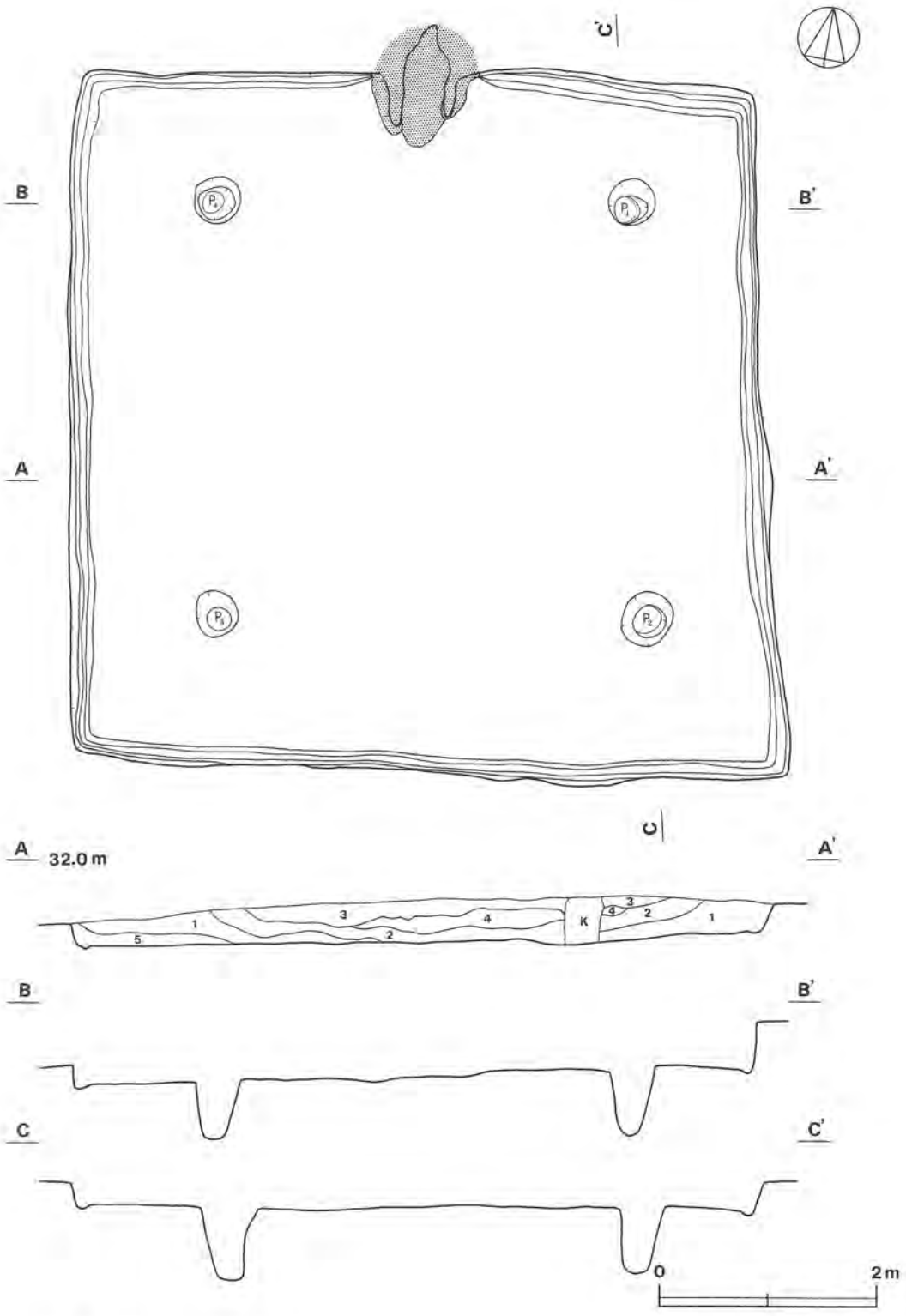
ピット　4か所検出され，径38～47cmの円形を呈し，深さ48～65cmで，いずれも主柱穴である。

竈　北壁中央部に付設され，規模は長さ115cm・幅75cmで，壁への掘り込みは48cmである。砂質粘土で構築され，天井部は崩落しているが，両袖部は良好な状態で残っている。火床は床面を10cm程掘り窪め，ロームが焼けてゴツゴツしている。

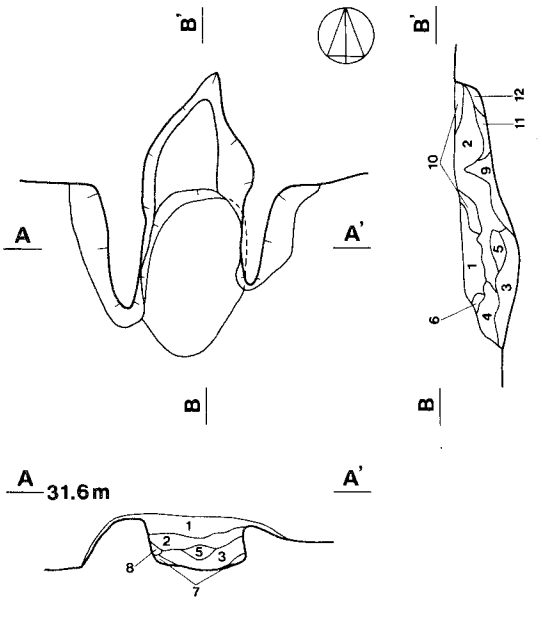
覆土　基本的に4層から成り，自然堆積である。焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，壁近くは，褐色土でローム粒子少量を含み，硬く締まっている。

遺物　土師器片（甕，坏，高坏）294点，須恵器片2点，土製品（土玉）5点が住居跡全体に散らばった状態で出土している。土玉は覆土上・中層から出土している。須恵器は細片で，覆土上層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第 7 図　第 2 号住居跡実測図



住居跡土層解説表

1	褐色	ローム粒子少量　炭化粒子微量　締まりあり
2	暗褐色	ローム粒子少量　炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
3	暗褐色	炭化粒子・焼土粒子微量　締まりあり
4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬い
5	にぶい褐色	炭化粒子微量　硬く締まる

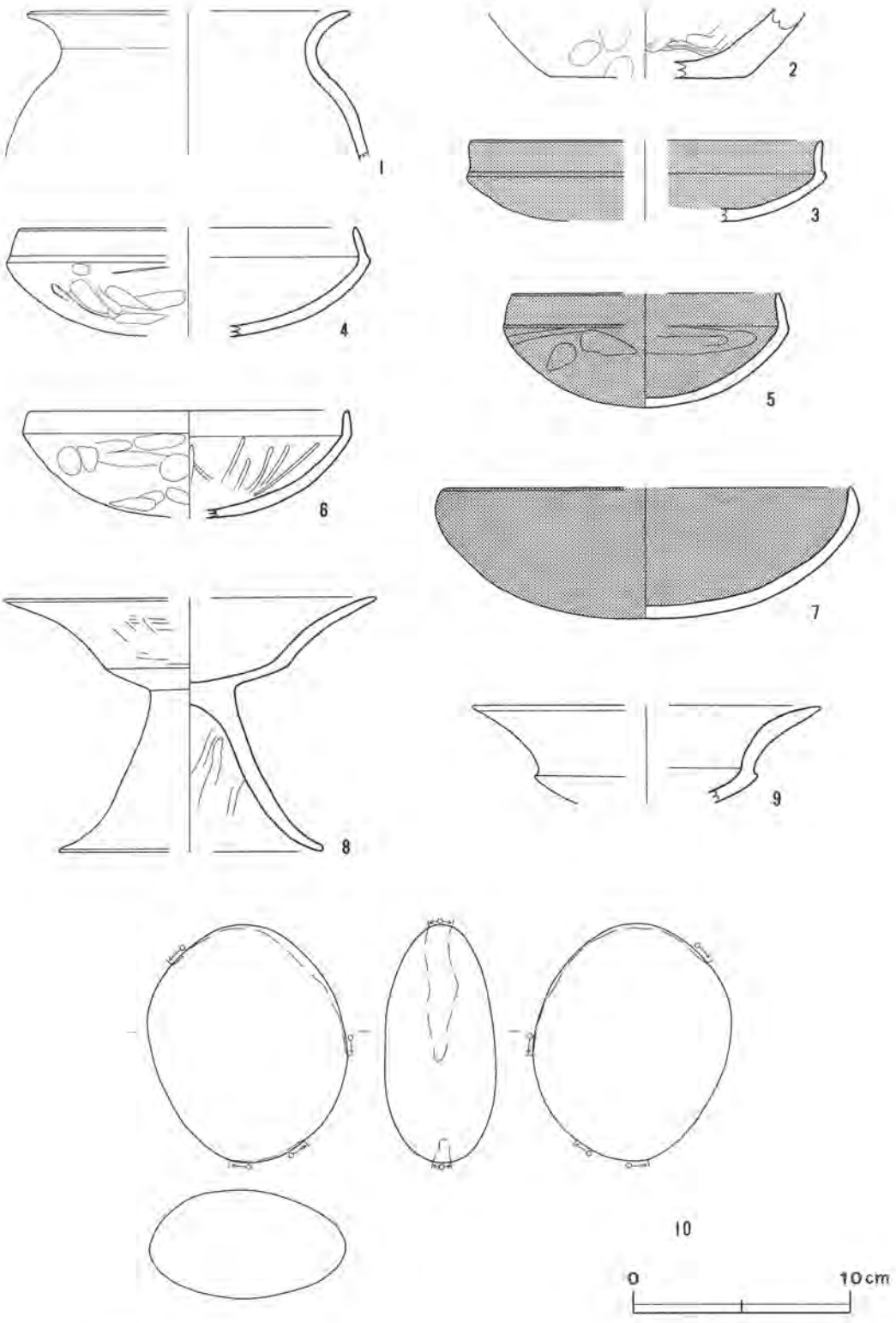
竈土層解説表

1	褐色	ローム粒子微量　焼土粒子微量　硬い
2	にぶい赤褐色	焼土粒子中量　硬い
3	暗赤褐色	焼土粒子多量．硬い
4	にぶい赤褐色	ローム粒子微量　焼土粒子少量　硬く締まる
5	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
6	褐色	ローム粒子少量　焼土粒子微量　硬い
7	褐色	焼土粒子微量　硬い
8	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
9	褐色	焼土粒子・砂微量　硬い
10	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
11	にぶい赤褐色	焼土粒子微量　硬い
12	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い

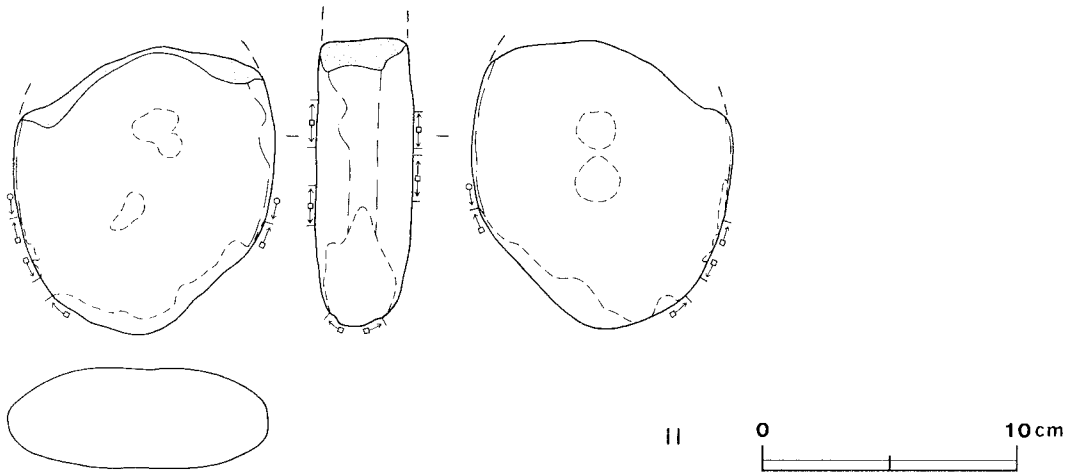
第 8 図　第 2 号住居跡竈実測図

第 2 号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 9 図 1	甕 土師器	A 15.0 B〔 6.2〕	頸部から口縁部にかけて丸みをもって外反する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	5％　P 8 北西コーナー付近覆土中層
2	甕 土師器	B〔 3.2〕 C〔 9.0〕	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部はナデ整形。胴部外面は，ヘラ削り。器内面はナデ調整。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	10％　P 9 南西部中央覆土中層
3	坏 土師器	A(16.4) B〔 3.7〕	丸底。口縁部と体部の境に稜を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20％　P10 北東コーナー付近覆土中層
4	坏 土師器	A(15.6) B〔 5.0〕	丸底。口縁部と体部の境に稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	30％　P11 竈東側床面直上
5	坏 土師器	A(12.2) B　5.3	丸底。口縁部と体部の境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部に横方向のヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ調整有り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	50％　P12 南壁際覆土中層
6	坏 土師器	A 14.8 B　4.9	丸底。口縁部と体部の境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部・底部の外面はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内面は縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	85％　P13 南西コーナー付近覆土上層
7	坏 土師器	A(19.0) B　6.1	丸底。内彎して立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。器内面はナデ調整。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	40％　P14 南東壁付近覆土上・下層



第9図　第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第10図　第２号住居跡遺物実測図(２)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第９図 8	高坏 土師器	A(17.2) B 11.7 D(12.2) E 7.5	坏底部は凹み，坏部は外反気味に大きく開き口縁部に至る。坏部外面下位に稜を有する。脚部はラッパ状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面ヘラ磨き，外面ヘラナデ。脚部内面斜位のヘラナデ，外面ヘラナデ。裾部内面横ナデ，外面横ナデ後，縦位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	70% P15 北西部覆土中・下層
9	高坏 土師器	A(16.2) B〔4.5〕	脚部欠損。坏底部は凹み，坏部は外反しながら口縁部に至る。坏部外面下位に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい赤褐色 普通	20% P16 南東コーナー付近覆土上層

第２号住居跡出土石器観察表

図版番号	器種	石質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第９図 10	磨石	砂岩	10.9	9.3	5.0	700.2	北西コーナー付近壁際覆土下層	側縁部の磨り。	1
第10図 11	敲石	アプライト	〔11.3〕	10.3	3.9	〔736.4〕	南部床面直上	側縁部全体に使用痕有り。	2

第３号住居跡（第11図）

位置　調査区の中央部C3f$_2$区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸7.2m，短軸6.8mの方形を呈している。

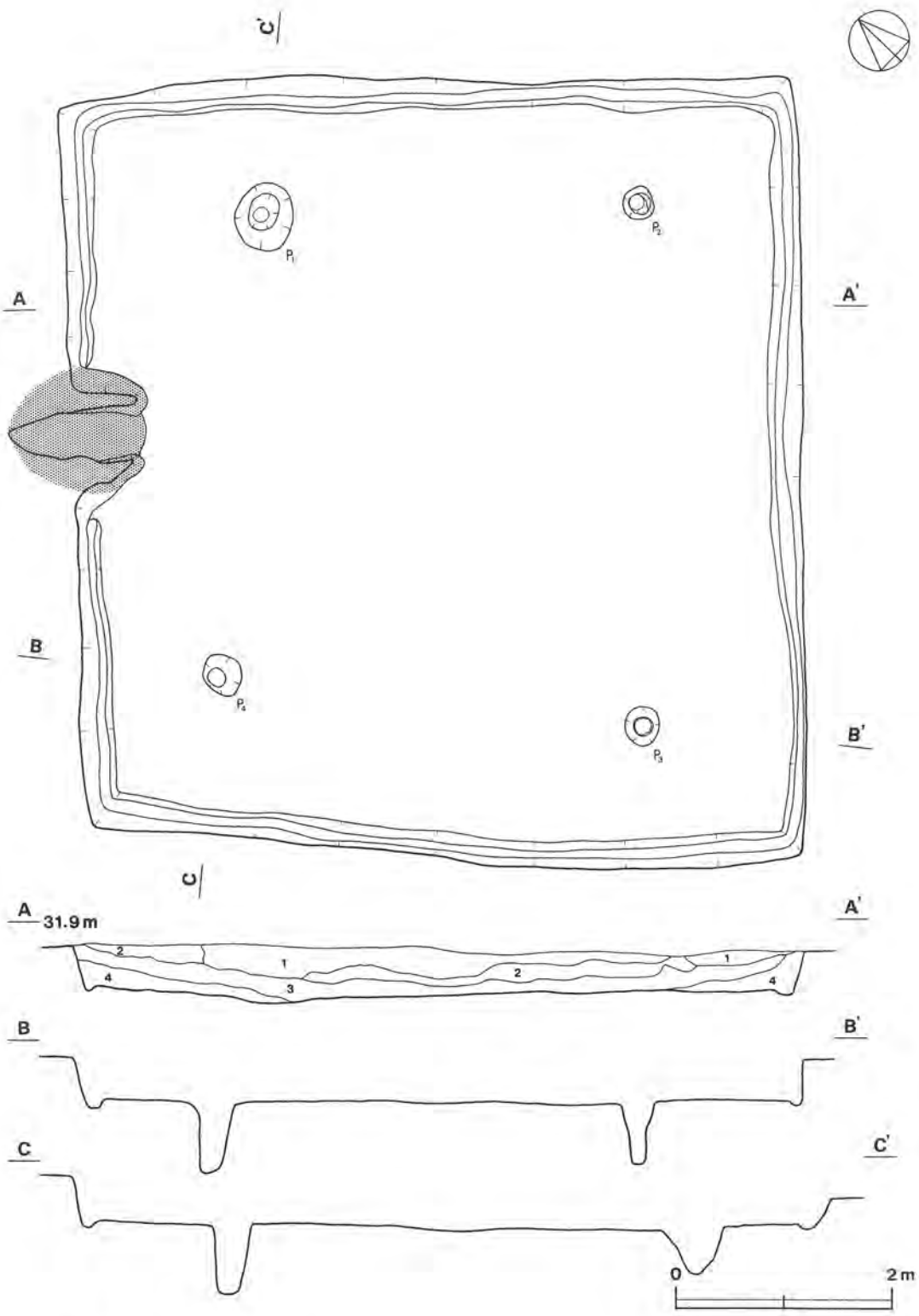
主軸方向　N－40°－W。

壁　壁高は北東壁が25～35cm，その他は約40cmで，垂直に立ち上がっている。

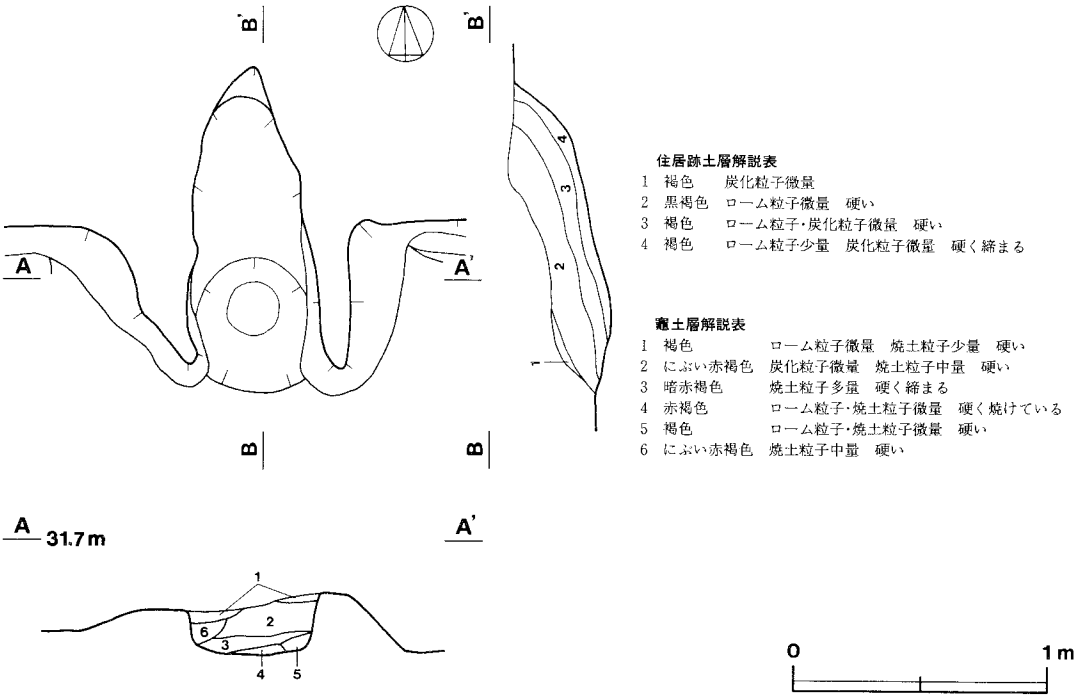
壁溝　上幅11～16cm，深さ6cm前後を測り，全周している。

床　ほぼ平坦で硬く締まっている。

ピット　4か所確認され，径30～55cmの円形を呈し，深さ45～55cmで，いずれも主柱穴である。



第11図　第３号住居跡実測図



住居跡土層解説表

1 褐色　炭化粒子微量
2 黒褐色　ローム粒子微量　硬い
3 褐色　ローム粒子・炭化粒子微量　硬い
4 褐色　ローム粒子少量　炭化粒子微量　硬く締まる

竈土層解説表

1 褐色　ローム粒子微量　焼土粒子少量　硬い
2 にぶい赤褐色　炭化粒子微量　焼土粒子中量　硬い
3 暗赤褐色　焼土粒子多量　硬く締まる
4 赤褐色　ローム粒子・焼土粒子微量　硬く焼けている
5 褐色　ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
6 にぶい赤褐色　焼土粒子中量　硬い

第12図　第3号住居跡竈実測図

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ136cm，幅120cmで，壁への掘り込みは64cmである。砂質粘土で構築され，天井部は崩落しているが，両袖部は良好な状態で残っている。火床は50×45cmのほぼ円形を呈し，10cmほど床面を掘り込んでおり，ロームが焼けて硬くゴツゴツしている。

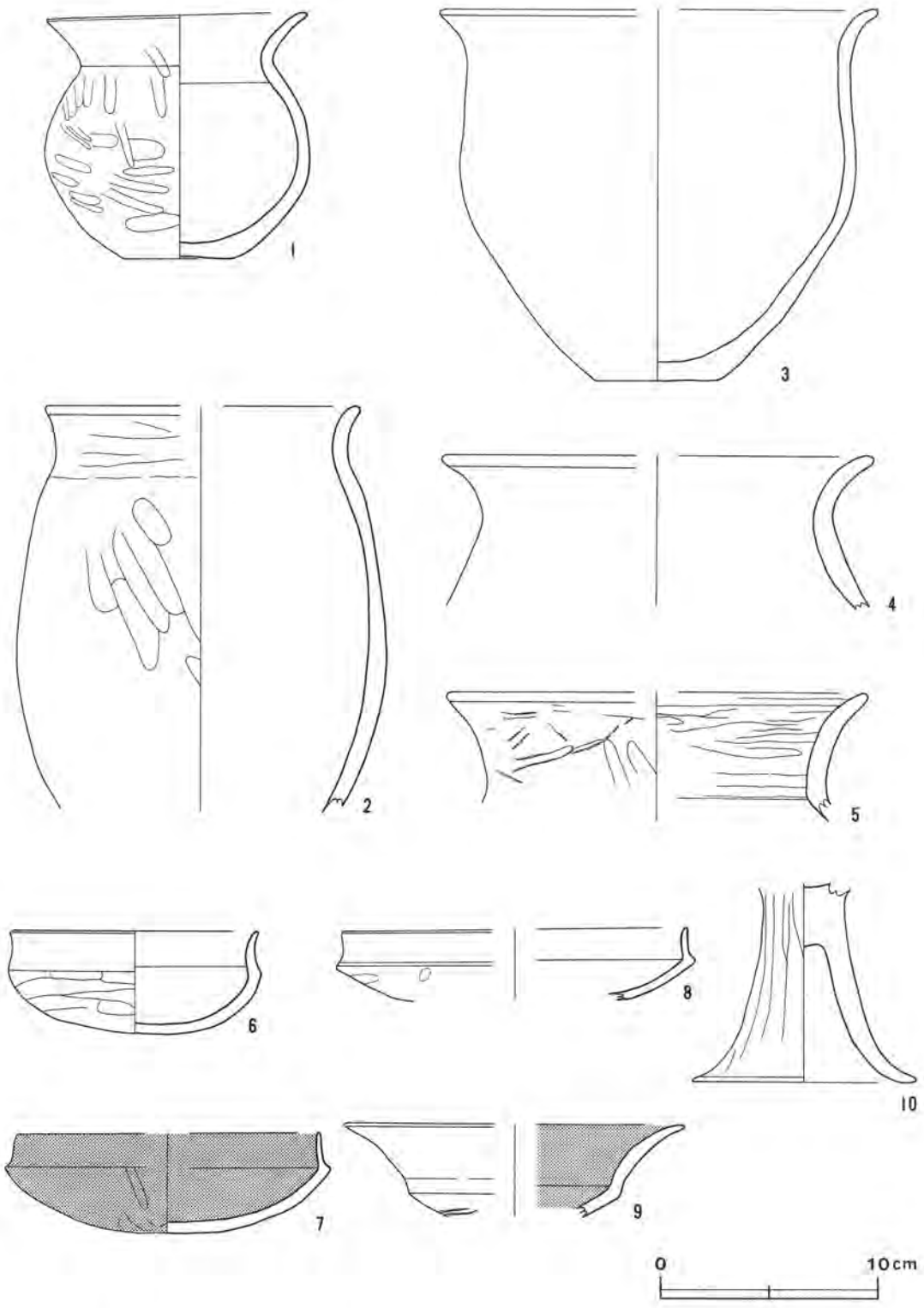
覆土　炭化粒子・ローム粒子を微量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（甕，坏，高坏）910点，土製品（土玉）13点，石製品（石鏃）3点が出土している。(1)は，ほぼ完形の土師器の小型甕で西コーナー付近の覆土下層から，(3)の土師器の甕片は竈の南東側の床面直上から出土している。土玉は全体に散らばって覆土中層から出土しているが，(第67図19・20)は南東壁中央部付近の床面から出土している。石鏃は，(11)が中央部床面から，(12)が西部床面から，(13)が南西部覆土中層から出土している。

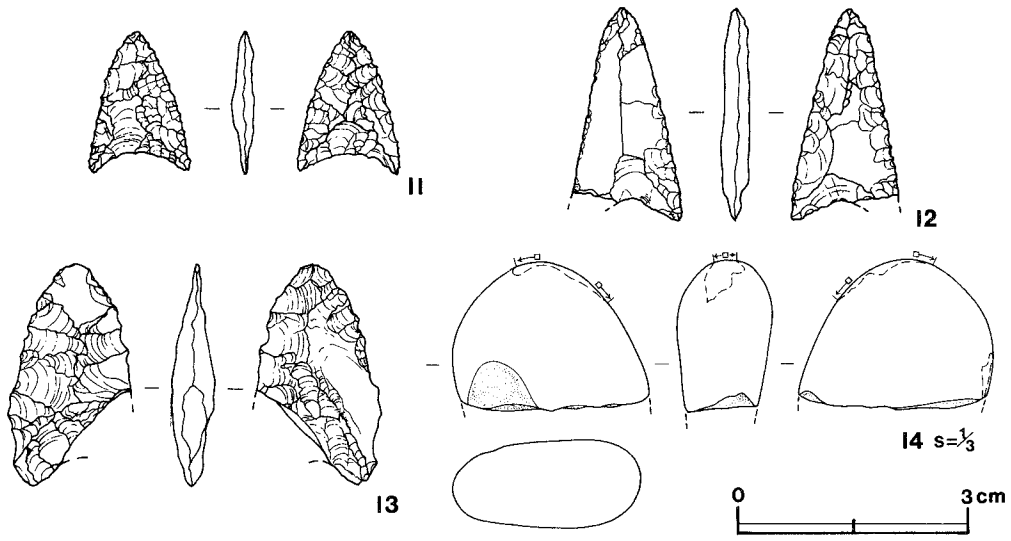
所見　本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	小型甕 土師器	A 12.1 B 11.3 C 5.0	平底。体部は内彎し，頸部は緩やかにくびれ，口縁部は外反し，口縁端部は丸い。胴中央部に最大径を有する。	口縁部内面横ナデ，外面横ナデ後縦位のヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	90%　P17 西コーナー付近覆土下層
2	甕 土師器	A(14.6) B〔18.7〕	胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部から口縁部にかけて丸みをもって外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部中央部に斜位のヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	25%　P18 竈東側覆土中・下層



第13図　第３号住居跡出土遺物実測図（１）



第14図　第３号住居跡出土遺物実測図（２）

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第13図 3	甕 土師器	A（20.2） B　17.1 C　5.6	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，胴中央部に最大径をもつ。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し，口唇部は丸い。	口縁部は内・外面横ナデ。胴部，底部外面ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	30%　P19 竈南東側床面
4	甕 土師器	A（20.0） B〔 7.0〕	口縁部は大きく外反する。口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	10%　P20 東部覆土下層
5	甕 土師器	A（19.6） B〔 5.9〕	口縁部は外反する。口唇部は丸い。	口縁部内面横ナデ整形後，横位のヘラ削り。外面横ナデ整形後，横位・斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	5%　P21 中央部覆土下層
6	坏 土師器	A　11.5 B　4.8	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部は，外反して口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面，横位のヘラ削り。底面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	99%　P22 竈西壁際覆土下層
7	坏 土師器	A（14.2） B　4.6	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立して，口唇部は尖る。	口縁内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。底部ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	45%　P23 竈南側付近覆土下層 西側覆土下層
8	坏 土師器	A（16.0） B〔 3.3〕	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立し口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	20%　P24 中央部覆土下層
9	高　坏 土師器	A（15.8） B〔 4.3〕	脚部欠損。体部はやや内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。 内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	15%　P25 北東部覆土
10	高　坏 土師器	B〔 9.2〕 D　10.4 E　8.5	坏部欠損。脚部は中空でラッパ状に開く。	脚部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	35%　P26 中央部覆土下層

第3号住居跡出土石器観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第14図11	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.3	0.5	中央部床面直上		5
12	石鏃	チャート	2.8	1.5	0.4	〔1.1〕	西部床面直上		6
13	石鏃	チャート	2.9	1.6	0.6	〔1.8〕	南西部覆土中層		7
14	敲石	アプライト	〔5.9〕	7.7	3.8	〔213.4〕	竈東部覆土下層	2か所に使用痕有り。	8

第4号住居跡（第15図）

位置　調査区の中央部C2h9区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸6.5m・短軸5.8mの方形を呈している。

主軸方向　N－32°－W。

壁　壁高は南東壁で30cm，その他で18～21cmを測り，垂直に立ち上がっている。

壁溝　確認されなかった。

床　平坦で硬い。

ピット　4か所検出され，径25～50cmの円形を呈し，深さ55～75cmで，いずれも主柱穴である。

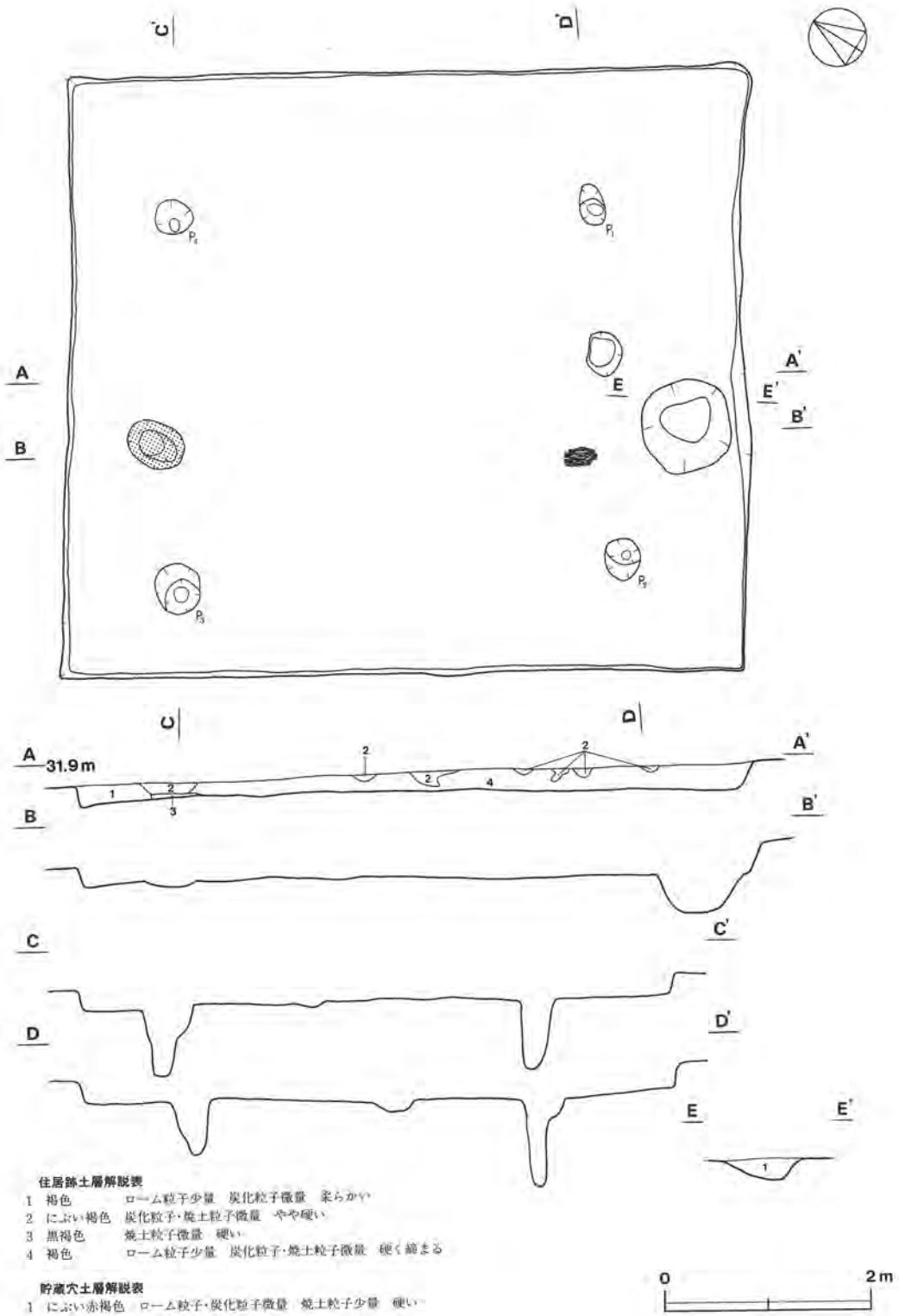
貯蔵穴　南東壁中央よりやや西側に付設され，長径88cm・短径85cmの円形状を呈し，深さ20cmを測る。覆土は，焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量を含むにぶい赤褐色土が，自然堆積している。

炉　中央から北西側に設置され，規模は53×43cmで，深さは6cm掘り込んだ地床炉である。焼土小ブロック・ローム粒子を含み硬く締まっている。

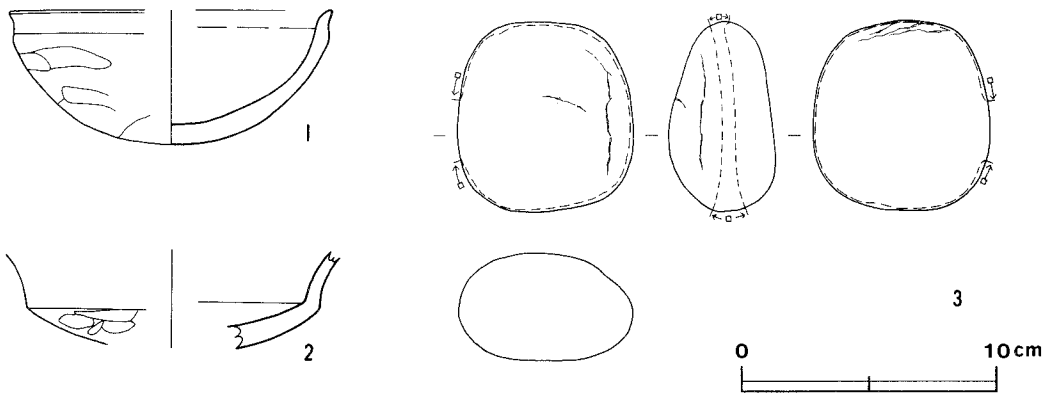
覆土　炭化粒子・焼土粒子微量，ローム粒子少量を含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（甕，坏）180点，須恵器片1点が出土している。(1)の土師器の坏片が南東壁中央部の貯蔵穴内覆土から，(2)の土師器の坏片が北東部覆土上層から出土している。須恵器は細片で覆土中層から出土している。中央よりやや南東部の床面からは少量の炭化物が検出されている。

所見　本跡は撹乱を受けており，壁の遺存も僅かで不明確であるが，遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第15図　第4号住居跡実測図



第16図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	坏 土師器	A〔12.7〕 B　5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	40%　P27 貯蔵穴
2	坏 土師器	B〔3.8〕	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は，やや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	30%　P28 北東部覆土

第４号住居跡出土石器観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第16図 3	敲石	石英	7.4	6.9	4.2	307.8	覆土上層	側縁部に使用痕有り。	9

第５号住居跡（第17図）

位置　調査区の中央部C3h$_2$区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸5.5m・短軸5.3mの方形を呈している。

主軸方向　N－27°－W。

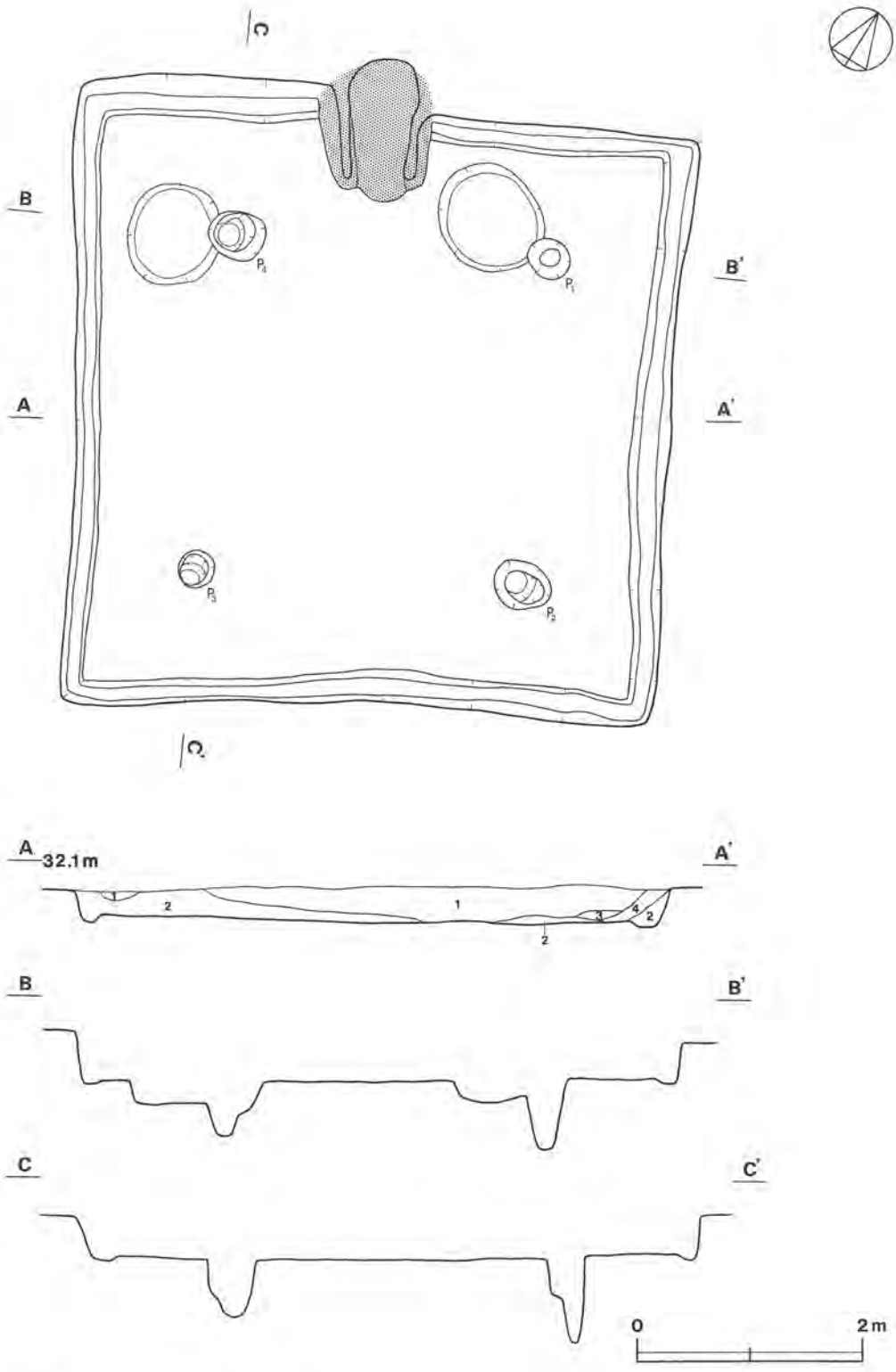
壁　壁高は30～45cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　上幅17～25cm，深さ５cm前後を測り，全周している。

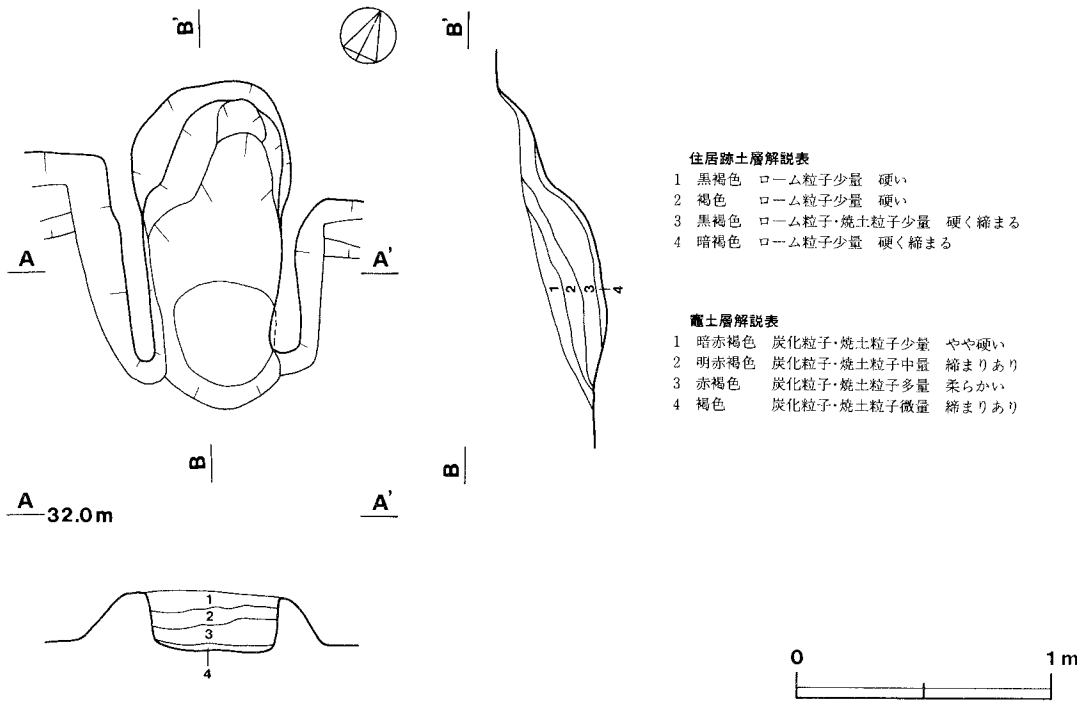
床　ほぼ平坦で硬く締まっている。

ピット　４か所検出され，径33～53cmの円形を呈し，深さ48～68cmで，いずれも主柱穴である。P$_1$～P$_3$の３か所は側壁が段状になっていて，いずれも硬い。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ130cm・幅85cmで壁への掘り込みは38cmである。粘土で構築され，天井部は崩落しているが，袖部は良好な状態で残っている。火床部は直径40cm・深さ５cm



第17図　第 5 号住居跡実測図



第18図　第5号住居跡竈実測図

程掘り窪め，良く焼けている。

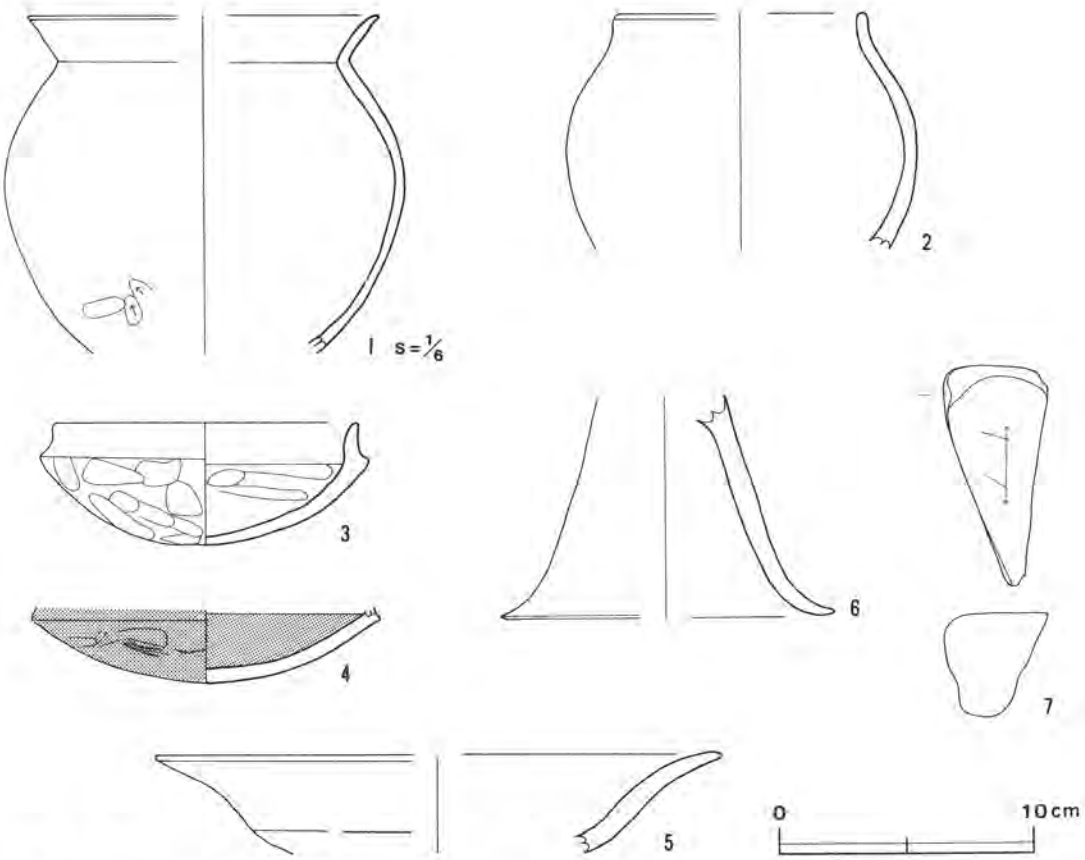
覆土　焼土粒子・ローム粒子共に少量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片(甕，坏，高坏)594点，須恵器片(甕)4点，土製品(土玉)，石器(砥石)，陶器片各1点が中央部から東コーナーにかけて特に多く出土している。土師器は(3)の完形の坏が南コーナー付近の覆土上層から，(4)のほぼ完形の坏が南東コーナー付近の覆土中層から出土している。(5)の高坏片(坏部)が南壁付近の覆土中層より横位で出土している。須恵器は細片で覆土上層から出土している。その他(7)の砥石は南西壁中央付近の覆土中層から出土し，陶器片は覆土上層から出土しているが，流れ込みと思われる。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	甕 土師器	A(27.6) B〔26.4〕	胴下半部欠損。胴部は内彎し，ほぼ球状を呈している。頸部は，くの字状を呈し口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ，内面剝離が著しく調整不明。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	30% P29 内・外面の一部に煤付着 南西部覆土中層 南東壁際覆土上層
2	甕 土師器	A(10.0) B〔 9.3〕	胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内面横ナデ。外面及び胴部内・外面剝離が著しく調整不明。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	20% P30 覆土



第19図　第5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 3	坏 土師器	A 12.0 B 4.8	丸底。体部はやや内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部は，ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横位のヘラ削り，外面ヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	98%　P31 外面煤付着 南コーナー付近覆土上層
4	坏 土師器	B〔3.0〕	丸底。口縁部欠損。体部はなだらかに内彎し立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。	体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り後ヘラナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	70%　P32 南東コーナー付近覆土中層
5	高　坏 土師器	A(22.4) B〔3.8〕	脚部欠損。坏底部に，にぶい稜を残し，大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面剥離のため調整不明。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	10%　P33 南壁付近覆土中層
6	高　坏 土師器	D(13.2) E〔8.7〕	坏部欠損。脚部は中空でラッパ状に開く。	脚部外面ヘラナデ，内面剥離のため調整不明。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	40%　P34 南西部覆土中層

第5号住居跡出土石器観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第19図 7	砥石	凝灰岩	8.8	4.1	4.1	117.1	南西壁中央付近覆土中層		10

第6号住居跡（第20図）

位置　調査区の中央部C3h4区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸6.3m・短軸5.9mの方形を呈している。

主軸方向　N－44°－W。

壁　壁高は4～12cmを測り硬い。

壁溝　確認されなかった。

床　平坦で硬い。特に炉の周辺は硬く締まりがある。

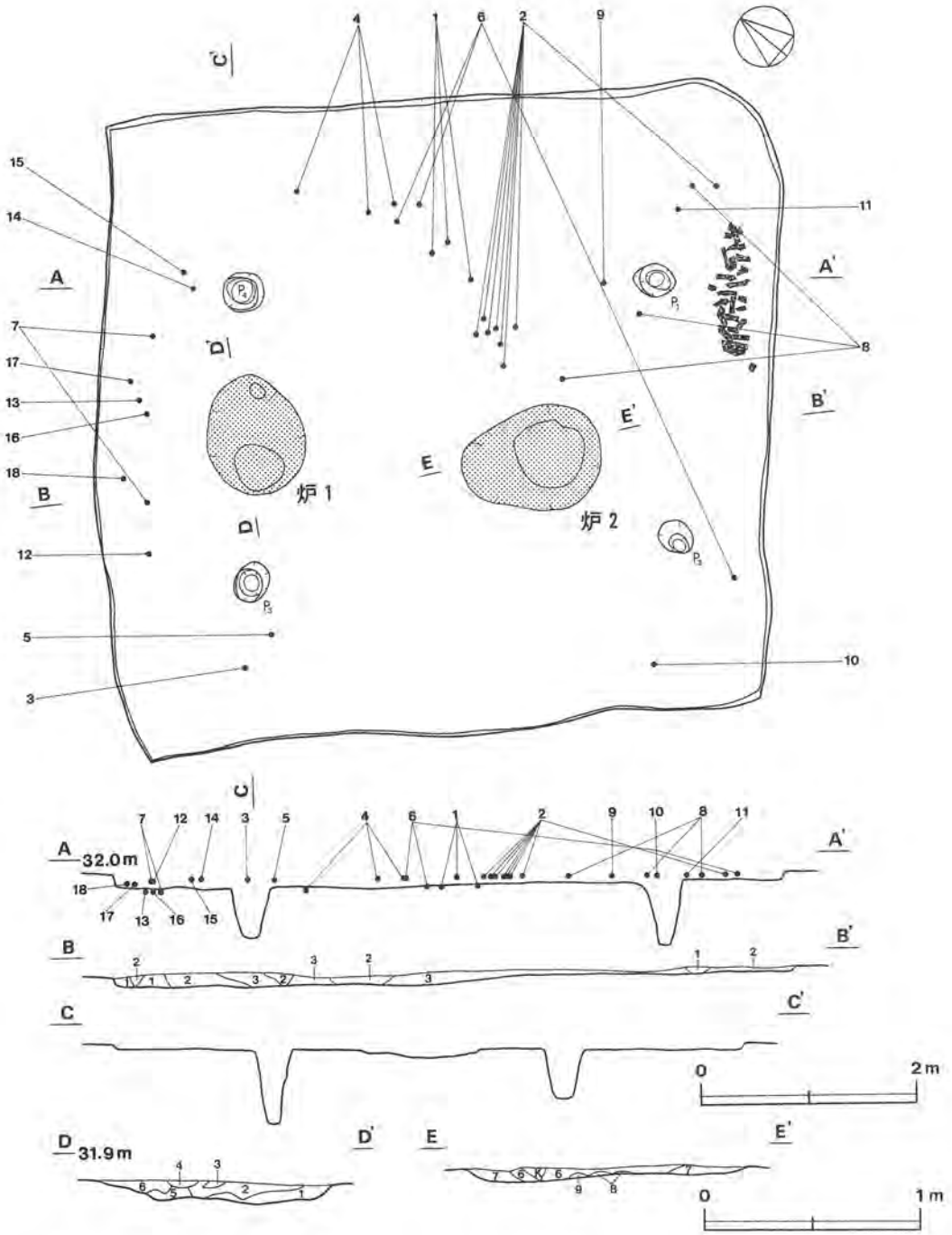
ピット　4か所検出され，径34～40cmの円形を呈し，深さ45～70cmで，いずれも主柱穴である。

炉　2か所検出され，中央より北西側の炉1は，長径110cm・短径95cmの楕円形を呈し，炉床はよく焼けていて，8cm程鍋底状に掘り込まれている。中央よりやや南東側の炉2は，長径130cm・短径95cmの楕円形を呈し，4cm程鍋底状に掘り込まれている。炉床は良く焼けていて非常に硬い。

覆土　微量の炭化粒子・焼土粒子を含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（壺，甕，坏，高坏）460点，須恵器（坏）1点，土製品（勾玉）1点が床面及び床面近くから出土している。土師器は（2）の壺が中央部から潰れた状態で出土し，（5）の壺片（口縁部）は西部の床面から逆位で出土している。完形の坏が多量に出土し，（13）の坏は北西壁中央付近の床面から逆位で，（16）の坏はその北西部の床面から出土している。（14）の坏が北部の床面から正位で，（15）の坏が北部の覆土中層から正位で，（17）の坏が北西壁中央付近の床面から出土し，（18）の高坏が北西壁中央の床面近くから横位で出土している。（19）の須恵器は細片で覆土上層から出土している。（第67図2）は土製品の勾玉で，中央部覆土上層から出土している。

所見　主柱穴の内側に2か所の炉を持ち，南東壁付近からは，炭化材が検出されている。本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



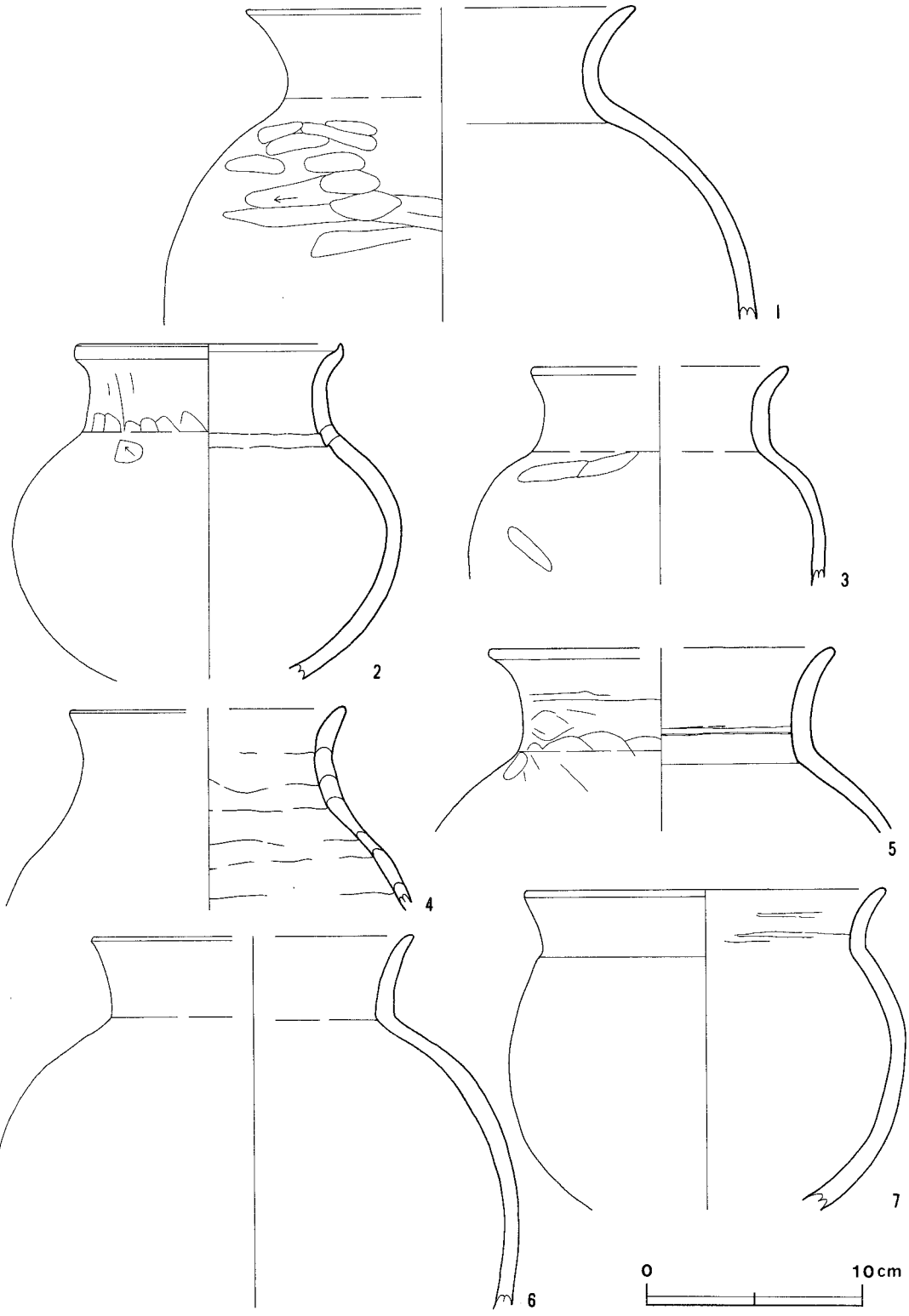
住居跡土層解説表

1	褐色	硬く締まる
2	褐色	焼土粒子微量　硬い
3	褐色	炭化粒子微量　硬い

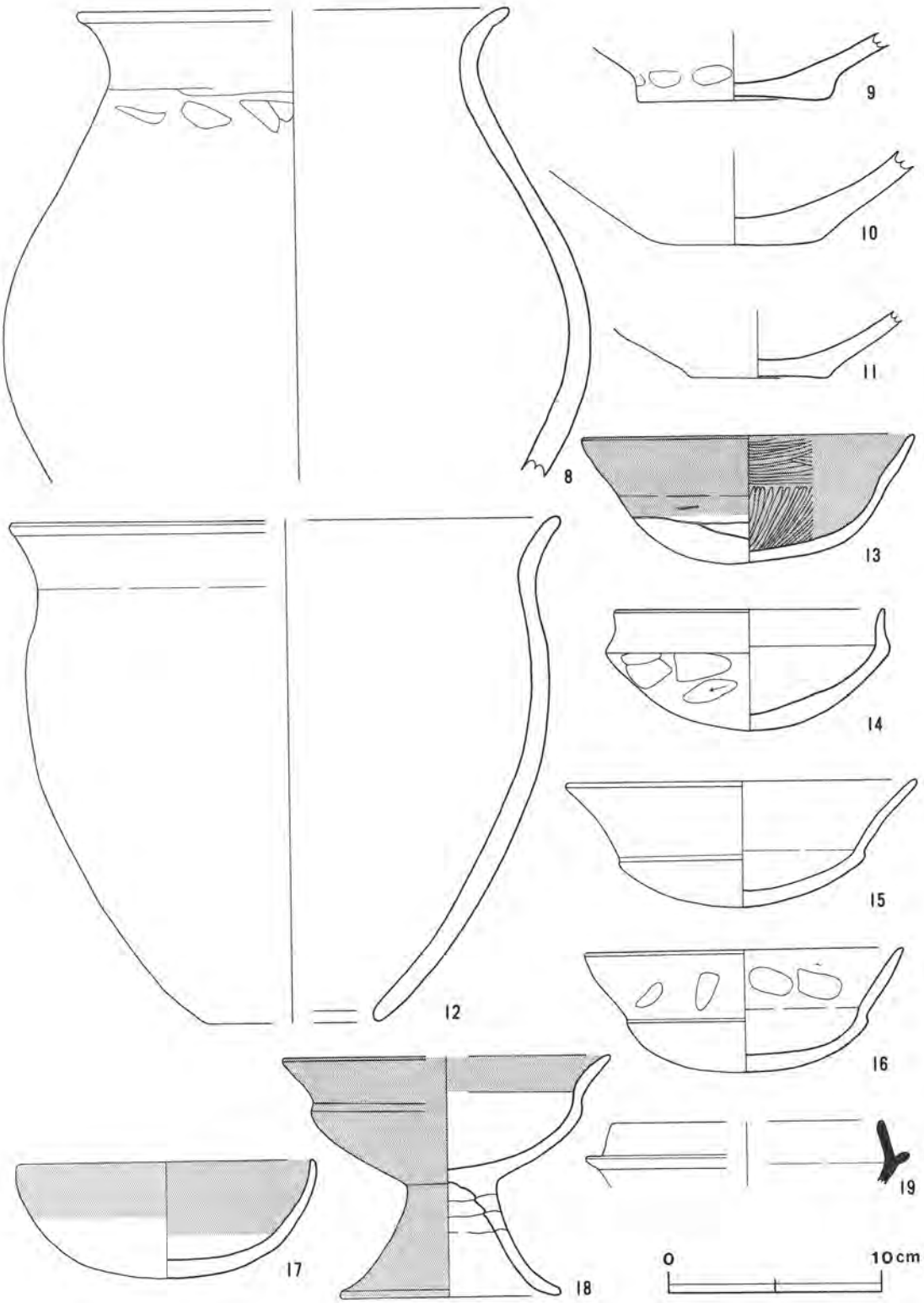
炉土層解説表

1	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
2	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量　硬い
3	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
4	極暗赤褐色	ローム粒子微量　焼土粒子中量　硬い
5	暗赤褐色	焼土ブロック　硬く締まる
6	暗褐色	ローム粒子微量　焼土粒子少量　硬い
7	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
8	明赤褐色	焼土粒子中量　硬い
9	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い

第20図　第6号住居跡実測図



第21図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）



第22図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	壺 土師器	A(18.2) B〔14.6〕	胴下半部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部から口縁部にかけて丸味を持って外反し，口唇部は丸味を帯びている。	胴部内面剝離のため調整不明。外面，横位のヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	35% P36 北東部覆土下層
2	壺 土師器	A 12.6 B〔15.6〕	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，胴中央部に最大径を持つ。頸部は直立気味に立ち上がり，やや外反する。口唇部は上方へつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面に縦位のヘラ削り。胴部内・外面ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P37 中央部床面・覆土下層 東コーナー付近覆土下層
3	壺 土師器	A(12.0) B〔10.2〕	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は直立気味に立ち上がり，やや外反する。口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。胴上半部外面，横位・斜位のナデ。内面剝離のため調整不明。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	35% P38 西コーナー付近床面直上
4	壺 土師器	A(13.0) B〔 9.4〕	胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて丸みを持って外反する。	口縁部内・外面にナデ。器内面全体に輪積み痕を残す。	砂粒・長石 橙色 普通	20% P39 北東部覆土下層
5	壺 土師器	A(16.2) B〔 8.6〕	胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。胴部外面ナデ。内面剝離のため調整不明。	砂粒・長石 赤褐色 普通	25% P40 西部床面直上
6	壺 土師器	A(15.0) B〔17.4〕	底部欠損。胴部は内彎し，頸部はくびれ，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面剝離が著しく調整不明。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	20% P41 北東部・南コーナー付近覆土下層
7	甕 土師器	A 16.8 B〔14.9〕	胴部は，ほぼ球状を呈し，頸部との境ににぶい稜を有し，口縁部は外反し口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	60% P42 北西壁付近床面・覆土下層
第22図 8	甕 土師器	A(20.4) B〔22.1〕	底部欠損。胴部は内彎し，胴下半部に最大径を有する。頸部との境にあまい稜を有し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面上部ヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P43 南東部覆土中層
9	甕 土師器	B〔 3.1〕 C 9.2	平底。胴部欠損。	内・外面横ナデ。底部に指頭状の圧痕あり。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	10% P44 南東部覆土中層
10	甕 土師器	B〔 4.3〕 C 8.0	平底。胴部欠損。	内・外面ナデ。底部外面ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	10% P45 南コーナー付近床面直上
11	甕 土師器	B〔 3.1〕 C 6.6	平底。胴部欠損。	内面剝離のため調整不明。外面ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	10% P46 東コーナー付近覆土中層
12	甑 土師器	A(26.0) B 23.6 C 8.0	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部はややくびれる。口縁部は外反し，口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内面ナデ，外面横位及び斜位のナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	20% P47 北西壁付近覆土中層
13	坏 土師器	A 15.8 B 6.0	丸底。体部は内彎し口縁部との境に，にぶい稜を有する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面縦位のヘラ磨き，外面ヘラナデ。内・外面赤彩痕あり。	砂粒 赤色 普通	100% P48 北西壁中央付近床面直上
14	坏 土師器	A 12.8 B 5.6	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を持つ。口縁部は，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	99% P49 北部床面直上
15	坏 土師器	A 16.6 B 5.9	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を持つ。口縁部は緩く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	90% P50 北部覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 16	坏 土師器	A 15.0 B 5.7	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外傾する。	口縁部内面横ナデ後，ヘラ削り。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	90% P51 北西部覆土下層
17	坏 土師器	A 14.0 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は，ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面に赤彩痕あり。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	70% P52 北西壁中央付近床面直上
18	高坏 土師器	A(15.6) B 11.3 D 10.4 E 5.4	脚部は中空でラッパ状に開く。坏部は内彎し，口縁部と体部との境に稜を有する。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面ナデ，外面横ナデ。脚部外面ナデ，内面は輪積み痕が残る。口縁部内面，器外面に赤彩痕あり。	砂粒・長石・雲母 赤色 普通	70% P53 北西壁付近床面
19	坏 須恵器	A(12.8) B〔3.0〕	体部欠損。口縁部と体部との境に丸みのある稜を有する。口縁部は，やや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 暗灰黄色 普通	5% P54 西部覆土上層

第7号住居跡（第23図）

位置　調査区の中央部D3a4区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸4.9m・短軸4.7mの方形を呈している。

主軸方向　N－40°－W。

壁　壁高は20～30cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　北西壁際付近を除き検出され，上幅17～27cm・深さ5cmを測る。

床　平坦で，ピットに囲まれた中央部は踏み固められていて，硬く締まりがある。南西側と南東側の一部及び，南コーナー付近は撹乱を受けている。

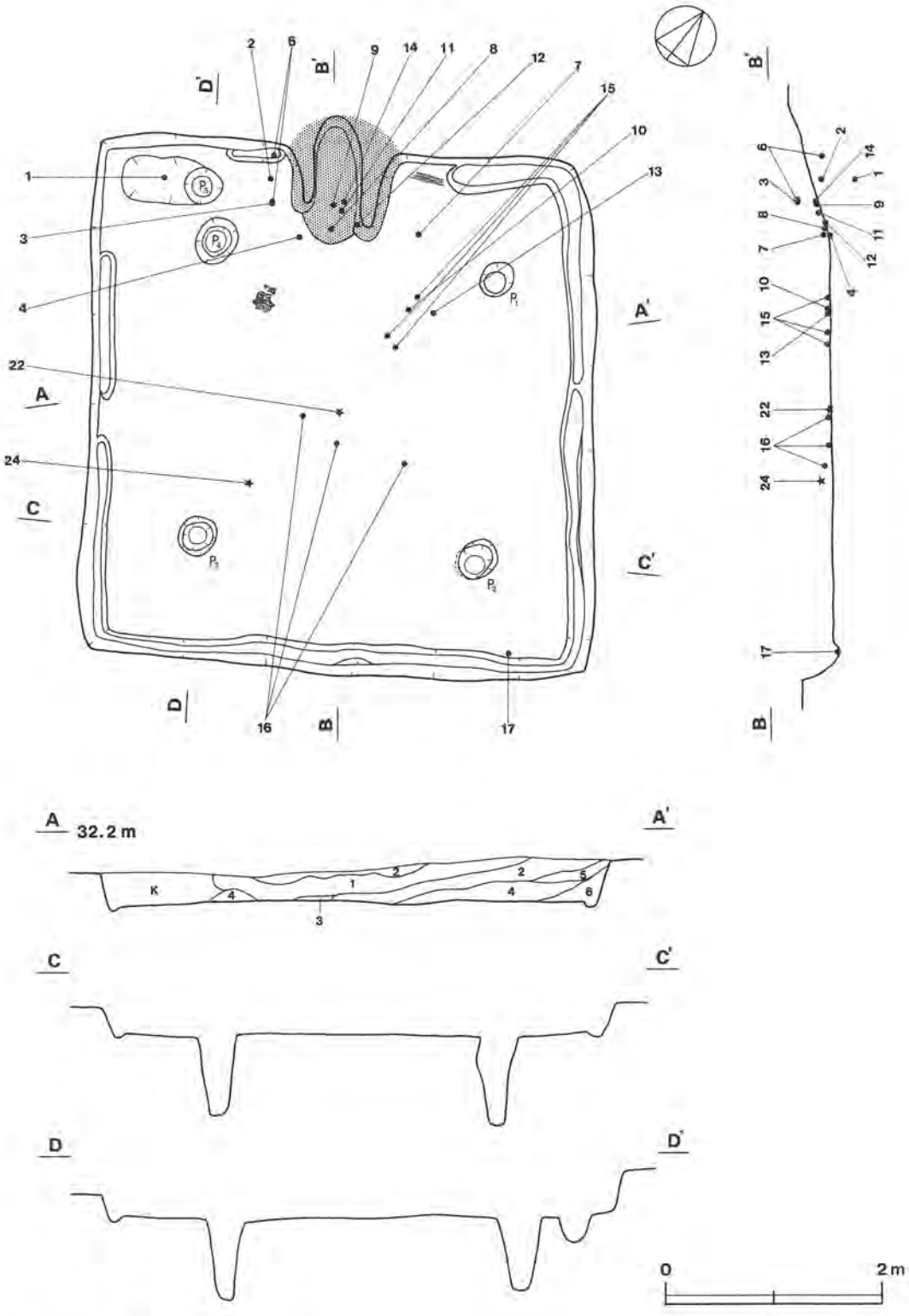
ピット　5か所確認され，P_1～P_4が主柱穴で径34～44cmの円形を呈し，深さ66～87cmを測る。P_5は深さ25cmで補助柱穴と考えられる。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ115cm・幅105cmで，壁への掘り込みは30cmである。砂質粘土を主体として構築され，両袖部とも良好な形で残っている。火床は径55cmの円形を呈し，赤変硬化している。

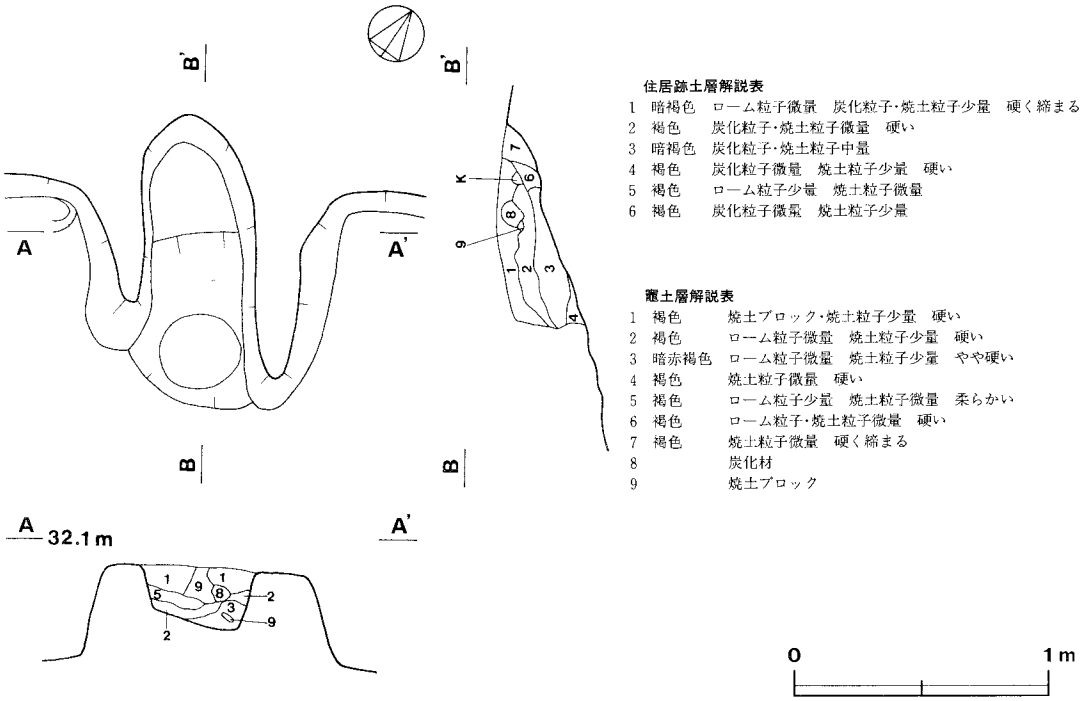
覆土　炭化粒子・焼土粒子を少量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（壺，甕，坏，高坏）276点，須恵器片2点，土製品（土玉，管状土錘）4点が出土している。土師器は（1）の壺が，西コーナー付近のやや掘り込んだ床面から出土している。竈の西側の覆土からは，（3）の甕が潰れた状態で，（2）の甕が横位で，（6）の甑が斜位で（2）の胴下半部に入り込んで，連なって出土している。北部の覆土下層からは，（10・13）の完形の坏が出土している。竈の火床面からは，（8・11・12・14）の完形の坏が正位で，（9）の完形の坏が逆位でそれぞれ出土している。須恵器は細片で覆土上層から出土している。また，北西及び竈の北東部の床面付近からは炭化材がまとまって出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第23図　第7号住居跡実測図



住居跡土層解説表

1 暗褐色 ローム粒子微量 炭化粒子・焼土粒子少量 硬く締まる
2 褐色 炭化粒子・焼土粒子微量 硬い
3 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子中量
4 褐色 炭化粒子微量 焼土粒子少量 硬い
5 褐色 ローム粒子少量 焼土粒子微量
6 褐色 炭化粒子微量 焼土粒子少量

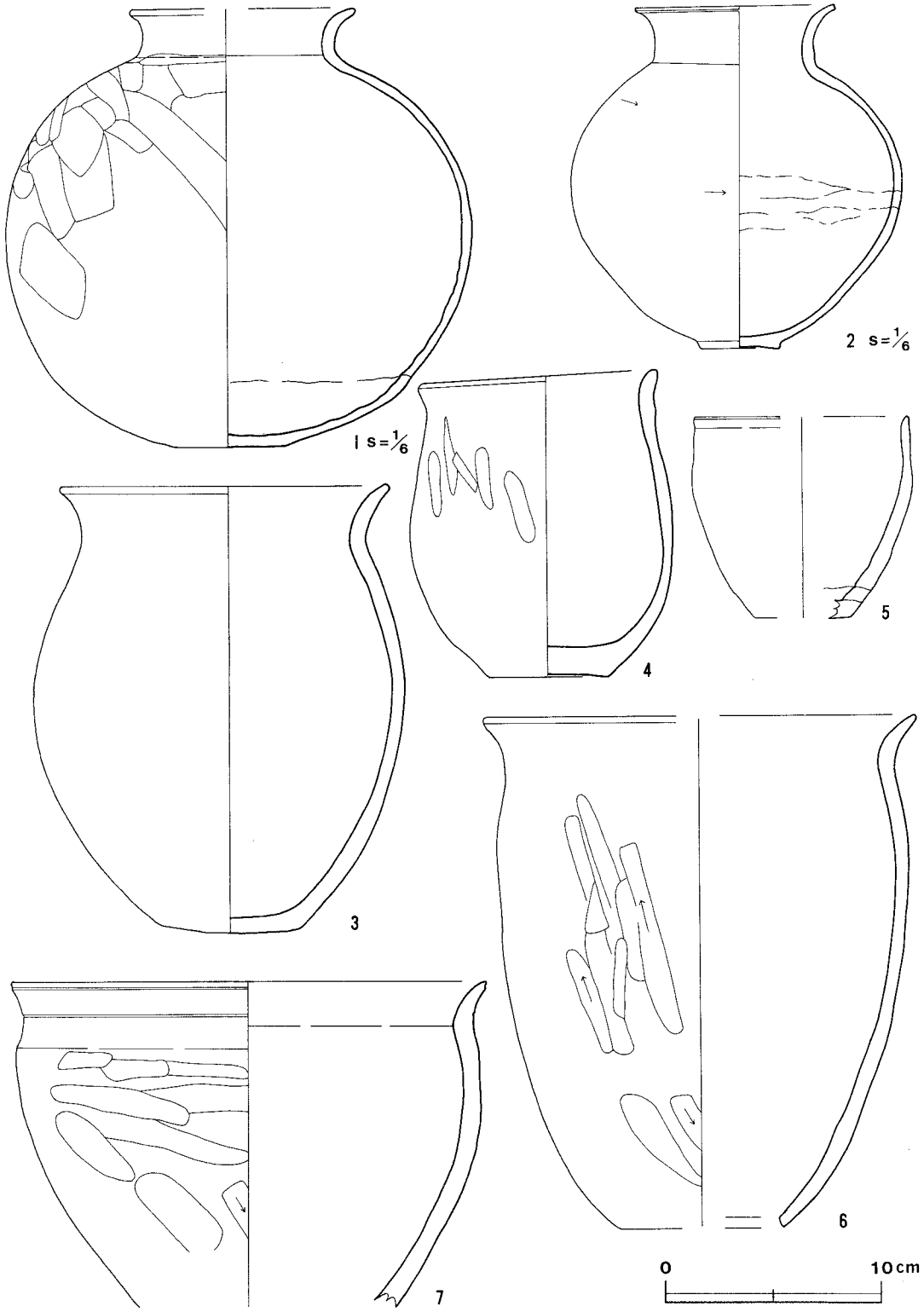
竈土層解説表

1 褐色 焼土ブロック・焼土粒子少量 硬い
2 褐色 ローム粒子微量 焼土粒子少量 硬い
3 暗赤褐色 ローム粒子微量 焼土粒子少量 やや硬い
4 褐色 焼土粒子微量 硬い
5 褐色 ローム粒子少量 焼土粒子微量 柔らかい
6 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 硬い
7 褐色 焼土粒子微量 硬く締まる
8 炭化材
9 焼土ブロック

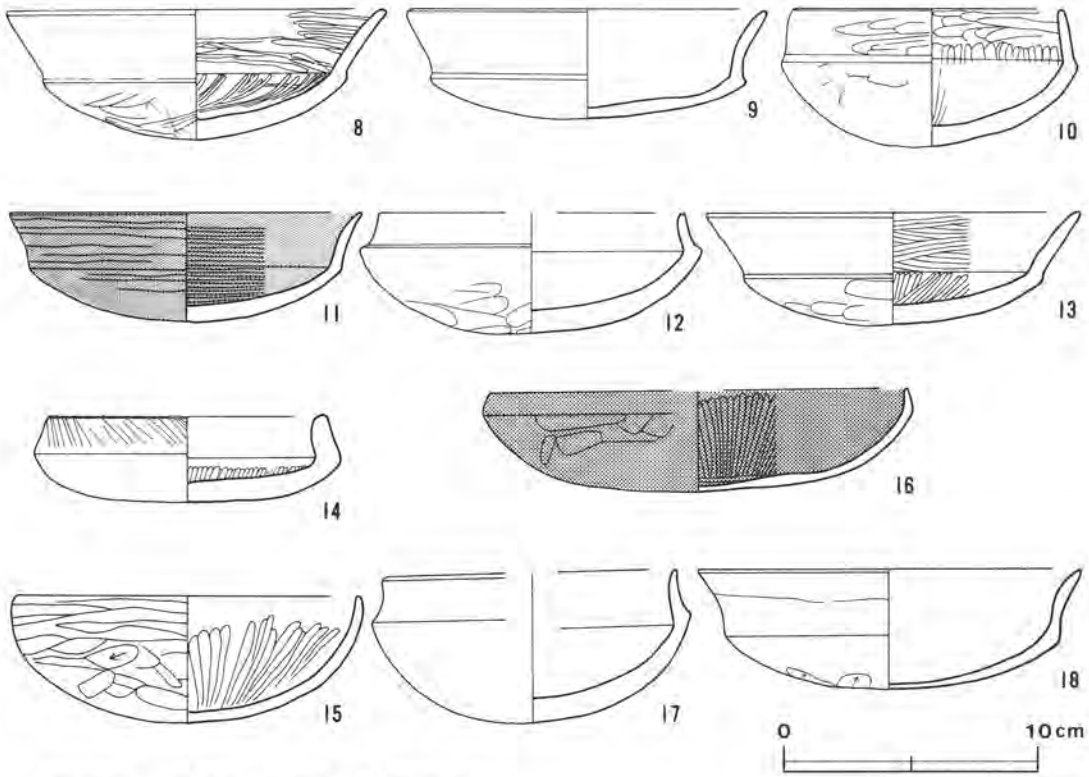
第24図　第7号住居跡竈実測図

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	壺 土師器	A(20.9) B 40.3 C 10.5	平底。胴部は球状を呈し,口縁部は直立気味に立ち上がり,口唇部で外反する。	器内面は剥離のため整形不明瞭。口縁部外面横ナデ。胴部外面多方向にヘラ削り。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	97% P55 西コーナー付近床面
2	甕 土師器	A 18.5 B 31.6 C 7.4	突出した平底。胴部は球状を呈し,頸部は直立しながら立ち上がり,外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	80% P56 竈西側覆土下層
3	甕 土師器	A 15.4 B 20.7 C 6.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり,胴中央部に最大径を有する。口縁部は,外反する。	底部はヘラナデ。胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	70% P57 内面煤付着 竈西側覆土中層
4	小型甕 土師器	A 11.2 B 14.2 C 5.8	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり,胴下半部に最大径を有する。口縁部は,短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ,外面斜位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	70% P58 竈南側覆土下層
5	小型甕 土師器	A(10.0) B 9.3 C(4.4)	胴部は内彎しながら，直立気味に立ち上がり，口縁部に至る。頸部に，にぶい稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	30% P59 覆土
6	甑 土師器	A(20.2) B 23.9 C(8.0)	無底式。胴部は直立気味に立ち上がり，頸部は緩やかにくびれ,口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面斜位のヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	70% P60 竈西側覆土下層



第25図　第７号住居跡出土遺物実測図（１）



第26図　第７号住居出土遺物実測図（２）

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第25図 7	鉢 土師器	A 22.2 B〔15.0〕	胴下半部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部に，にぶい稜を有し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ，外面横及び斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	80%　P61 竈東側覆土下層
第26図 8	坏 土師器	A 15.0 B　5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外傾する。	口縁部内面横ナデ後，横位のヘラ磨き。外面横ナデ。体部内面ナデ後ヘラ磨き，外面ヘラナデ。底部にヘラ記号。	砂粒・雲母 橙色・黒色 普通	100%　P62 竈火床部直上
9	坏 土師器	A 14.2 B　4.3	丸底。体部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	100%　P63 竈火床部直上
10	坏 土師器	A 10.7 B　5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内面横ナデ後，横位及び縦位のヘラ磨き，外面横ナデ，横位及び縦位のヘラ磨き。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	100%　P64 北部覆土下層
11	坏 土師器	A 14.0 B　4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反し，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内・外面ナデ後，横位のヘラ磨き。器内・外面に赤彩痕あり。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	95%　P65 竈火床部直上
12	坏 土師器	A（12.1） B　4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ，外面ナデ，下半部から底部にかけてヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・石英 浅黄橙色 普通	98%　P66 竈火床部直上

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第26図 13	坏 土師器	A 14.8 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外傾する。	口縁部内面横ナデ後，横位のヘラ磨き。外面横ナデ。体部内面ナデ後ヘラ磨き，外面ヘラ削り。底部にヘラ記号。	砂粒・雲母 赤色・黒色 普通	98%　P67 北部覆土下層
14	坏 土師器	A 10.9 B 3.4	丸底。体部は内彎気味に緩やかに立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾し，口唇部は丸い。	口縁部内面横ナデ。外面横ナデ後，斜位のヘラ磨き。体部内面ヘラナデ後ヘラ磨き，外面ヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	98%　P68 竈火床部直上
15	坏 土師器	A 13.6 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は，やや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後，ヘラ磨き，外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	70%　P69 中央部床面・覆土下層
16	坏 土師器	A(16.6) B 4.0	丸底。体部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部との境ににぶい稜を有する。口縁部は，やや内傾し，口唇部は尖る。	口縁部内面横ナデ後ヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面縦位のヘラ磨き，外面ヘラ削り。 内・外面黒色処理。	砂粒 黒色 普通	50%　P70 中央部覆土下層
17	坏 土師器	A(11.6) B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境ににぶい稜を有する。口縁部は，やや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	50%　P71 器内・外面に煤付着 南東コーナー付近覆土下層
18	坏 土師器	A 15.0 B 4.7	丸底。体部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラナデ，底部ヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	98%　P72 覆土

第8号住居跡（第27図）

位置　調査区の中央部D3c3区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸4.7m・短軸4.5mの方形を呈している。

主軸方向　N－11°－W。

壁　壁高は30～35cmを測り，垂直に立ち上がる。

壁溝　上幅14～18cm，深さ5cmを測り，全周している。

床　ほぼ平坦で硬く締まっている。

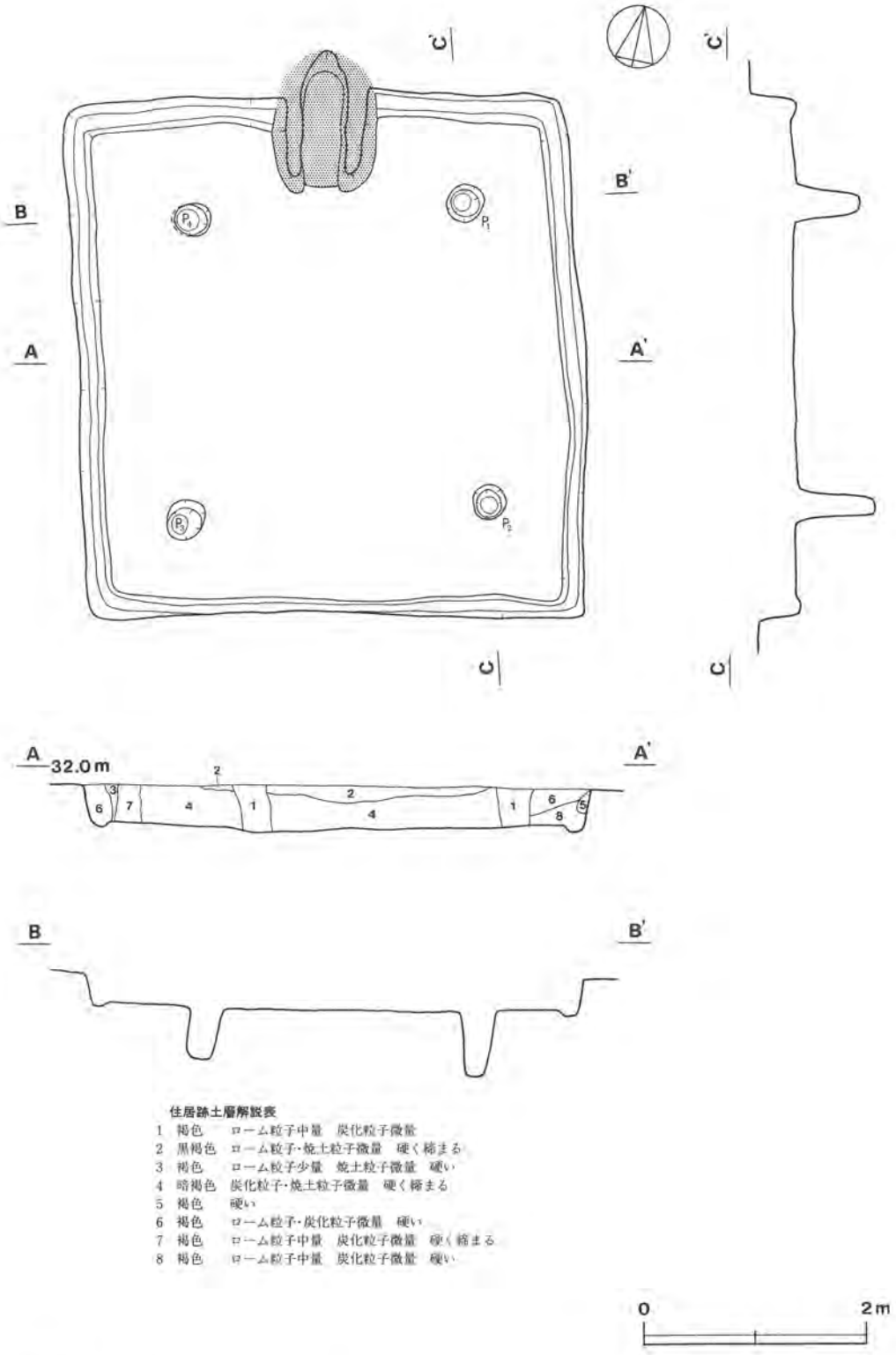
ピット　4か所検出され，径20～35cmの円形を呈し，深さ48～76cmで，いずれも主柱穴である。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ135cm，幅105cmで，壁への掘り込みは40cmである。砂質粘土で構築され，天井部は，崩落しているが，両袖部は良好な状態で残っている。火床は径40cmの円形を呈し，良く焼けている。

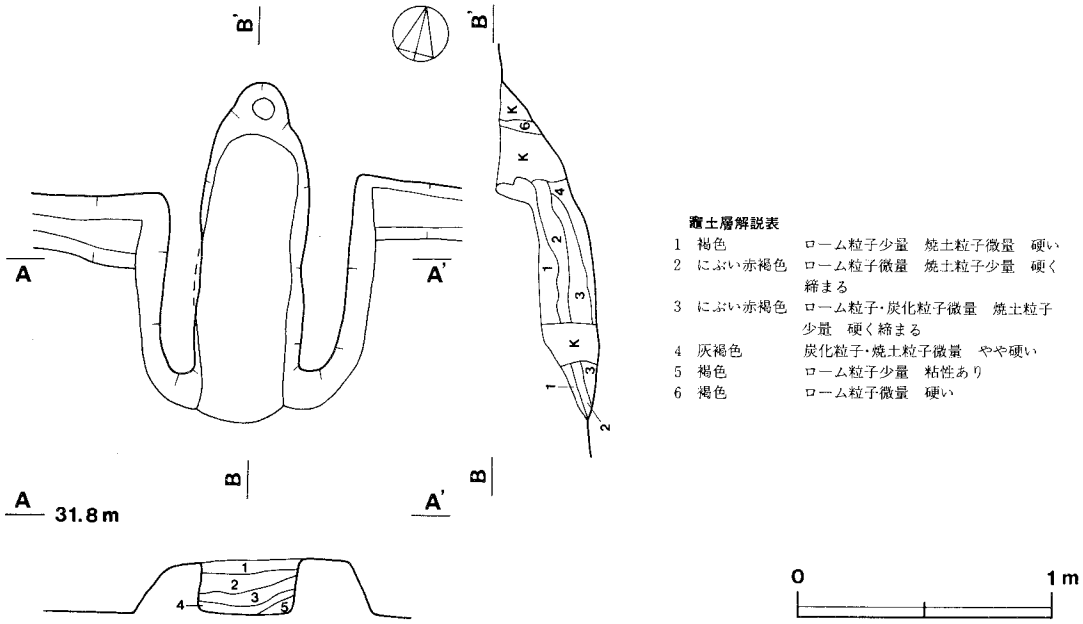
覆土　微量の炭化粒子・焼土粒子を含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片(壺，甕，坏，高坏)528点，須恵器片1点が，竈の東側と床面の中央部から南側にかけて出土している。土師器は（1）の甕片（口縁部）が中央部の床面から正位で，（2）の甕が北東部の床面から潰れた状態で，（8）の高坏片（坏部）が中央部の床面からそれぞれ出土している。須恵器は細片で覆土上層から出土している。（10）の磨石が覆土上層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



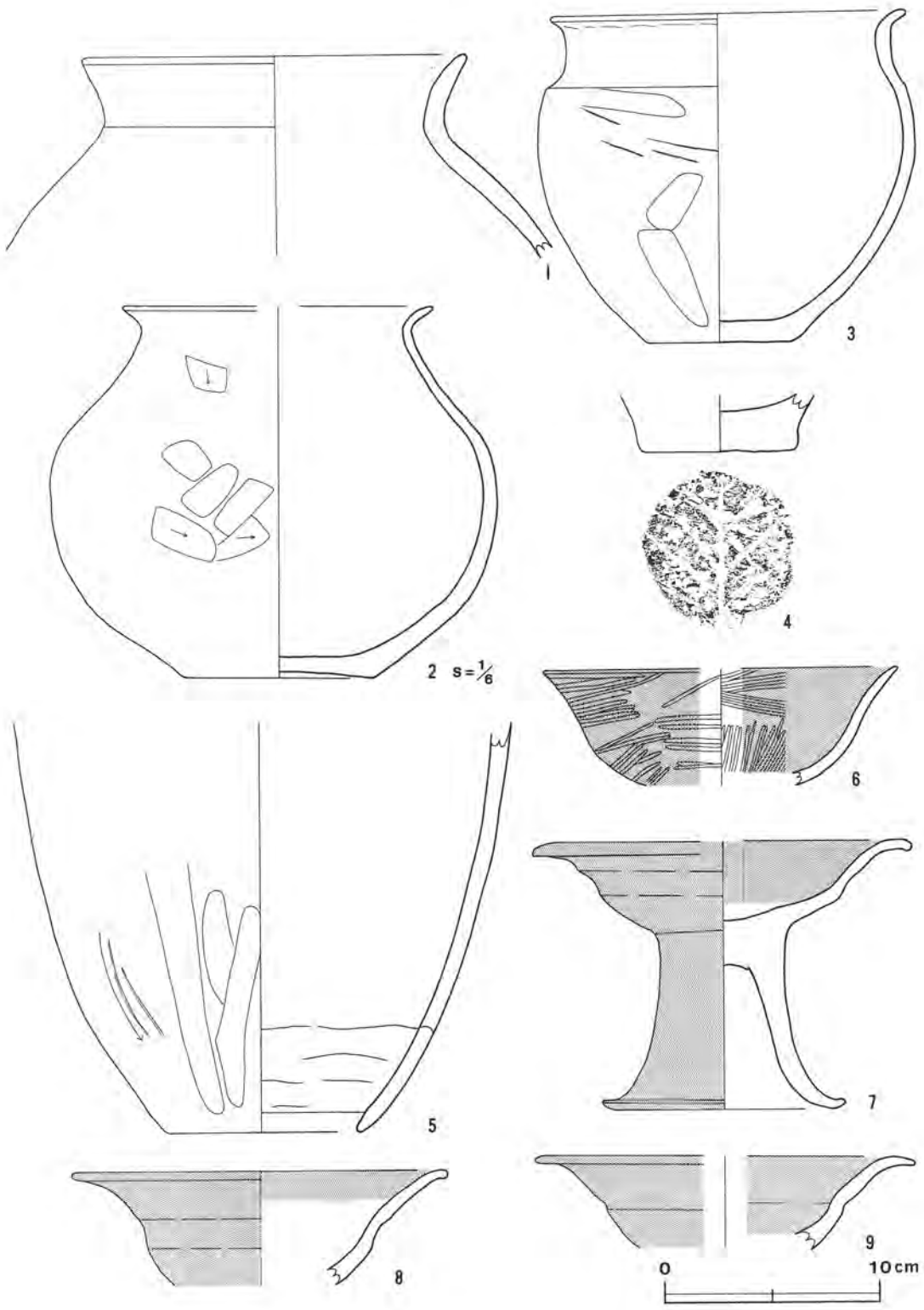
第27図　第８号住居跡実測図



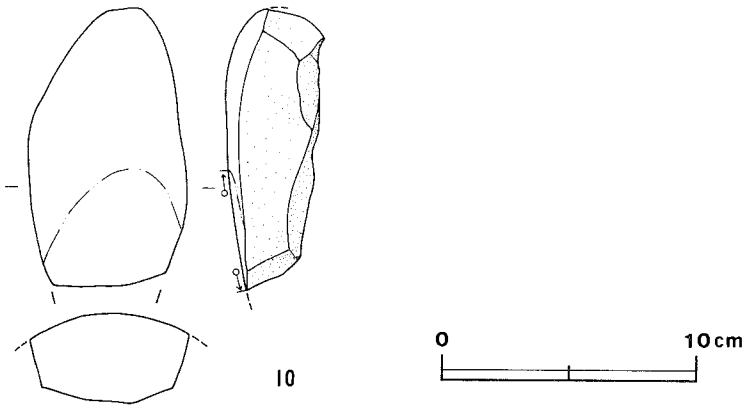
第28図　第8号住居跡竈実測図

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	甕 土師器	A 18.0 B〔9.5〕	胴中央部・下半部欠損。胴部は，やや内彎気味に立ち上がり，頸部に緩いくびれを持ち，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P73 中央部床面・覆土下層
2	甕 土師器	A 20.6 B 24.3 C 12.6	平底。胴部は球状を呈し，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後，ナデ。内面剥離のため調整不明。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	60% P74 北東部床面・覆土下層
3	甕 土師器	A 16.6 B 15.4	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部にくびれを持つ。口縁部は直立しながら，口唇部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ・外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	95% P75 北壁付近床面・覆土下層 中央部覆土下層
4	甕 土師器	B〔2.6〕 C 7.3	平底。胴部欠損。	調整不明。	砂粒・長石 橙色 普通	5% P76 底部，木葉痕あり。 北部覆土下層
5	甑 土師器	B〔19.1〕 C 9.0	無底式。口縁部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ，外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	50% P77 北東壁付近覆土下層
6	坏 土師器	A〔16.6〕 B〔5.4〕	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は大きく外傾する。	口縁部内・外面横ナデ後ヘラ磨き。体部内・外面ナデ後ヘラ磨き。内・外面赤彩痕あり。	砂粒 赤色 普通	30% P78 南東コーナー付近覆土中層
7	高坏 土師器	A〔17.8〕 B 12.5 D 11.4 E 8.6	坏部は内彎気味に立ち上がり，脚部は中空でラッパ状に開く。にぶい稜を有し，口縁部で大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面横ナデ。脚部内・外面ヘラナデ。裾部外面横ナデ。内外面赤彩痕残る。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	70% P79 中央部床面



第29図　第８号住居跡出土遺物実測・拓影図(１)



第30図　第8号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 8	高坏 土師器	A 17.6 B〔5.3〕	脚部欠損。坏部は内彎気味に立ち上がり，にぶい稜を有する。口縁部は，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏底部外面ヘラナデ。坏部内・外面に赤彩痕残る。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P80 中央部床面直上
9	高坏 土師器	A(17.8) B〔4.3〕	脚部欠損。坏部は，内彎気味に立ち上がり稜を有する。口縁部は外傾気味に立ち上がり，口唇部で大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内外面横ナデ。坏部内・外面に赤彩痕残る。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P81 東部覆土下層

第8号住居跡出土石器観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第30図 10	磨石	砂岩	〔11.0〕	〔6.3〕	〔3.8〕	〔360.0〕	南西部覆土上層	1面に磨り。	11

第9号住居跡（第31図）

位置　調査区の中央部D2a$_0$区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸8.0m・短軸7.8mの方形を呈している。

主軸方向　N－51°－W。

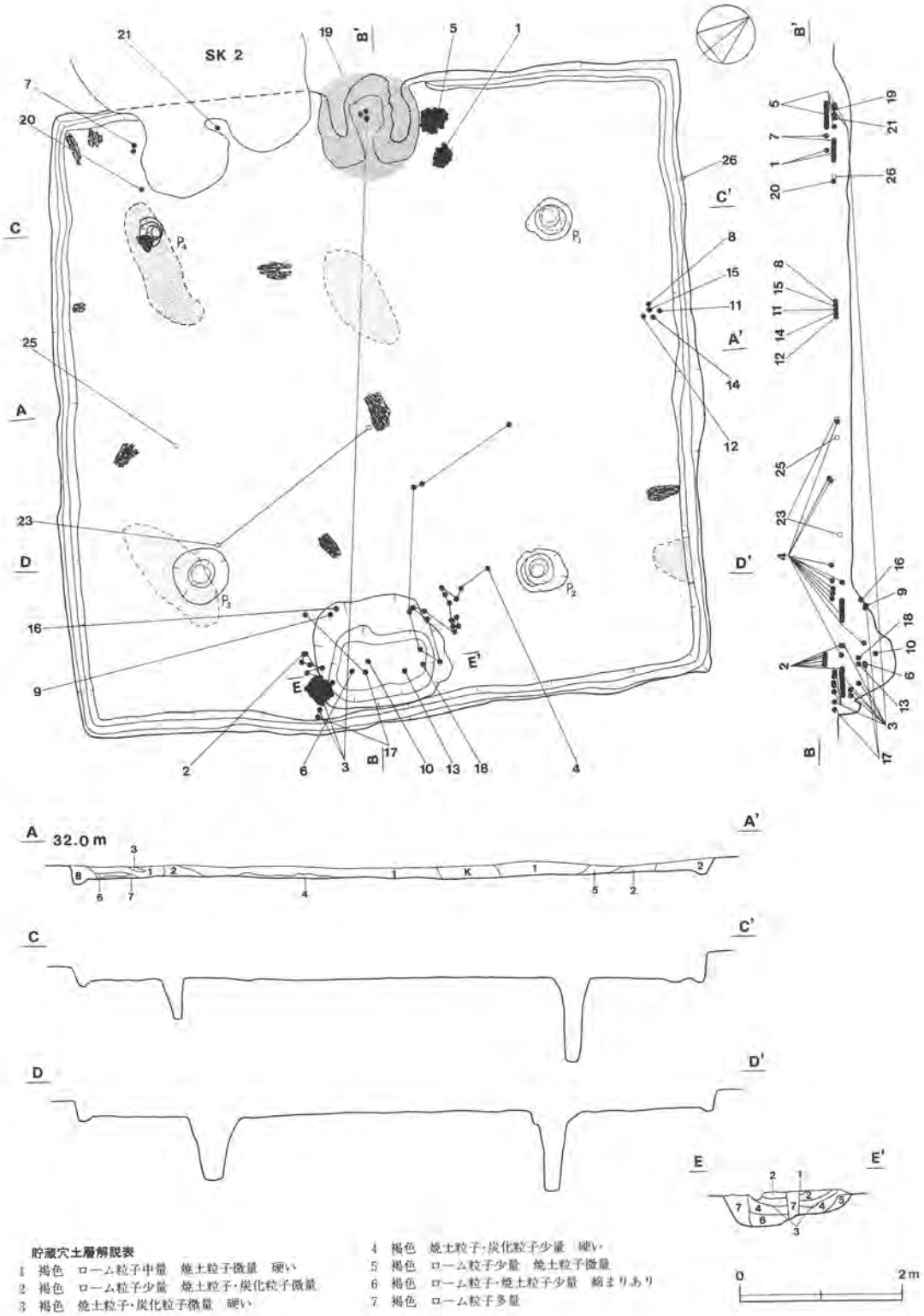
壁　壁高は20～23cmで，垂直に立ち上がる。北西壁の竈西側の壁は第1号地下式壙と重複しており不明である。

壁溝　上幅14～40cm，深さ10cm前後を測り，全周している。

床　全体に平坦で硬く締まっている。

ピット　4か所検出され，径35～60cmの円形を呈し，深さ40～88cmで，いずれも主柱穴である。

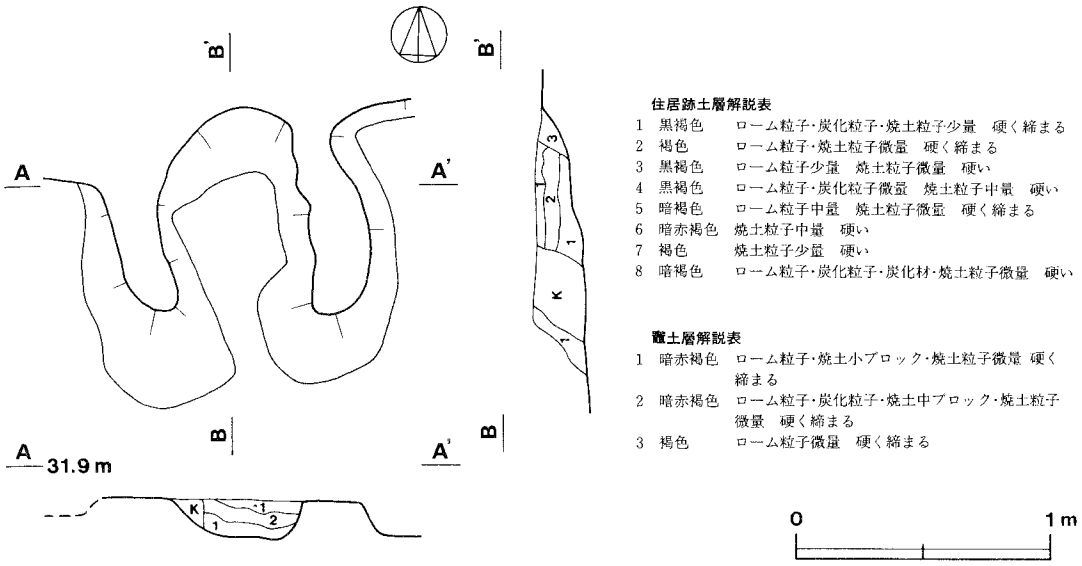
貯蔵穴　南東壁際中央部に付設され，長径160cm・短径130cmの長方形を呈し，深さ50cmを測る。底部は鍋底状を呈し，北西壁は緩やかに立ち上がり，南東壁は急傾斜で立ち上がる。覆土は，底面付近に焼土粒子・ローム粒子を少量含む褐色土が，自然堆積している。



貯蔵穴土層解説表

1 褐色 ローム粒子中量 焼土粒子微量 硬い
2 褐色 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 硬い
4 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 硬い
5 褐色 ローム粒子少量 焼土粒子微量
6 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 締まりあり
7 褐色 ローム粒子多量

第31図 第9号住居跡実測図



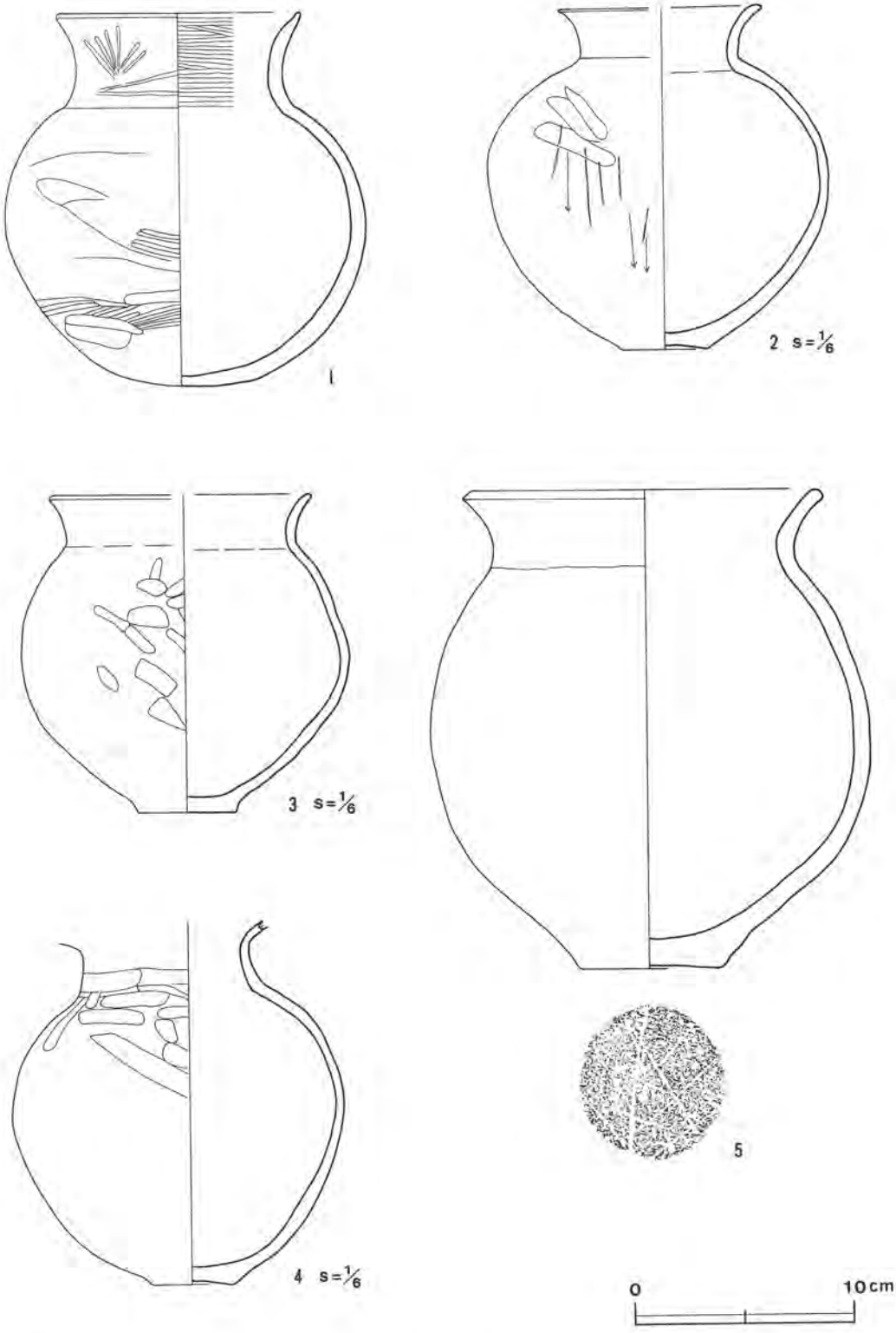
第32図　第9号住居跡竈実測図

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ110cm・幅110cmで，壁への掘り込みは25cmを測り煙道としている。天井部は，崩落しているが，袖部は，右袖部が非常に焼けて硬く良好な状態で残っており，左袖部は一部撹乱を受けている。火床部は焼けて硬くゴツゴツしている。

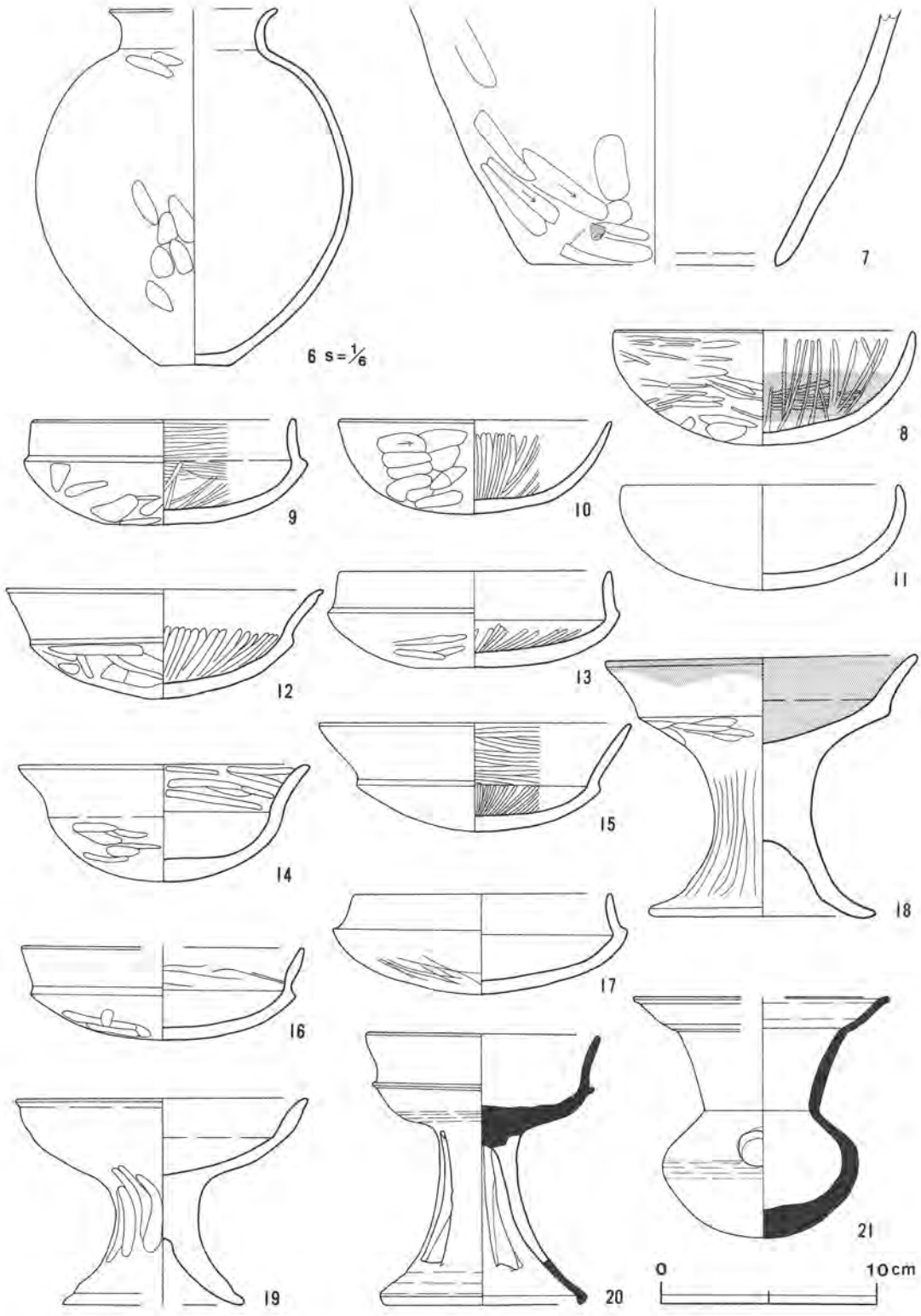
覆土　炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子を少量含む黒褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片(壺，甕，坏，高坏)595点，須恵器片2点，土製品(土玉)1点。石製品(紡錘車等)5点が，床面及び貯蔵穴内から出土している。土師器は(1)の壺が竈東側床面から，(5)の甕が竈東側の床面から出土している。(8・11・12・14)の完形の坏が北東壁付近床面から逆位でそれぞれ出土している。貯蔵穴内からは，(9・10・13・16・17)の坏や，(18)の高坏が正位で出土し，須恵器は，(20)の高坏が西部床面から横位で，(21)の甕が西部床面近くから横位で出土している。他に(23)の敲石が横位で出土している。(25・26)の紡錘車は南西部及び北東壁の床面から正位で出土している。その他，炭化材が床全体から検出され，極めて硬い焼土が南西部床全域から検出された。

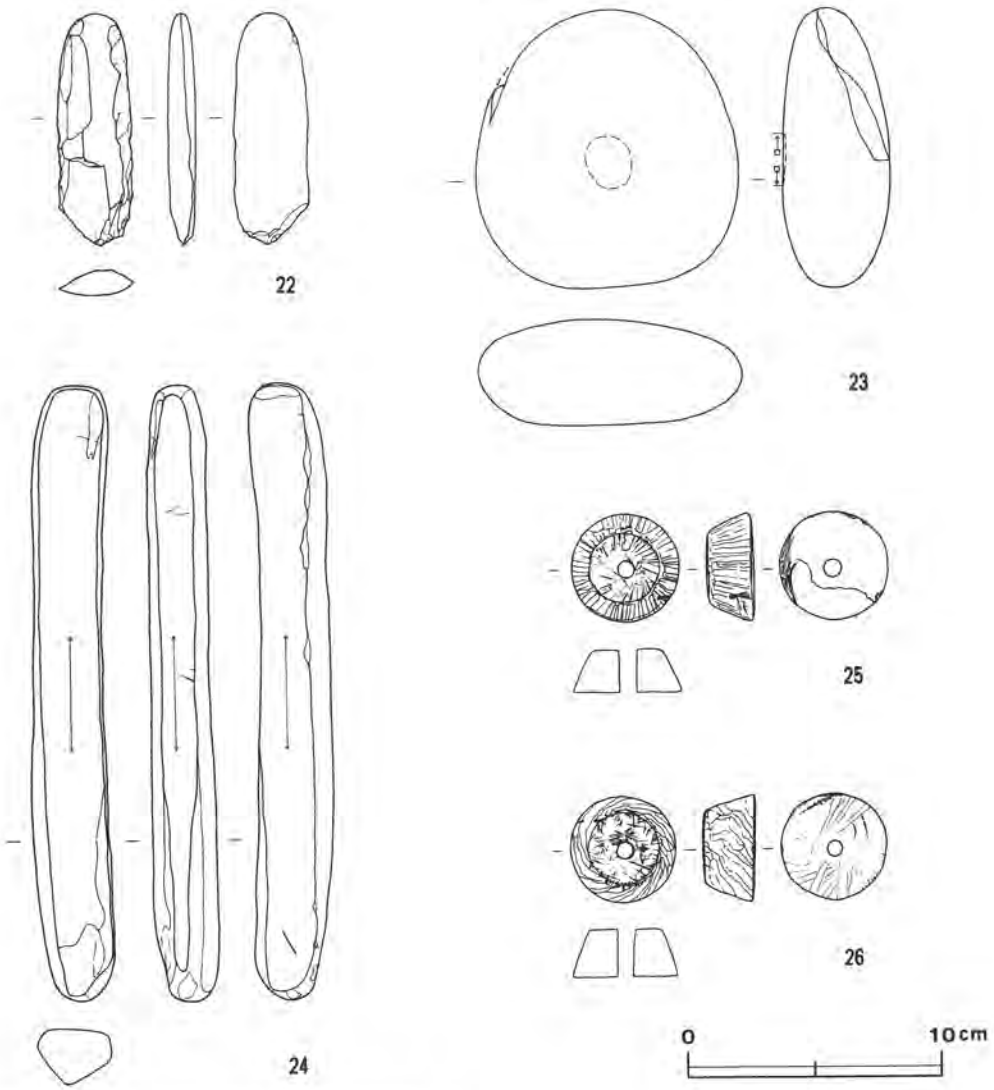
所見　本跡の床面から多量の炭化材が検出されたので，焼失家屋と思われる。遺構の形態や遺物から，古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第33図　第９号住居跡出土遺物実測・拓影図(１)



第34図　第９号住居跡出土遺物実測図（２）



第35図　第９号住居跡出土遺物実測図（３）

第９号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第33図 1	壺 土師器	A 11.2 B 17.0	丸底。胴部は球状を呈し，頸部に稜を有する。口縁部は外反しながら立ち上がり，口唇部はつまみ上げられる。	口縁部内面横ナデ後，横位のヘラ磨き，外面横ナデ後，多方向のヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。外面ヘラ削り後，多方向のヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	99%　P82 竈東側床面直上
2	壺 土師器	A（18.8） B 31.1 C 7.8	平底。胴部は球状を呈し，口縁部は直立しながら立ち上がり，上位で外反する。	口縁部内，外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面縦位及び斜位のヘラ削り。	砂粒・スコリア・長石 橙色 普通	70%　P83 貯蔵穴付近床面・覆土上層
3	壺 土師器	A（24.0） B 28.8 C 9.0	突出した平底。胴部はほぼ球状を呈し，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面多方向へのヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	50%　P84 貯蔵穴付近床面・覆土中層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 4	壺 土師器	B〔32.9〕 C 7.4	突出した平底。胴部は球状を呈し，口縁部は直立しながら立ち上がり，上位で大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。器内面剥離で調整不明。胴部外面ナデ，多方向のヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色，普通	65% P85 貯蔵穴
5	甕 土師器	A 16.7 B 21.8 C 6.6	底部は突出した平底。胴部は内彎し，胴中央部に最大径を有する。口縁部は外傾し，口唇部を面とりする。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	98% P87 底部木葉痕有り。 竈東側床面
第34図 6	壺 土師器	A〔15.6〕 B 32.9 C 6.6	平底。胴部はほぼ球状を呈し，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	45% P86 竈北東側床面・覆土上層
7	甑 土師器	B〔11.9〕 C 11.6	無底式。胴上半部欠損。胴部は外傾気味に立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ，外面斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	10% P88 西コーナー付近床面直上
8	坏 土師器	A 14.0 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面横ナデ後，横位及び縦位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。内面に赤彩痕残る。	砂粒 橙色 普通	99% P89 北東壁付近床面直上
9	坏 土師器	A 12.2 B 4.9	丸底。体部は緩やかに内彎し，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内面横ナデ後ヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面ナデ後ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	100% P90 貯蔵穴
10	坏 土師器	A 12.8 B 4.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内面は横ナデ後，縦位のヘラ磨き，外面はヘラ削り。	砂粒 橙・黒褐色 普通	100% P91 貯蔵穴
11	坏 土師器	A 12.8 B 4.9	丸底。体部は強く内彎して立ち上がる。口縁端部はやや内傾する。口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	100% P92 北東壁付近床面直上
12	坏 土師器	A 14.8 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後，ヘラ磨き。体部外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	99% P93 北東壁付近床面直上
13	坏 土師器	A 12.8 B 4.5	丸底。体部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・長石 黒褐色 普通	100% P94 貯蔵穴
14	坏 土師器	A 13.6 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境ににぶい稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内面横ナデ後，ヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	99% P95 北東壁付近床面直上
15	坏 土師器	A 14.6 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に角張る稜を有する。口縁部は外傾し，口唇部は尖る。	口縁部内面は，横ナデ後，ヘラ磨き，外面は横ナデ。体部内面はヘラ磨き，外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	98% P96 北東壁付近床面直上
16	坏 土師器	A〔13.2〕 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外傾気味に立ち上がり，口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後，ヘラナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	70% P97 貯蔵穴
17	坏 土師器	A 12.0 B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	70% P98 貯蔵穴，貯蔵穴付近床面
18	高坏 土師器	A 14.6 B 12.2 D 10.6 E 7.6	坏部は，底部に稜を有し外反する。脚部は，中空でラッパ状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面ナデ，坏底部外面ヘラ削り後ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き。裾部内面横ナデ。坏部内面に赤彩痕残る。	砂粒 明赤褐色 普通	100% P99 貯蔵穴

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 19	高坏 土師器	A 13.6 B 9.6 D(8.5) E 5.6	坏部は内彎し，口縁部との境ににぶい稜を有する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。脚部は中空でラッパ状に開き，裾部ににぶい稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	90% P100 竈燃焼部下層
20	高坏 須恵器	A 10.9 B 12.7 D 9.6 E 8.0	口縁部は外反する。坏部は内彎気味に立ち上がり，稜を有する。脚部は裾部ににぶい稜をもち，ラッパ状に開く。長方形透しは3個。	横ナデ。坏部貼り付け。透し窓，ヘラ削り。	砂粒 灰黄色 普通	70% P101 西部床面直上
21	壺 須恵器	A(11.2) B 12.0	丸底。胴部は球状を呈す。口縁部は外傾し，上位で稜をもち更に外傾する。胴部上位に径1.8cmの穴が穿たれている。	口縁部，胴部外面横ナデ。底部ナデ。	砂粒 灰色 普通	80% P102 西部床面直上

第9号住居跡出土石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第35図 22	石斧	緑泥片岩	9.1	2.9	1.1	43.2	南西部覆土上層		12
23	敲石	砂岩	11.0	10.3	4.2	635.4	中央部・南部床面直上	2か所に使用痕有り。	13
24	砥石	緑泥片岩	4.3	3.2	5.5	298.3	貯蔵穴	全面に使用痕有り。	28
25	紡錘車	滑石	4.3	4.3	1.9	48.6	南西部床面直上		14
26	紡錘車	滑石	4.2	4.2	2.1	50.8	北東壁床面直上		15

第10号住居跡（第36図）

位置　調査区の中央部D2a7区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸6.9m・短軸6.7mの方形状を呈している。

主軸方向　N－33°－W。

壁　壁高は20～25cmを測り，垂直に立ち上がる。

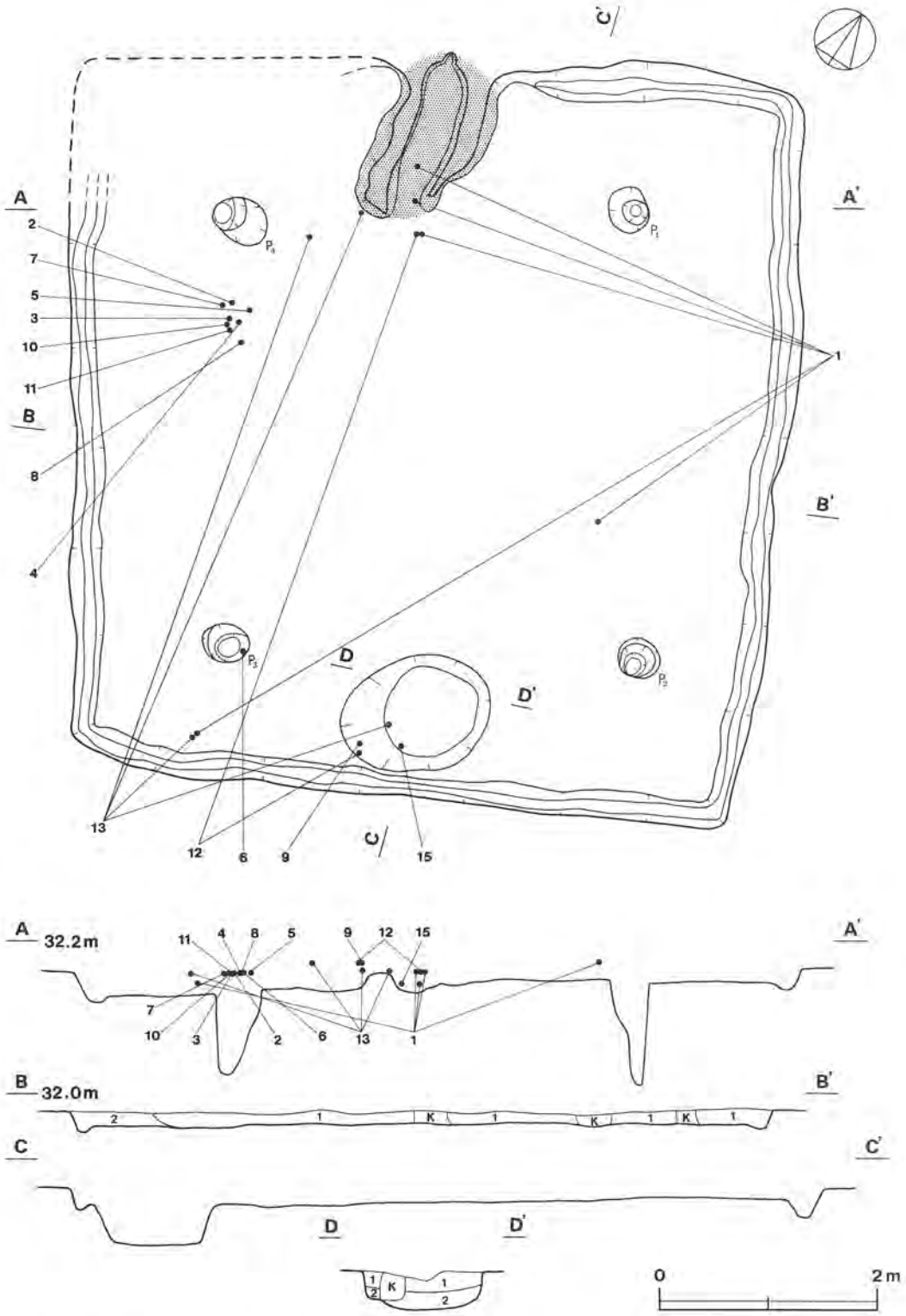
壁溝　北西部はエリア外で確認できなかったが，ほぼ全周しているものと思われる。上幅18～25cm，深さ5～8cmを測る。

床　ほぼ平坦で硬い。

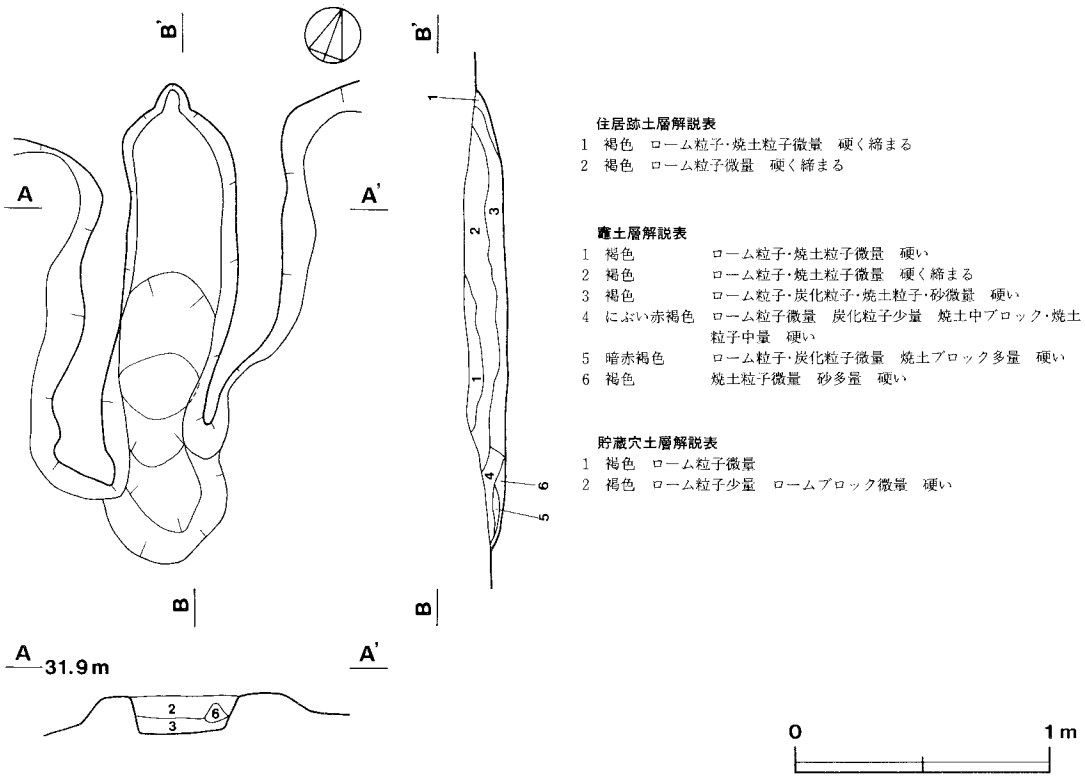
ピット　4か所検出され，径35～52cmの円形を呈し，深さ70～95cmで，いずれも主柱穴である。

貯蔵穴　南東壁際中央部に付設され，長径140cm・短径105cmの楕円形を呈し，深さ30cmを測る。覆土はローム粒子を少量含む褐色土が，自然堆積している。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ162cm・幅93cmで，煙道部は壁を15cm掘り込んでいる。天井部は崩落しているが，両袖部は良好な状態で残っており，西側120cm，東側105cmを測る。火床は長径32cm，短径25cmの楕円形を呈し，焼けているがあまり硬くない。



第36図　第10号住居跡実測図

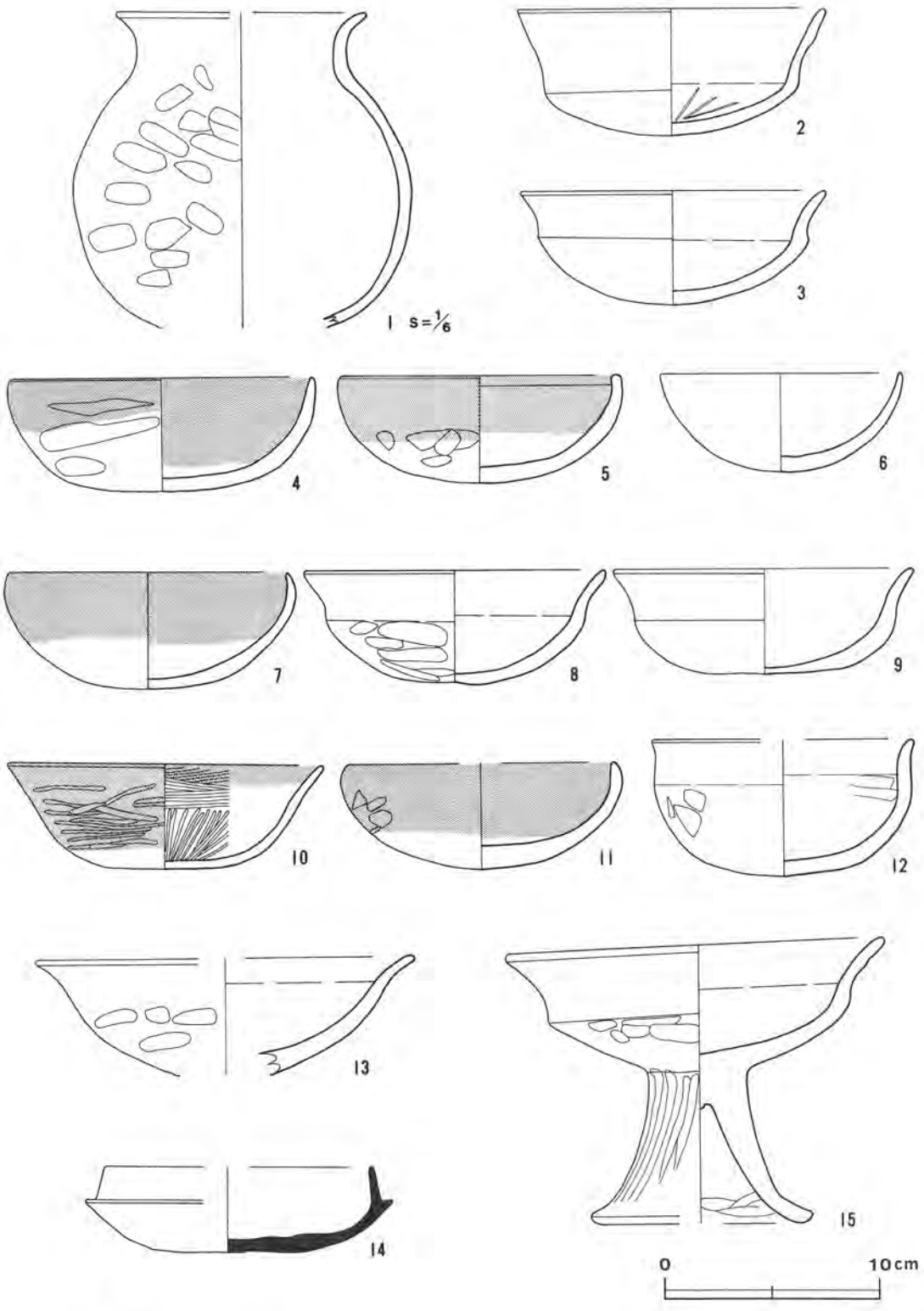


第37図　第10号住居跡竈実測図

覆土　焼土粒子・ローム粒子を微量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（壺，甕，坏，高坏）246点が出土している。(2)～(5)・(7)～(12)はいずれも土師器の坏である。西部床面からは，(7) の上に (2)が重なり，(11) の上に(10)・(3)・(4)が重なって出土している。それらの近くから (5) と (8) が出土し，いずれも正位で床面から出土している。貯蔵穴の覆土上層からは，(9) の上に (12) が正位で重なって出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第38図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	壺 土師器	A(23.4) B〔29.2〕	底部欠損。胴部は球状を呈し，口縁部は直立しながら立ち上がり，上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ，器内面剝離で調整不明。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	30% P103 竈付近覆土下層 東部覆土下層 南部床面直上
2	坏 土師器	A 14.4 B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は，外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部内面ナデ及びヘラ削り，外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	100% P104 西部床面直上
3	坏 土師器	A 14.3 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	98% P105 西部床面直上
4	坏 土師器	A 14.3 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	内面横ナデ，外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面赤彩痕残る。	砂粒・雲母 橙色 普通	100% P106 西部床面直上
5	坏 土師器	A 12.9 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	器内面横ナデ・外面ヘラ削り。内・外面に赤彩痕残る。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	99% P107 西部床面直上
6	坏 土師器	A 11.3 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	97% P108 南部床面直上
7	坏 土師器	A 13.1 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	器内・外面ナデ。内・外面上半部に赤彩痕残る。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	100% P109 西部床面直上
8	坏 土師器	A 14.2 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境ににぶい稜を有する。口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	100% P110 西部床面直上
9	坏 土師器	A 14.0 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反する。	器内面剝離のため調整不明。口縁部外面横ナデ，体部外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	99% P111 貯蔵穴
10	坏 土師器	A 14.9 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内面横位及び斜位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面縦位のヘラ磨き，外面横位のヘラ磨き。内・外面に赤彩痕残る。	砂粒・長石 赤色 普通	100% P112 西部床面直上
11	坏 土師器	A(12.3) B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	内面ヘラナデ，外面ヘラ削り後ヘラナデ。内・外面上半部に赤彩痕残る。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	98% P113 西部床面直上
12	坏 土師器	A(12.1) B 6.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境ににぶい稜を有する。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	40% P114 貯蔵穴 竈南東側覆土下層
13	高坏 土師器	A(17.6) B〔5.5〕	脚部欠損。坏部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	45% P115 貯蔵穴 竈南西側覆土下層 南コーナー付近床面直上

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第38図 14	坏 須恵器	A(12.5) B　4.0 C　7.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾する。	横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石 灰色 普通	90%　P116 南東部覆土
15	高　坏 土師器	A 17.7 B 13.3 D(10.4) E　7.2	坏部は，内彎気味に立ち上がり稜を有し，口縁部は外反する。脚部は中空でラッパ状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内面ナデ，外面ヘラ削り後ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	70%　P117 貯蔵穴

第11号住居跡（第39図）

位置　調査区の中央部D2g9区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸5.9m・短軸5.8mの方形を呈している。

主軸方向　N－22°－W。

壁　壁高は18～27cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がる。南東壁は削平され，壁高4cmである。

壁溝　南東壁際を除いて確認されたが，上幅7～12cm，深さ3～5cmと浅い。

床　平坦で硬いが，撹乱を受けている。床面中央部は特に踏み固められ硬く締まっている。

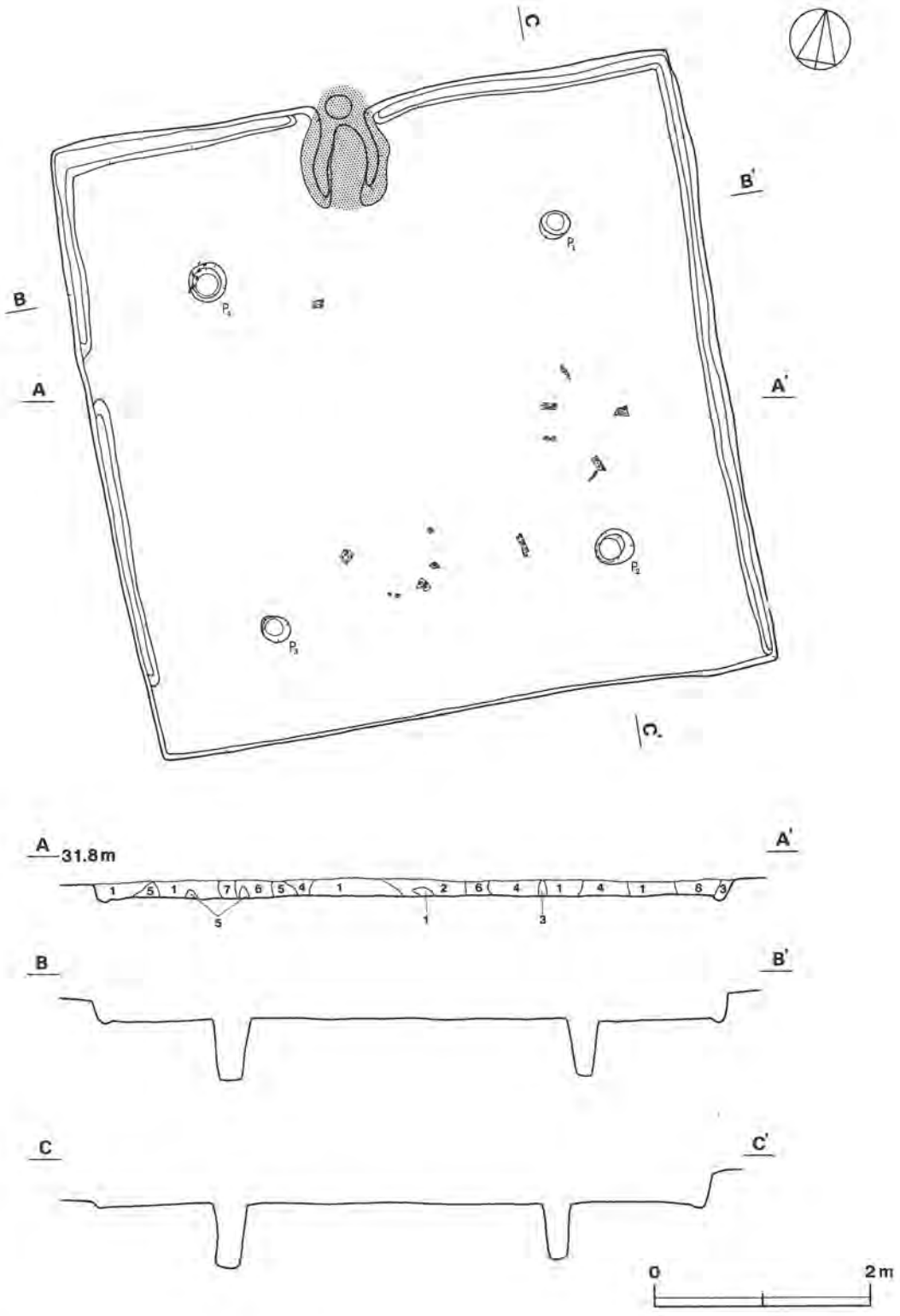
ピット　4か所検出され，径30～35cmの円形を呈し，深さ50～55cmで，いずれも主柱穴である。側壁は垂直に立ち上がっている。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ102cm・幅60cmで，煙道部は壁へ15cmほど掘り込み，煙道口は径20cmを測る。砂質粘土で構築され，天井部は，崩落しているが，両袖部は残っている。火床は長径35cm，短径27cmの楕円形で床を3cm掘り下げている。

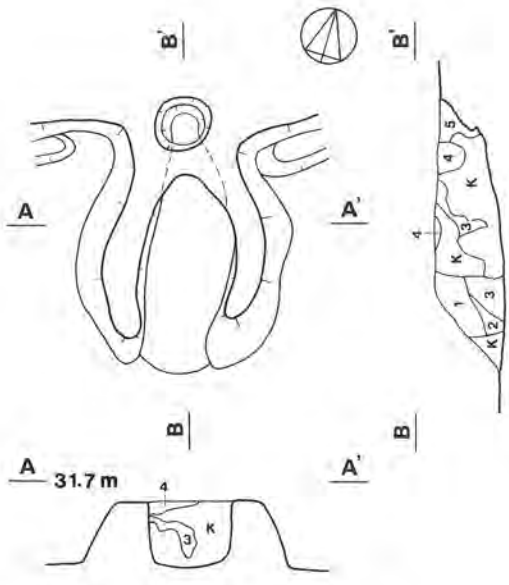
覆土　炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子をそれぞれ微量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（壺，甕，坏，高坏）335点，石製品（紡錘車等）2点が出土している。土師器は，(1)の壺片が竈煙道部から斜位で，(3)の甕片が北西壁付近の覆土下層から出土している。床面から炭化材が多量に出土している。

所見　床面から炭化材が出土しているので，焼失家屋と考えられる。時期は遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第39図　第11号住居跡実測図



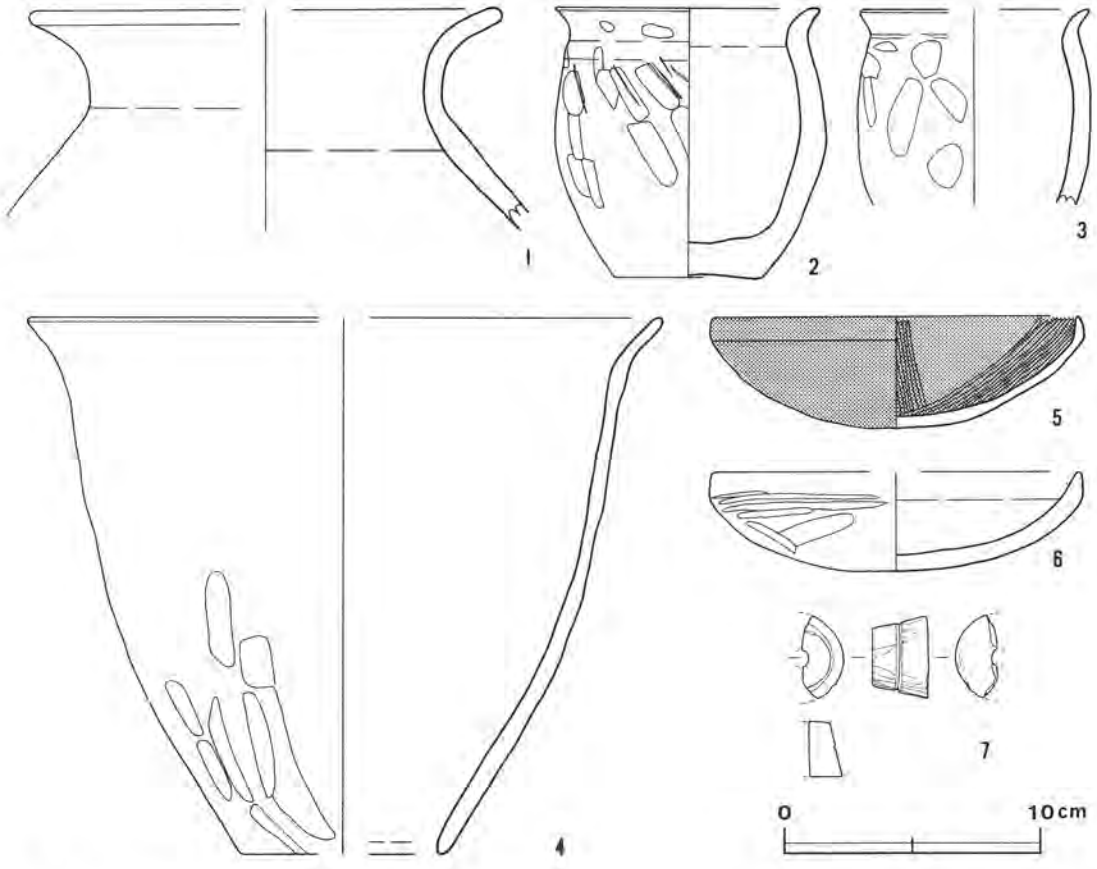
住居跡土層解説表

1	褐色	ローム粒子少量　炭化粒子・炭化材・焼土粒子微量　硬く締まる
2	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
3	褐色	ローム粒子微量　硬い
4	褐色	ローム粒子少量　炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
5	褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　やや柔らかい
6	にぶい赤褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬い
7	褐色	ローム大ブロック・ローム粒子少量　炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
8	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量　炭化粒子微量　硬く締まる

竈土層解説表

1	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
2	褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
3	にぶい赤褐色	ローム粒子微量　焼土小ブロック少量　焼土粒子多量　硬く締まる
4	褐色	ローム粒子・砂微量　焼土粒子中量　硬く締まる
5	にぶい赤褐色	炭化粒子・砂微量　焼土粒子少量　硬く締まる

第40図　第11号住居跡竈実測図



第41図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	壺 土師器	A(18.6) B〔8.6〕	胴部欠損。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母にぶい赤褐色 普通	10% P118 竈煙道部覆土上層
2	小型甕 土師器	A 10.3 B 10.5 C 5.8	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部は緩いくびれを有し，口縁部は外反する。	口縁部内面横ナデ，外面横ナデ及びヘラ削り。胴部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	80% P121 竈西側覆土下層
3	小型甕 土師器	A〔9.0〕 B〔7.6〕	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部は緩いくびれを有し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石にぶい赤褐色 普通	20% P122 北西壁付近覆土下層
4	甑 土師器	A(25.0) B 21.0 C〔8.2〕	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	25% P123 中央部覆土下層
5	坏 土師器	A 14.3 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。器内面縦位のヘラ磨き，外面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黒褐色 普通	80% P124 南部床面・覆土下層
6	坏 土師器	A(14.5) B 3.9	丸底。体部は内彎し，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面ヘラ磨き。	砂粒 黒褐色 普通	95% P125 南部覆土下層

第11号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第41図 7	紡錘車	滑石	〔3.2〕	〔3.2〕	2.1	〔14.6〕	北東部床面直上		17

第12号住居跡（第42図）

位置　調査区の中央部D3h4区を中心に確認された。

規模と平面形　長軸6.6m・短軸6.5mの方形を呈している。

主軸方向　N－29°－W。

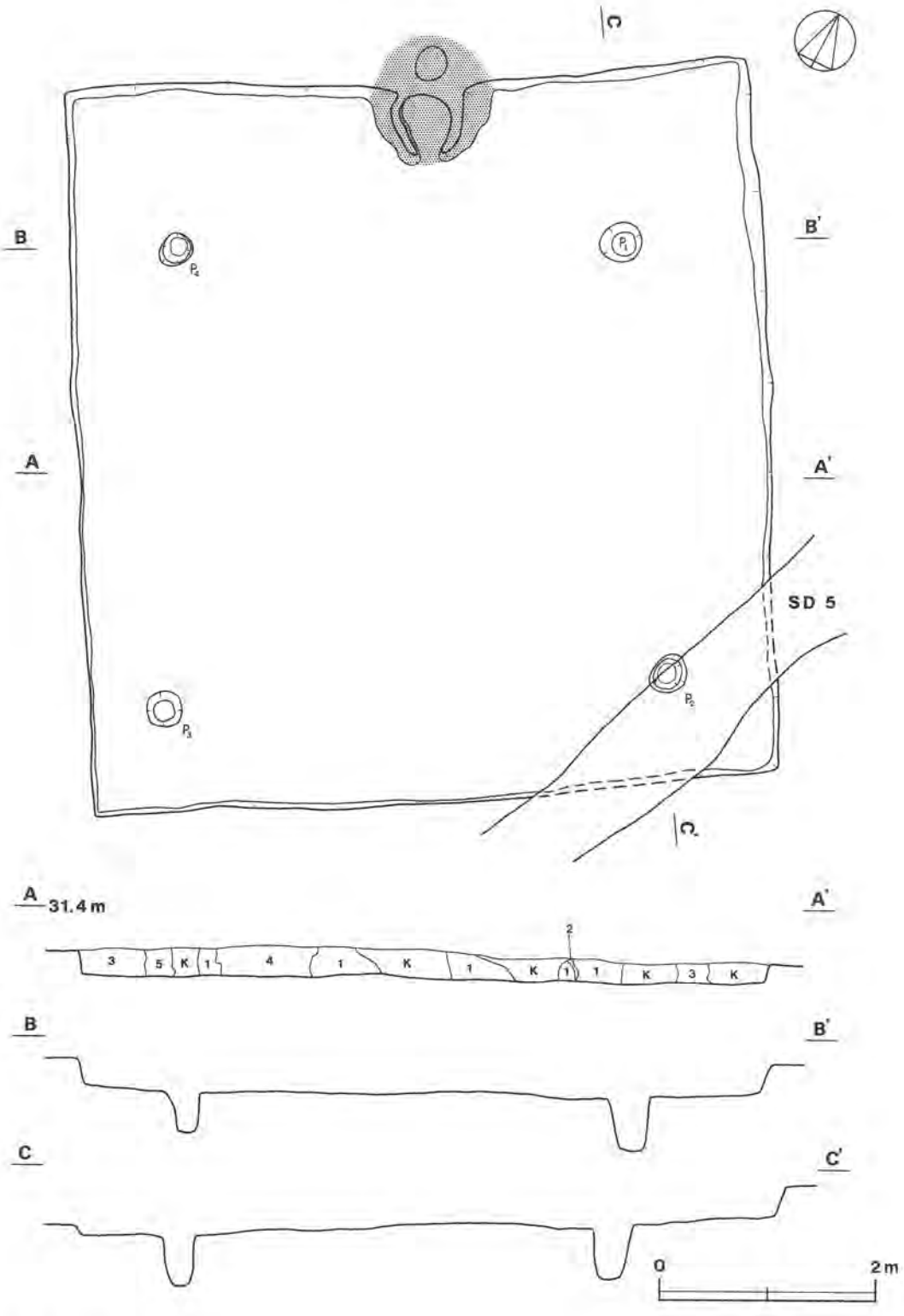
壁　ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は北東壁で34cm前後，南東壁で12cm前後を測る。

壁溝　確認されなかった。

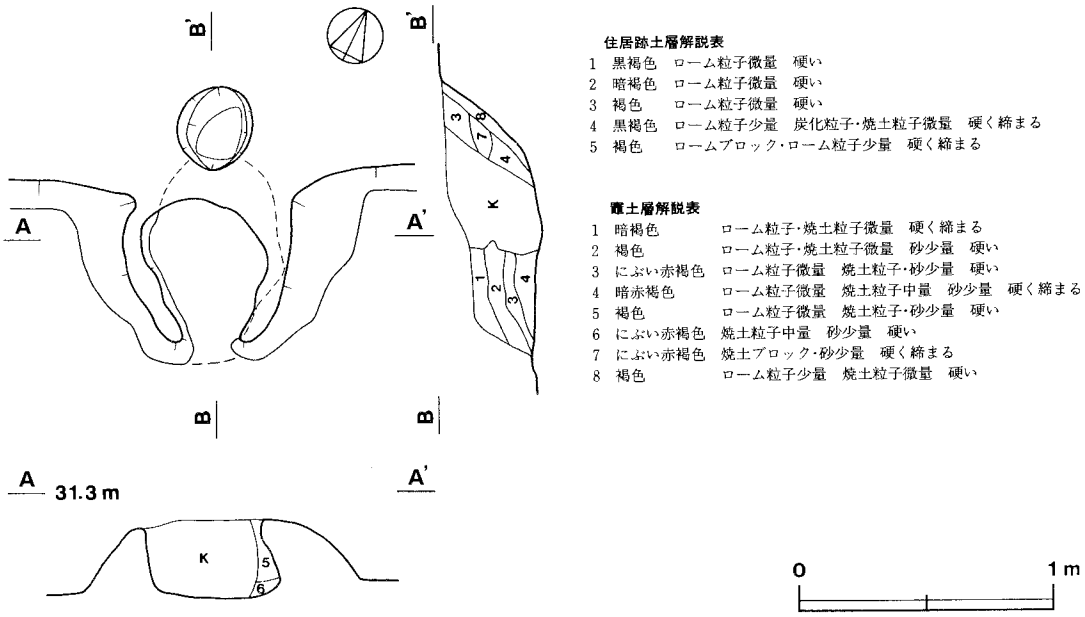
床　耕作による撹乱を受けている。床面はほぼ平坦で硬く締まっているが，北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。

ピット　4か所検出され，径31～39cmの円形を呈し，深さ35～50cmで，いずれも主柱穴である。側壁は垂直に立ち上がり硬い。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ105cm，幅120cmで，壁への掘り込みは40cmである。砂質粘土を主体として構築され，天井部は完存し両袖部とも良好な形で残っている。焚口部は狭く，火床部は床面を約3cm掘り込んでいる。火床部から煙道部にかけては緩やかに立ち上がり，径30cmの



第42図　第12号住居跡実測図



住居跡土層解説表

1 黒褐色 ローム粒子微量 硬い
2 暗褐色 ローム粒子微量 硬い
3 褐色 ローム粒子微量 硬い
4 黒褐色 ローム粒子少量 炭化粒子・焼土粒子微量 硬く締まる
5 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量 硬く締まる

竈土層解説表

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 硬く締まる
2 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 砂少量 硬い
3 にぶい赤褐色 ローム粒子微量 焼土粒子・砂少量 硬い
4 暗赤褐色 ローム粒子微量 焼土粒子中量 砂少量 硬く締まる
5 褐色 ローム粒子微量 焼土粒子・砂少量 硬い
6 にぶい赤褐色 焼土粒子中量 砂少量 硬い
7 にぶい赤褐色 焼土ブロック・砂少量 硬く締まる
8 褐色 ローム粒子少量 焼土粒子微量 硬い

第43図　第12号住居跡竈実測図

煙道口が確認された。

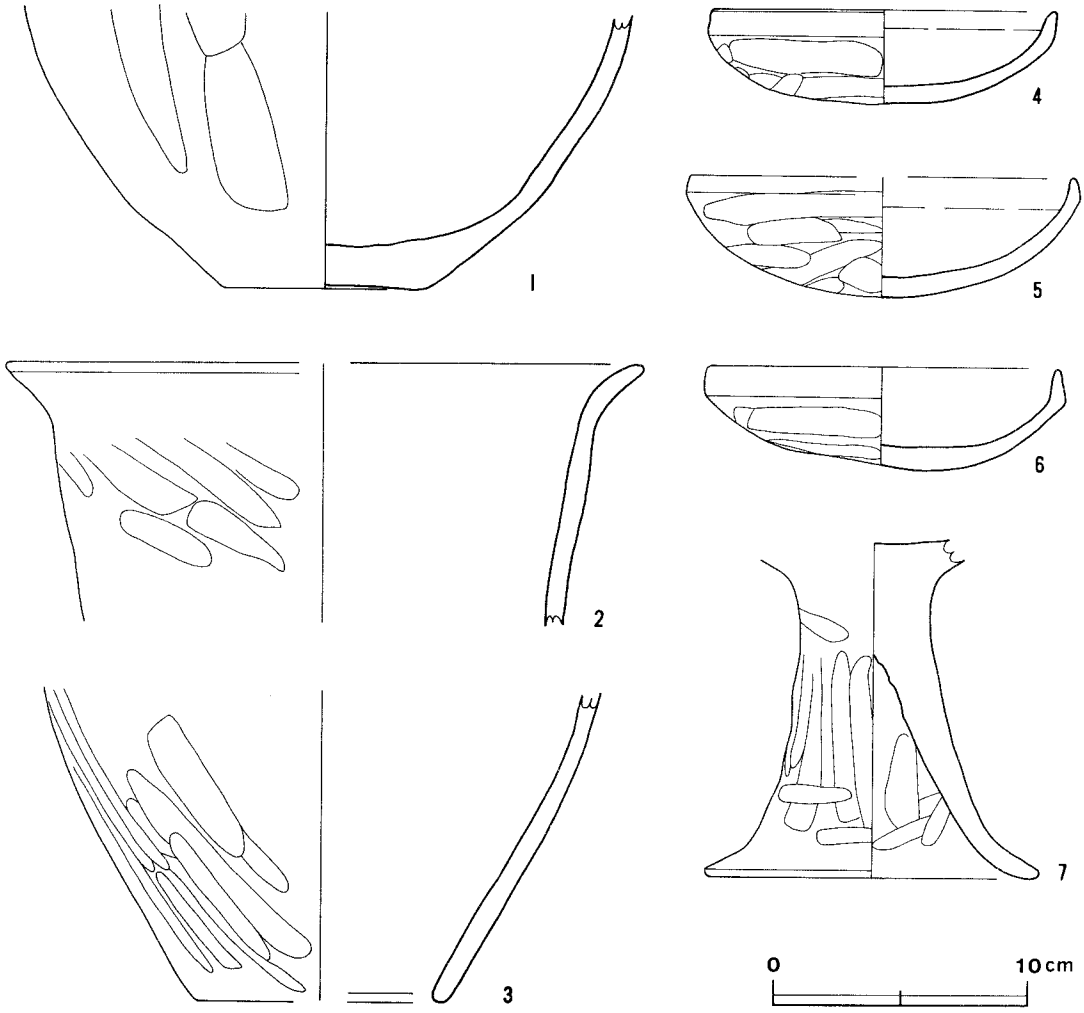
覆土　ローム粒子を少量含む黒褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（壺，甕，坏，高坏）418点，須恵器片１点が，竈周辺から出土している。土師器は竈の南西側から，（4・6）の坏が正位で，（7）の高坏片（脚部）が横位で，床面から出土している。竈の南東側からは，（2）の甕片（口縁部）と（3）の甑片（胴下半部）が床面から出土している。須恵器は細片で覆土上層から出土している。

所見　遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 1	壺 土師器	B〔10.9〕 C　8.0	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	器内面剝離のため調整不明。胴部外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	20%　P128 竈東側覆土上層
2	甕 土師器	A〔25.2〕 B〔10.2〕	胴下半部欠損。胴部は外傾気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面斜位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	10%　P130 竈南東側覆土下層 北部床面
3	甑 土師器	B〔12.2〕 C〔 9.2〕	無底式。胴部は外傾気味に立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ，外面斜位のヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	15%　P131 竈南東側覆土下層 北部床面直上
4	坏 土師器	A 13.5 B　3.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	97%　P132 竈南西側床面直上



第44図　第12号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 5	坏 土師器	A〔16.0〕 B　4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	60%　P133 竈南西側覆土下層
6	坏 土師器	A 13.8 B　4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 普通	75%　P134 竈南西側床面 竈東側覆土下層
7	高　坏 土師器	B〔13.3〕 D 13.2 E 11.5	坏部欠損。脚部は中空でラッパ状に開く。	脚部内面ヘラ削り，外面縦位のヘラ削り。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	60%　P135 竈南西側床面直上

第13号住居跡（第45図）

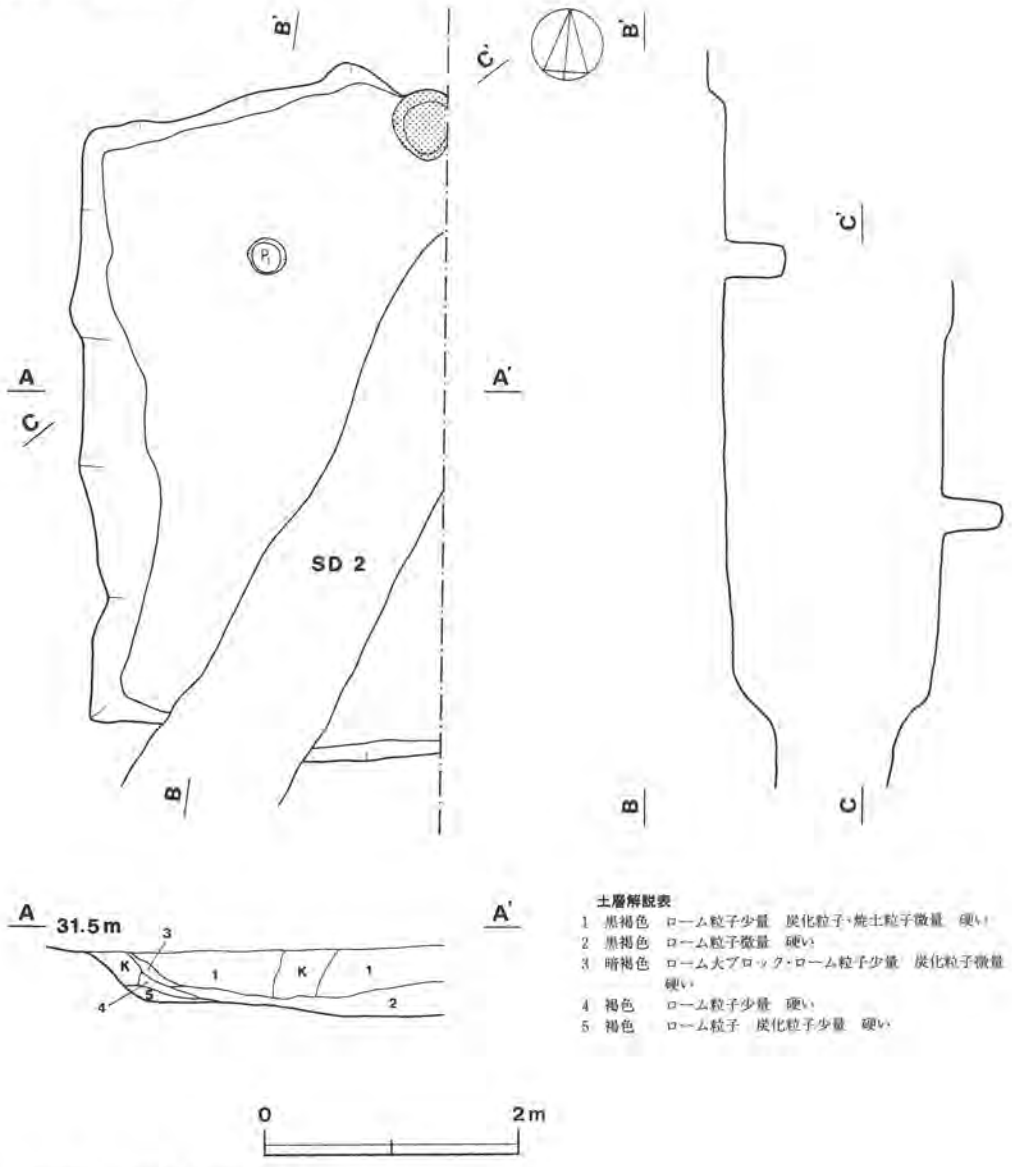
位置　調査区の中央部D3e6区を中心に確認された。

規模と平面形　東側半分が調査区外になり，また北東から南西に向かって第２号溝が入り込んでいるが，一辺が5.2mの方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－10°－W。

壁　残存している壁は，西壁及び北壁と南壁の一部である。壁高は西壁で45cm，北壁で12cm，南壁で30cmである。

壁溝　確認されない。



第45図　第13号住居跡実測図

床　ほぼ平坦であり，中央部からやや南側に焼土が確認された。ローム混じりの褐色土が床面全体を覆っている。

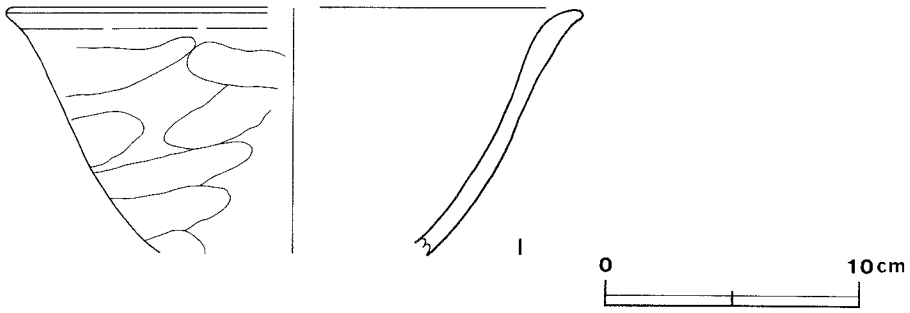
ピット　1か所検出され，径25cmの円形を呈し，深さ45cmで主柱穴と思われる。

竈　検出されなかった。

覆土　ローム粒子を少量含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片(甕，坏，高坏)243点，須恵器片2点，土製品(土玉，管状土錘)2点，陶器片1点が覆土から出土している。(1)の土師器の鉢片(口縁部)は，炉火床部から出土している。須恵器は細片で覆土上層から出土している。土玉は覆土下層から出土している。その他，陶器片1点が覆土上層から出土しているが，流れ込みと思われる。

所見　本跡の東側は調査区域外に延びており，また，第2号溝が縦断しているため，本跡の全体を捉えることは出来ない。



第46図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	鉢 土師器	A(22.8) B〔9.7〕	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	15%　P136 炉火床部

第14号住居跡（第47図）

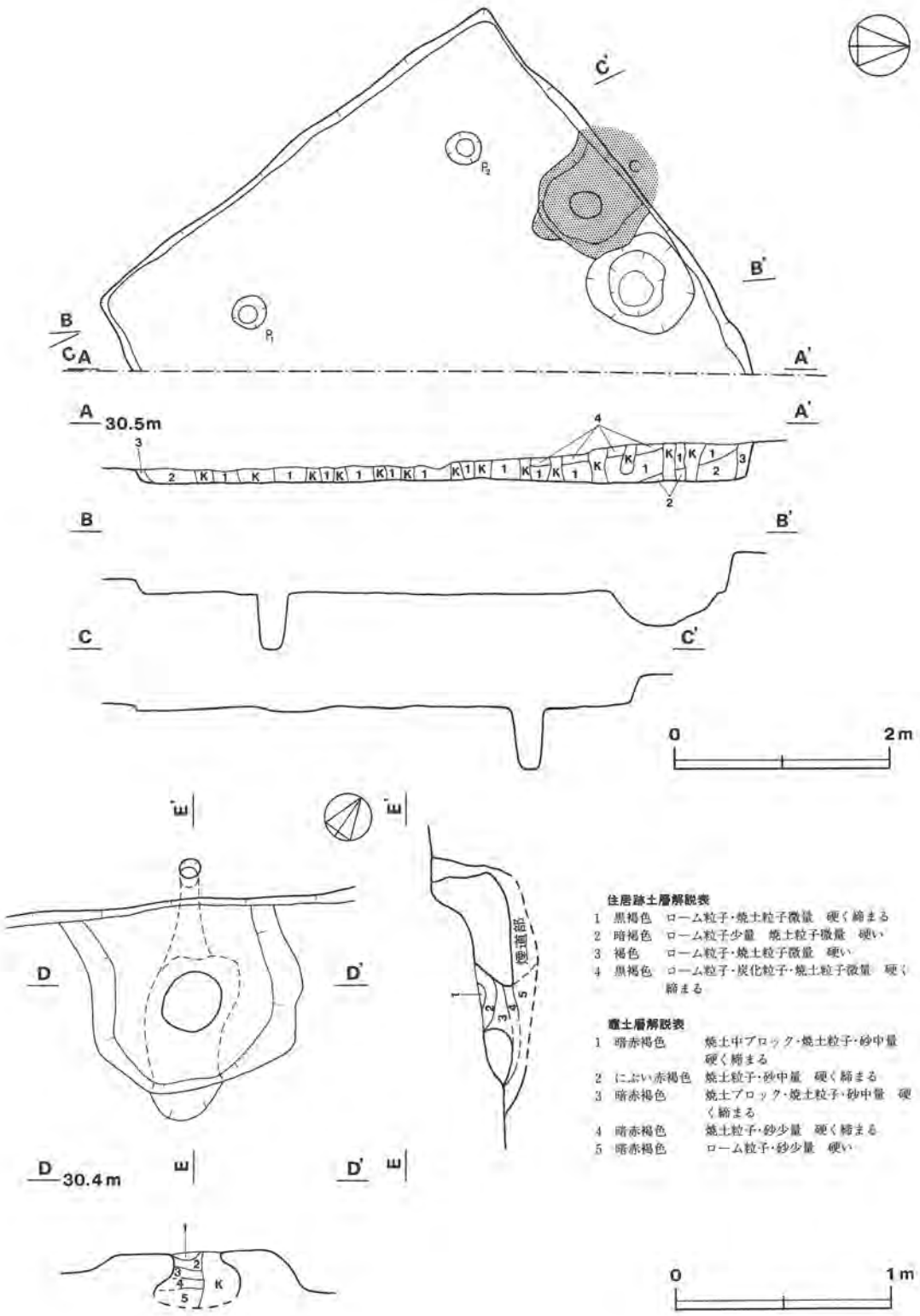
位置　調査区の中央部E3c6区を中心に確認された。

規模と平面形　南東部三分の二程が調査区外に延びていているが，一辺が4.5mの方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－38°－W。

壁　壁高は北西壁で35cm，南西壁15cmを測り，垂直に立ち上がる。

壁溝　確認されなかった。



住居跡土層解説表

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
2	暗褐色	ローム粒子少量　焼土粒子微量　硬い
3	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる

竈土層解説表

1	暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土粒子・砂中量　硬く締まる
2	にぶい赤褐色	焼土粒子・砂中量　硬く締まる
3	暗赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子・砂中量　硬く締まる
4	暗赤褐色	焼土粒子・砂少量　硬く締まる
5	暗赤褐色	ローム粒子・砂少量　硬い

第47図　第14号住居跡・竈実測図

床　一部耕作による撹乱を受けているが，平坦で硬く締まりがある。

ピット　2か所確認され，径33～30cmの円形を呈し，深さ50cm前後を測り，いずれも主柱穴である。

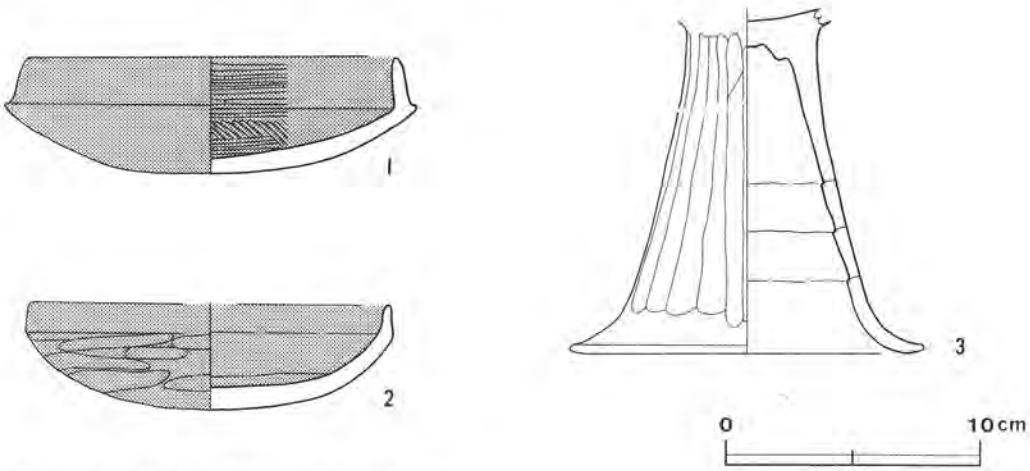
貯蔵穴　北西壁の竈の東隣に付設され，長径100cm，短径90cmの円形状を呈し，深さ30cmを測る。底面は半円形で，焼土粒子少量・砂粒少量を含む暗赤褐色土が堆積している。

竈　北西壁中央部よりやや西側に付設され，規模は長さ55cm，幅45cm，壁への堀り込みは約6cmである。砂質粘土で構築され，天井部は，崩落しているが，両袖部は良好な形で残っている。火床面は焼けているがあまり硬くない。

覆土　ローム粒子・焼土粒子微量を含む黒褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（甕，坏，高坏）111点が出土している。土師器は（1）のほぼ完形の坏が貯蔵穴の覆土上層から，（2）の坏が竈の西側の床面から出土している。

所見　本跡の東側が調査区域外へ延びているが，遺構の形態や遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第48図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	坏 土師器	A 14.6 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ後，ヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	90%　P137 貯蔵穴覆土上層
2	坏 土師器	A (14.2) B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	90%　P138 竈西側床面直上
3	高坏 土師器	B (13.5) D 14.0 E 12.7	坏部欠損。脚部は中空でラッパ状に開く。	脚部内面は輪積痕が残り，外面は縦位のヘラ削り。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 黒褐色 普通	50%　P141 西コーナー付近覆土中層

第15号住居跡（第49図）

位置　調査区の南部H2i₀区を中心に確認された。

規模と平面形　西コーナーが調査区外になるが，一辺が6.3m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－38°－W。

壁　壁高は南西壁で3～6cm，北東壁で23～27cm，北西壁で13～18cm，南東壁で15～20cmを測り，垂直に立ち上がる。

壁溝　南西壁際には確認できなかったが，その他は上幅13～20cm，深さ5～8cmを測る。

床　ほぼ平坦で硬い。特に貯蔵穴と南東側のP₂の間は踏み固められていて硬く締まりがある。

ピット　4か所検出され，径31～41cmの円形を呈し，深さ54～64cmで，いずれも主柱穴である。

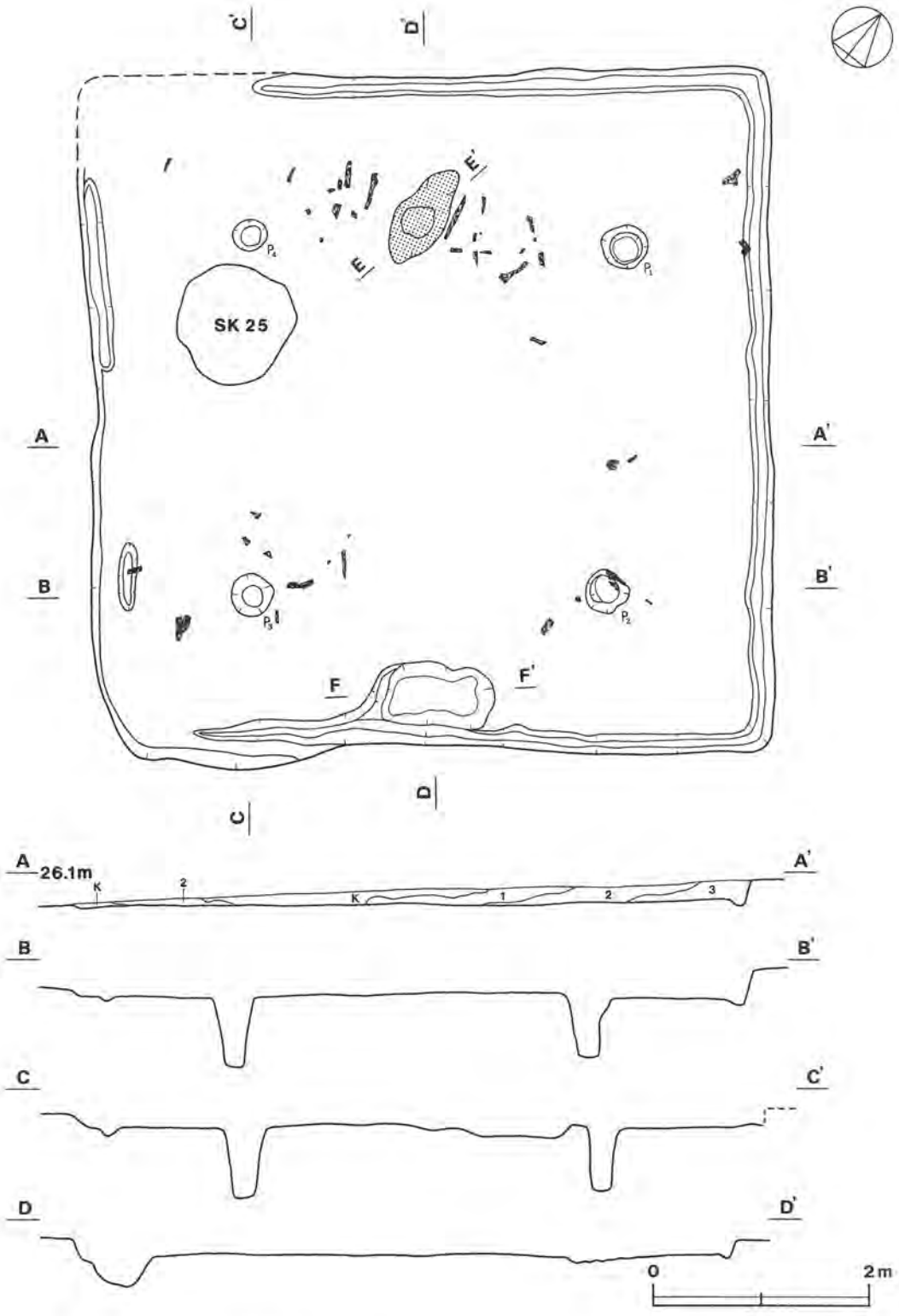
貯蔵穴　南東壁際中央部に付設され，長径114cm・短径56cmの楕円形を呈し，深さ23cmを測る。覆土は，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量を含む暗褐色土及び褐色土が，自然堆積している。

炉　中央部からやや北側にあり，長径100cm，短径47cmの楕円形を呈し，床面を4cm程掘り込んでいる地床炉である。

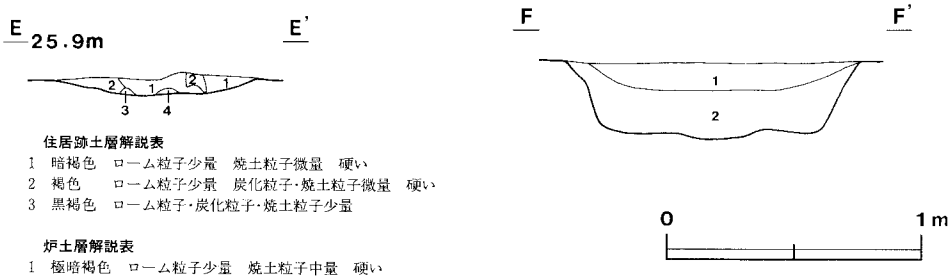
覆土　一部撹乱を受けているが，焼土粒子微量，ローム粒子少量を含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　土師器片（甕，坏，高坏）52点，須恵器片（高坏）3点，石製品1点が出土している。(1)はほぼ完形の土師器の坏で，北西壁中央付近の覆土下層から正位で，(2)は半完形の須恵器の高坏で南部床面から横位で，(3)の双孔円板は北東壁中央付近の床面から出土している。

所見　炉周辺を中心として床面から炭化材が多量に出土していることから焼失家屋であると思われる。本跡は，出土遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第49図　第15号住居跡実測図(１)

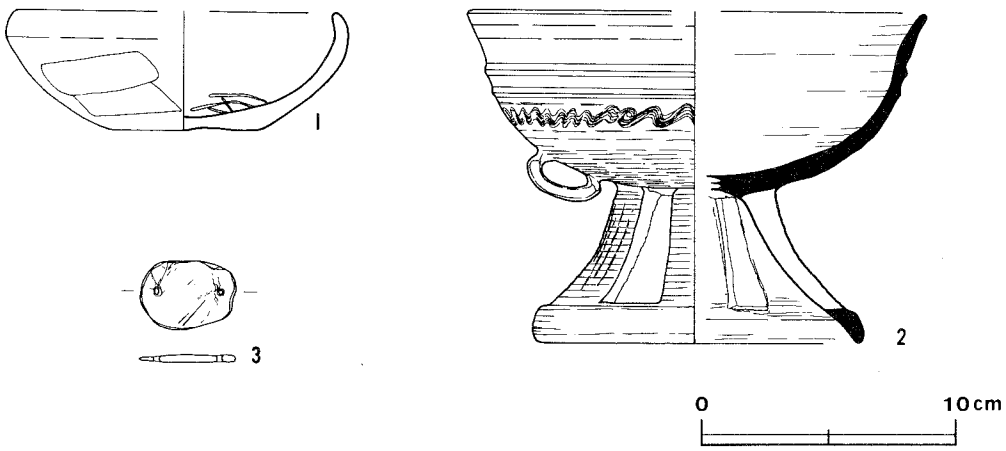


住居跡土層解説表
1 暗褐色 ローム粒子少量 焼土粒子微量 硬い
2 褐色 ローム粒子少量 炭化粒子・焼土粒子微量 硬い
3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量

炉土層解説表
1 極暗褐色 ローム粒子少量 焼土粒子中量 硬い
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 硬く締まる
3 黒褐色 焼土小ブロック少量 焼土粒子中量 硬く締まる
4 暗赤褐色 焼土ブロック

貯蔵穴土層解説表
1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 硬い
2 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子微量 ローム粒子少量 硬く締まる

第50図 第15号住居跡実測図(2)



第51図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	坏 土師器	A(12.6) B 4.7 C 6.0	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に，にぶい稜を有する。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	75% P142 北西壁付近覆土下層
2	高坏 須恵器	A(18.0) B 13.1 D 13.0 E 6.1	坏底部に耳を有し，内彎しながら立ち上がる。体部には，細い波状の沈線を4条施し，その上位には稜を2条有する。口縁部はやや外反する。脚部はラッパ状に開き，裾部に稜を有する。透かしは4か所。	水挽き。横ナデ。脚部の一部に横ナデ後，縦位のヘラ削り。	砂粒 灰色 普通	50% P143 南部床面直上・覆土下層

第15号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第51図3	双孔円板	滑石	2.7	3.8	0.3	6.4	北東壁中央付近床面直上		19

2 土坑

検出された土坑は40基であるが，土坑の多くは，台地中央部の平坦部から緩い南斜面にかけての位置と，南端の第15号住居跡付近の平坦な部分に位置している。全体的に小規模で，遺物の出土量も少なく，時期や性格を決定する資料に乏しいものが多い。主な土坑2基については，以下のとおり記載し，他は一覧表の中に掲載した。

第9号土坑（第53図）

位置 調査区中央部のD2b9区に確認された。

長径方向 N－74°－W。

規模と平面形 1.5×1.0mの隅丸長方形を呈し，深さは16cmである。

壁面 緩やかに立ち上がり，砂質粘土で硬く締まっている。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 自然堆積。2層から成っていて，上層は，ローム粒子微量・粘土極微量を含み硬く締まっている褐色土，下層は，粘土層である。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期は不明であるが，粘土で構築されている。

第31号土坑（第55図）

位置 調査区の南部I3b3区に確認された。

長径方向 N－85°－W。

規模と形状 2.20×1.09mの楕円形を呈し，深さは71cmである。

壁面 南・北壁は急に，東・西壁は緩やかに立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面 全体的に平坦である。

覆土 自然堆積。上層はローム粒子少量・焼土粒子微量を含む硬い黒褐色土，下層はローム粒子少量を含む硬い暗褐色土が堆積している。

遺物 土師器片4点，縄文式土器片2点が覆土上層から出土している。

所見 形状から陥し穴と考えられる。

3　地下式壙

第1号地下式壙（第52図）

位置　調査区中央部のD2a$_9$区を中心に確認された。

規模と形状　竪坑と主室からなり，主室の天井部は，既に崩落している。全長は3.2mである。竪坑は上面が楕円形で長径1.1m，短径0.9mを測り，深さは1mである。底面は円形を呈し，径0.6mを測る。羨道部は，竪坑の底面南東側から羨道がのび，0.6mで主室とつながる。立面形は長方形を呈し，幅0.5m，高さ1.3mを測る。主室は，楕円形を呈し，長径3.2m，短径2.0m，高さ1.6mで，壁の立ち上がりから判断して，袋状を呈していたものと考えられる。

主軸方向　N－45°－E。

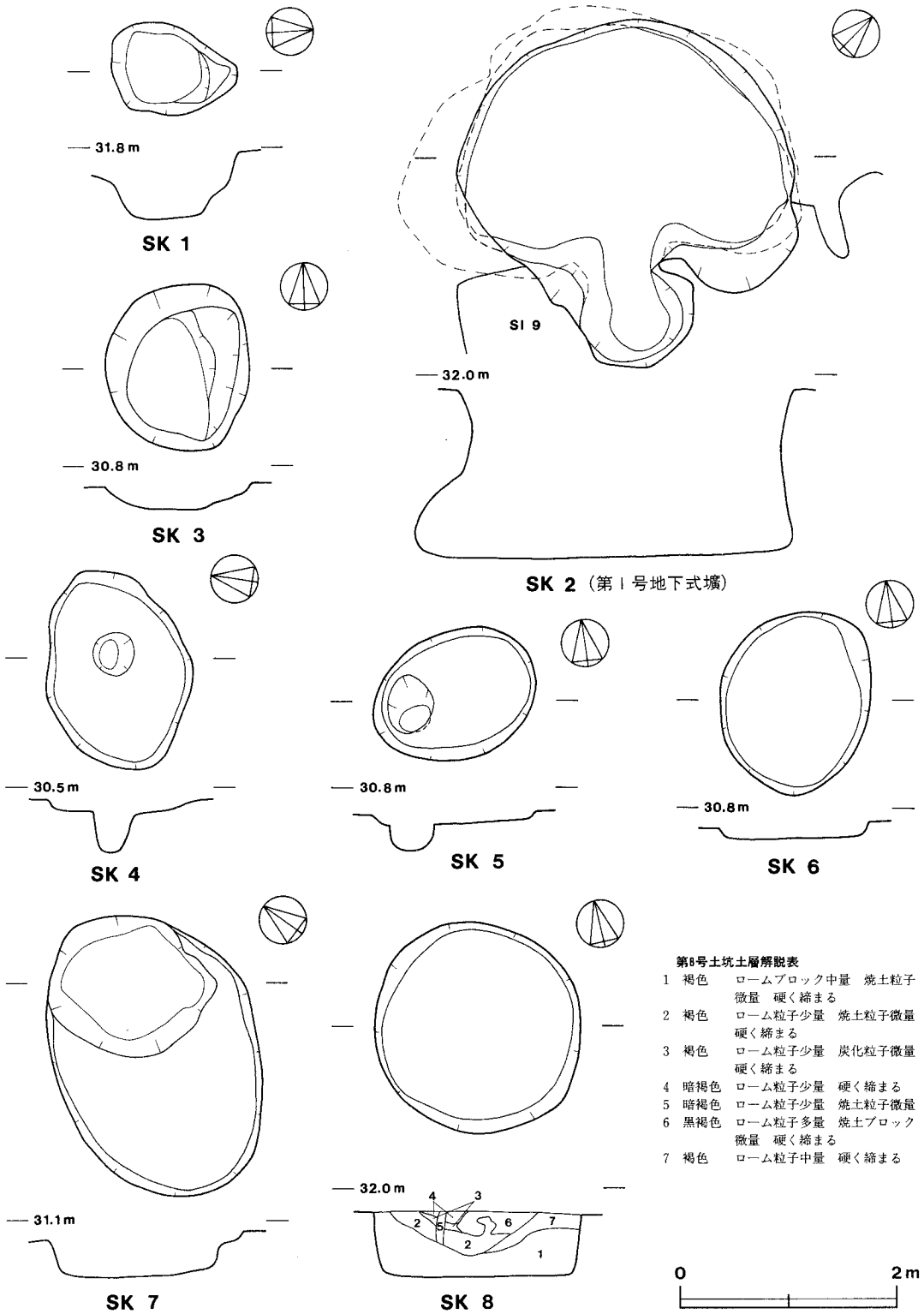
覆土　人為堆積。上層はローム粒子・焼土粒子微量を含み締まりのある褐色土，中層はローム粒子微量を含む黒褐色土，下層はローム粒子・炭化粒子微量を含み粘性のある褐色土が堆積している。堆積した土層を見ると竪坑から主室に向かって斜め下方に0.1～0.3mの幅で堆積している。また，床面南西部から骨粉と思われる灰白色土が極微量検出された。

所見　本跡は，第9号住居跡の北西壁を掘り込んで構築された地下式壙である。本跡からは，時期を決定する遺物は検出されなかった。

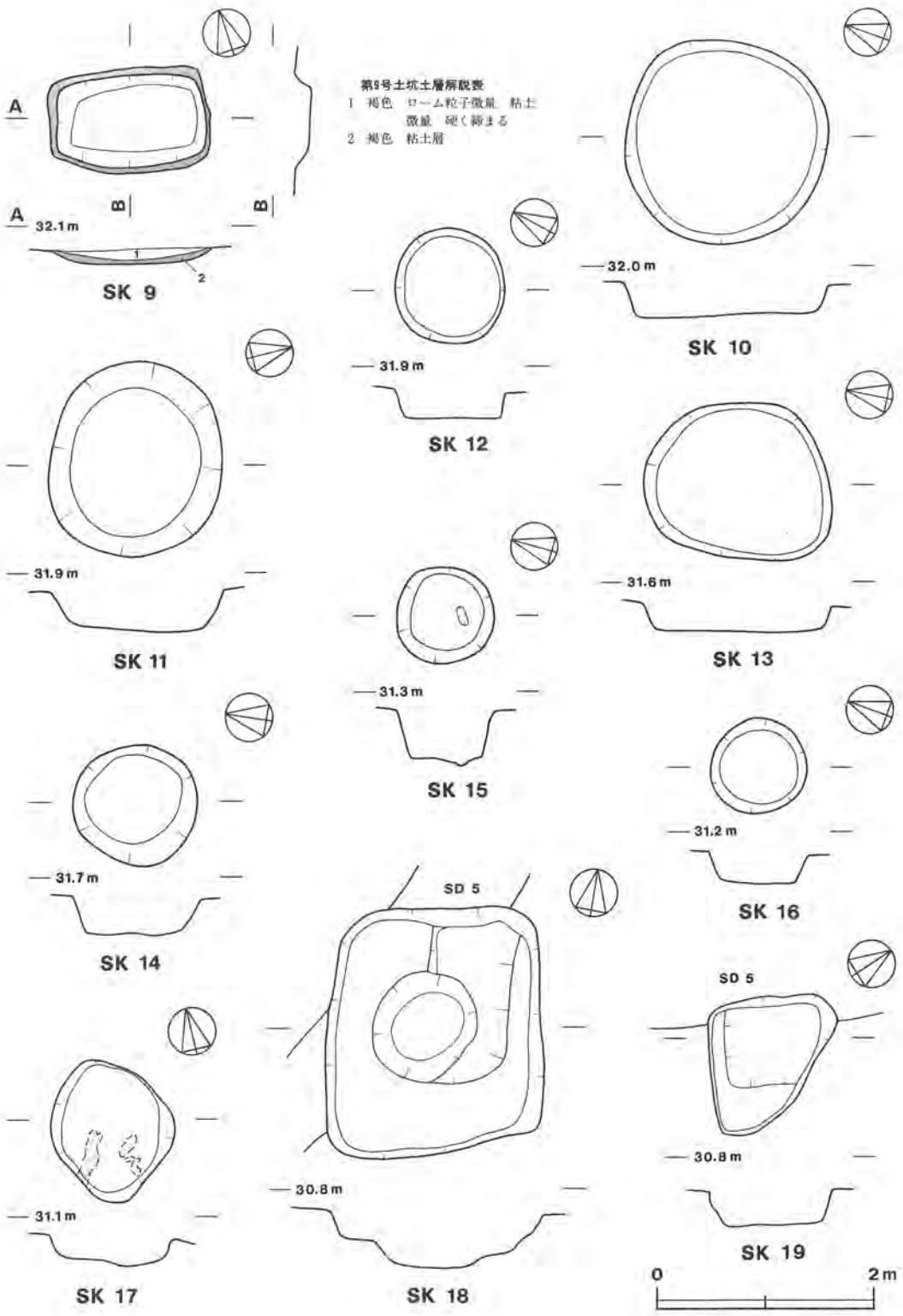
表2　畑田川波遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模		壁面	床面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	C2c$_0$	N-8°-E	楕円形	1.17 × 0.84	64	段状	皿状	自然	縄文式土器片147，土師器片9，土製品1		52
2	D2a$_9$	N-45°-W	円形	3.24 × 3.20	155	垂直	平坦	人為	縄文式土器片30，弥生式土器片1，土師器片8，陶器片1	SI－9と重複　第1号地下式壙	52
3	C2c$_5$	N-14°-E	円形	1.53 × 1.38	12	外傾	皿状	自然			52
4	C2b$_4$	N-22°-W	楕円形	1.94 × 1.40	49	垂直	平坦	自然			52
5	C2d$_4$	N-77.5°-E	楕円形	1.57 × 1.18	36	垂直	皿状	自然			52
6	C2d$_5$	N-32.5°-E	円形	1.68 × 1.42	19	外傾	平坦	自然			52
7	C2e$_6$	N-23.5°-E	楕円形	2.77 × 1.96	40	外傾	平坦	自然			52
8	C3j$_3$	N-52.5°-E	円形	2.05 × 1.92	69	垂直	平坦	人為	縄文式土器片2，土師器片1		52
9	D2b$_9$	N-74°-W	隅丸長方形	1.50 × 1.0	16	外傾	平坦	自然			53
10	D2c$_8$	N-32°-E	円形	1.96 × 1.92	34	外傾	平坦	自然			53
11	D3d$_2$	N-71.5°-W	円形	1.82 × 1.58	38	外傾	平坦	自然	縄文式土器片1		53
12	D3d$_4$	N-61°-E	円形	1.10 × 1.02	30	垂直	平坦	自然			53
13	D3e$_4$	N-12°-W	円形	1.72 × 1.44	27	垂直	平坦	自然	縄文式土器片3		53
14	D3e$_2$	N-9°-W	円形	1.19 × 1.13	39	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片4		53
15	D2i$_9$	N-35°-W	円形	0.94 × 0.92	53	外傾	凹凸	自然	土師器片1		53

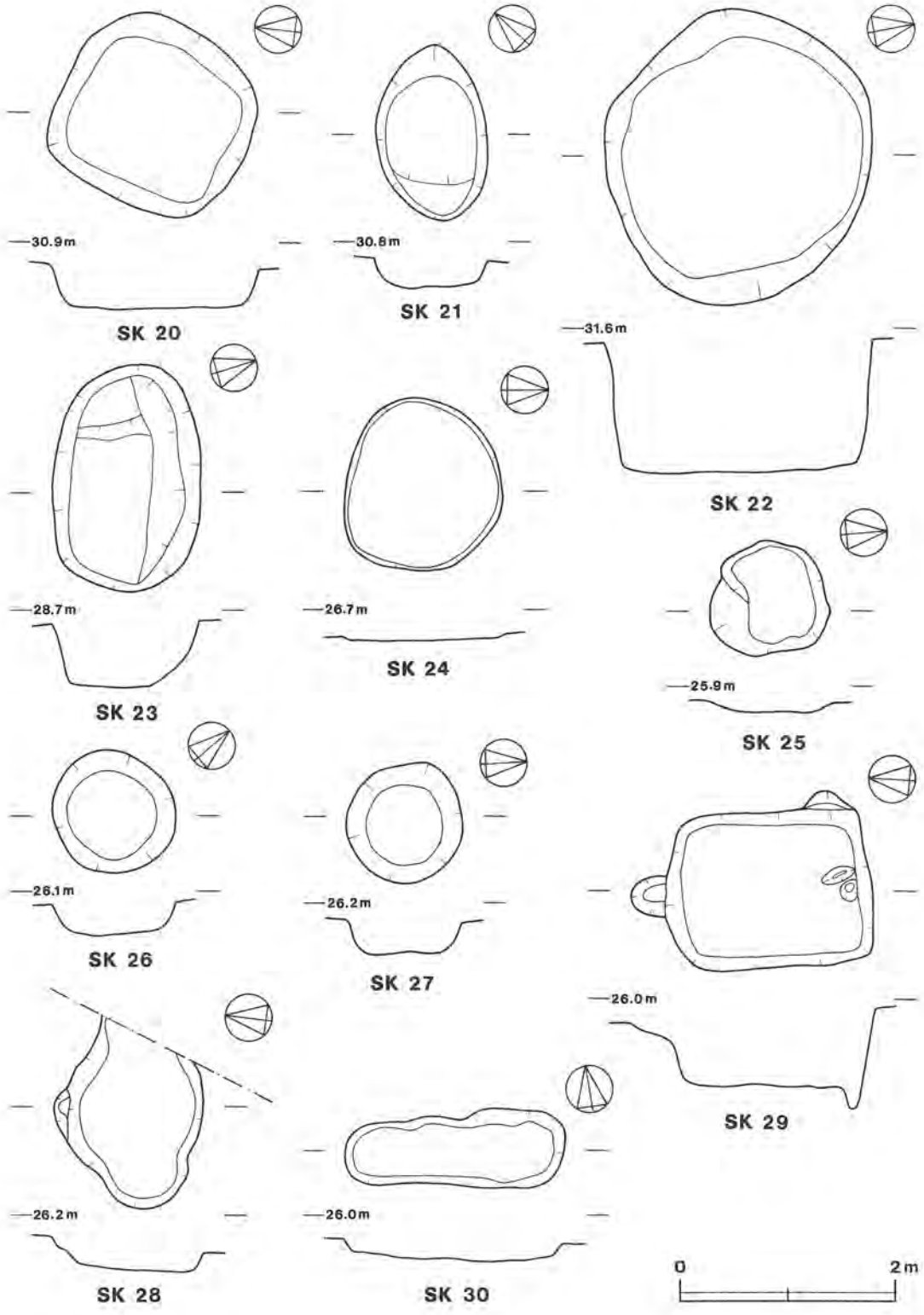
土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	床面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
16	D2j$_9$	N-20°-W	円形	0.90 × 0.90	29	外傾	平坦	自然			53
17	D3i$_4$	N- 6°-E	楕円形	1.25 × 1.14	30	外傾	傾斜	自然	土師器片4, 石器1		53
18	D3j$_4$	N- 9°-W	隅丸長方形	2.30 × 1.98	62	段状	平坦	自然	縄文式土器片1, 土師器片29, 陶器片1	SD－5と重複	53
19	E3b$_4$	N-54°-W	不整形	1.25 × 1.02	33	外傾	凹凸	人為		SD－5と重複	53
20	E3b$_1$	N-24°-E	隅丸長方形	1.81 × 1.74	45	外傾	平坦	自然	縄文式土器片3, 土師器片9, 石製品1		54
21	E2b$_0$	N-45°-E	楕円形	1.60 × 1.04	35	外傾	平坦	自然	縄文式土器片1, 土師器片5		54
22	D3f$_3$	N-74°-W	円形	2.76 × 2.50	126	垂直	平坦	自然			54
23	F3b$_3$	N-71°-W	楕円形	2.11 × 1.37	61	外傾	平坦	自然	土師器片2		54
24	H3f$_4$	N-53°-W	円形	1.62 × 1.50	12	緩斜	傾斜	自然			54
25	H2i$_9$	N-12°-W	円形	1.12 × 1.04	12	緩斜	平坦	自然		SI－15と重複	54
26	H3j$_1$	N-11°-W	円形	1.17 × 1.10	29	外傾	平坦	自然			54
27	H3j$_2$	N-11°-W	円形	1.09 × 1.08	33	外傾	平坦	自然			54
28	H3i$_4$	N-76°-E	〔楕円形〕	〔2.04 × 1.38〕	33	段状	平坦	自然			54
29	H3j$_2$	N-35°-W	隅丸長方形	2.25 × 1.43	98	段状	平坦	自然	土師器片4, 陶器片1		54
30	I3a$_3$	N-80°-W	楕円形	2.04 × 0.60	25	外傾	凹凸	自然			54
31	I3b$_3$	N-85°-W	楕円形	2.20 × 1.09	71	段状	平坦	自然	縄文式土器片2, 土師器片4		55
32	I3b$_2$	N-32°-E	楕円形	1.34 × 0.90	26	緩斜	皿状	自然			55
33	I2a$_9$	N-81.5°-E	楕円形	1.27 × 0.80	9	緩斜	平坦	自然			55
34	I2a$_9$	N-27°-E	楕円形	2.08 × 1.34	54	段状	平坦	自然			55
35	I3d$_3$	N-43°-E	楕円形	2.89 × 1.03	59	垂直	凹凸	自然			55
36	I3b$_4$	N-74°-W	楕円形	1.22 × 0.84	35	段状	平坦	自然	縄文式土器片23, 陶器片1		55
37	I3b$_4$	N- 4°-W	円形	0.64 × 0.62	27	外傾	傾斜	自然			55
38	H3i$_2$	N-24°-W	円形	0.70 × 0.59	26	外傾	凹凸	自然			55
39	H3i$_3$	N-45°-W	円形	0.89 × 0.78	36	外傾	凹凸	自然		SK－40と重複	55
40	H3i$_3$	N-45°-W	円形	0.83 × 0.75	15	外傾	平坦	自然		SK－39と重複	55



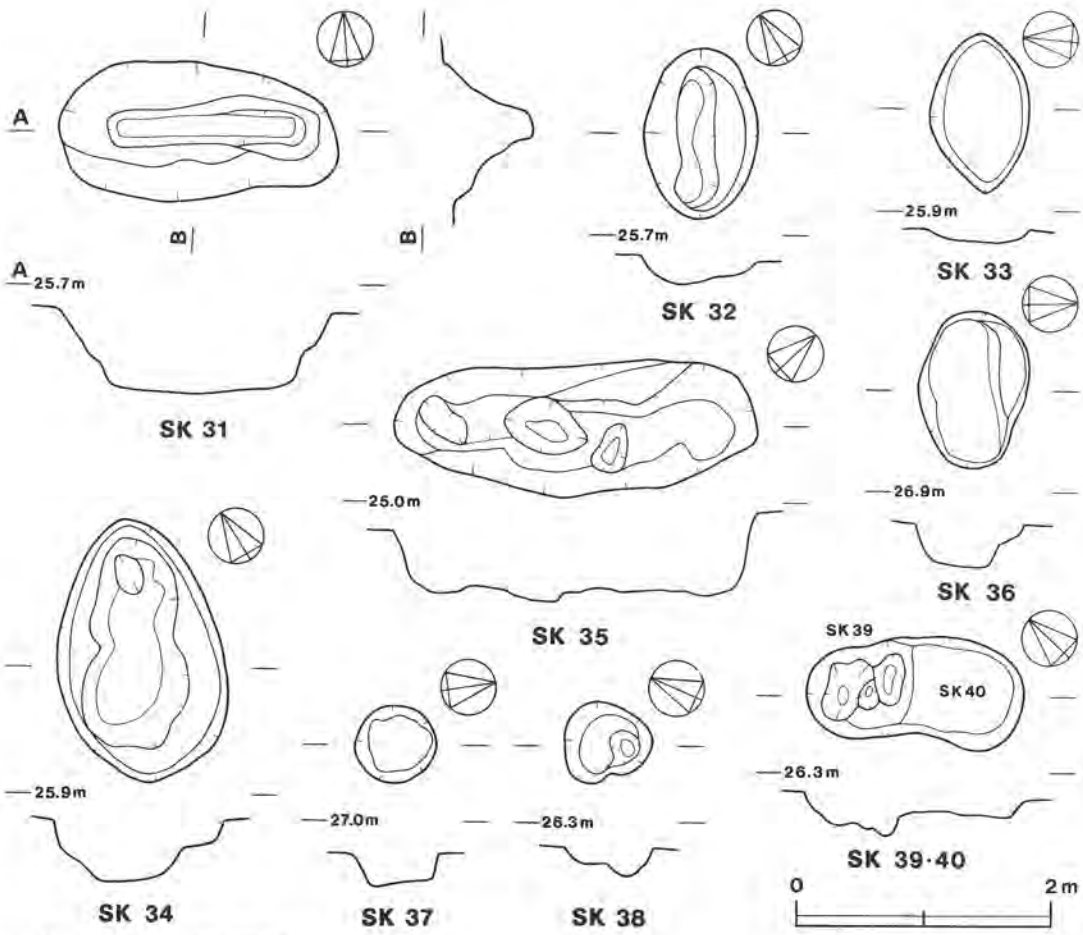
第52図　土坑・地下式壙実測図（１）


第9号土坑土層解説表
1 褐色 ローム粒子微量 粘土微量 硬く締まる
2 褐色 粘土層
A
B
A
32.1m
1
2
SK 9
32.0m
SK 10
31.9m
SK 12
31.9m
SK 11
31.6m
SK 13
31.3m
SK 15
31.2m
SK 16
31.7m
SK 14
SD 5
SD 5
30.8m
30.8m
31.1m
SK 17
SK 18
SK 19
0
2m

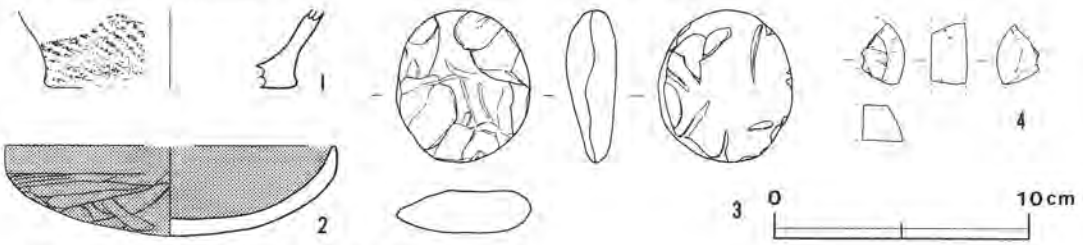
第53図　土坑実測図(２)


30.9m
SK 20
30.8m
SK 21
31.6m
SK 22
28.7m
SK 23
26.7m
SK 24
25.9m
SK 25
26.1m
SK 26
26.2m
SK 27
26.0m
SK 29
26.2m
SK 28
26.0m
SK 30
0
2m

第54図　土坑実測図(３)



第55図　土坑実測図(４)



第56図　土坑出土遺物実測・拓影図

土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	壷 弥生式土器	B〔3.0〕 C(10.0)	底部片。平底。	胴部外面縄文痕有り。内面剝離のため調整不明。	砂粒・長石 橙色 普通	5% P144 SK−2 覆土
2	坏 土師器	A(13.1) B 3.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母 灰黄褐色 普通	80% P145 SK−18 中央部覆土中層

土坑出土石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考	台帳番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第56図3	礫器	凝灰岩	6.0	5.3	2.0	67.8	SK-17	側縁部全体に使用痕有り。	21
4	紡錘車	滑石	〔2.4〕	〔1.8〕	1.4	〔7.8〕	SK-20		22

4 堀

第1号堀（第57図）

位置 調査区の南部F3区，G3区に確認された。

重複関係 無し。

方向 G3d2から北東方向（N－35°－E）に直線的に延びている。堀の両端は，さらに調査区外に延びている。

規模と形状 全長約26.0m,上幅6.5～7.5m,下幅0.75～1.2m，深さ2.1～2.7mを測る。断面形状は箱薬研堀の形状を呈し，底面及び壁面は硬く締まっている。西側の壁面は，底面から急な傾斜で立ち上がり，中途からやや緩やかになる。東側の壁面は，底面から約1.5mまで急な傾斜で立ち上がり，そこから上は，緩やかに立ち上がっている。

覆土 上層は，ロームブロック（4～5㎝）が少～中量，炭化粒子及び焼土粒子が微量，粘土粒子微量を含む褐色土が堆積している。中層は，ロームブロック中量，炭化粒子及び焼土粒子微量を含み硬く締まりのある褐色土が堆積している。上・中層の間には，ロームブロック・粘土粒子中量を含み締まりのある明褐色土が堆積している。下層は焼土粒子が中～多量を占め，赤褐色粒子を含む褐色土が堆積している。粘土質で硬い底面にはにぶい黄褐色の砂が約5㎝堆積している。

遺物 覆土中からは，土師器片3点，須恵器片2点，陶器片4点，敲石1点が覆土上・中層から出土しているが，いずれも流れ込みと思われる。

所見 本跡は，烟田城跡の外堀の一部と考えられ，時期は遺構の形状等から中世と思われる。

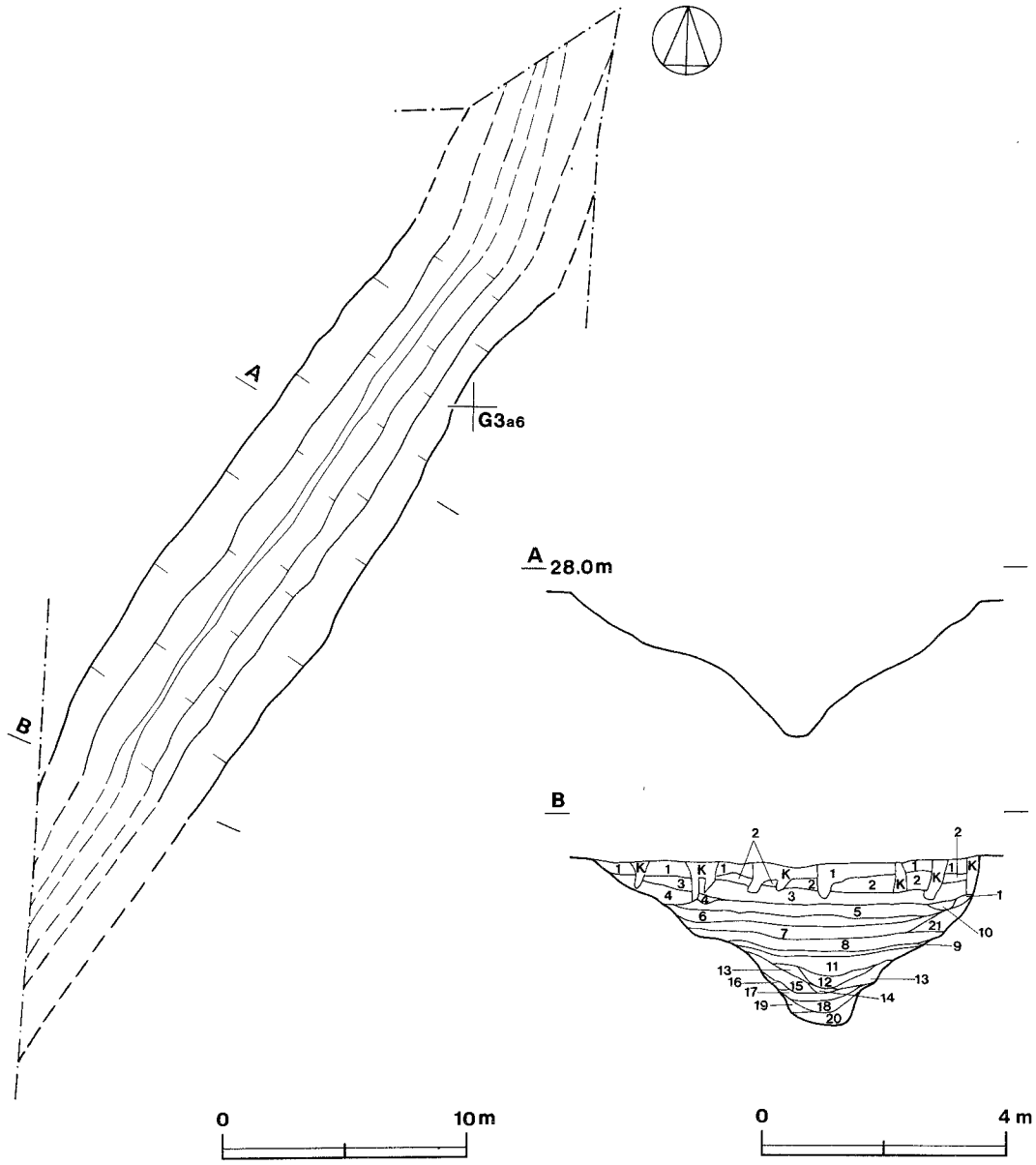
5 溝

第1号溝（第58図）

位置 調査区の中央部C2区・C3区を中心に確認された。

方向 C2c0区から北東方（N－35°－E）に向かって緩く弧を描きながら延び，調査区外に達している。

規模と形状 全長12.3m，上幅1.1～1.7m，下幅0.4～1.3m，深さ0.4～0.5mである。底面は，ほぼ平坦である。壁は，緩やかな傾斜で立ち上がり，断面形状は「U」状を呈している。溝中央部から



土層解説表

1 褐色　ローム粒子中量　炭化物・焼土粒子少量　硬い
2 暗褐色　ローム粒子多量　炭化粒子・焼土粒子少量　硬く締まる
3 褐色　ローム粒子中量　炭化粒子・焼土粒子・粘土粒少量
4 褐色　ロームブロック少量　炭化粒子・焼土粒子微量
5 褐色　ローム小ブロック中量　粘土粒中量
6 褐色　ロームブロック多量　砂・粘土粒中量
7 褐色　ロームブロック少量　炭化粒子・粘土粒少量　小石中量
8 褐色　ロームブロック中量　粘土粒・小石少量
9 明褐色　ローム層　締まりあり
10 褐色　ローム小ブロック多量
11 暗褐色　ロームブロック少量　粘土粒少量　焼土粒子微量　やや硬い
12 褐色　鉄錆多量　やや硬い
13 暗褐色　ローム粒子微量　硬い
14 暗褐色　ローム粒子少量　粘土粒微量　硬く締まる
15 褐色　ロームブロック・ローム粒子微量　硬い
16 暗褐色　ローム粒子微量　粘土少量　柔らかい
17 褐色　ローム粒子・粘土粒微量　柔らかい
18 褐色　ロームブロック・ローム粒子微量　粘土粒中量　やや柔らかい
19 褐色　ローム粒子微量　粘土粒中量　柔らかい
20 暗褐色　粘土粒中量　柔らかい
21 暗褐色　ロームブロック少量　ローム粒子中量　焼土粒子微量　やや柔らかい

第57図　第1号堀実測図

北東部にかけて，南東壁と北西壁は5°前後の傾斜が見られ，北西壁が10cm前後高い。

覆土　ローム粒子微量を含み硬く締まっている褐色土が，自然堆積している。

遺物　縄文式土器片6点，弥生式土器片1点，土師器片7点が出土している。

所見　本跡は，第1・2号住居跡に隣接していることから，それに伴う排水路とも考えられるが，確定は出来ない。

第2号溝（第59図）

位置　調査区の中央部D3区を中心に確認された。

重複関係　D3e$_6$区で第13号住居跡と重複し，第13号住居跡の南東壁を掘り込んでいる。

方向　D3f$_6$から北東方（N－21°－E）にほぼ直線的に延び，調査区外に達している。

規模と形状　全長5.6m，上幅0.9～1.3m，下幅0.3～0.5m，深さ0.4～0.5mである。底面は平坦であり，壁は急な傾斜で立ち上がる。断面形状は，皿状を呈している。

覆土　上層にローム粒子・炭化粒子微量を含む黒褐色土，下層にローム粒子・炭化粒子少量を含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　なし。

所見　本跡は，第13号住居跡より新しい溝で性格・時期を確定することは出来なかった。

第3号溝（第60図）

位置　調査区の中央部D3区，E3区に確認された。

方向　E3a$_4$区から北東方（N－26°－E）にほぼ直線的に延び，調査区外に達している。

規模と形状　全長14.4m，上幅1.3～2.0m，下幅0.7～1.0m，深さ0.4～0.6mである。底面は平坦であり，壁は急な傾斜で立ち上がる。断面形状は皿状を呈している。

覆土　人為堆積。上層はローム粒子多量，炭化粒子・焼土粒子微量を含み，硬く締まっている暗褐色土が，中層はローム粒子中量，焼土粒子微量を含む褐色土が，下層はローム粒子微量を含む褐色土が堆積している。

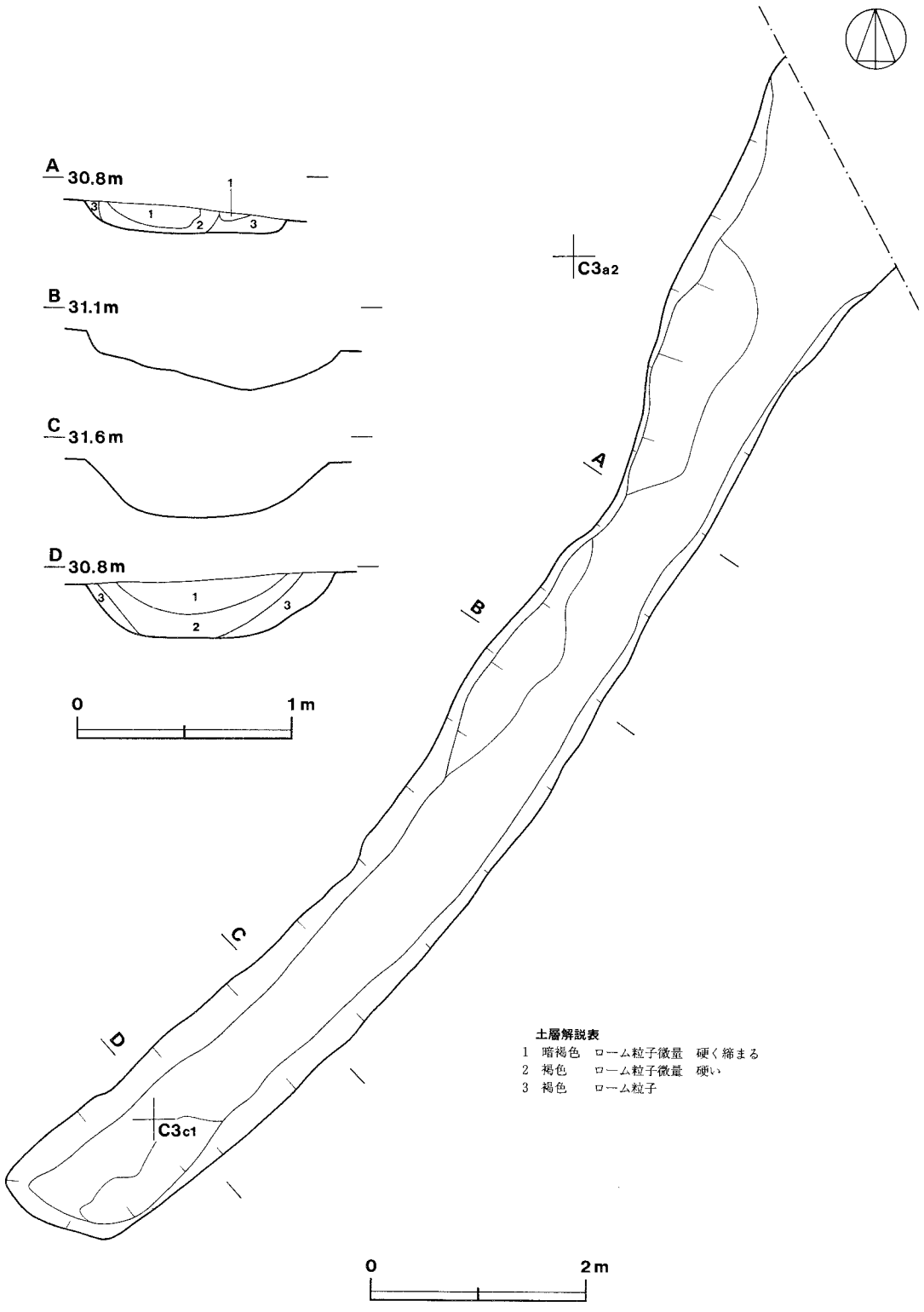
遺物　縄文式土器片14点，土師器片152点，陶器片14点，石器（磨石・砥石）2点が出土している。

所見　性格・時期共に不明。

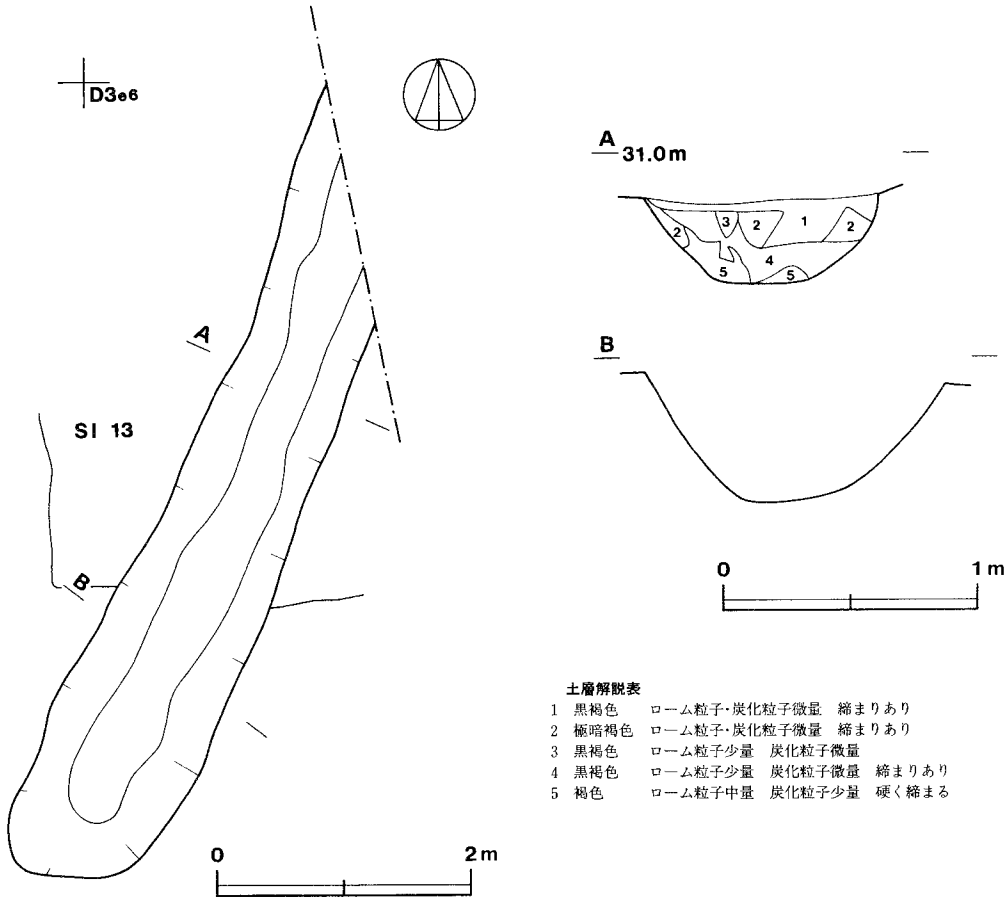
第5号溝（第61図）

位置　調査区の中央部D3区，E3区に確認された。

重複関係　第12号住居跡とD3h$_5$区で，第18号土坑とD3j$_4$区で，第19号土坑とE3b$_4$区でそれぞれ重複している。



第58図　第１号溝実測図



第59図　第２号溝実測図

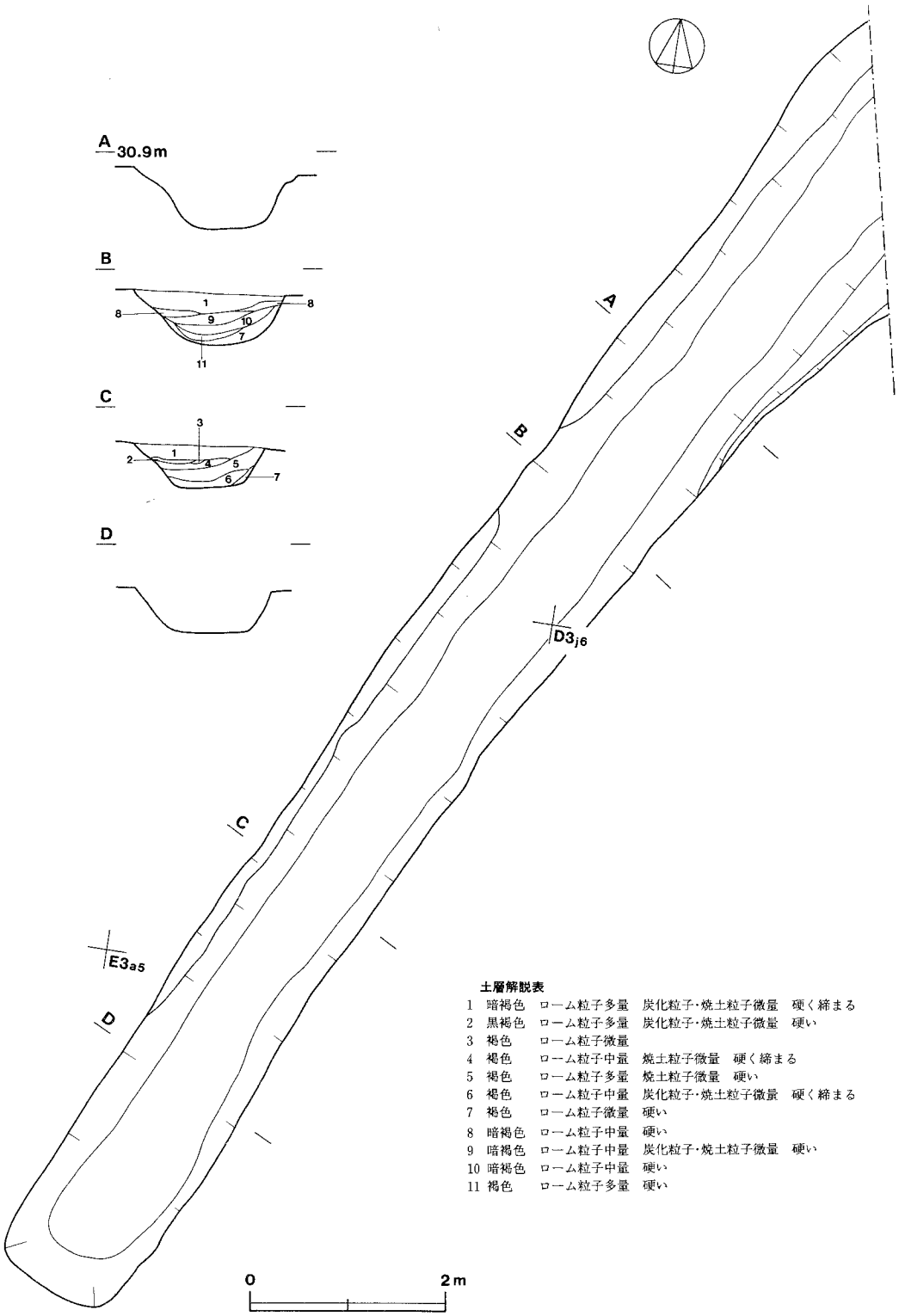
方向　E3e1区の調査区南西端から北東方（N－58°－E）にほぼ直線的に延びている。南西端はE2f0区へ，北東端はD3f6区へそれぞれ延びていくものと考えられる。

規模と形状　全長約40.0m，上幅0.7m，下幅0.2～0.3m，深さ0.1～0.2mである。底面は平坦であり，壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。断面形状は，皿状または鍋底状を呈している。

覆土　耕作による撹乱を受けている。上層はローム小ブロックを微量含み締まりのある褐色土が，中層は炭化粒子微量・ローム小ブロック微量を含む暗褐色土が，下層は炭化粒子微量を含み硬く締まっている褐色土が堆積している。

遺物　土師器片４点，陶器片１点，土製品（管状土錘）１点が出土している。

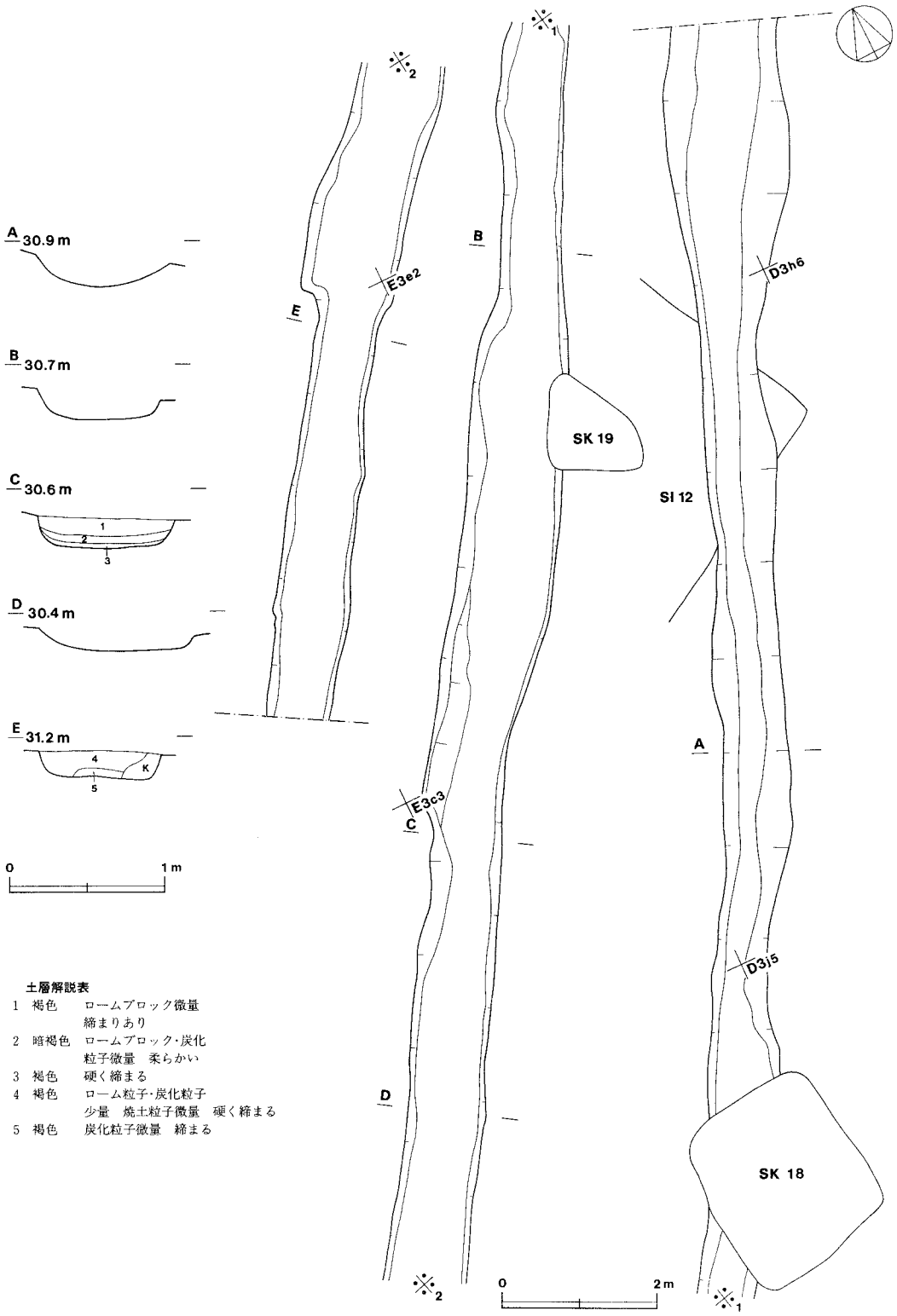
所見　性格は不明。時期は第12号住居跡との重複から第12号住居跡より新しいものと考えられる。



土層解説表

1	暗褐色	ローム粒子多量	炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
2	黒褐色	ローム粒子多量	炭化粒子・焼土粒子微量　硬い
3	褐色	ローム粒子微量	
4	褐色	ローム粒子中量	焼土粒子微量　硬く締まる
5	褐色	ローム粒子多量	焼土粒子微量　硬い
6	褐色	ローム粒子中量	炭化粒子・焼土粒子微量　硬く締まる
7	褐色	ローム粒子微量	硬い
8	暗褐色	ローム粒子中量	硬い
9	暗褐色	ローム粒子中量	炭化粒子・焼土粒子微量　硬い
10	暗褐色	ローム粒子中量	硬い
11	褐色	ローム粒子多量	硬い

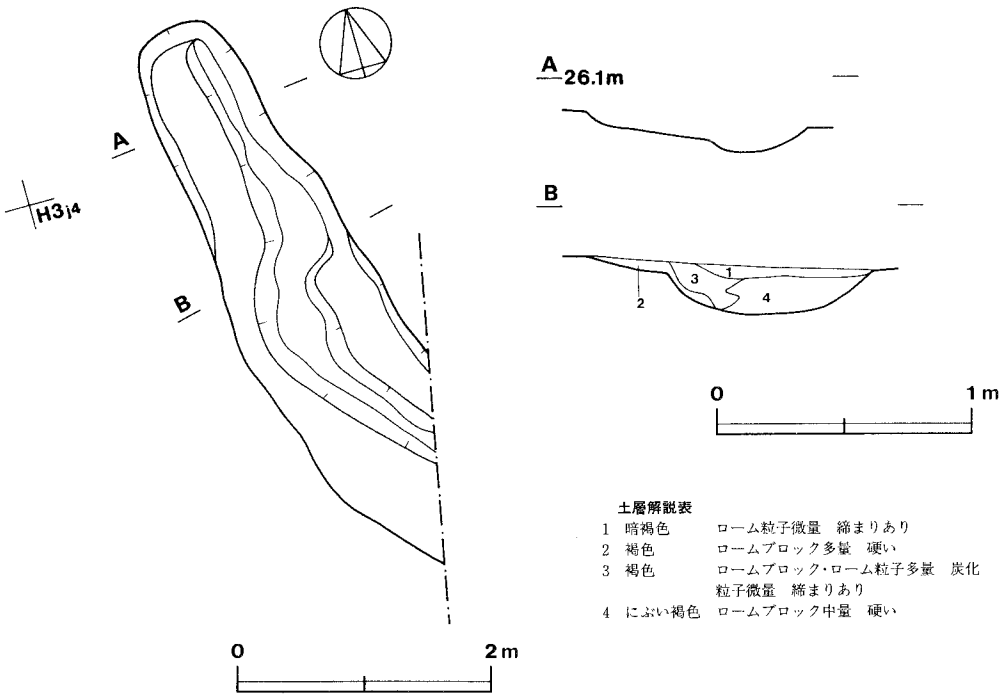
第60図　第3号溝実測図



土層解説表

1	褐色	ローム・ブロック微量 締まりあり
2	暗褐色	ローム・ブロック・炭化 粒子微量　柔らかい
3	褐色	硬く締まる
4	褐色	ローム粒子・炭化粒子 少量　焼土粒子微量　硬く締まる
5	褐色	炭化粒子微量　締まる

第61図　第5号溝実測図



第62図　第6号溝実測図

第6号溝（第62図）

位置　調査区の南部H3区を中心に確認された。

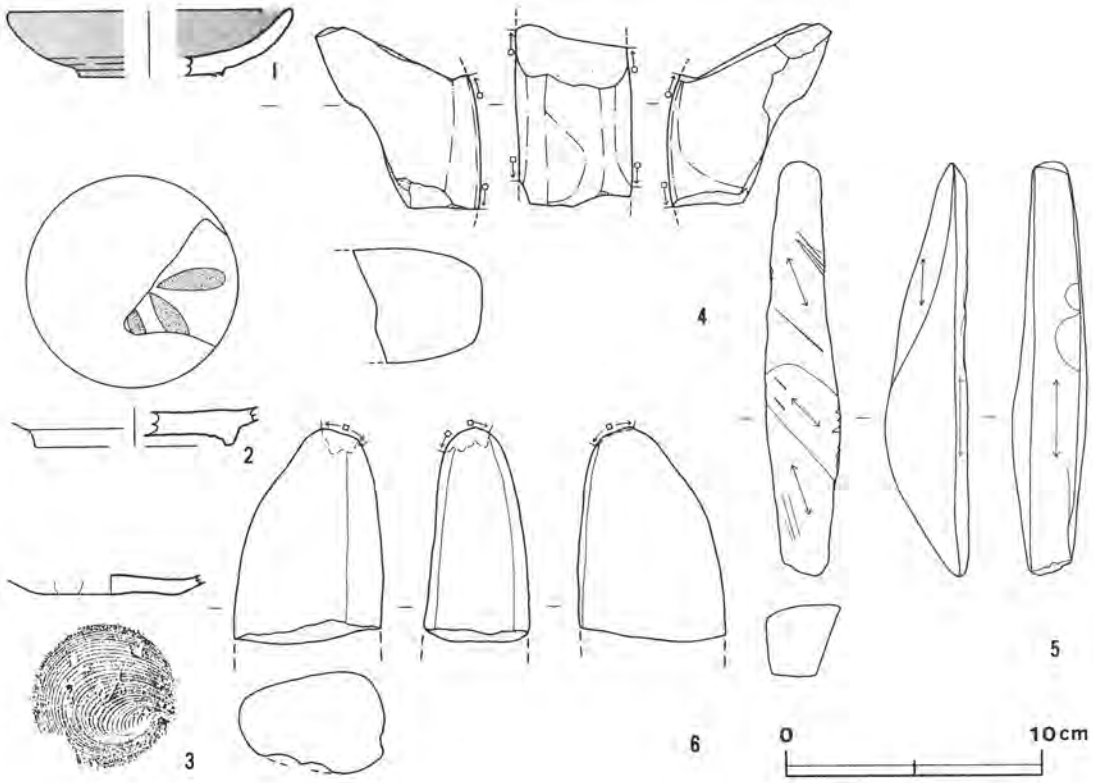
方向　H3i4区から南東方（N－9°－E）に約3.1m，ほぼ直線的に延び，H3j4区の途中から南東方（N－33°－W）に約1m曲がって調査区外に延びている。

規模と形状　全長4.1m，上幅0.9～1.3m，下幅0.1～0.3m，深さ0.1～0.2mである。北西から南東に緩やかに傾斜し，段状になっている。壁は，緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は「U」状である。

覆土　上層にローム粒子微量を含み締まりのある暗褐色土，下層にロームブロック中量・炭化粒子微量を含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　無し。

所見　性格・時期共に不明。



第63図　溝出土遺物実測・拓影図

溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	陶器 皿	A(11.2) B〔2.6〕 C(5.6)	平底。体部は内彎して立ち上がる。内・外面施釉。	水挽き。横ナデ。	砂粒 (灰白色) 普通	25% P149
2	陶器 皿	B〔1.5〕 D(7.8) E 0.7	平底。内面に花弁と思われる模様痕有り。	水挽き。横ナデ。高台内回転ヘラ削り。	砂粒 灰白色 普通	10% P150
3	陶器 皿	B〔0.8〕 C 5.4	底部片。平底。	底部回転糸切り。	砂粒・長石 灰白色 普通	20% P151

注：色調の欄の( )は，施釉の色を表わしている。

溝出土石器観察表

図版番号	器種	石質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第63図 4	磨石	安山岩	〔7.1〕	〔6.5〕	4.5	〔204.6〕	SD-3	側縁部の磨り。	23
5	砥石	凝灰岩	16.1	3.0	3.3	129.2	SD-3	2面に使用痕有り。	24
6	敲石	流紋岩	〔8.5〕	5.9	4.2	〔254.7〕	SD-4	1カ所に使用痕有り。	25

6　その他の出土遺物

(1) 土器

当調査区からは，遺構に伴わない縄文式土器片，弥生式土器片，須恵器片が出土した。いずれも破片であり器形が不明なものが大部分である。これらの主な土器について説明を加えていきたい。

① 縄文式土器（第64・65図）

1～4は，胴部片で刺突文が横位または斜位に施されている。前期に比定される。5は，胴部片で縄文を地文とし，浮線文が横位及び斜位に施され，浮線文上には斜位の刻みが施されている。6は，口縁部片で平行のナデ整形が横位に施され，その間には斜位の刻みが施されている。いずれも前期後葉の諸磯b式に比定される。7は，胴部片で連節状刺突文が横位に2条施され，刺突文上には斜位の沈線が4条施されている。8は，連節状刺突文が横位及び斜位に施されている。いずれも前期後葉興津式に比定される。9～46は，浮島式に比定される土器片である。9～11は，口縁部片で沈線が横位に施されている。12・13は，胴部片で沈線が斜位に施され，14は口縁部片で沈線が斜位に施されている。15は，胴部片で平行沈線が斜位に施されており，16～19は胴部片で平行沈線が横位及び斜位に施されている。20・21は，胴部片で沈線が横位に6条ないし9条施され，沈線の下端に爪形文が1条施されている。22は，口縁部片で沈線が横位に施され，その下端に爪形文が1条施されている。23は，胴部片で上端に平行沈線を横位に2条施し，その下端に斜位の平行沈線を施している。24・25は，胴部片で地文に斜位の細い撚糸文を施し，その上に横位の沈線を施している。26は，口縁部片で上端に斜位の沈線を施し，その下端に半截竹管による平行沈線が木葉状に施されている。27は，胴部片で半截竹管による平行沈線が木葉状に施され，28は同じく複合山形状に施されている。29は，胴部片で撚糸文が縦位に施され，30・31は，胴部片で貝殻波状文が縦位に施されている。32は，胴部片で爪形文が横位に4条施されている。33・34は，胴部片，35・36は，口縁部片で，それぞれ爪形文が横位に2条施されている。37・38は，胴部片で押引き刺突文が横位に施されている。39は，口縁部片で平行沈線が横位に3条施され，沈線間に半截竹管による刺突文が1条施され，補修孔が2つ施されている。40は，口縁部片で連節状沈線文が平行に4条施され補修孔が1つ施されている。41は，胴部片で撚糸の地文を斜位に施し，波状の沈線を横位に施している。42は，胴部片で撚糸を地文とし，波状の沈線を横位及び斜位に施している。43は，口縁部片で上端に連続沈線文を横位に2条施し，その下端に半截竹管による刺突文が1条施されている。44は，胴部片で地文に細い沈線を施し，上端に平行沈線を横位及び斜位に施し，下端に刺突文を横位に施している。45は，胴部片で地文に条線文が施され，その上に竹状工具による刺突文が施されている。46～48は，中期前葉の阿玉台式に比定される土器片である。46は，口縁部片で結節状沈線文が横位及び円形に施されており，47は，口縁部片で断面三角形の隆帯が施されており，48は，口縁部片で結節状

沈線文が横位に2条施されている。49～51は，胴部片で中期前葉に比定される。押引き刺突文が横位に施されている。52～58は，胴部片で中期中葉から後葉に比定される加曽利Ｅ式の土器片である。52～54は，縄文が施され，55･56は，隆帯により区画された内側に縄文が施されている。57は，２条の円形の隆帯により沈線を配し，その内側に縄文を施している。58は，胴部片で幅の広い縄文帯を垂下させており，底部近くは無文である。また，横位の把手が２組付くと思われるが欠損している。59～61は，後期前葉称名寺式に比定される土器片である。59は，口縁部片で縄文地文上に沈線が施されており，補修孔が施されている。60は，口縁部片で縄文地文上に沈線が施され，口縁部直下に円形瘤が貼り付けされている。61は，口縁部片で隆起した波状の把手が付されているが欠損しており，装飾に刺突文が施され，円形瘤が貼り付けられている。地文は縄文である。62～64は，同じく後期前葉に比定される土器片である。62は，胴部片で細い条線が斜位に施され，63は，口縁部片で太い沈線が横位に１条施され，その下端に細い平行沈線が斜位に施されている。64は，胴部片で細い平行沈線が縦位及び斜位に施されている。65～67は，胴部片で縄文が斜位に施されており，焼成･形状から後期中葉加曽利Ｂ式に比定される土器片である。

② 弥生式土器（第66図）

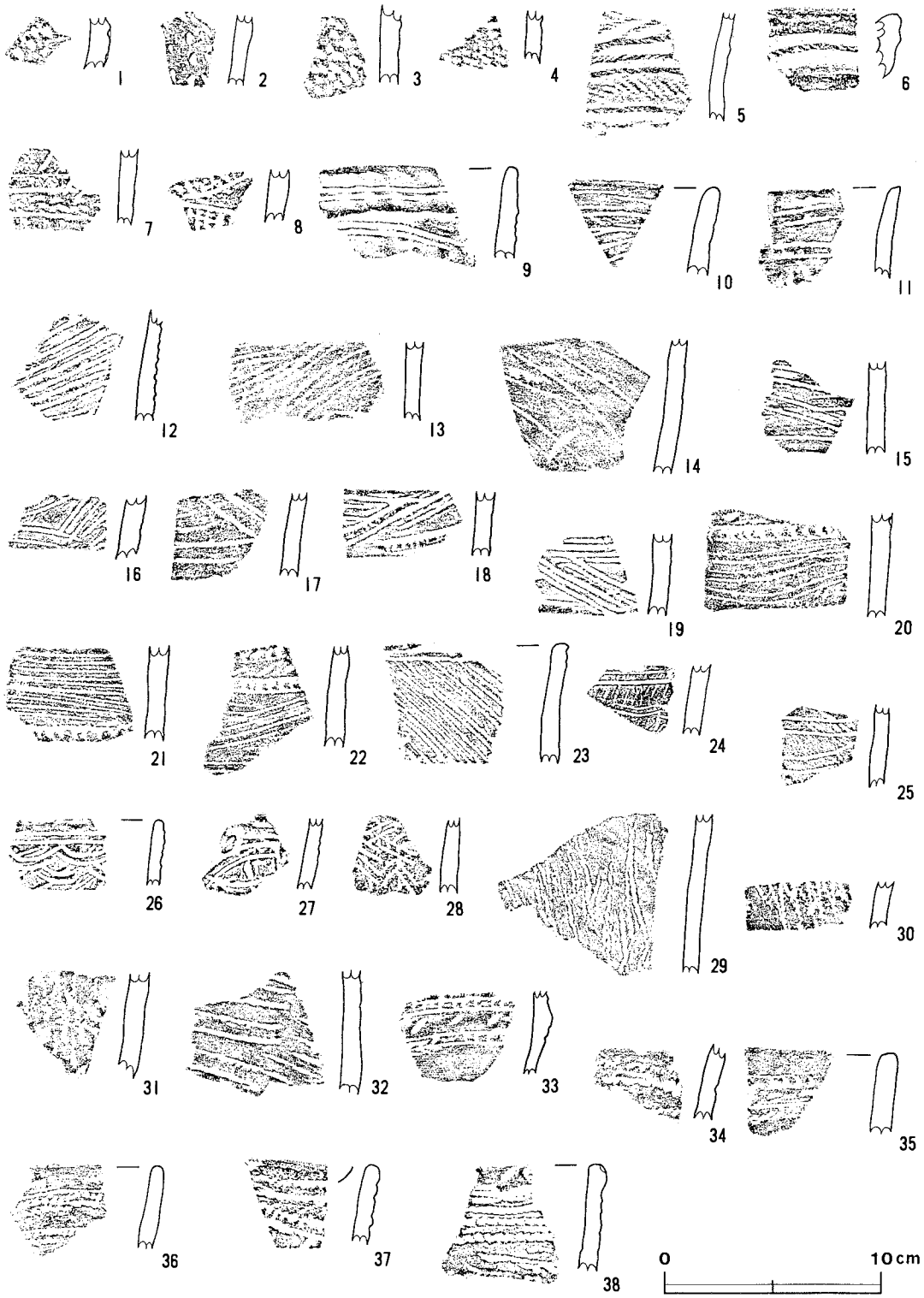
いずれも第6号住居跡の覆土上層から出土し，胴部片と思われる。68は，斜位の縄文が施され，69は，縦位の縄文が施されている。

③ 須恵器（第66図）

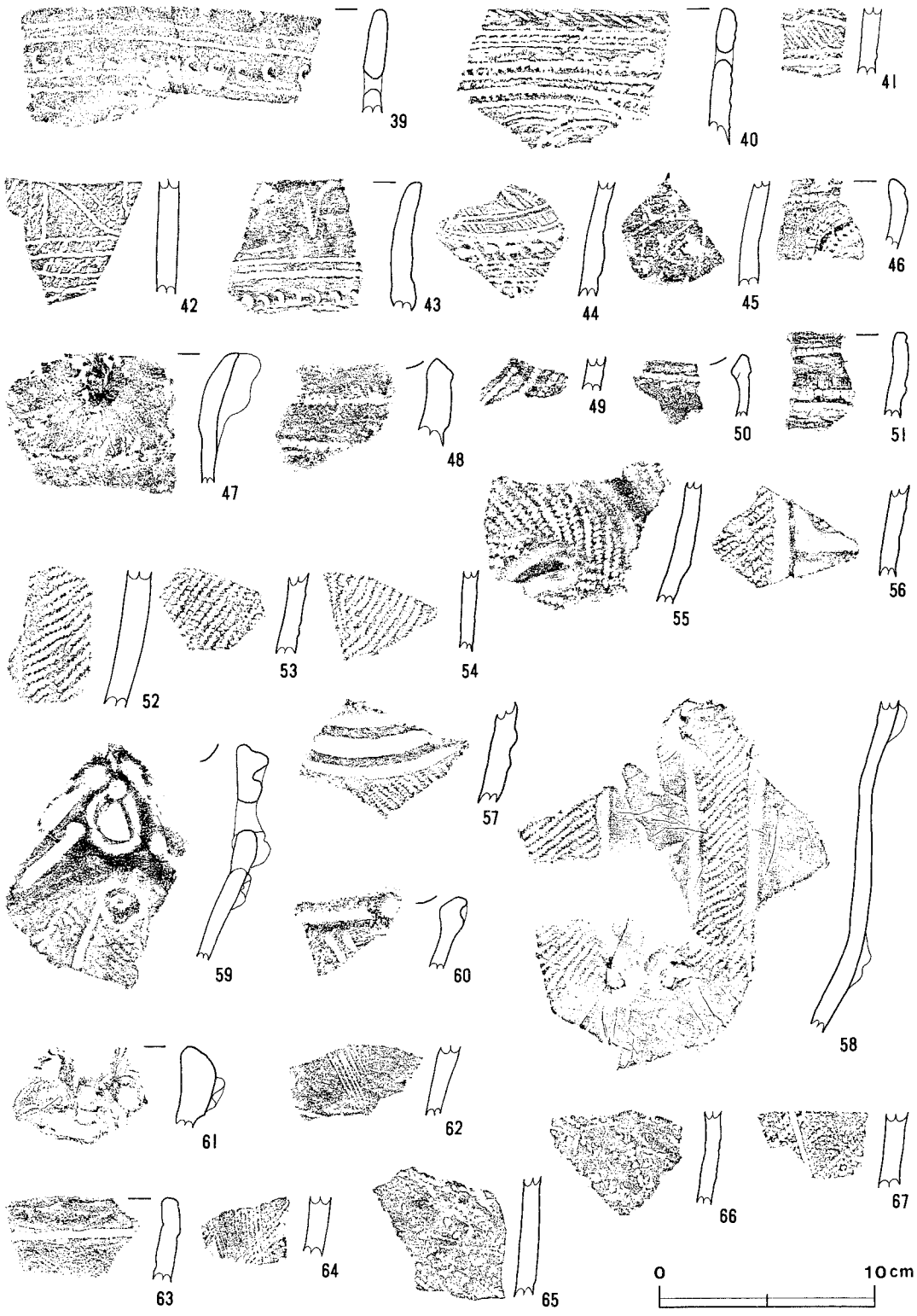
いずれも甕の胴部片と思われる。70は，第８号住居跡の覆土上層から出土し，外面に横位及び斜位の平行線叩き目が施されている。71は，第13号住居跡の覆土上層から出土し，内面に同心円文，外面には斜位及び横位の平行線叩き目が施されている。72は，第３号溝の覆土上層から出土し，内面に円心円文，外面には横位の平行線叩き目が施されている。73は，第１号堀の覆土上層から出土し，内面に同心円文，外面には縦位の平行線叩き目が施されている。

(2) 土製品，石器･石製品，古銭（第67･68･69図）

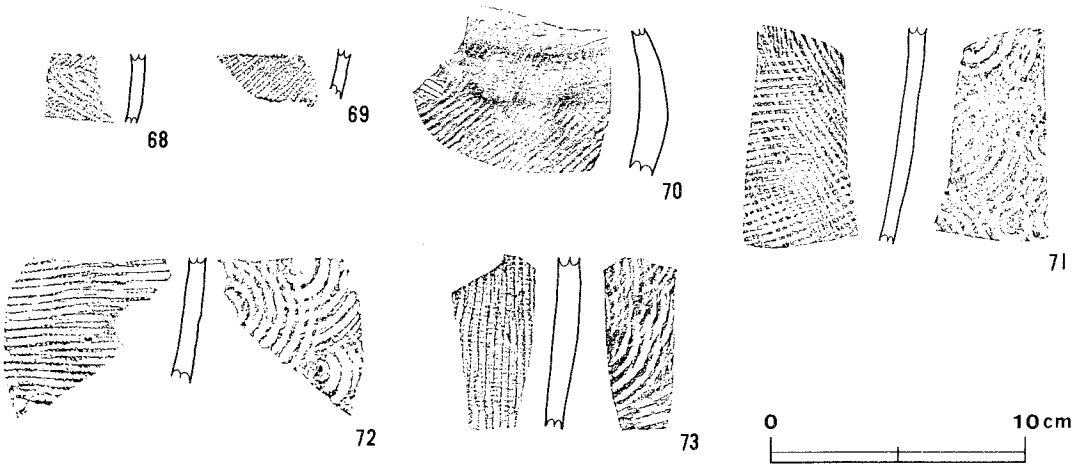
土製品は，勾玉２点，土玉26点，有孔円板２点，管状土錘15点，土器片錘１点の計46点である。石器･石製品は，９種類23点が出土した。磨石４点，敲石４点，礫器２点，砥石３点，石鏃３点，石斧１点，紡錘車４点，双孔円板１点，石錘１点が出土した。古銭は，寛永通寶１点が出土した。各遺物の法量，出土位置については観察表及び一覧表に掲載した。



第64図　遺構外出土土器拓影図(１)



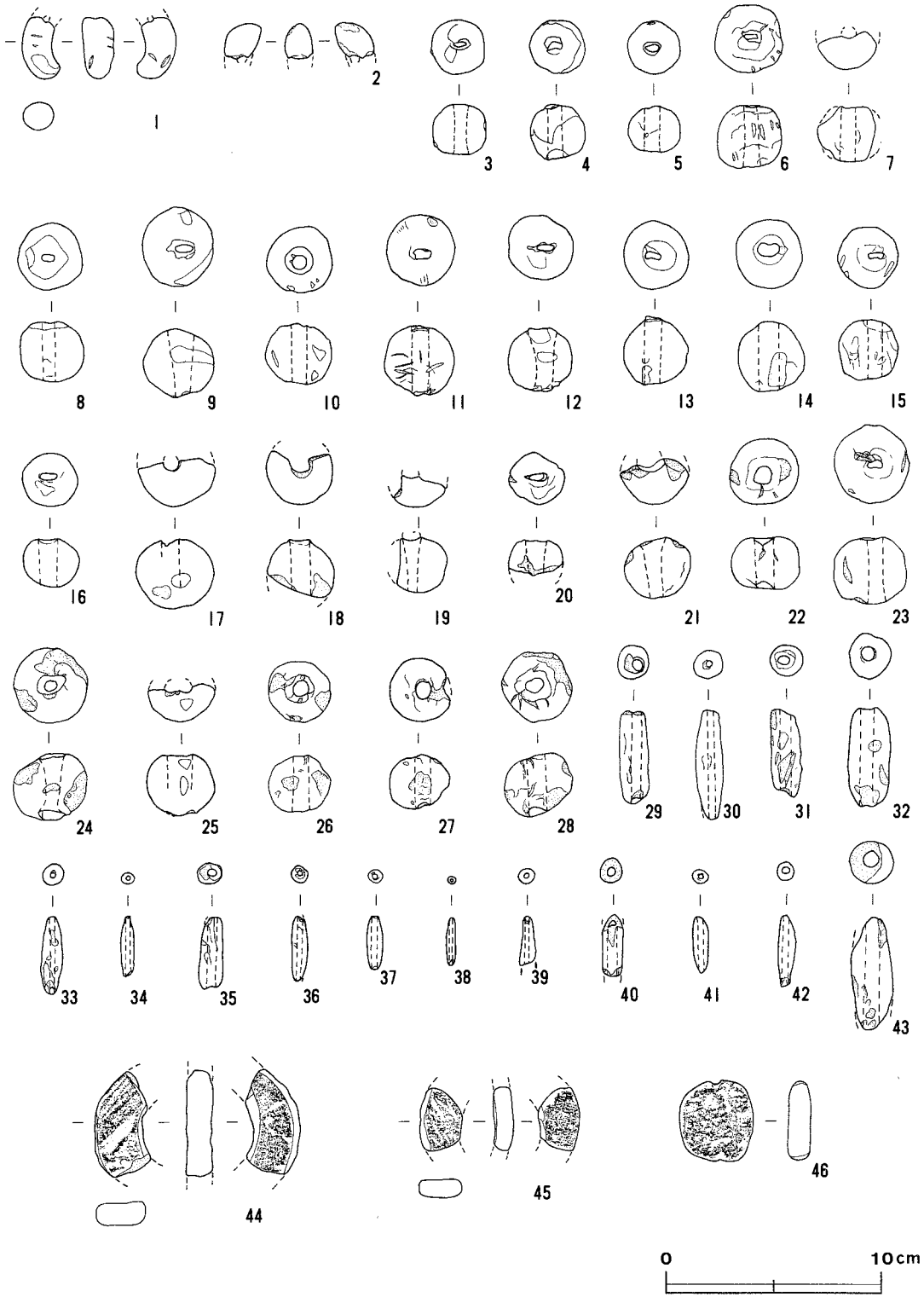
第65図　遺構外出土土器拓影図(２)



第66図　遺構外出土土器拓影図(３)

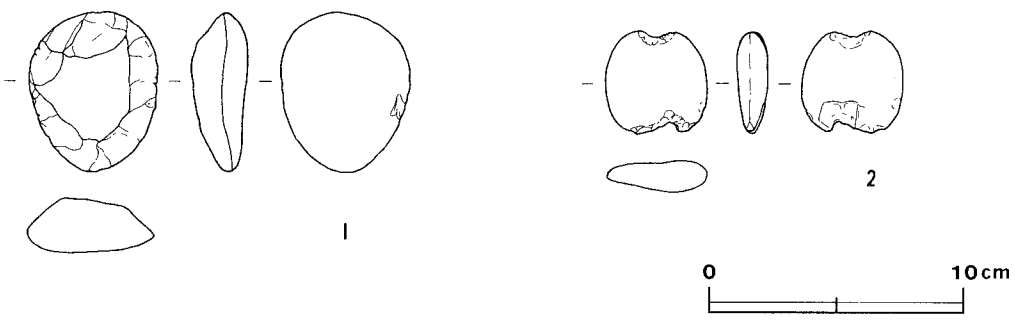
畑田川波遺跡出土土製品観察表

図版番号	名称	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第67図1	勾玉	〔2.8〕	1.8	1.3	〔6.2〕	S I-1	孔径〔0.2〕	DP 1
2	勾玉	〔1.3〕	1.9	1.4	〔3.5〕	S I-6	孔径〔0.4〕	DP21
3	土玉	2.4	2.5		14.0	S I-2	孔径 0.8	DP 2
4	土玉	2.6	2.6		14.0	S I-2	孔径 0.7	DP 3
5	土玉	2.2	2.4		11.8	S I-2	孔径 0.7	DP 4
6	土玉	2.9	3.2		25.4	S I-2	孔径 0.8	DP 5
7	土玉	2.6	〔2.7〕		〔9.5〕	S I-2	孔径〔0.7〕	DP 6
8	土玉	2.8	3.1		25.7	S I-3	孔径 0.6	DP 7
9	土玉	3.1	3.6		32.3	S I-3	孔径 1.3	DP 8
10	土玉	2.7	3.0		24.2	S I-3	孔径 0.7	DP 9
11	土玉	3.2	3.3		31.1	S I-3	孔径 0.8	DP10
12	土玉	2.9	3.0		24.0	S I-3	孔径 1.4	DP11
13	土玉	3.1	3.2		25.1	S I-3	孔径 0.8	DP12
14	土玉	3.3	3.1		30.0	S I-3	孔径 1.0	DP13
15	土玉	2.8	2.9		20.3	S I-3	孔径 0.7	DP14
16	土玉	2.1	2.6		11.7	S I-3	孔径 0.7	DP15
17	土玉	〔3.2〕	3.6		〔16.4〕	S I-3	孔径 0.8	DP16
18	土玉	〔2.7〕	3.1		〔14.6〕	S I-3	孔径 0.9	DP17
19	土玉	2.5	〔2.4〕		〔7.2〕	S I-3	孔径〔0.9〕	DP18
20	土玉	〔1.6〕	2.5		〔6.4〕	S I-3	孔径 1.1	DP19

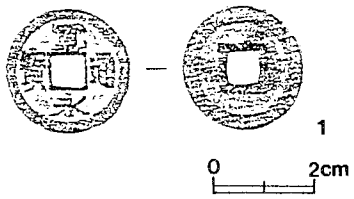


第67図　畑田川波遺跡出土土製品実測・拓影図

図版番号	名称	法量				出土位置	備考	台帳番号
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67図21	土玉	〔2.8〕	〔3.2〕		〔14.3〕	SI-5	孔径〔1.0〕	DP20
22	土玉	2.4	3.2		23.4	SI-7	孔径 0.9	DP23
23	土玉	3.2	3.6		36.1	SI-7	孔径 0.9	DP24
24	土玉	3.1	3.5		34.1	SI-7	孔径 1.2	DP25
25	土玉	2.8	〔3.1〕		〔12.3〕	SI-9	孔径〔1.1〕	DP26
26	土玉	2.7	3.0		18.0	SI-13	孔径 0.8	DP28
27	土玉	2.5	2.9		14.6	Iトレンチ	孔径 0.7	DP32
28	土玉	2.9	3.3		27.1	Zトレンチ	孔径 0.9	DP45
29	管状土錘	4.3	1.5		8.8	SI-7	孔径 0.4	DP22
30	管状土錘	5.1	1.3		6.0	SD-5	孔径 0.3	DP31
31	管状土錘	4.1	1.5		6.8	Jトレンチ	孔径 0.5	DP33
32	管状土錘	4.6	2.1		18.8	Oトレンチ	孔径 0.6	DP34
33	管状土錘	3.6	1.0		2.8	Oトレンチ	孔径 0.3	DP35
34	管状土錘	2.8	0.6		0.7	Oトレンチ	孔径 0.2	DP36
35	管状土錘	3.3	1.2		3.2	Oトレンチ	孔径 0.4	DP37
36	管状土錘	3.0	0.8		1.4	Oトレンチ	孔径 0.2	DP38
37	管状土錘	2.5	0.7		0.8	Oトレンチ	孔径 0.3	DP39
38	管状土錘	2.2	0.4		0.3	Oトレンチ	孔径 0.2	DP40
39	管状土錘	〔2.2〕	0.7		〔0.9〕	Oトレンチ	孔径 0.2	DP41
40	管状土錘	〔2.8〕	1.1		〔2.4〕	Pトレンチ	孔径 0.4	DP42
41	管状土錘	2.6	0.7		0.9	Pトレンチ	孔径 0.2	DP43
42	管状土錘	3.3	0.8		1.8	Sトレンチ	孔径 0.3	DP44
43	管状土錘	〔5.2〕	2.1		〔11.7〕	表採	孔径 0.7	DP46
44	有孔円板	〔4.9〕	2.2	1.2	〔15.9〕	SI-11		DP27
45	有孔円板	〔2.9〕	2.0	0.8	〔6.3〕	SK-1		DP30
46	土器片錘	3.8	3.5	1.1	15.4	SI-13		DP29



第68図　遺構外出土石器・石製品実測図



第69図　遺構外出土古銭拓影図

遺構外出土石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第68図 1	礫器片	アプライト	6.3	5.1	2.2	77.5	$D5f_5$	側縁部全体に使用痕有り。	26
2	石錘	砂岩	4.0	4.0	1.2	25.3	Zトレンチ		27

遺構外出土古銭一覧表

図版番号	銭名	初鋳年	鋳造地名	出土位置	備考
第69図 1	寛永通寶	寛永3年(1636)	日本	$C2c_9$	古寛永

表3　住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
1	$C2a_9$	N−30°−W	方形	6.0 × 6.0	16~30	平坦	4	竈(不明)	自然	土師器片(甕,坏,高坏)318片,土製品(勾玉)1点	
2	$C2c_9$	N−9°−W	方形	6.7 × 6.7	20~45	平坦	4	竈115・75・48	自然	土師器片(甕,坏,高坏)294片,須恵器片2片,土製品(土玉)5点	
3	$C3f_2$	N−40°−W	方形	7.2 × 6.8	25~40	平坦	4	竈136・120・64	自然	土師器片(甕,坏,高坏)910片,土製品(土玉)13片,石製品(石鏃)3点	
4	$C2h_9$	N−32°−W	方形	6.5 × 5.8	18~30	平坦	4	炉53×43・6	自然	土師器片(甕,坏)180片,須恵器片1片	
5	$C3h_2$	N−27°−W	方形	5.5 × 5.3	30~45	平坦	4	竈130・85・38	自然	土師器片(甕,坏,高坏)594片,須恵器片(甕)4片,土製品(土玉),石器(砥石),陶器片1	
6	$C3h_4$	N−44°−W	方形	6.3 × 5.9	4~12	平坦	4	炉110×95・8 130×95・4	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)460片,須恵器(坏)1片,土製品(勾玉)1点	
7	$D3a_4$	N−40°−W	方形	4.9 × 4.7	20~30	平坦	5	竈115・105・30	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)276片,須恵器片2片,土製品(土玉,管状土錘)4点	床に炭化材
8	$D3c_3$	N−11°−W	方形	4.7 × 4.5	30~35	平坦	4	竈135・105・40	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)528片,須恵器片1片	
9	$D2a_9$	N−51°−W	方形	8.0 × 7.8	20~23	平坦	4	竈110・110・25	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)595片,須恵器片(甕)2片,土製品(土玉)1点,石製品(紡錘車等)5点	床に炭化材
10	$D2a_7$	N−33°−W	方形	6.9 × 6.7	20~25	平坦	4	竈162・93・15	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)246片	
11	$D2g_9$	N−22°−W	方形	5.9 × 5.8	18~27	平坦	4	竈102・60・15	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)335片,石製品(紡錘車等)2点	焼失家屋
12	$D3h_4$	N−29°−W	方形	6.6 × 6.5	12~34	平坦	4	竈105・120・40	自然	土師器片(壺,甕,坏,高坏)418片,須恵器片1片	
13	$D3e_8$	N−10°−W	(方形)	5.2 × 5.2	12~45	平坦	1	不明	自然	土師器片(甕,坏,高坏)243片,須恵器片2片,土製品(土玉,管状土錘)2点,陶器片1片	
14	$E3c_6$	N−38°−W	(方形)	4.5 × 4.5	15~35	平坦	2	竈55・45・6	自然	土師器片(甕,坏,高坏)111片	
15	$H2_{10}$	N−38°−W	方形	6.3 × 6.3	3~27	平坦	4	炉100×47・4	自然	土師器片(甕,坏,高坏)52片,須恵器片(高坏)3片,石製品1点	焼失家屋

注　炉・竈の欄の数値は，炉は長径×短径・深さの順に，竈は長さ・幅・壁への掘り込みの順に記載し，単位はcmである。

第3節　考察

1　竪穴住居跡と出土土器について

今回の調査によって烟田川波遺跡から検出された竪穴住居跡は，これまで述べてきたように15軒である。その中で14軒の住居跡については，古墳時代後期前葉に比定されるものと考えられるが，出土土器や住居跡の構造等から，次のようにⅠ期・Ⅱ期に分けることができる。残り1軒については住居跡の東側半分が調査区外のため調査が不十分で時期については不明である。

Ⅰ期　古墳時代後期前葉（鬼高Ⅰ期前半）―(第4・5・6・8・9・15号住居跡)

Ⅱ期　古墳時代後期前葉（鬼高Ⅰ期後半）―(第1・2・3・7・10・11・12・14号住居跡)

ここでは，各時期毎に出土土器と住居跡について概観することにする。

(1)　Ⅰ期

①　出土土器について（第71・72図)

該期の出土土器は土師器が中心であるが，須恵器も少量出土している。器種としては，土師器の壺・甕・坏・高坏，須恵器の高坏・𤭯が出土している。

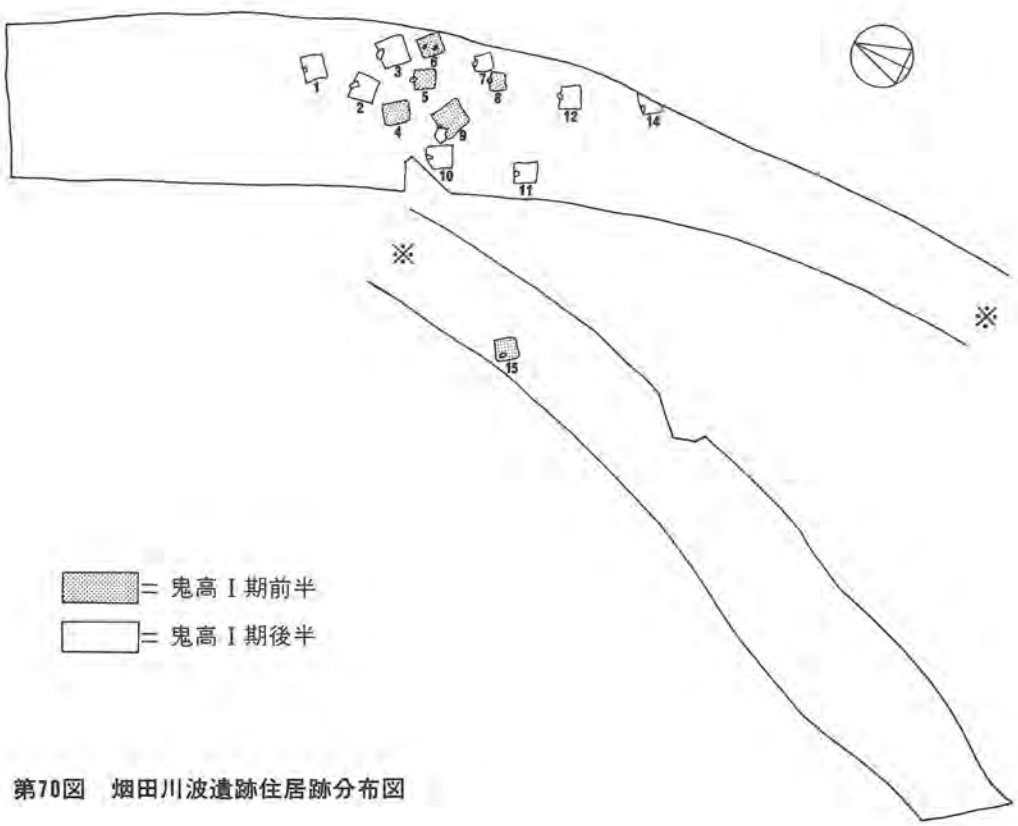
土師器の壺(9-1・2)は，丸底及び平底で，胴部は球状を呈し，口縁部は外反している。整形技法は，口縁部内・外面横ナデ，胴部内面ナデ，外面ヘラ削りまたはヘラ削り後ヘラ磨きである。土師器の甕は，平底で口縁部が外傾するもの(9-5)と，口縁部はほぼ直立して立ち上がり口唇部が外反するもの(8-3)とがある。胴部外面にはナデが施されている。

土師器の坏は，須恵器の模倣坏が主で，丸底を呈し，口縁部と体部外面の境に明瞭な稜を有している。口縁部は後述するⅡ期の土器よりも幅が広く，内傾(9-17)，外傾(6-15)，直立(5-3)するものの3種類が見られる。その他平底で口縁部が内彎するもの(15-1)，丸底で口縁部がやや外傾するもの(4-1)が出土している。整形技法は，体部内面はヘラ磨き，外面はヘラ削りが施されているものが多い。

土師器の高坏は，坏部の底部に稜を有し，口縁部が外反するもの(9-18)がある。整形技法として，脚部外面に縦位のヘラ磨きが施され，坏部には赤彩痕が残っている。

須恵器の高坏は，2点出土しており，(9-20)は坏部に明瞭な稜を有し，脚部には3か所の透かし窓が施されている。(15-2)は坏部に波状沈線が4条施され，その上位には2条の稜が施されており，坏底部には環が付されている。坏底部に環が付されている高坏は，あまり類を見ないが，和歌山県の楠原遺跡及び大日山Ⅰ遺跡から出土している高坏に類似している。

須恵器の𤭯(9-21)は，丸底で，胴部は球状を呈し，孔が1か所穿たれており，口縁部は大きく外傾している。整形技法は横ナデを施している。



第70図　畑田川波遺跡住居跡分布図

② 竪穴住居跡について

Ⅰ期の住居跡は6軒で，第4・5・6・8・9号住居跡が，調査区の中央部にそれぞれ近接して検出されている。第15号住居跡だけが，中央部から南へ約182.0m離れて検出されている。

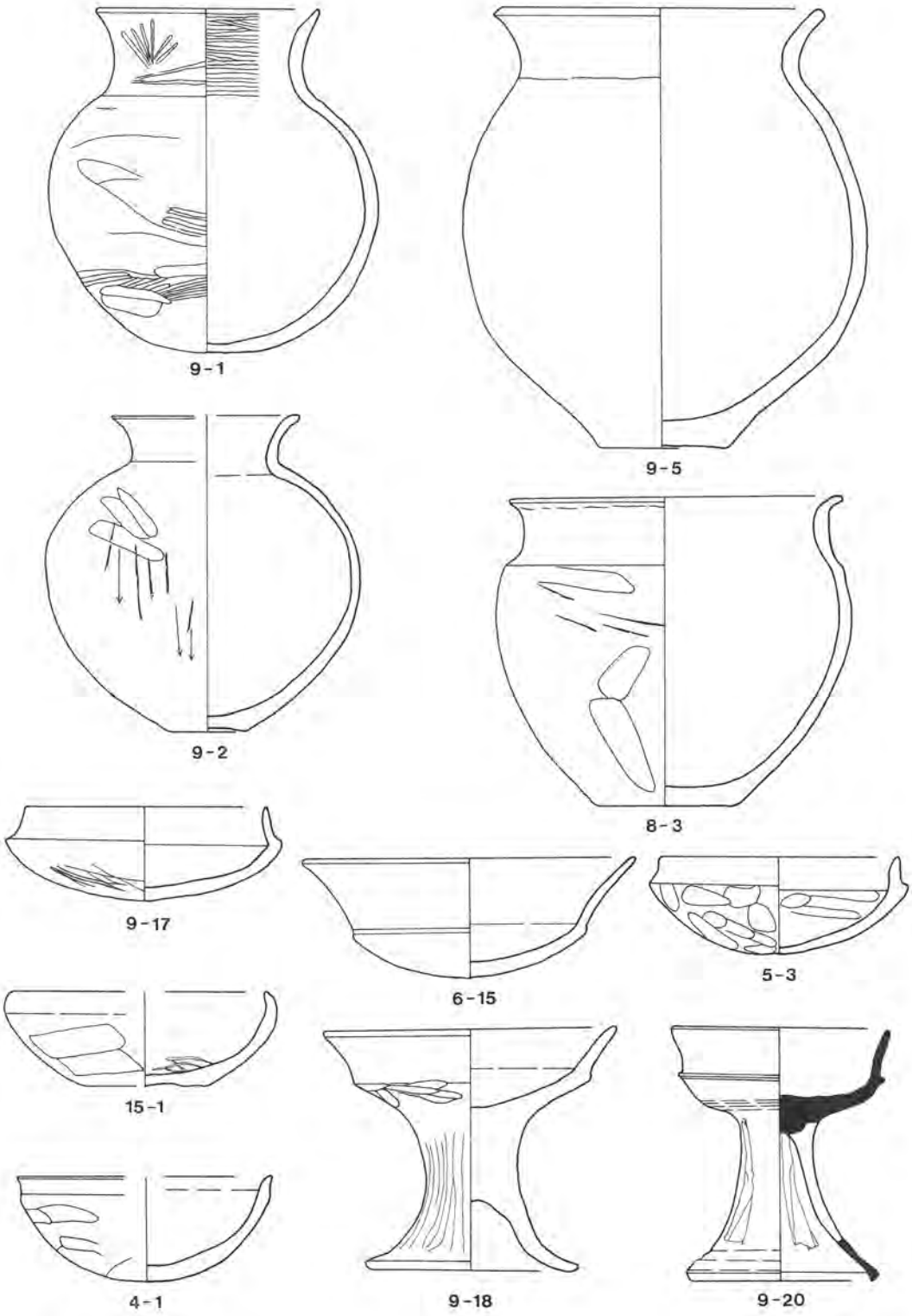
規模は，当調査区の中では比較的大型のものが多く，最も大規模なものは第9号住居跡で，長軸8.0m，短軸7.8mを測る。最小のものは，第8号住居跡で，長軸4.7m，短軸4.5mを測り，規模には大きな差があることが窺える。

床面積は，30㎡を超す住居跡が4軒(第4・6・9・15号住居跡)認められ，その中でも第9号住居跡は，62.40㎡と他の3軒の住居跡の2倍近い面積を有している。最も狭い住居跡は，第8号住居跡の21.15㎡である。該期の住居跡6軒の平均床面積は37.88㎡である。この数値は，Ⅱ期の住居跡8軒の平均床面積と比較して，ほとんど変化が認められない。

主軸方向をみると，第8号住居跡を除く5軒の住居跡は，西へ27°～51°の方向に集中している。

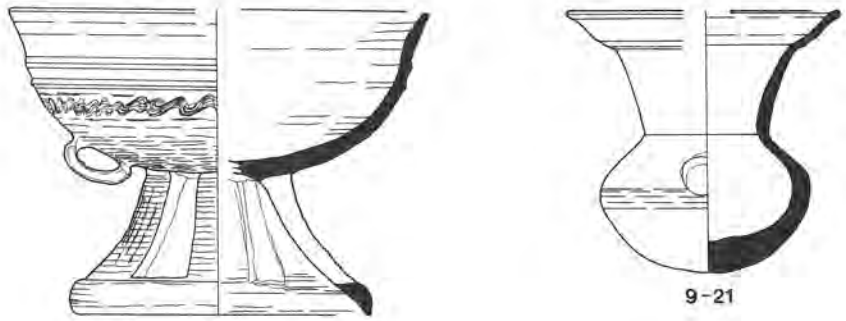
ピットは，6軒の住居跡全てに主柱穴4か所が検出されている。主柱穴はいずれも対角線上に規則的に検出されている。

床面は，いずれも極めて硬く踏み固められており，平坦である。

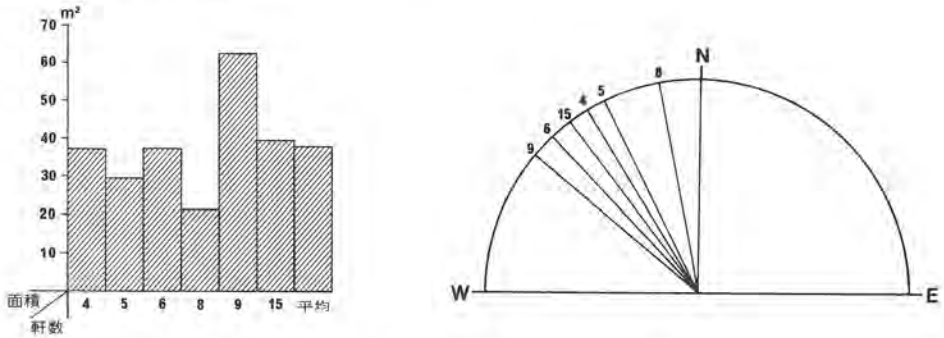


第71図　第Ⅰ期遺物実測図(１)

炉及び竈についてみると，炉を持つ住居跡は，第4・6・15号住居跡の3軒で，竈を持つ住居跡は，第5・8・9号住居跡の3軒である。竈はいずれも北西壁中央部に構築されている。古墳時代中期で，炉を持ち鬼高期の遺物が出土した調査例は，水海道市の西原遺跡，竜ヶ崎市の屋代A遺跡にみることができる。(1)



第72図　第Ⅰ期遺物実測図(2)



第73図　畑田川波遺跡第Ⅰ期住居跡規模・主軸方向

(2)　Ⅱ期

①　出土土器について（第74図）

出土土器は，Ⅰ期と同様に土師器が主である。器種としては，土師器の壺・甕・坏・高坏，須恵器の坏が出土している。

土師器の壺(7-1)は，平底で胴部は球状を呈しており，口唇部は外反する。整形技法は，口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ヘラ削りである。

土師器の甕は，平底で長胴を呈し，口縁部は外反するもの(7-3)が多い。整形技法は，胴部外面はナデが施されている。

土師器の坏は，全て丸底を呈している。口縁部と体部外面の境に稜を有するが，Ⅰ期で見られた程の鋭さは無くなる。口縁部は内傾(12-5)，外傾(10-10)，外反(7-9)，直立(12-4)の4種類がある。整形技法は，口縁部内・外面にヘラ磨きを施しているものが多く見られる。中には，黒色処理をしているもの(7-16)もある。

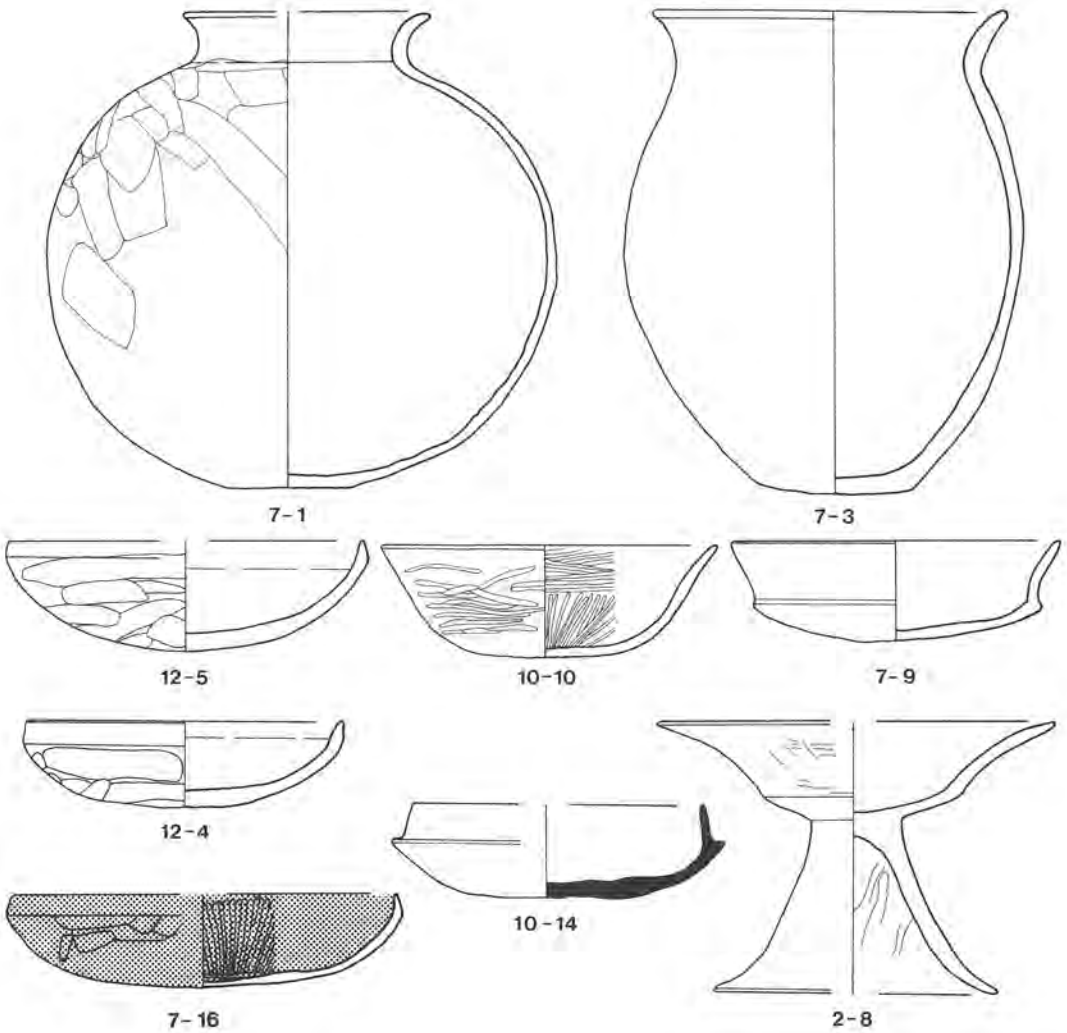
土師器の高坏(2-8)は，坏部の口縁部が大きく外反するものが見られる。整形技法は，坏部内面にヘラ磨きが施され，外面はヘラナデが施されている。

須恵器の坏(10-14)は，平底で体部は緩く内彎し，口縁部との境に稜を有する。整形は横ナデで，底部は回転糸きりである。

② 竪穴住居跡について

Ⅱ期の住居跡は８軒で，いずれも調査区の中央部に検出されている。その中で特に，第１・２・３号住居跡は近接して検出されている。

規模は，Ⅰ期の第9号住居跡のように大規模なものはなくなり，平均化している。最大規模は，第3号住居跡で長軸7.2m，短軸6.8mを測る。最小のものは，第14号住居跡で一辺4.5mの方形を呈している。



第74図　第Ⅱ期遺物実測図

床面積は，30㎡を超す住居跡が6軒(第1・2・3・10・11・12号住居跡)認められるが，大きな差はない。8軒の住居跡の平均床面積は，37.06㎡で，Ⅰ期の住居跡とほぼ同程度である。

主軸方向は，第2号住居跡が，ほぼ北に近い方向(N-9°-W)を向いているが，他の7軒は，西へ22°～40°の方向に集中している。Ⅰ期の住居跡とほぼ同方向である。

ピットは，第7号住居跡が，主柱穴4か所，補助柱穴1か所の計5か所に検出されているが，他の7軒は，いずれも主柱穴4か所が検出され，対角線上に規則的に配置されている。Ⅰ期の住居跡の主柱穴と同様の構造であり変化は認められない。

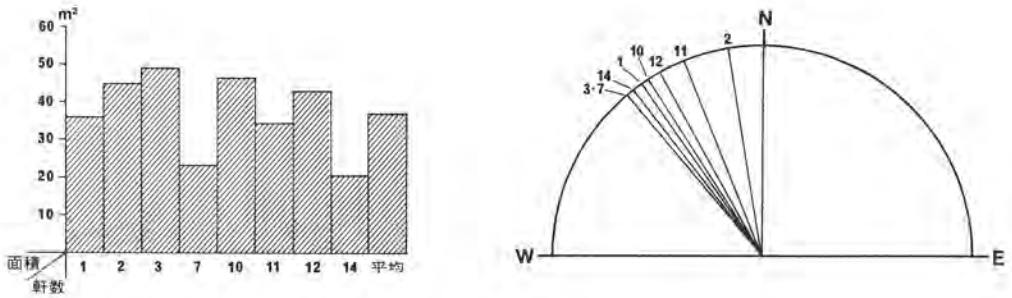
床面は，Ⅰ期の住居跡同様，極めて硬く踏み固められており，平坦である。

炉及び竈についてみると，Ⅱ期の住居跡は，炉を持つ住居跡がなくなり，全て竈を持つ住居跡となる。設置場所は，撹乱を受けて不明の第1号住居跡を除いて，7軒とも全て北西壁中央部に構築されている。北西壁の掘り込みの状況を比較しても，Ⅰ期の平均が幅100cm，掘り込み34cm，Ⅱ期の平均が幅88cm，掘り込み31cmで，Ⅰ期の竈を持つ第5・8・9号住居跡と比べても大きな変化は認められない。

以上，当調査区で検出された出土土器と竪穴住居跡について，Ⅰ・Ⅱ期に分け時期毎に概観してきた。Ⅱ期の土師器は，Ⅰ期と比べて，甕では胴部が長胴化している。

なお，坏では，口縁部と体部の境の稜がⅠ期では明瞭な稜を有し鋭さを持っているが，Ⅱ期になると鋭さが無くなったり，稜がにぶくなったり，さらに稜が無くなることがある。また，口縁部の幅がⅠ期と比べてやや狭くなる傾向が見られる。また，整形技法においては，Ⅰ・Ⅱ期ともあまり変化は見られない。

以上の概観から当調査区のある台地には，古墳時代後期初頭から人々が定住し，集落を形成していたものと考えられる。その後，古墳時代後期前葉の終わり頃まで集落は継続するが，永くは続かず，その後の生活の痕跡は認められない。



第75図　畑田川波遺跡第Ⅱ期住居跡規模・主軸方向

表4　住居跡内出土主要土器一覧表

時期	器種／住居跡	土師器								須恵器				
		壺	甕	小型甕	甑	鉢	坏	高坏	小計	坏	高坏	鼷	小計	合計
I	SI-4						2		2					2
	5		2				2	2	6					6
	6	6	5		1		5	1	18	1			1	19
	8		4		1		1	3	9					9
	9	5	1		1		10	2	19		1	1	2	21
	15						1		1		1		1	2
	小計	11	12		3		21	8	55	1	2	1	4	59
II	SI-1		4				2	1	7					7
	2		2				5	2	9					9
	3		4	1			3	2	10					10
	7	1	2	2	1	1	11		18					18
	10	1					11	2	14	1			1	15
	11	1		2	1		2		6					6
	12	1	1		1		3	1	7					7
	14						2	1	3					3
	小計	4	13	5	3	1	39	9	74	1			1	75
	合計	15	25	5	6	1	60	17	129	2	2	1	5	134

注・参考文献

(1)　小川邦男「年報7　鬼高期初頭の土器と住居について」茨城県教育財団　1987年

第5章　烟　田　城　跡

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，鹿島郡鉾田町大字烟田字川波1,305番地他に所在し，鉾田町役場の南東約1.5km，烟田川波遺跡の南側に隣接している。遺跡の北側には南西に流れて鉾田川に合流する長茂川が，南側には南西に流れて北浦の湖頭に注いでいる田中川がある。本遺跡は両川に挟まれ，南西方向へ張り出した舌状台地の南端部にあり，標高9～25mを測る。南側は，沖積低地で水田となっている。当遺跡と低地との比高は7～24mである。

烟田城は常陸三十三館の一つで，鉾田町大字烟田の氷川から外城の西300m・南北200mにわたる，標高約25mの丘の上に位置している。烟田城の本丸跡は氷川南端にあたり，約90mの方形の土塁と空堀がめぐらされており，現在小学校敷地の一部となっている。

遺構は，堀1条，土坑25基，溝3条が検出された。堀は，城跡の南西に検出され烟田城の外堀と思われ，堀の両側は急崖で上幅約11～14m，下幅約4m，深さ約4mを測る。土坑は，当遺跡の北西側に検出され，烟田川波遺跡の延長上にある。溝は，第1号溝が堀の上層に一部重なって作られており，他の2条は北西側台地上に検出されている。

遺物は，縄文式土器片・土師器片・須恵器片・陶器片・石製品・土製品・古銭等が出土している。

第2節　堀と出土遺物

1　堀

第1号堀（第76図）

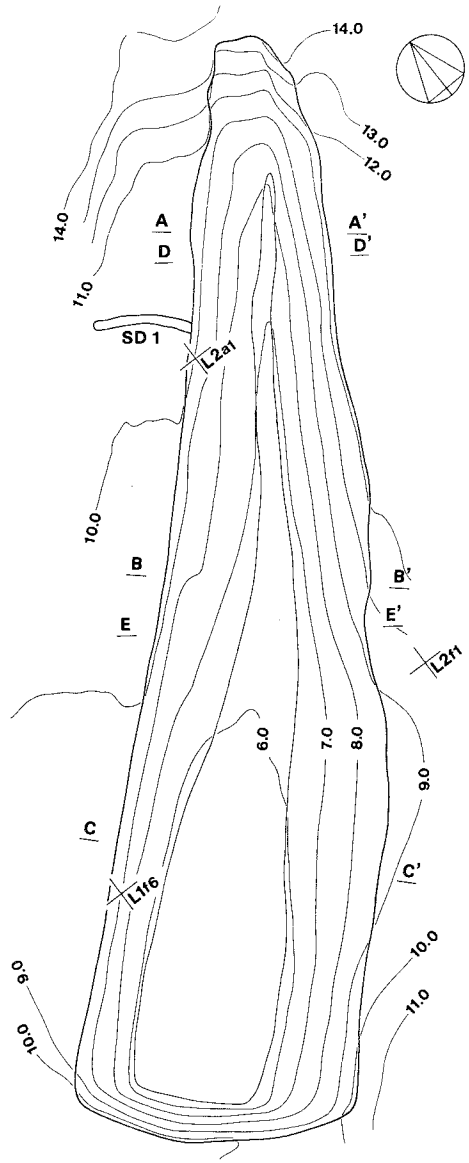
位置　調査区の南部K2区，L1区，L2区に確認された。

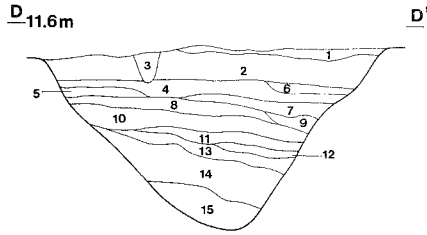
重複関係　L1b$_9$区で第25号土坑と，K2j$_1$区・L2a$_1$区・L1b$_0$区・L1c$_9$区で第1号溝とそれぞれ重複している。

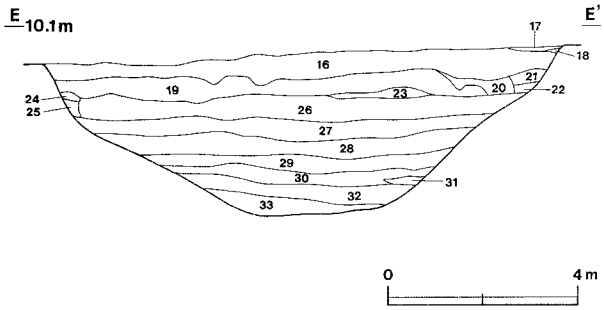
方向　L1g$_3$区からK2f$_4$区にかけて，北東方向（N－48°－E）にほぼ直線的に延びている。堀の両端は，更に調査区外に延びている。

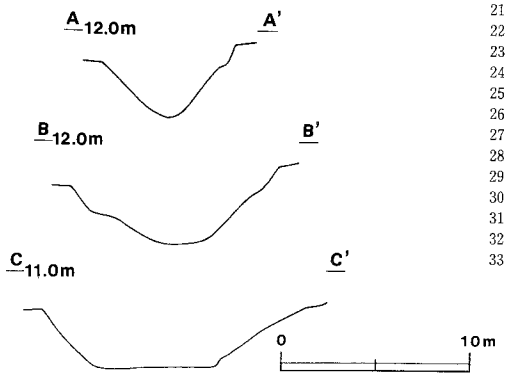
規模と形状　全長約49.2m，上幅6.6～15.2m，下幅1.3～5.2m，深さ2.9～3.2mを測る。底面は，調査区の南端から中央部迄は平坦であり，中央部から北端にかけては，やや鍋底状を呈している。壁は，中央部から北部にかけては段状で，それ以外は急な傾斜で立ち上がる。段面形状は，調査区の南側で「凵」状を呈し，北側で「㇕」状を呈する。

覆土　上層には，小石少量，砂粒中量，ローム粒子・炭化粒子微量を含む褐色土及び暗褐色土が堆









土層解説表

1	褐色	砂多量　硬い
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬い
3	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　硬い
4	褐色	ロームブロック微量　ローム粒子・小石少量　砂多量　硬く締まる
5	褐色	砂層　炭化粒子微量　小石中量　砂多量　硬い
6	褐色	砂層　硬い
7	褐色	砂層
8	暗褐色	砂層　炭化材微量　小石少量　硬い
9	黒褐色	ローム粒子少量　炭化粒子・炭化材・小石微量　硬い
10	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量　小石少量　硬い
11	黒褐色	砂層　小石微量　柔らかい
12	黒褐色	粘性あり
13	黒褐色	粘性あり　硬い
14	褐色	ローム粒子・小石微量　硬い
15	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量　硬い
16	褐色	砂層　小石微量
17	暗褐色	ローム粒子微量　砂質土・小石少量
18	暗褐色	ローム粒子・小石微量
19	暗褐色	炭化物・炭化粒子・焼土粒子微量　小石少量　締まりあり
20	褐色	砂層　炭化粒子微量　小石少量　柔らかい
21	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・小石少量　締まりあり
22	暗褐色	ローム粒子・小石少量　締まりあり
23	暗褐色	ロームブロック・ローム粒子少量　炭化粒子微量　締まりあり
24	褐色	ローム粒子・焼土粒子・小石少量　柔らかい
25	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子少量　締まりあり
26	暗褐色	ローム粒子・小石微量　柔らかい
27	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
28	暗褐色	砂層　ローム粒子少量　炭化粒子微量　小石少量
29	黒褐色	砂層　ローム粒子・炭化粒子・小石少量
30	黒褐色	ロームブロック少量　ローム粒子・焼土粒子微量　小石少量　締まりあり
31	黒褐色	砂層中量
32	黒褐色	小石微量　締まりあり
33	褐色	ロームブロック・小石微量

第76図　第1号堀実測図

積している。中層には，小石少量，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量を含む暗褐色土及び黒褐色土が堆積し，中層と下層の間には，小石少量・ローム粒子・炭化粒子少量を含む砂層がありさくさくしている。下層には，小石（直径0.5cm大）少量，ローム粒子・炭化粒子微量を含み締まりのある黒褐色土が，自然堆積している。

遺物　覆土中層から，縄文式土器片20点，土師器片3点，陶器片3点が出土している。

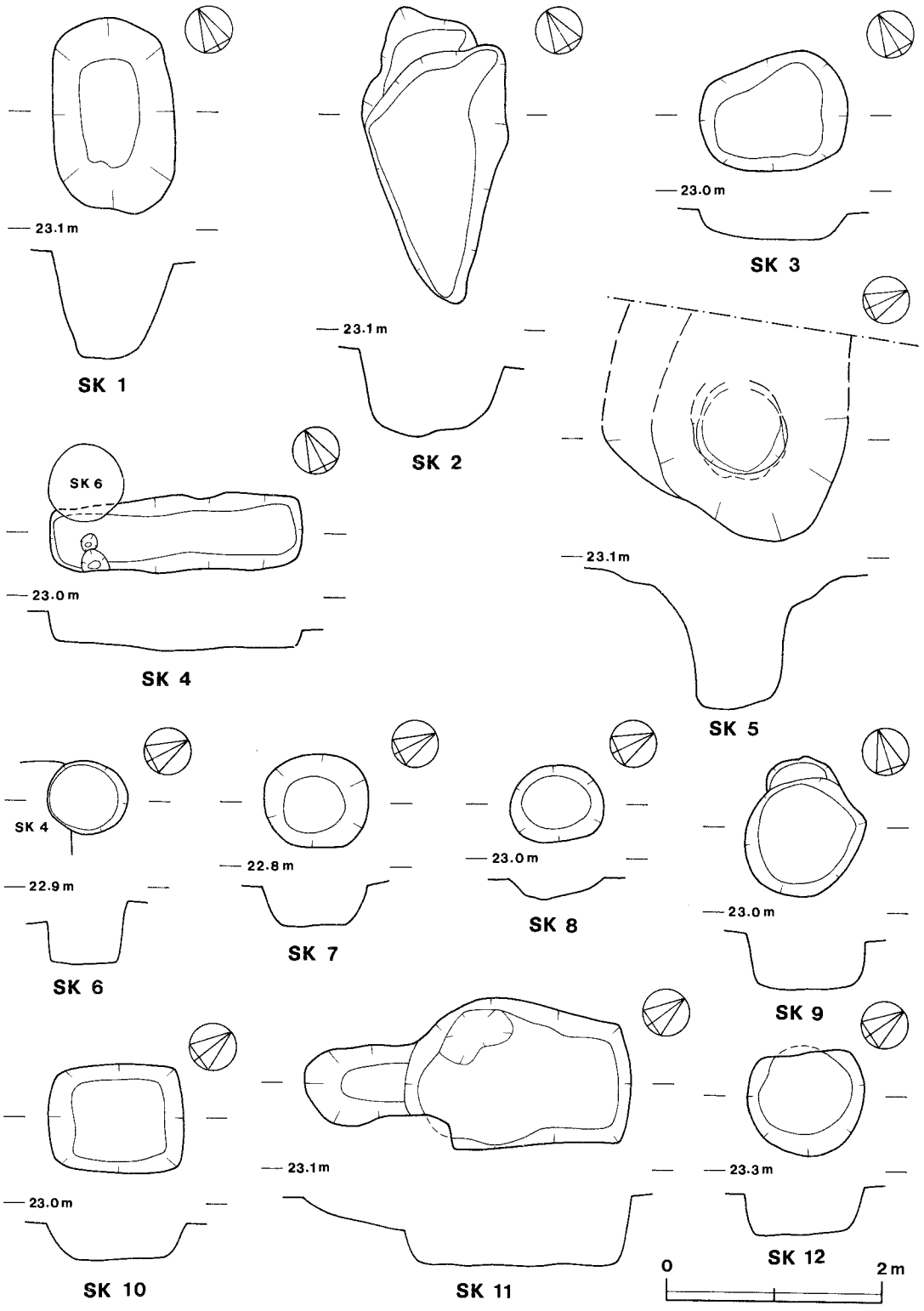
所見　本跡は，堀の形態や立地から判断して，中世に構築された畑田城の外堀であると思われる。

2　土坑（第77・78図）

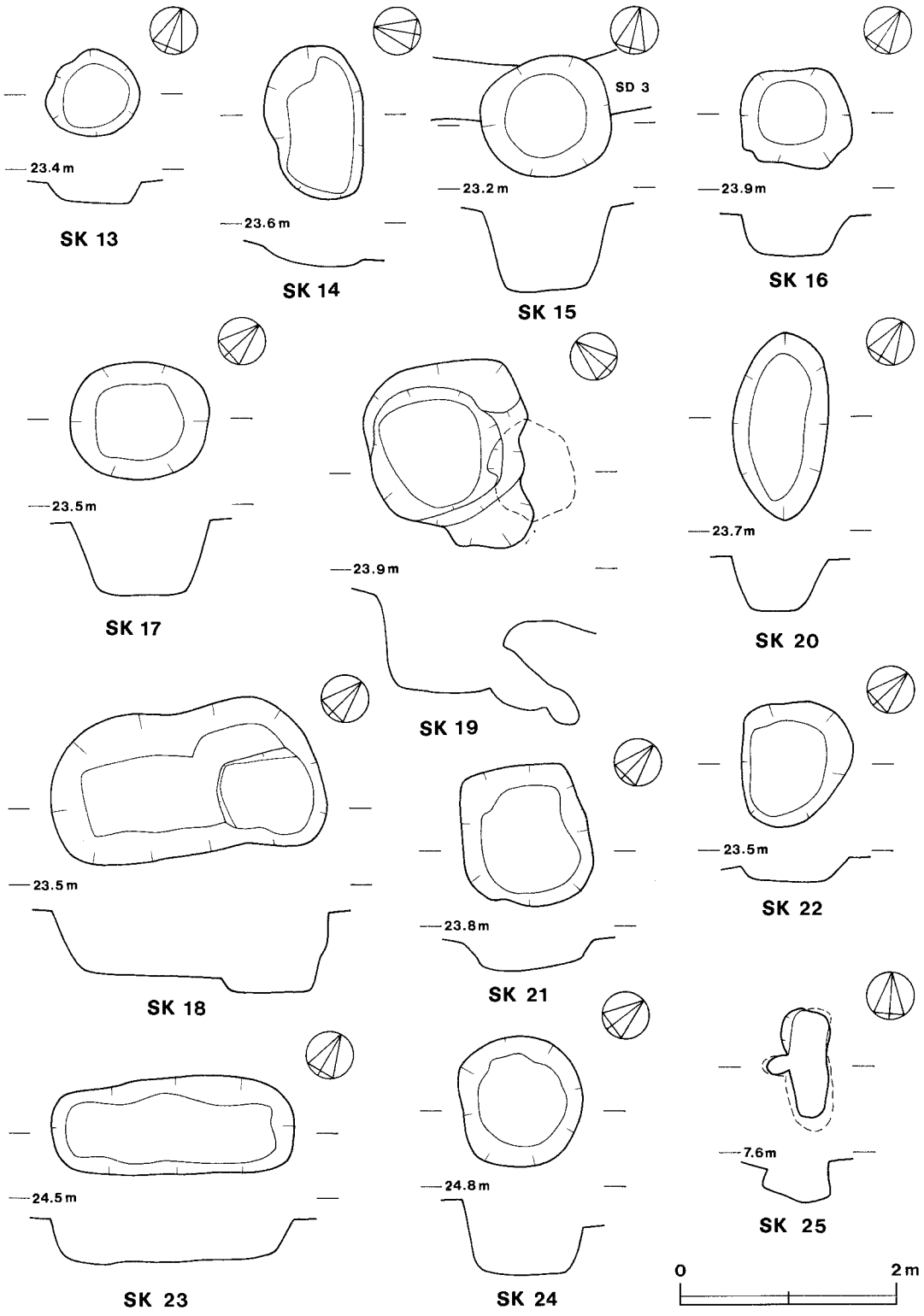
土坑として調査した遺構は25基であるが，整理の段階で検討した結果，覆土が自然堆積で遺物もほとんど無く時期や性格を決定するのに乏しいものが多く，一覧表の中で記載した。

表5　畑田城跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模		壁面	床面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	J2h$_2$	N-23.5°-E	楕円形	1.82 × 1.17	106	外傾	平坦	自然			77
2	J2i$_1$	N-25°-E	不整形	2.68 × 1.23	85	垂直	皿状	自然			77
3	J2h$_2$	N-28°-E	楕円形	1.39 × 1.06	31	外傾	平坦	自然			77
4	J2h$_2$	N-62°-W	隅丸長方形	2.36 × 0.72	36	垂直	平坦	自然		SK−6と重複	77
5	J2h$_1$	N-23°-E	（楕円形）	〔2.31×1.18〕	134	垂直	皿状	自然	土師器片1		77
6	J2h$_2$	N-29°-E	円形	0.73 × 0.70	66	垂直	平坦	自然		SK−4と重複	77
7	J2g$_2$	N-27°-E	円形	1.00 × 0.88	43	外傾	平坦	自然			77
8	J2f$_3$	N-18°-E	楕円形	0.89 × 0.71	21	緩斜	皿状	自然			77
9	J2f$_3$	N-11°-E	円形	1.29 × 1.13	55	垂直	平坦	自然			77
10	J2f$_3$	N-39°-E	隅丸長方形	1.28 × 1.03	36	外傾	平坦	自然			77
11	J2e$_4$	N-37°-E	不整形	3.06 × 1.40	68	段状	平坦	自然			77
12	J2d$_3$	N-38°-E	円形	1.10 × 1.02	48	垂直	平坦	自然			77
13	J2d$_4$	N-18°-E	円形	0.84 × 0.79	21	外傾	平坦	自然			78
14	J2c$_5$	N-75°-E	楕円形	1.42 × 0.93	26	緩斜	皿状	自然			78
15	J2d$_5$	N-74°-E	円形	1.21 × 1.10	78	外傾	平坦	自然		SD−3と重複	78
16	J2c$_5$	N-52°-E	円形	0.99 × 0.91	42	外傾	平坦	自然			78
17	J2b$_6$	N-42°-E	円形	1.28 × 1.09	68	外傾	平坦	自然			78
18	J2b$_7$	N-35°-E	楕円形	2.50 × 1.42	78	外傾	傾斜	自然	土師器片1，陶器片1		78
19	J2b$_7$	N-26°-E	不整形	1.86 × 1.49	128	垂直	傾斜	自然			78
20	J2a$_7$	N-32.5°-W	楕円形	1.75 × 0.91	51	外傾	平坦	自然			78
21	J2a$_7$	N-57°-W	円形	1.34 × 1.22	23	外傾	皿状	自然			78


23.1m
SK 1
23.1m
SK 2
23.0m
SK 3
SK 6
23.0m
SK 4
23.1m
SK 5
SK 4
22.9m
SK 6
22.8m
SK 7
23.0m
SK 8
23.0m
SK 9
23.0m
SK 10
23.1m
SK 11
23.3m
SK 12
0
2m

第77図　土坑実測図(１)


SD 3
23.4m
SK 13
23.6m
SK 14
23.2m
SK 15
23.9m
SK 16
23.5m
SK 17
23.9m
SK 19
23.7m
SK 20
23.5m
SK 18
23.8m
SK 21
23.5m
SK 22
24.5m
SK 23
24.8m
SK 24
7.6m
SK 25
0
2m

第78図　土坑実測図(２)

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	床面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
22	J2a$_7$	N-22°-W	円形	1.22 × 1.09	25	外傾	平坦	自然			78
23	I2j$_7$	N-60°-E	楕円形	2.26 × 0.92	46	外傾	平坦	自然			78
24	I2j$_6$	N-54°-W	円形	1.24 × 1.13	72	垂直	平坦	自然			78
25	L1b$_9$	N-8°-W	不整形	1.14 × 0.62	43	垂直	皿状	自然		第1号堀と重複	78

3 溝

溝は3条検出されている。

第1号溝（第79図）

位置 調査区の南部K1・2区，L1・2区を中心に確認された。

重複関係 本跡の大部分が第1号堀の上位に重複している。

方向 北端のK1i$_0$区から南端のL1c$_9$区まで弧を描くように湾曲している。北端から南東方向（N－41°－E）に約5.8m延び，さらに南東方向（N－5°－E）に約3.5m延び，そして北西方向（N－43°－W）に約8.3m延びて，南端に達している。

規模と形状 全長約17.6m，上幅0.5～0.6m，下幅0.3～0.5m，深さ0.2～0.4mである。底面は平坦である。壁は急な傾斜で立ち上がる。断面形状は皿状を呈している。

覆土 人為堆積。上層には炭化物少量，焼土ブロック（0.5cm大）少量を含み，褐色土がさくさくしている。下層には炭化物多量で締まりのある黒褐色土が，堆積している。

遺物 土師器片5点，須恵器片1点，古銭（寛永通寶）2点が覆土上層から出土している。また，陶器片10点・石器・石製品（砥石等）4点が覆土中・下層から出土し，炭化材が床面全体から少量出土している。

所見 本跡は，性格不明の溝であるが，遺物等から時期は近世以降と思われる。

第3号溝（第80図）

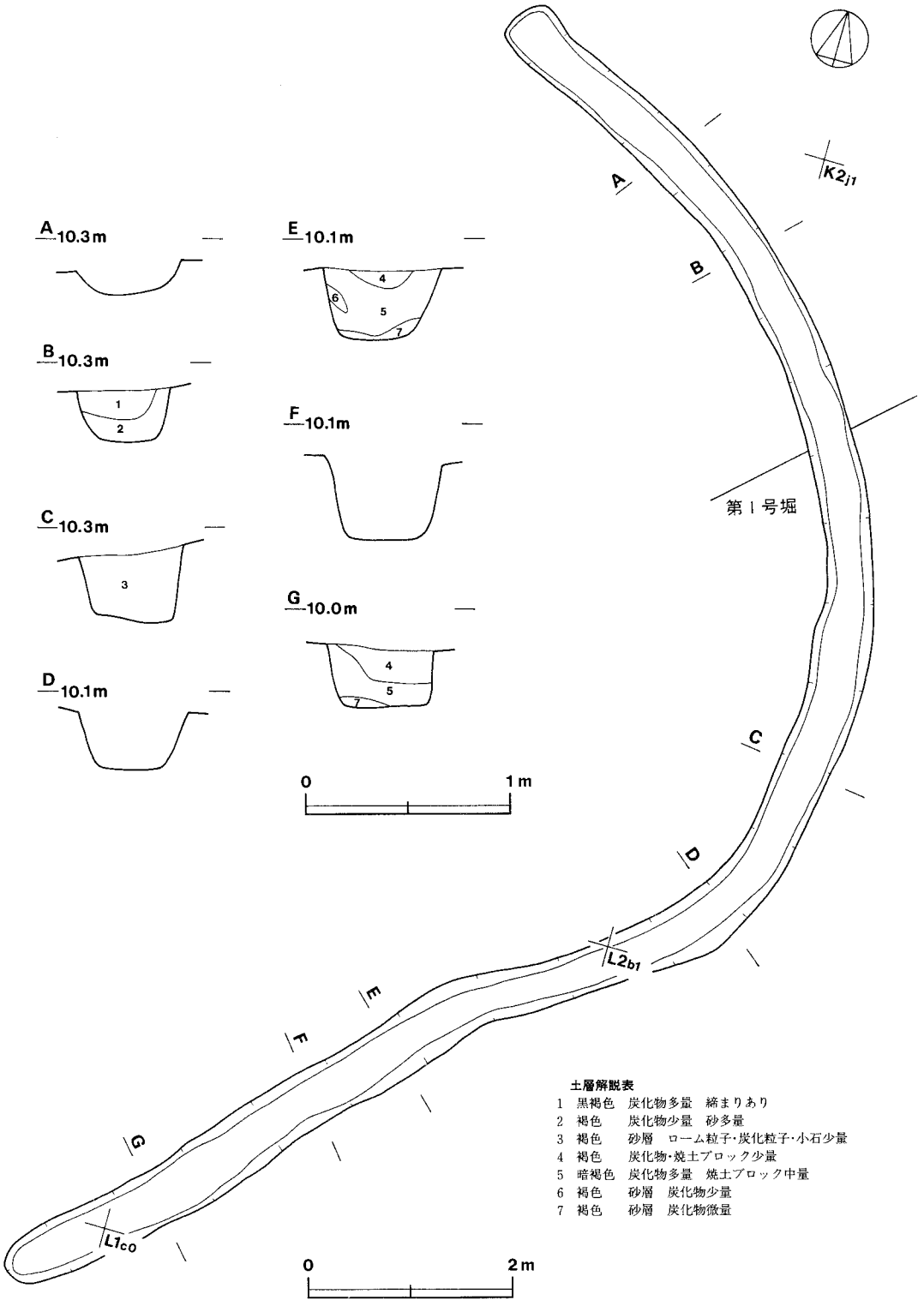
位置 調査区の北部，J2区を中心に確認された。

重複関係 J2d$_5$区で第15号土坑と重複し，第15号土坑の北壁を掘り込んでいる。

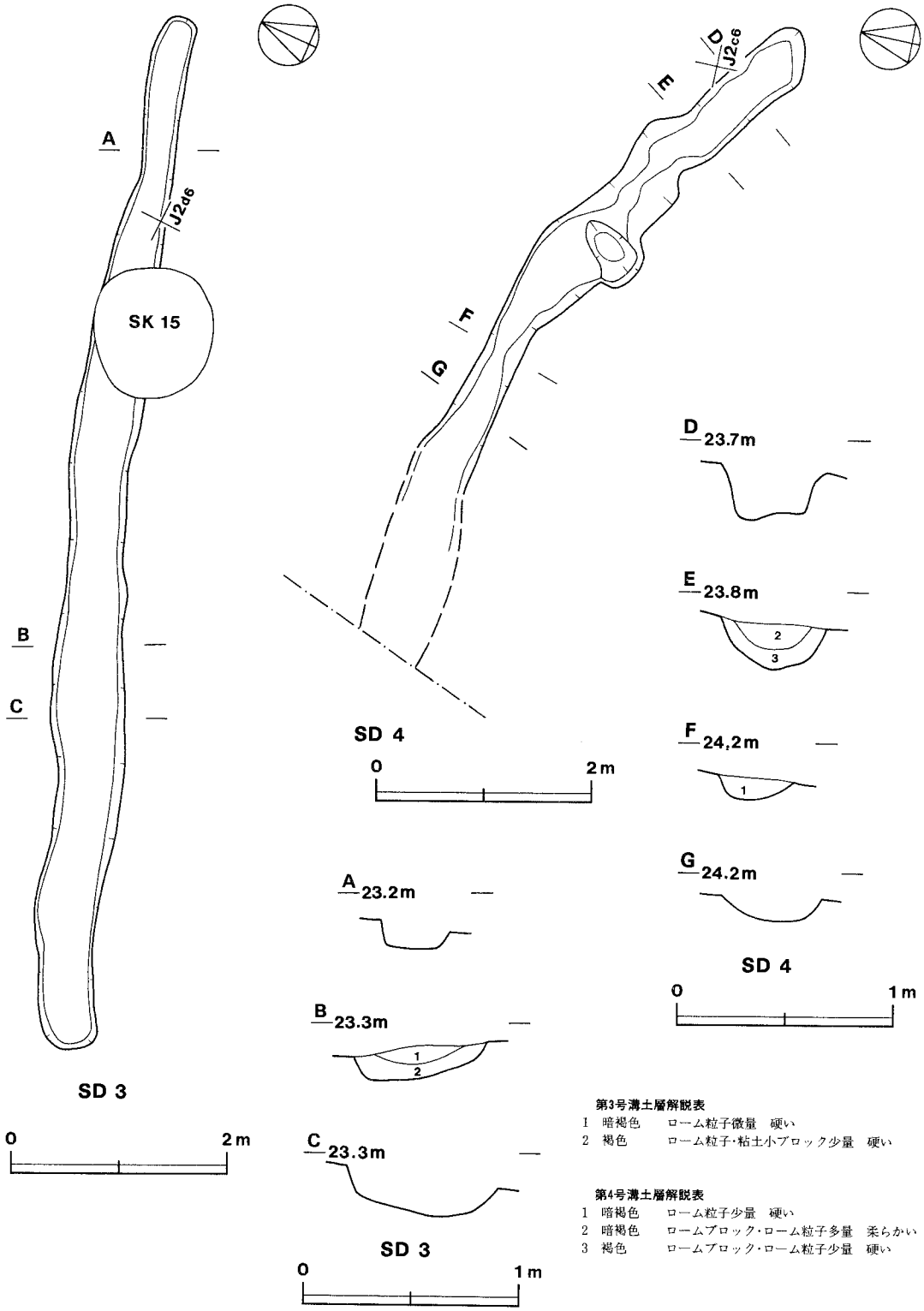
方向 J2c$_6$区から南西方向（N－20°－W）にほぼ直線的にJ2d$_4$区まで延びている。

規模と形状 全長約9.5m，上幅0.3～0.8m,下幅0.2～0.6m，深さ0.1～0.4mである。底面は平坦であり，壁は急な角度で立ち上がっている。断面形状は「∪」状を呈している。

覆土 上層にローム粒子微量を含み硬い暗褐色土，下層に粘土小ブロック少量・ローム粒子微量を



第79図　第1号溝実測図



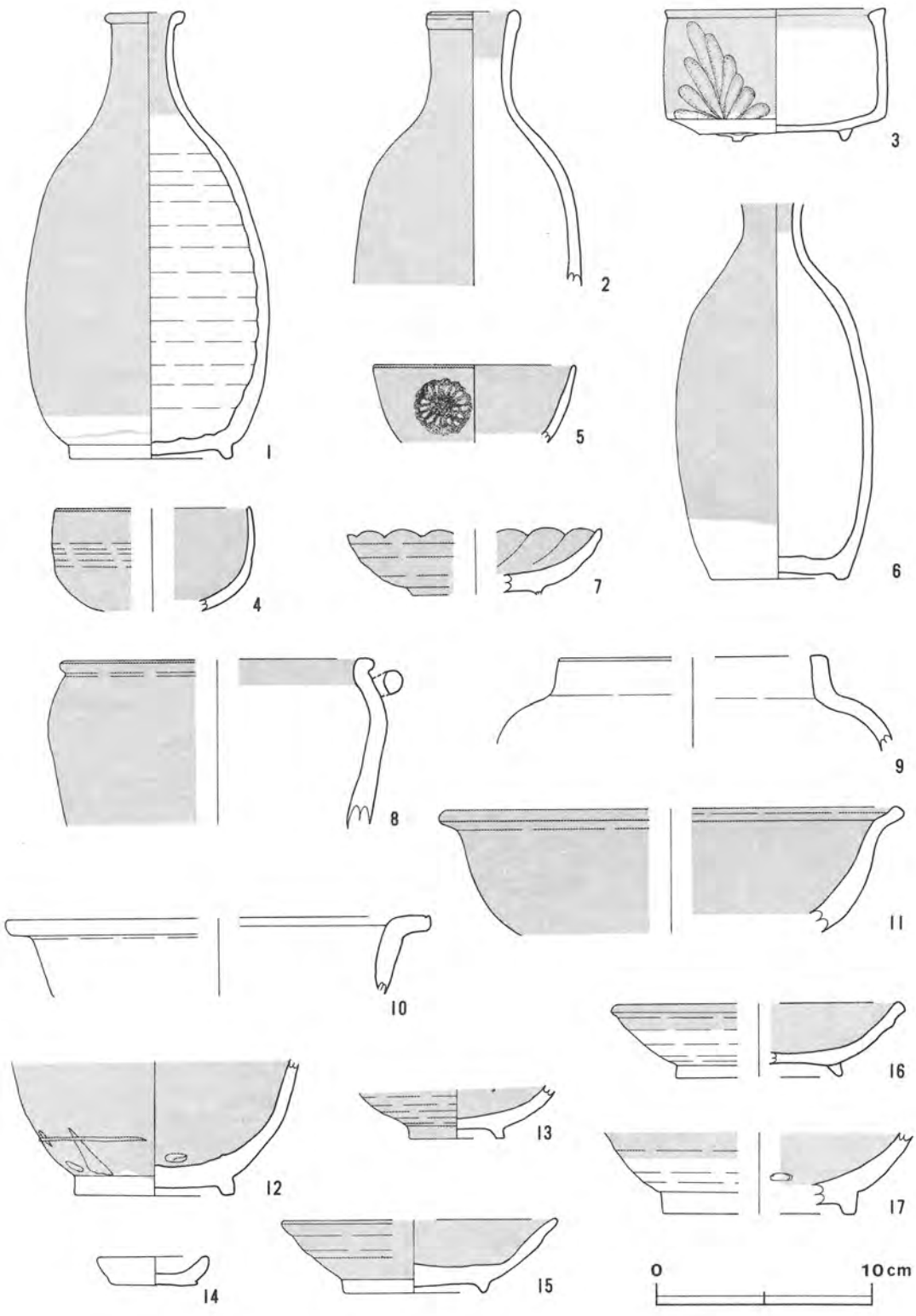
第3号溝土層解説表

1	暗褐色	ローム粒子微量　硬い
2	褐色	ローム粒子・粘土小ブロック少量　硬い

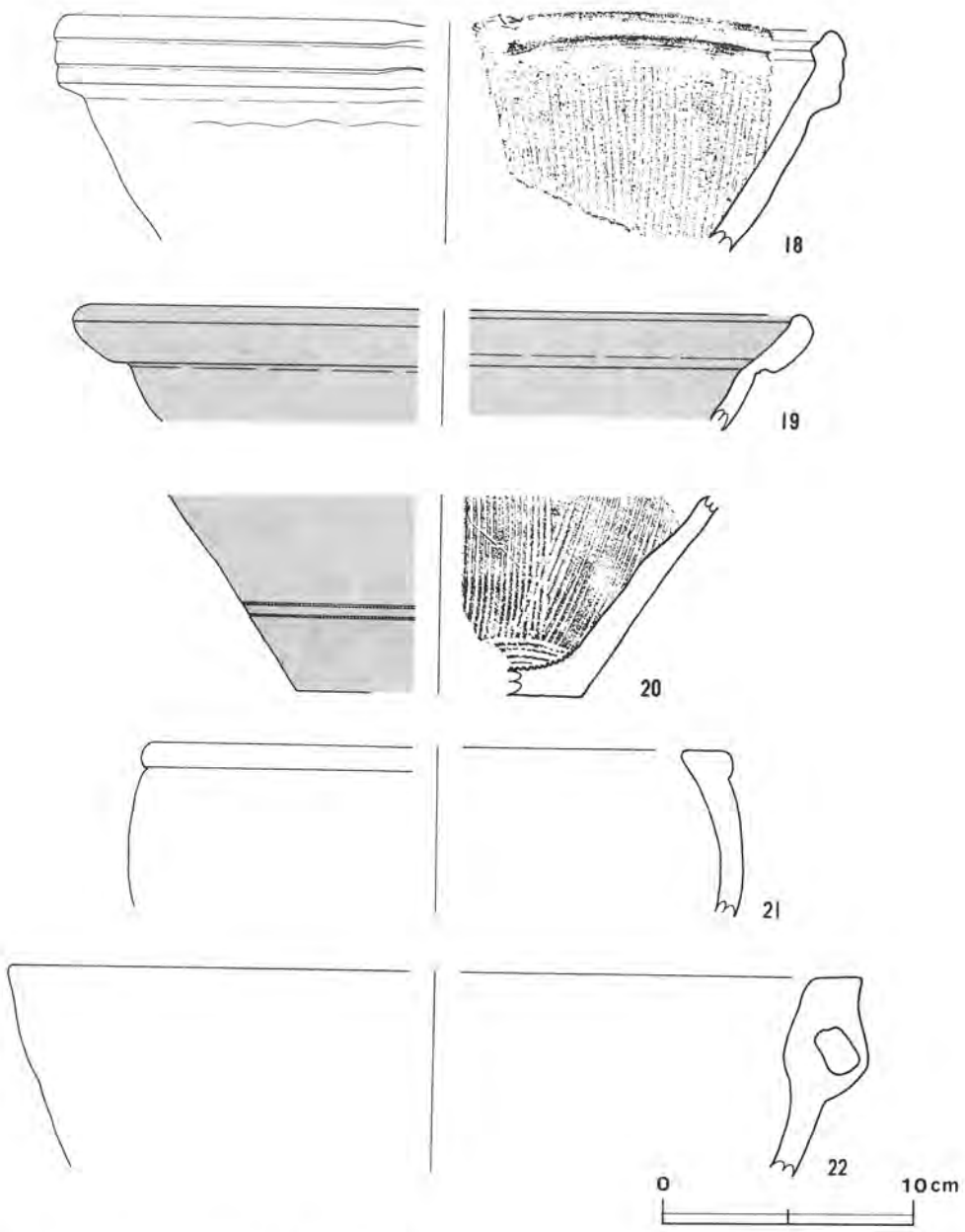
第4号溝土層解説表

1	暗褐色	ローム粒子少量　硬い
2	暗褐色	ロームブロック・ローム粒子多量　柔らかい
3	褐色	ロームブロック・ローム粒子少量　硬い

第80図　第3・4号溝実測図



第81図　畑田城跡出土遺物実測図(1)



第82図　畑田城跡出土遺物実測・拓影図(２)

含む褐色土が，自然堆積している。

遺物　無し。

所見　性格・時期共に不明。

第4号溝（第80図）

位置　調査区の北部J2区を中心に確認された。

重複関係　無し。

方向　J2c6区から北西方向（N－30°－W）に緩く曲がりながら延びて行き，調査区外に達している。

規模と形状　全長約5.2m，上幅0.4～0.9m，下幅0.1～0.7m，深さ0.1～0.2mである。底面は凹凸が激しく，壁面はロームで硬い。

覆土　上層はロームブロック多量・ローム粒子微量を含み硬い褐色土が，自然堆積している。

遺物　無し。

所見　性格・時期共に不明。

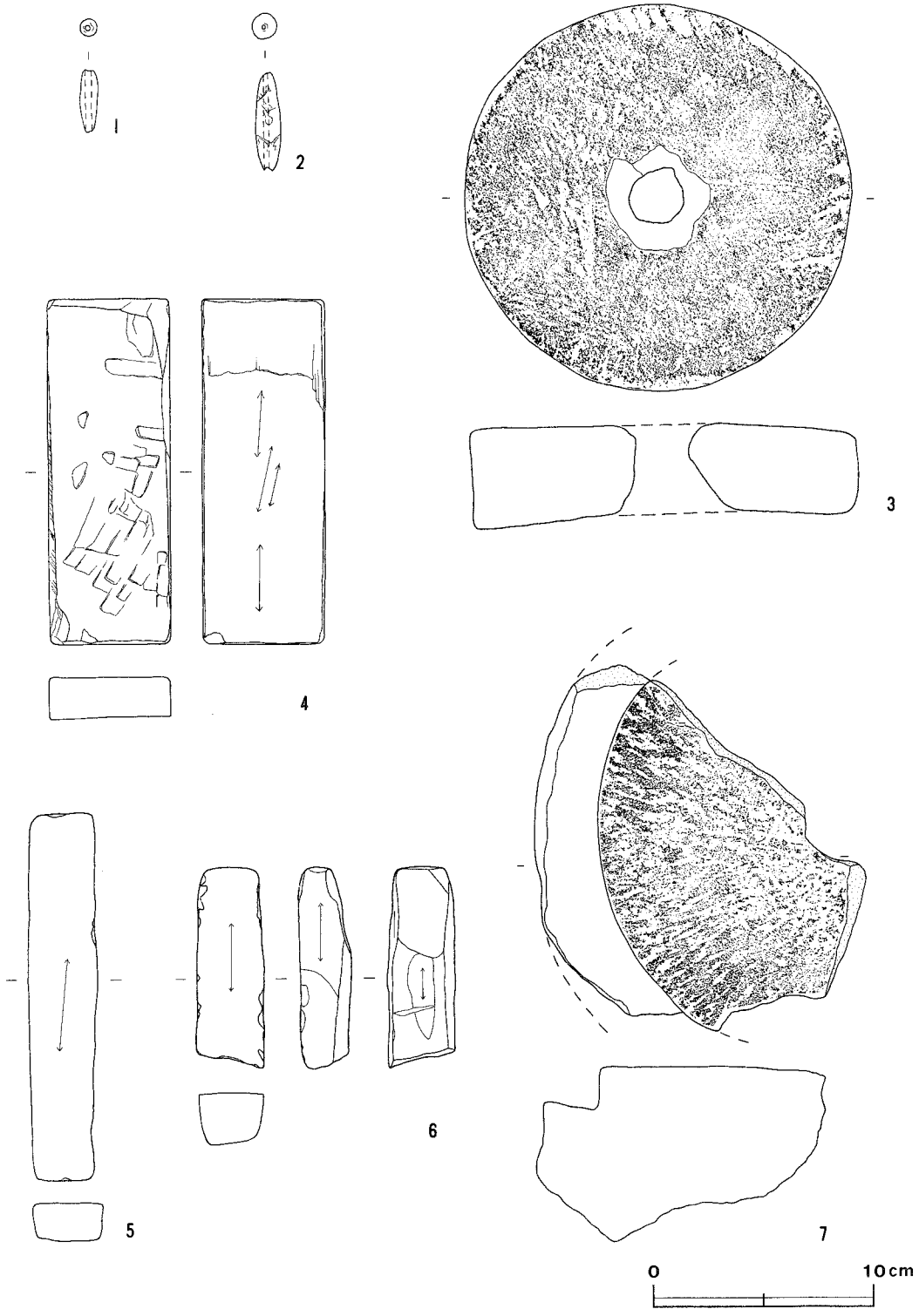
4　出土遺物

当遺跡の堀・溝等の中・下層覆土から出土した遺物で陶器・土師質土器・内耳形土器は観察表で記載した。陶器は，花瓶3点，香炉1点，碗4点，皿4点，擂鉢2点，鉢1点，甕1点，壺1点である。土師質土器は，皿1点，甕2点であり，内耳形土器は2点である。各遺物の器形の特徴及び整形技法等については観察表で記載し，烟田城との関わりについては第3節考察で述べることとする。また，土製品，石器・石製品，古銭については，それぞれの観察表及び一覧表で記載した。

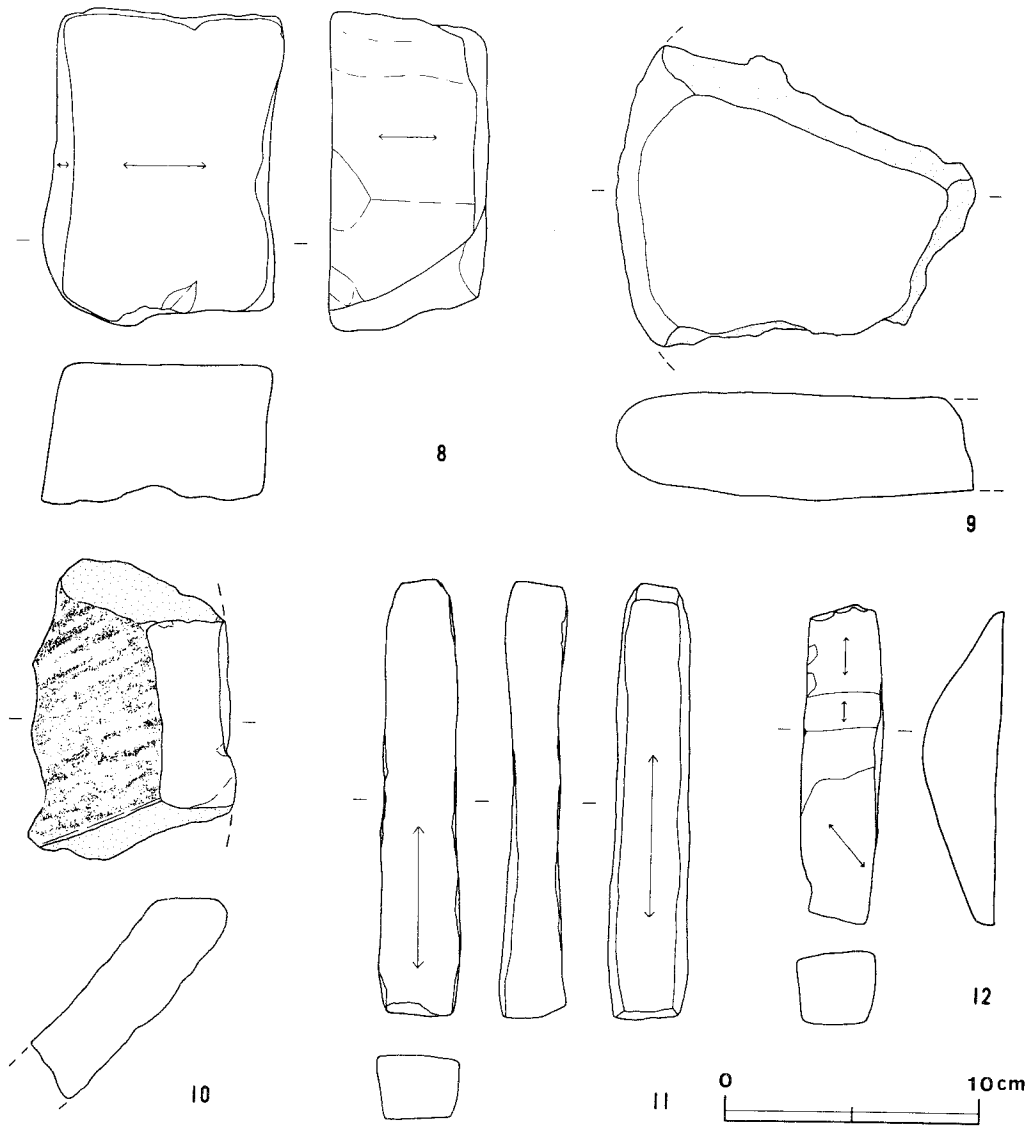
烟田城跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	花瓶 陶器	A 3.7 B 20.7 D 7.6 E 0.7	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口唇部は折り返す。胴部にロクロ痕がある。底部は露胎。	水挽き，横ナデ，高台内回転ヘラ削り。	砂粒 黄灰色 （オリーブ褐色・浅黄色） 普通	95%　P1 SD1 南部覆土下層
2	花瓶 陶器	A 4.4 B〔12.7〕	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，口唇部は折り返す。器外面全体に施釉。	水挽き，横ナデ。	砂粒 灰色 （オリーブ褐色・浅黄色） 普通	30%　P2 SD1 中央部覆土下層
3	香炉 陶器	A 10.3 B 6.2 C 10.2	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外傾し，稜をもつ。口縁部内・外面及び体部外面全体に施釉。	水挽き，横ナデ，底部回転糸切り後，足3カ所接合。	砂粒 灰白色 （灰オリーブ色） 普通	100%　P3 SD1 南部覆土下層
4	碗 陶器	A（9.2） B〔4.8〕	底部欠損。体部は内彎しながら直立する。		砂粒　白色 （灰白色・極暗赤褐色） 普通	45%　P4 SD1 覆土上層
5	碗 陶器	A 9.5 B〔3.6〕	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。外面に花紋が施してある。		砂粒　白色 （明緑灰色） 普通	30%　P5 SD1 覆土上層
6	花瓶 陶器	B〔17.4〕 C 6.4	口縁部欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部内・外面，体部外面上半部・中央部及び底面に施釉。	水挽き，横ナデ，高台内回転ヘラ削り。	砂粒 黄灰色 （オリーブ黄色・灰白色） 普通	95%　P6 SD2 覆土上層

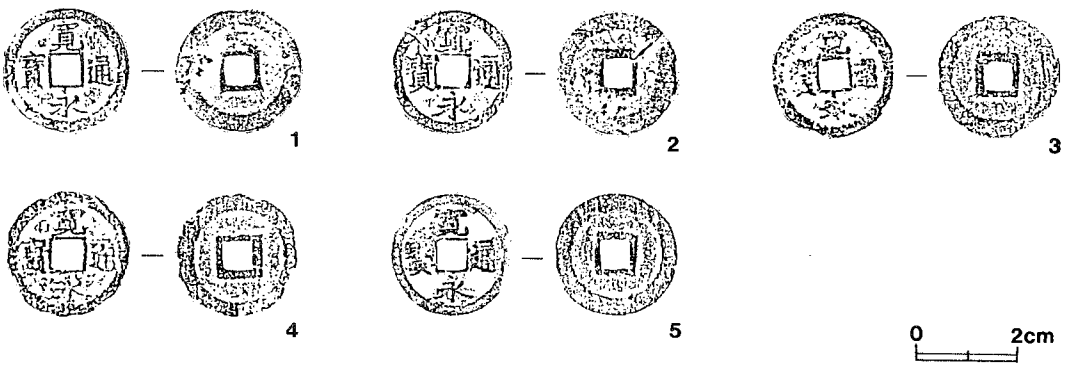
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 7	皿 陶器	A(11.8) B〔3.0〕 D(6.0) E〔0.4〕	体部は内彎気味に立ち上がる。内・外面全体に施釉。口縁部は波状を呈している。	水挽き。	砂粒 浅黄色 (灰白色) 普通	25%　P7 SD2 覆土上層
8	壺 陶器	A(14.6) B〔7.8〕	胴部は外傾し，胴上半部で内彎して立ち上がり，口縁部は折り返す。胴上半部に把手が貼付されている。胴上半部に施釉。	水挽き，横ナデ。	砂粒 淡黄色 (浅黄色) 普通	5%　P17 Wトレンチ
9	甕 土師質 土器	A(12.6) B〔4.4〕	胴部は内彎し，口縁部は直立して立ち上がる。口唇部は平坦である。	口縁部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	5%　P8 K1区表土
10	甕 土師質 土器	A(19.7) B〔3.6〕	口縁部片。口縁部は直立気味に大きく外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	5%　P11 L1区表土
11	甕 陶器	A(21.8) B〔5.8〕	体部は内彎し，口縁部にくびれをもつ。器内・外面に施釉。	水挽き，横ナデ。	砂粒 灰黄褐色 (灰オリーブ色) 普通	5%　P13 L1区表土
12	碗 陶器	B〔6.3〕 D　7.5 E　0.9	体部は内彎しながら立ち上がる。高台外面露胎。内面3カ所に重ね焼きの跡が残る。底部は露胎。	水挽き，横ナデ，高台内回転ヘラ削り。	砂粒 淡黄色 (にぶい黄橙色) 普通	60%　P19 Wトレンチ
13	碗 陶器	B〔2.4〕 D　4.4 E　0.5	底部片。体部は内彎して立ち上がる。器内・全体に施釉。	水挽き，横ナデ，高台内回転ヘラ削り。	砂粒 浅黄色 (内－灰白色，外－暗赤褐色) 普通	20%　P22 Wトレンチ
14	皿 土師質 土器	A　5.2 B　1.4 C　4.0	平底。	手ひねり，底部糸切条痕。	砂粒・長石・スコリア 雲母 橙色 普通	90%　P18 Wトレンチ
15	皿 陶器	A(12.9) B　3.4 D　6.8 E　0.5	底部はやや肥高する。体部は外傾して開き，ロクロ痕がある。器内面及び口縁部外面に施釉。器内・外面底部に煤付着。	水挽き，横ナデ，高台内回転ヘラ削り。	砂粒 褐灰色 (褐灰色) 普通	50%　P14 L2区表土
16	皿 陶器	A(13.7) B　3.4 D(7.8) E　0.6	体部は内彎しながら立ち上がる。器内面及び口縁部外面に施釉。	水挽き，横ナデ，底部回転糸切り，高台接合。	砂粒 灰白色 (灰白色) 普通	20%　P20 Wトレンチ
17	皿 陶器	B〔3.8〕 D(9.0) E　1.0	底部片。体部は内彎して立ち上がる。体部内面及び外面上半部に施釉。	水挽き，横ナデ，高台内回転ヘラ削り。	砂粒 淡黄色 (浅黄色) 普通	10%　P21 Wトレンチ
第82図 18	擂鉢 陶器	A(31.6) B〔8.9〕	底部欠損。体部は外傾し，内彎気味に立ち上がる。内面に櫛目が縦位に施されている。	ナデ，外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	10%　P9 K1区表土



第83図　畑田城跡出土土製品・石器・石製品実測・拓影図(1)



第84図　畑田城跡出土石器・石製品実測・拓影図(２)



第85図　畑田城跡出土古銭拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 19	鉢 陶器	A(29.5) B〔4.1〕	折り口平鉢片で,残存部分器内・外面に施釉。外面にロクロ痕がある。	水挽き。	砂粒 褐色 (にぶい黄橙色) 普通	5% P10 K2区崖部表土
20	擂鉢 陶器	B〔8.1〕 C(11.4)	底部破片。平底。体部は外傾し直線的に開く。内面には,15本1単位の櫛目が縦位に,底部には同心円状に施され,底部中央は格子目状になっている。	ロクロ整形,底部回転糸切り。	砂粒 暗褐色 普通	20% P15 Uトレンチ
21	内耳形土器 土師質土器	A(23.7) B〔6.5〕	体部は内彎し,口縁部にくびれをもつ。	横ナデ。	砂粒・長石・雲母 暗褐色 普通	5% P12 L1区表土
22	内耳形土器 土師質土器	A(34.2) B〔8.0〕	体部は内彎気味に開いて立ち上がる。頸部は内側の凹帯により外面が膨らむ。口唇部は平坦である。外面に鍋墨付着。	内・外面横ナデ,耳接合。	砂粒・長石・スコリア 暗赤褐色 普通	5% P16 Wトレンチ

注・色調の欄の( )は,施釉の色を表わしている。

畑田城跡出土土製品観察表

図版番号	名称	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第83図 1	管状土錘	2.8	0.8		1.4	Sトレンチ	孔径0.3	DP 1
2	管状土錘	4.4	1.1		4.0	$J2a_5$	孔径0.2	DP 2

畑田城跡出土石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考	台帳番号
第83図 3	茶挽臼	安山岩	17.5	17.5	4.1	2,071.8	SD−1		Q 2
4	砥石	粘板岩	15.6	5.6	1.9	384.7	SD−1	2面に使用痕あり。	Q 3
5	砥石	凝灰岩	16.5	3.2	1.7	149.2	SD−1	1面に使用痕あり。	Q 4
6	砥石	凝灰岩	9.1	3.2	2.5	105.4	SD−1	3面に使用痕あり。	Q 5
7	石臼	安山岩	〔16.6〕	〔15.1〕	〔8.0〕	〔2,138.1〕	K2区		Q 6
第84図 8	砥石	砂岩	12.5	9.1	5.6	1158.5	K2区	3面に使用痕あり。	Q 7
9	石皿	安山岩	〔11.8〕	〔14.1〕	4.2	〔806.2〕	Tトレンチ		Q 8
10	石擂鉢	砂岩	〔11.8〕	〔8.2〕	〔7.9〕	〔427.7〕	Wトレンチ		Q 9
11	砥石	凝灰岩	17.1	3.3	2.6	201.7	Wトレンチ	3面に使用痕あり。	Q 10
12	砥石	凝灰岩	12.6	3.2	2.9	152.0	Wトレンチ	1面に使用痕あり。	Q 11

畑田城跡出土古銭一覧表

図版番号	銭　名	初　鋳　年	鋳造地名	出土位置	備　　考	台帳番号
第85図1	寛永通寶	寛文8年(1668)	日　本	SD-1	新寛永(裏面に「文」の文字)	M1
2	寛永通寶	寛永3年(1636)	日　本	SD-1	古寛永	M2
3	寛永通寶	寛永3年(1636)	日　本	Wトレンチ	古寛永	M3
4	寛永通寶	寛永3年(1636)	日　本	Wトレンチ	古寛永	M4
5	寛永通寶	寛永3年(1636)	日　本	Wトレンチ	古寛永	M5

第3節　考察

当調査区から検出された第1号堀は，調査の結果，烟田城の主郭（Ⅰ郭）から北西部に位置する外堀の一部であることが判明した。本節においては，烟田城跡の地理的環境，烟田城跡について，烟田城跡の歴史的環境の3項に分けて記述することとする。

1　烟田城跡の地理的環境

烟田城跡は，城の北西側を南西に流れて鉾田川に流れ込んでいる長茂川と，城の南東側を南西に流れて北浦湖頭に注ぐ田中川に挟まれた舌状台地の南西端部に築城されている。烟田城跡は，標高20～25mほどで，南西側にある水田面との比高は20mほどである。

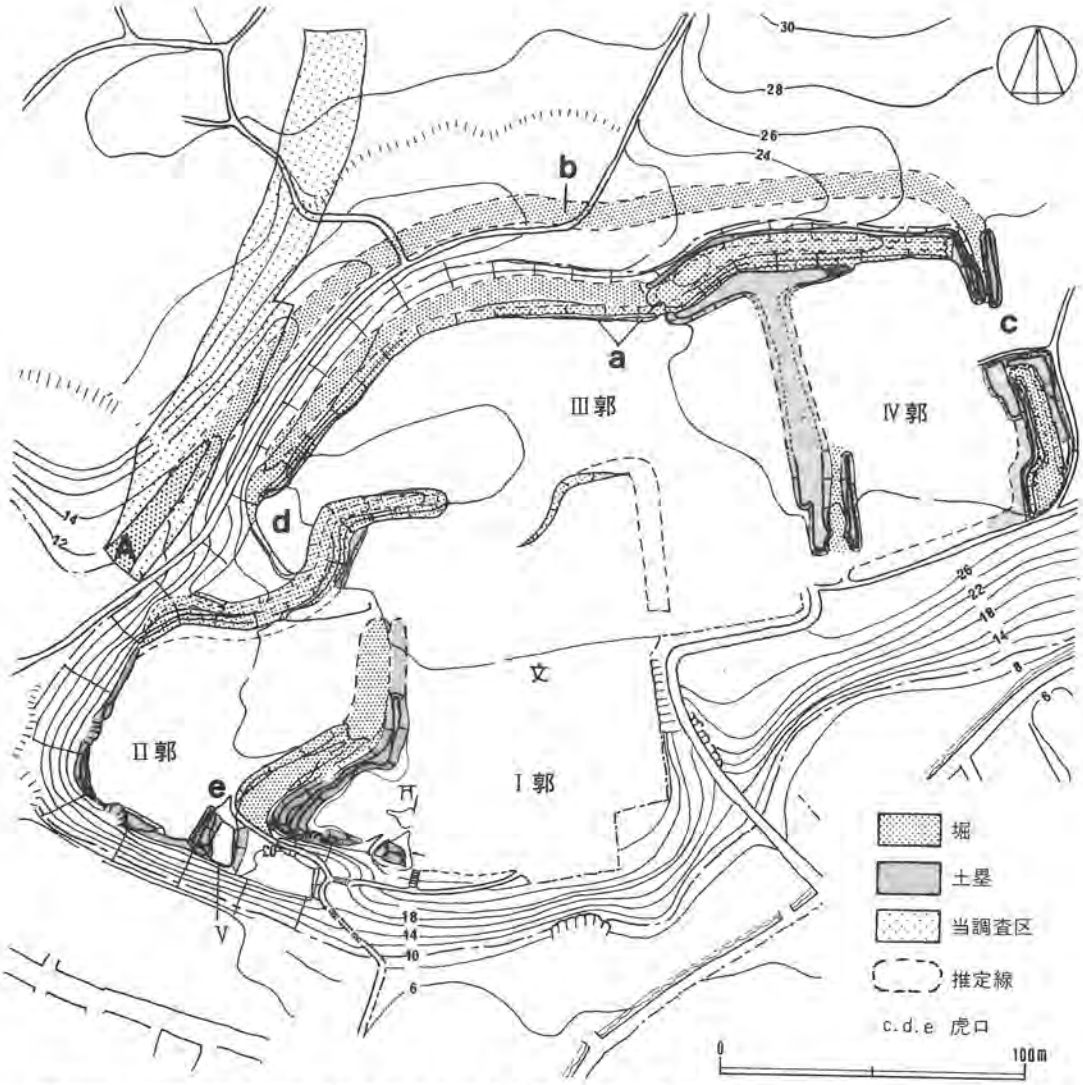
城跡の周囲の地形は，第86図Ⅰ郭の主郭から見て南側から西側にかけて急崖となっており，外敵からの防禦機能を十分に備えている主郭からは，北浦の湖岸一帯を見下ろすことができる。北西側から北側にかけては，北浦からの支谷が入り，支谷には後述する外堀が構築されて北西側や北側からの敵方の進入を防ぐ役割を果していたものと思われる。特に北側には台地が続いているため，敵方からの攻撃に対して最も弱点があるので，二重に堀を巡らして防禦をかためている。東側は，北側と同様に台地が続いているが，堀や土塁を築いて敵方が容易に侵入出来ないようにしている。

一般的に中世の城は，自然の地形を巧みに利用して造られた山城や平山城が多い。今回発掘調査した烟田城跡は，南方を急崖に面した台地上に構築し，他方，谷の一部を巧みに利用して外堀（調査した第1号堀）としており，万全の備えをしていたものと思われる。

2　烟田城跡について

烟田城跡に関係する文献資料は，「烟田家文書」・「新編常陸国誌」にみられる。特に，「新編常陸国誌」には，「鹿島郡烟田村永川及外城ニ瓦ル岡丘ニシテ，高五丈許，東西三町許，南北二町餘アリ，永川ノ地南端ニアリ，方五十間許，土塁空濠ヲ囘ラス，之ヲ本城トス…」と，烟田城跡の存在が記載されている。文書による烟田城跡は，現在の永川神社が所在している第86図のⅠ郭とⅡ郭・Ⅲ郭の外城に位置し，東西300m×南北200m，高さ15mの台地上に所在していると記されている。永川は烟田城の第86図のⅠ郭にあたり，これが新編常陸国誌の本城（主郭）にあたるものと思われる。

現在踏査による城跡の地形観察や城の概念図を基に現在の烟田城跡の構造について検討してみると，主郭は第86図のⅠ郭にあたるものと考えられ，東西約83m，南北約85mの方形状を呈し，新編常陸国誌に記されている一辺が90mの方形の本城（主郭）と近似している。主郭の西側には土塁及び堀の一部が残っており，主郭の西側にある堀は更に北に延びていくものと思われ，主郭は土塁



第86図　烟田城跡概念図（鉾田町教育委員会所蔵の図面を基に作成）

と堀によって方形状に区画されていたものと思われる。第86図のⅡ郭は主郭の西側に位置し，東西約73m，南北約65mで，外城の一部であると思われる。第86図のⅤには土塁の一部が残っており，物見櫓的な役割をもった場所で，一段と高く南側は急崖になっていて，北浦方面の眺望が開け，外敵をいち早く察知できる場所である。Ⅱ郭・Ⅲ郭の北側は台地と陸続きになっているため，外敵の侵入に対しては最も弱い部分である。そのため，Ⅲ・Ⅳの郭の北側には二重に堀を巡らしたりして防禦を固めている（第86図ａ・ｂ）。城外の北・東側の台地上には，烟田氏の家臣の武家屋敷や畑地が所在していたのではないかと思われる。Ⅳの郭の東端は大手門にあたり，主郭への出入り口の場所であったと思われる。Ⅲの郭の南西側には虎口が存在していたのではないかと思われる。Ａは，今回調査した外堀の一部であるが，地形的には南西側の平地から緩やかに登って来る谷を利用して，大規模な堀をⅢ・Ⅳの郭の西・北側に沿って構築しているもの思われる。さらに，この外堀

はⅣの郭の東側の大手門付近まで続いていたものと思われる。

次に，城跡の構造について，三島[(1)]氏の論文を参考にして鎌倉時代から戦国時代に存在した鹿島郡・行方郡の城(館)のいくつかを縄張りの構図等により分けると，次のように３つに分類できる。

(1)単郭の城—館山城（鹿島町），島名木館（玉造町）

(2)大きな単郭の館から発達した城—小高城（麻生町），手賀城（玉造町），中居城（大洋村）

(3)主敦を台地の先端に置き，直列に曲輪配列した城—島崎城(牛堀町)，神明城(北浦村)，林城（大野村）

烟田城跡は，上記の(2)の分類にあたり，単郭館を中心として居住施設としての機能性を優先させながら発達し，各郭は堀と土塁によって強力な防備を兼ね備えた丘城になっている。城(館)自体は領主の居住的・在地支配的な一面と軍事的な一面を兼ね備えて構築されている。

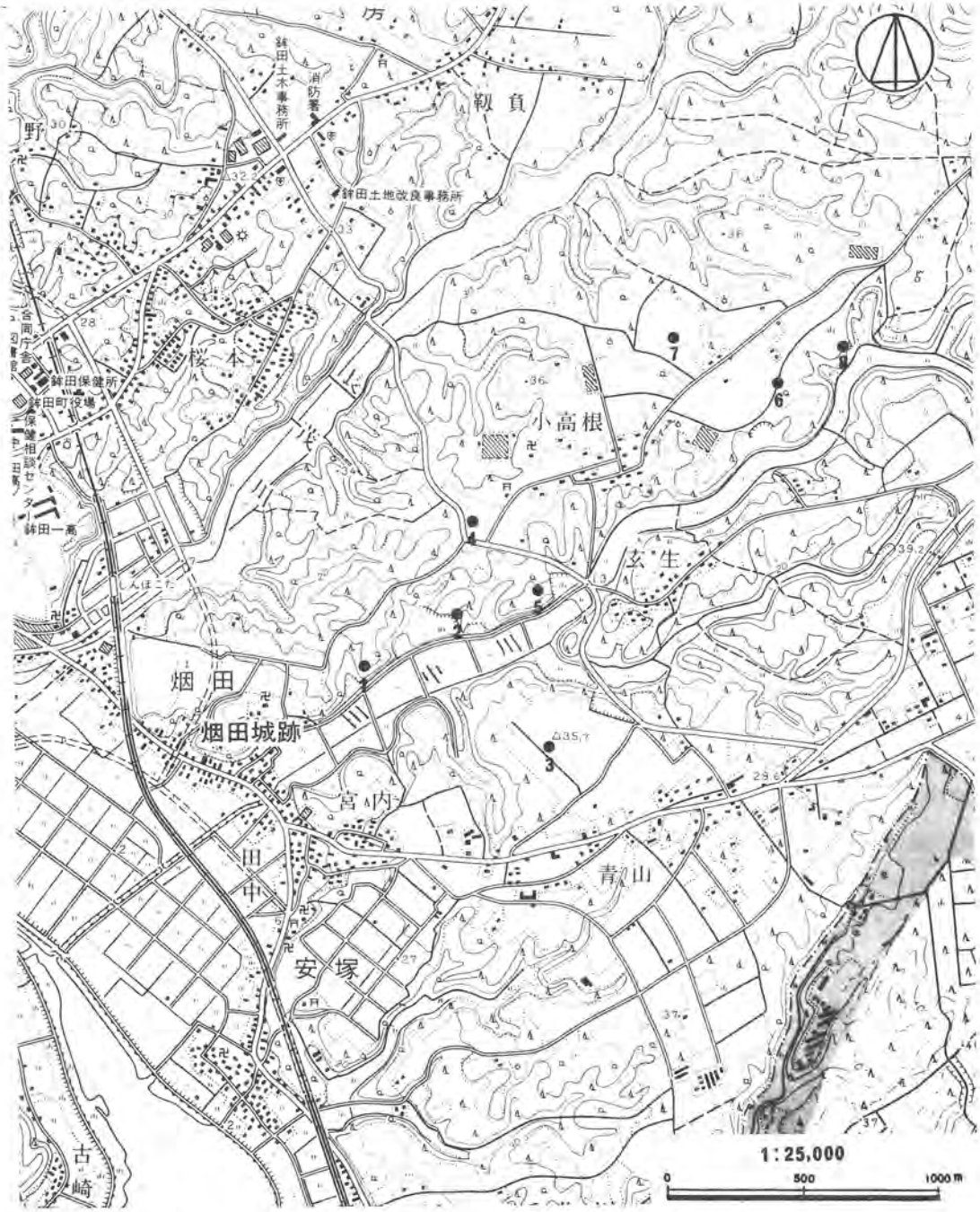
その他，この烟田には８つの館跡があり，これらの館跡は全て烟田氏の世臣である塙一族が創建したもので，以下に表記する[(2)]。

	館跡名	規　　模	土　塁　・　そ　の　他
1	富士山館	東西36m×南北90m	四周にめぐらされ，高さ約2.5m
2	塙　　館	東西36m×南北90m	南側の本丸に約２mの高さでめぐらされている
3	母ヶ谷館	56mの方形	高さ約２m
4	馬 場 館	55mの方形	四周に空堀がめぐらされている
5	大樋上館	東西43m×南北36m	高さ２m
6	金 敷 館	27mの方形	四周にめぐらされている
7	勧請地館	南北72m，東西未確認	
8	龍ヶ谷館	東西29m×南北27m	土塁に囲まれている

3　烟田城跡の歴史的環境

烟田城跡の所在する鉾田町は，霊亀元年（715年）の郷里制施行後，鹿島郡は18郷・行方郡は14郷３里となり，現在の鉾田町はその鹿島郡の徳宿郷・三宅郷・伊島郷・新居郷，行方郡の当麻郷・荒原郷の６郷に属していた[(3)]。10世紀になると，鹿島郡・行方郡は桓武天皇の曾孫高望王を祖とする大掾氏から分家した鹿島氏・行方氏などの大掾一族の勢力圏となった[(4)]。

次に鹿島氏の支流である烟田氏が烟田の地に土着した12世紀末期から，滅ぼされるに至った16世紀末期迄の経過について記すこととする。烟田氏がこの烟田に土着したのは，新編常陸国誌に，「烟田氏天福２年(1232年)文書ニ，鹿島徳宿郷内烟田村ノ名アリテ，累世烟田氏ノ所領ニテ，烟



第87図　館跡位置図

田氏ハ大掾氏ノ裔孫ニテ，世々コヽニ居ル」と記されており，それ以前に烟田朝秀が父徳宿秀幹から鹿島郡内の烟田・大和田・富田・生井沢の4か村を譲られて烟田氏を名乗ったのが始まりとされている。その後の烟田氏の代々の当主の活動の状況については「烟田家文書」に残されており，その内容については新編常陸国誌にも詳しく記されている。ここでは，豪族烟田氏が最も華々しく

勢力を誇ったと思われる烟田時幹について考えてみることとする。時幹は，南北朝時代の武将で，烟田幹宗の子として生まれ，幼名を又太郎と言い遠江守で，建武２年(1335年)の新編常陸国誌における烟田家文書に「去八月建武二十六日馳二参伊豆国府一属當御平畢，同十七日迄河合戦，至二随分忠節一事」とあり，父幹宗と共に伊豆の国府に赴き，同国での合戦に参加したのをはじめ，常陸神宮寺城に北畠親房を攻めるなど，14世紀半ばに北朝方ないし足利方に立って活躍している。新編常陸国誌における烟田家文書には「御判　今度馳□二京都到　合戦，　忠節之由，　相模守清朝臣所二注申一也，　尤以神妙，彌可レ抽二戦功之状一如レ件　文和四年七月五日」や「着到　常陸国　鹿島烟田遠江守時幹申軍忠事　右凶徒為二御對治一，野州御發向之間，層當御平，最前馳参，鎌倉御入，令二供奉一，至二于今一所レ致二當参奉公一也，仍着到如レ件　貞治二年十月　日　承了　在判」などをはじめとして，烟田時幹の戦場への参着や軍功を示す，着到状や軍忠状があり当時の様子を窺い知ることができる。また，烟田城及び徳宿城を攻め落とすことが仲々難しかったことが新編常陸国誌における「江戸軍記」に記されており，「江戸通雅文明十八年正月十八日，兵ヲ鹿島郡ニ出シ，徳宿・烟田ニ城ヲ攻ム，城堅クシテ抜ケズ，三月後徳宿城ヲ攻ム…(中略)十二月三隊進デ城ニ逼ル，城兵出戦フ，城主徳宿三郎驍悍ニシテ善戦フ…(中略)…遂ニ之ヲ敗り，転ジテ烟田ヲ攻ム，烟田入道惶遽シテ迎降ル…」とあり，徳宿城が滅んだ後は，江戸氏の旗下のもと鹿島郡北部の有力な豪族となり，勢力をふるっていたと考えられる。そして，戦国時代に至って烟田氏が滅んだ一大要因として，新編常陸国誌における「南窓院傳記」に「天正十九年（1591年）佐竹義宣其兄弟ヲ誘致ス，通幹途ニ義宣ノ謀ヲ聞キ，馳テ森式部ガ家ニ入リ，相刺テ死ス」と記されている。南方三十三館の領主達は，佐竹氏が新しい知行制を施行するため太田城へ参集するよう命じられ，太田へ赴いたが佐竹氏の謀略により，通幹など15人が殺害されてしまった。烟田城は，佐竹の将人見越前守に攻められ落城し，357年間19代にわたる領主としての烟田氏はここに滅ぶこととなった。

以上，文献より烟田氏の勢力が鎌倉時代から戦国時代にかけて，現在の鉾田町烟田を中心として誇っていたことが考えられ，その勢力にふさわしい烟田城であったものと思われる。鹿島・行方郡からは，戦国時代の後半常陸国内では佐竹氏，江戸氏等の一円支配化が進められる中で，それに匹敵するような統一権力はとうとう生まれず，南方三十三館と言われるような多分に割拠的様相を呈しながら，佐竹氏進攻（天正19年，1591年）まで続いていたものと考えられる。

注・参考文献

(1)　三島正之「中世城郭研究　創刊号」中世城郭研究会　1987年

(2)・(4)　今瀬文也「日本城郭大系４　茨城・栃木・群馬」新人物往来社　1979年

(3)・(5)　中山信名「新編常陸国誌」崙書房　1979年

結　　語

平成元年４月から翌２年３月にかけて実施された鉾田町烟田に所在する烟田川波遺跡，烟田城跡の発掘調査は，都市計画道路３・４・２鉾田環状線道路改良工事に伴うもので，平成２年10月から平成３年３月までの整理業務をもって完了する運びとなった。

調査の結果，烟田川波遺跡からは古墳時代後期の竪穴住居跡14軒，中世の堀１条，時期不明の竪穴住居跡１軒，土坑40基，溝５条が検出された。住居跡は竈を有するものが11軒である。炉を有するものが３軒，炉か竈か不明のものが１軒である。古墳時代後期の住居跡は一般的に竈を有するものとされているが，竈導入の初期的段階では竈を有する住居跡と炉を有する住居跡とが同一集落内において共存する当遺跡のような例が時折見られる。出土土器は土師器を主とするが，少量の須恵器を伴っている。第15号住居跡出土の環が付されている高坏は，類例の少ない須恵器としてきわめて貴重なもので，今後の古式須恵器の研究に役立つものと思われる。その他，該期の遺物としては，土玉，管状土錘，勾玉等の土製品や滑石製の双孔円板等の模造品が出土している。

烟田城跡からは，中世の烟田城の外堀の一部と考えられる堀１条が検出されている。烟田城の沿革については前章にて記載したので省略するが，烟田城は鎌倉から戦国時代にかけて当地方を支配した烟田氏の本拠であり，その勢力にふさわしく大規模で堅固な戦国期の城の様相を今に伝えている。今回の調査は，道路幅という限定された範囲内の調査であったが，烟田川波遺跡における古墳時代後期前葉の集落跡の検出や類例の少ない須恵器の高坏が出土したこと，烟田城の大規模な外堀の検出等のいくつかの新たな調査成果をあげることができた。本報告書が，今後，当地域の歴史を解明するための研究資料として活用されれば幸いである。

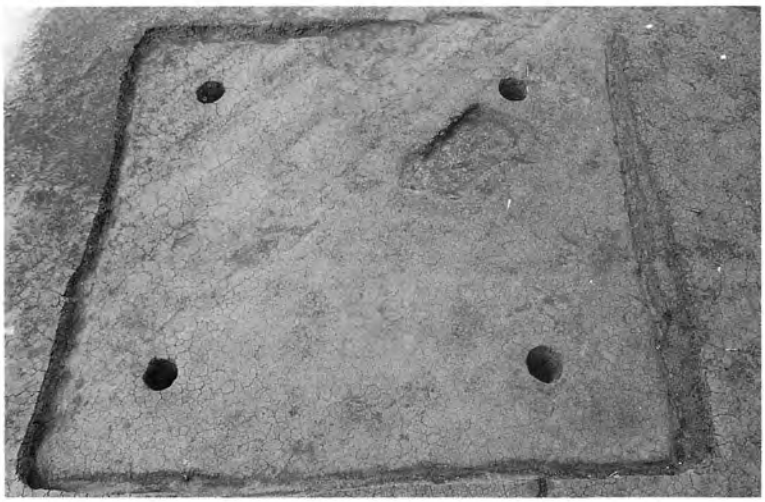
なお，本報告書をまとめるにあたり，鉾田町教育委員会をはじめ，関係各位から多くの御指導，御協力を頂いたことに対し，心から感謝の意を表したい。

写　真　図　版

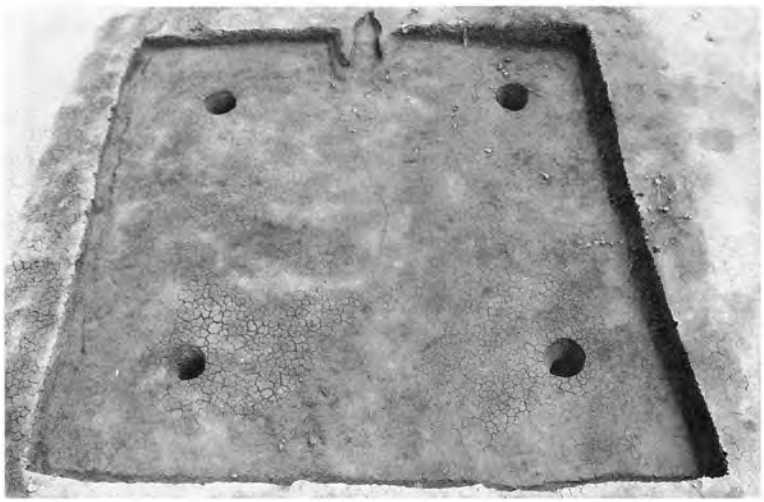
烟田川波遺跡全景

烟田城跡全景

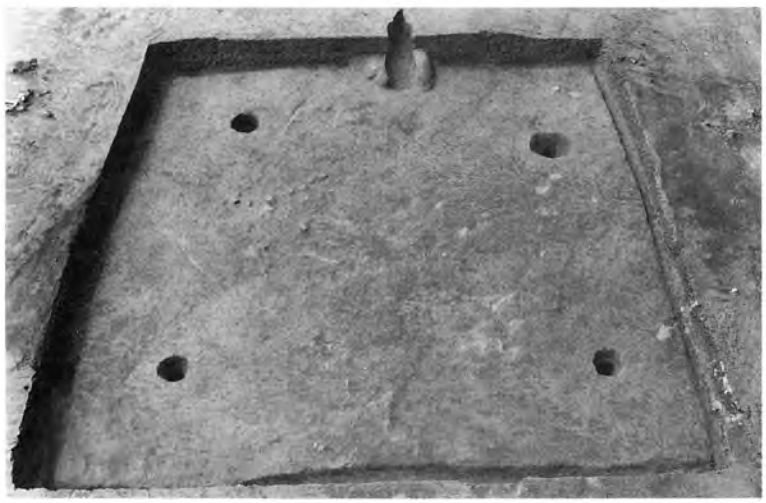
畑田川波遺跡



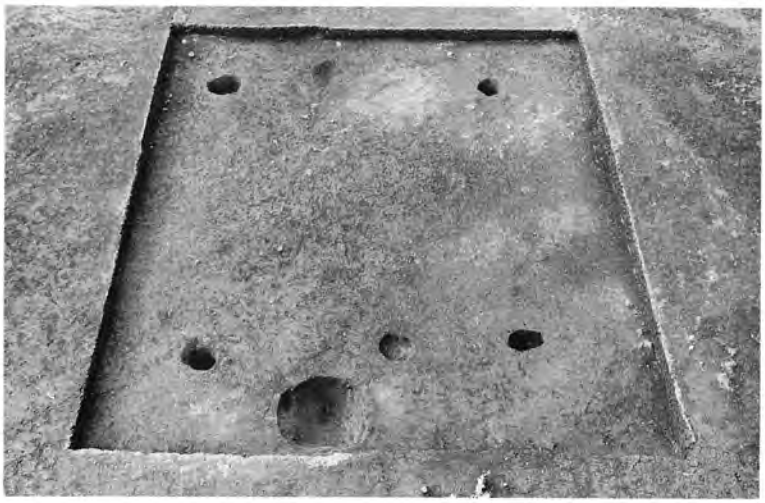
第1号住居跡



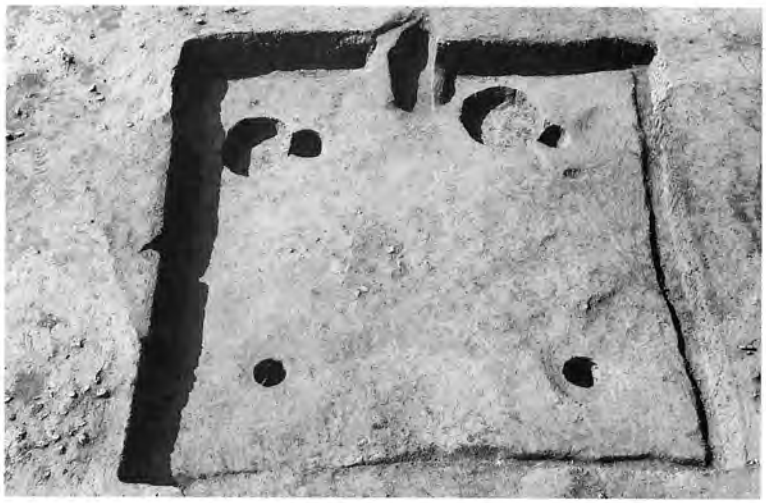
第2号住居跡



第3号住居跡



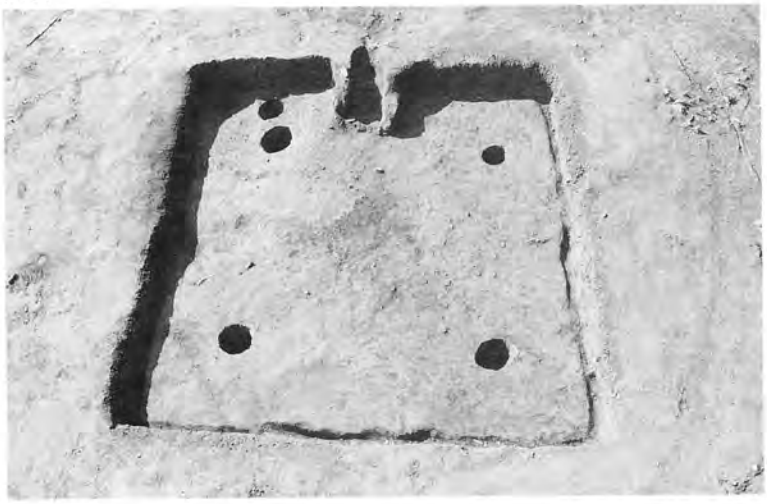
第4号住居跡



第5号住居跡

第6号住居跡

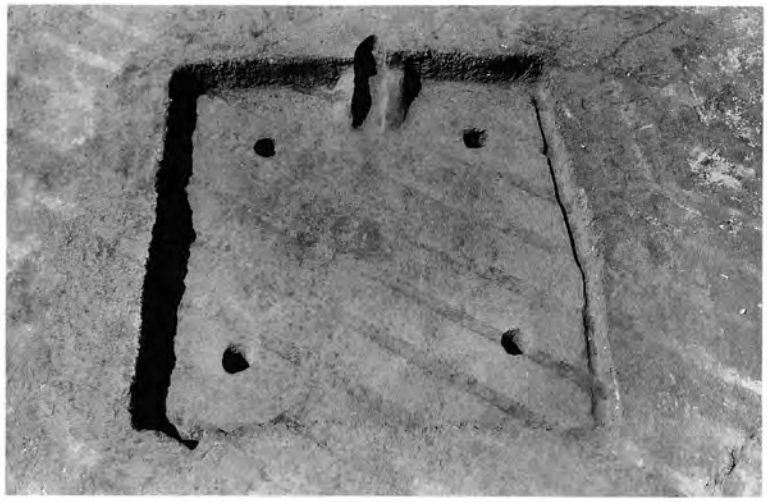
畑田川波遺跡



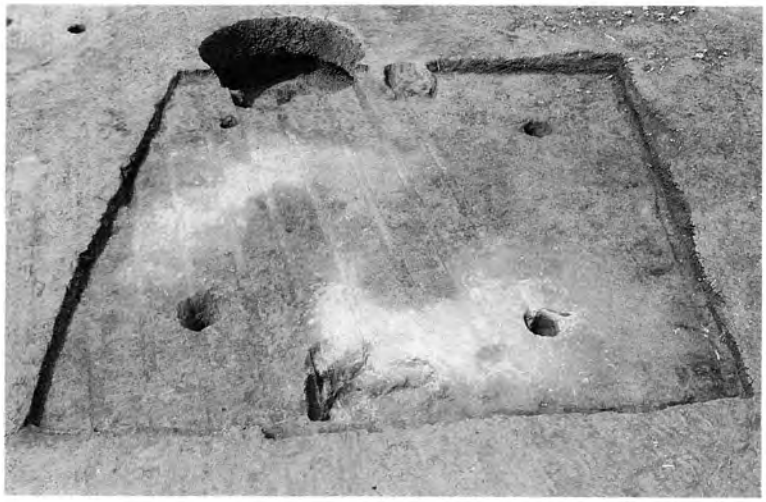
第7号住居跡

第7号住居跡
遺物出土状況

第7号住居跡
遺物出土状況



第 8 号住居跡



第 9 号住居跡

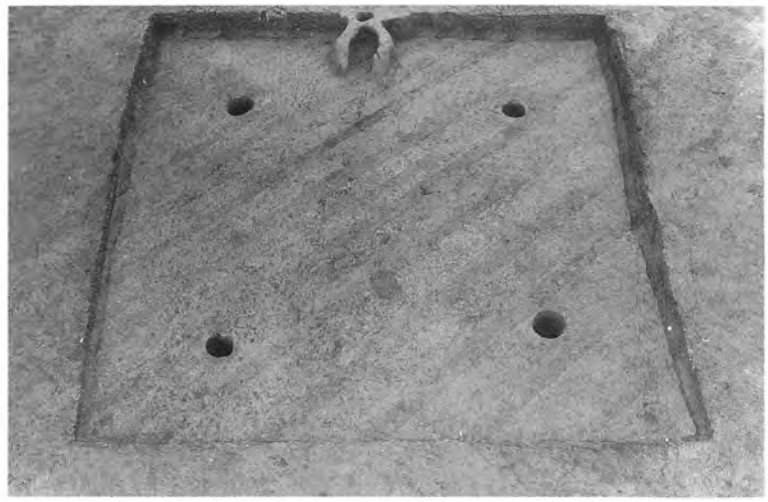
第 9 号住居跡
遺物出土状況

畑田川波遺跡

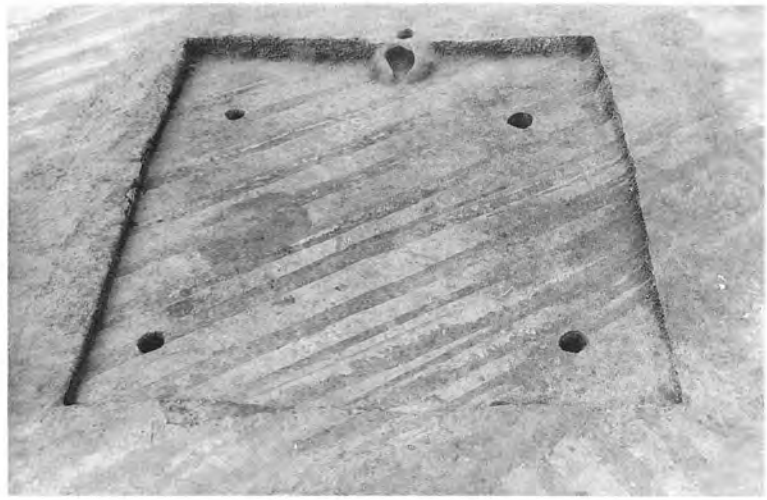
第9号住居跡
遺物出土状況

第10号住居跡

第10号住居跡
遺物出土状況



第11号住居跡

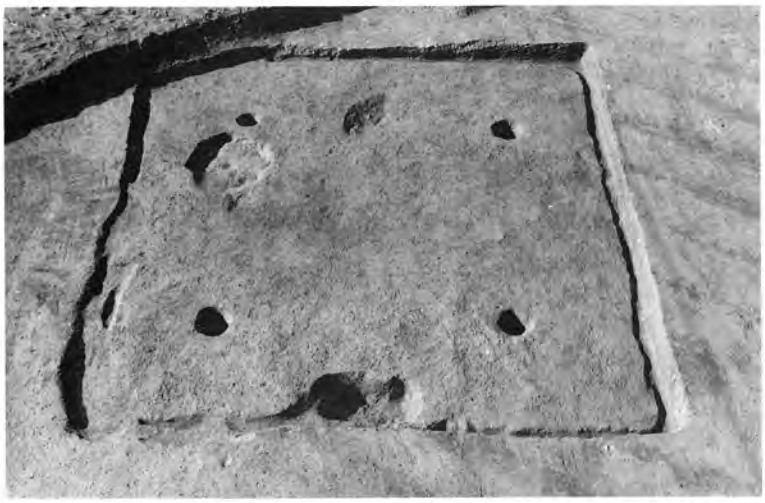


第12号住居跡

第13号住居跡

烟田川波遺跡

第14号住居跡



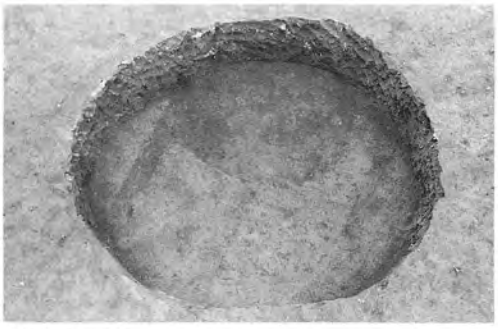
第15号住居跡

第15号住居跡
遺物出土状況

第２号土坑

第８号土坑

第９号土坑


第10号土坑

第18号土坑

第22号土坑

第29号土坑

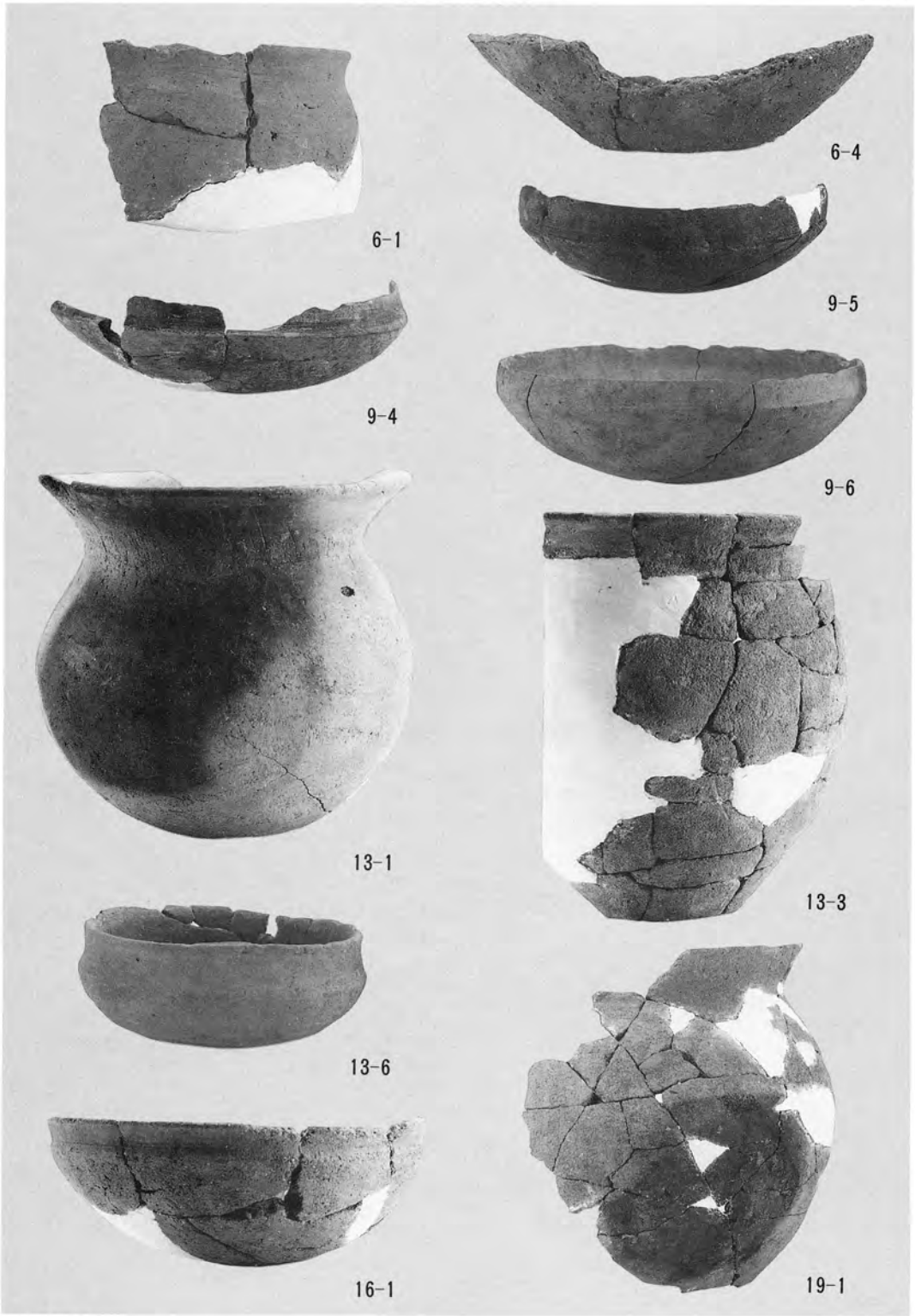
第31号土坑

畑田川波遺跡

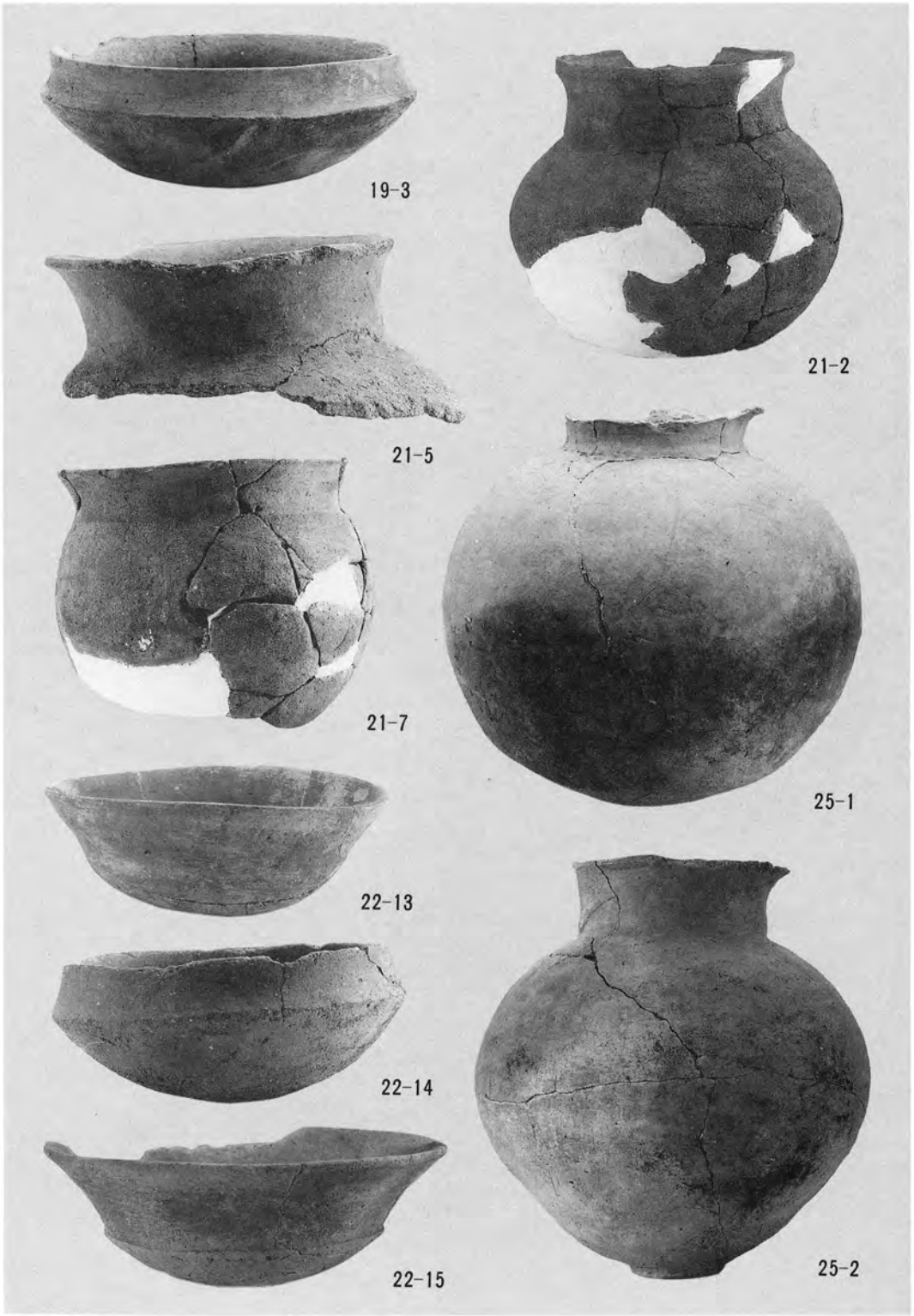
第1号溝

第3号溝

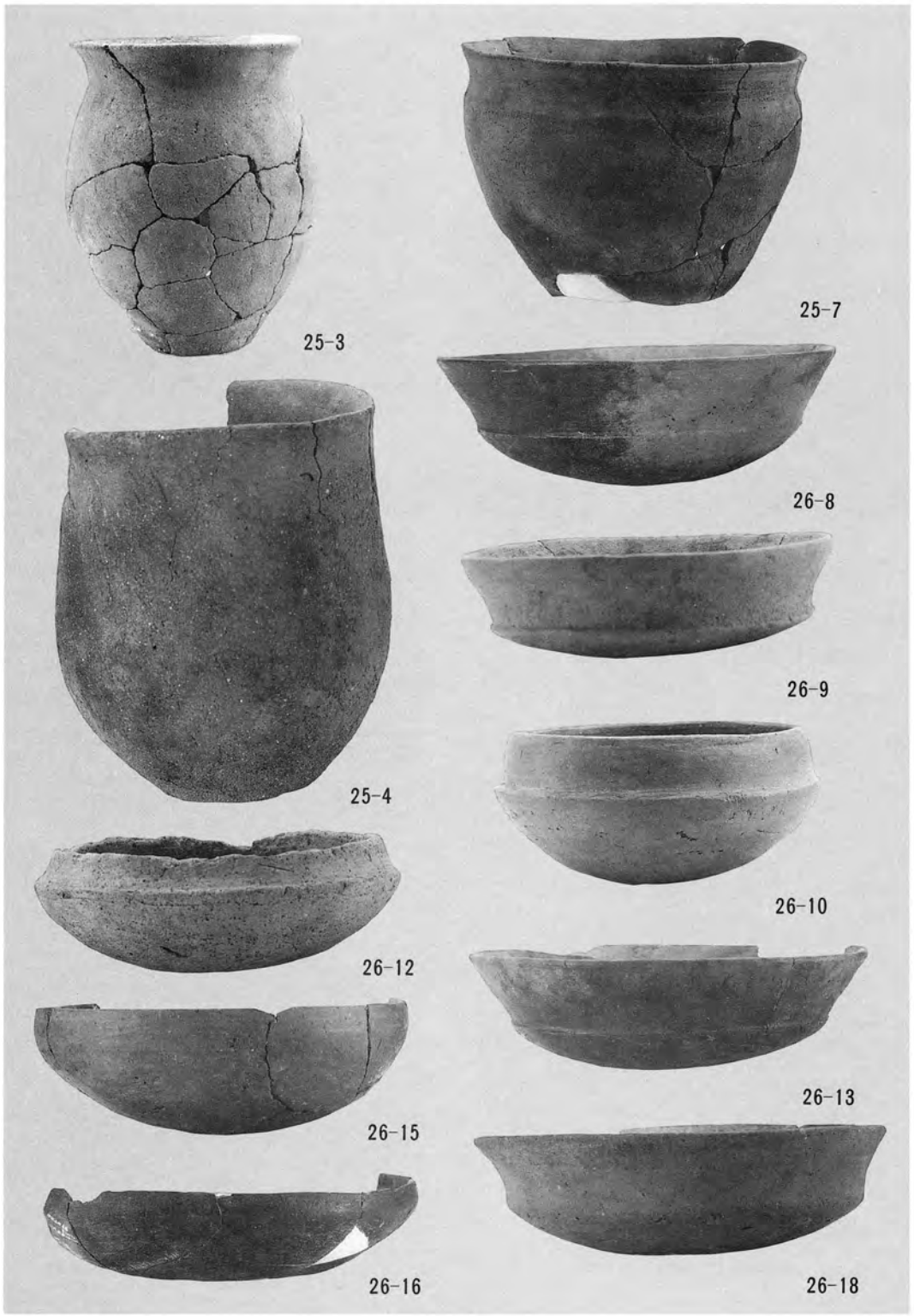
第1号堀



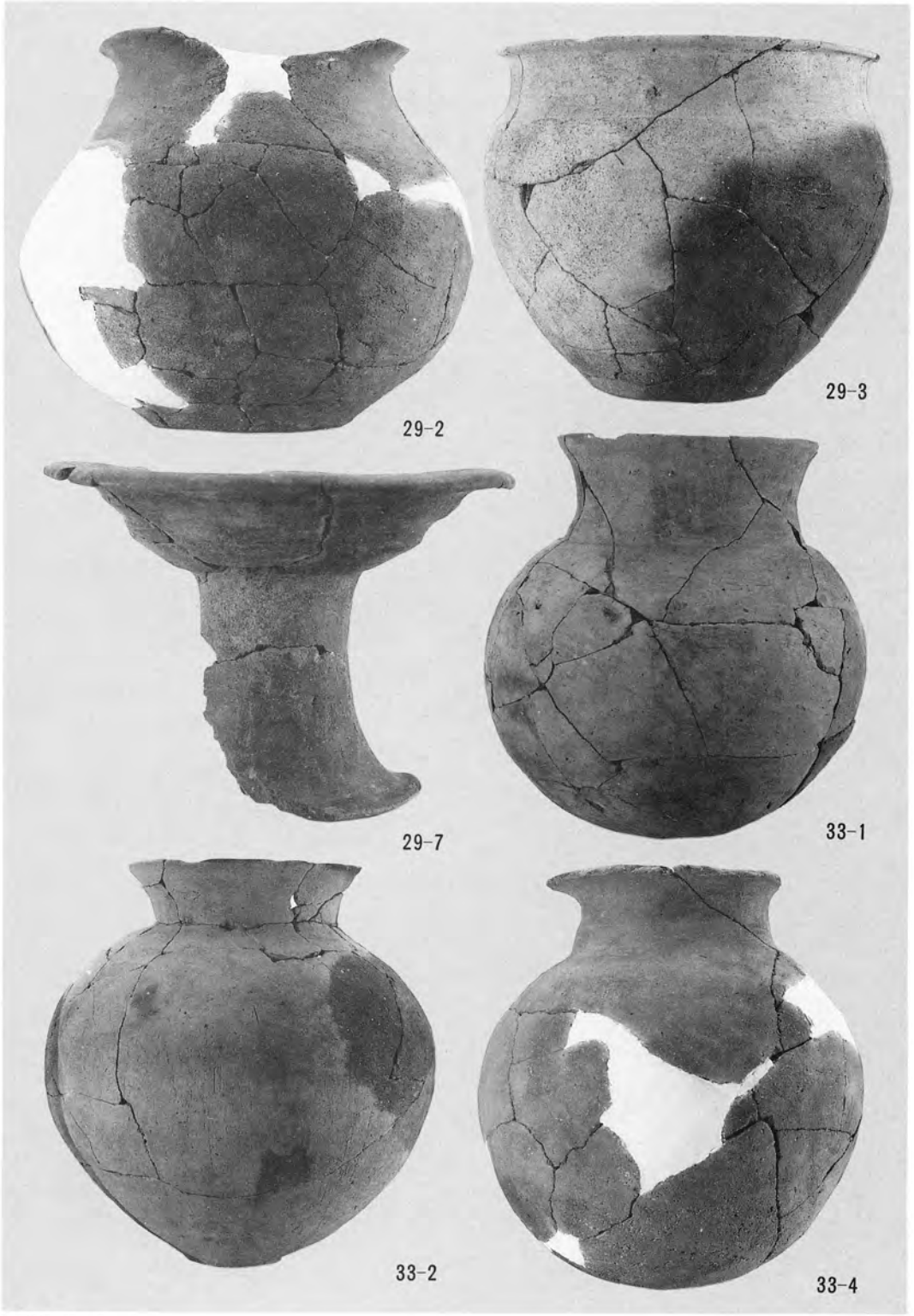
出土遺物(1)



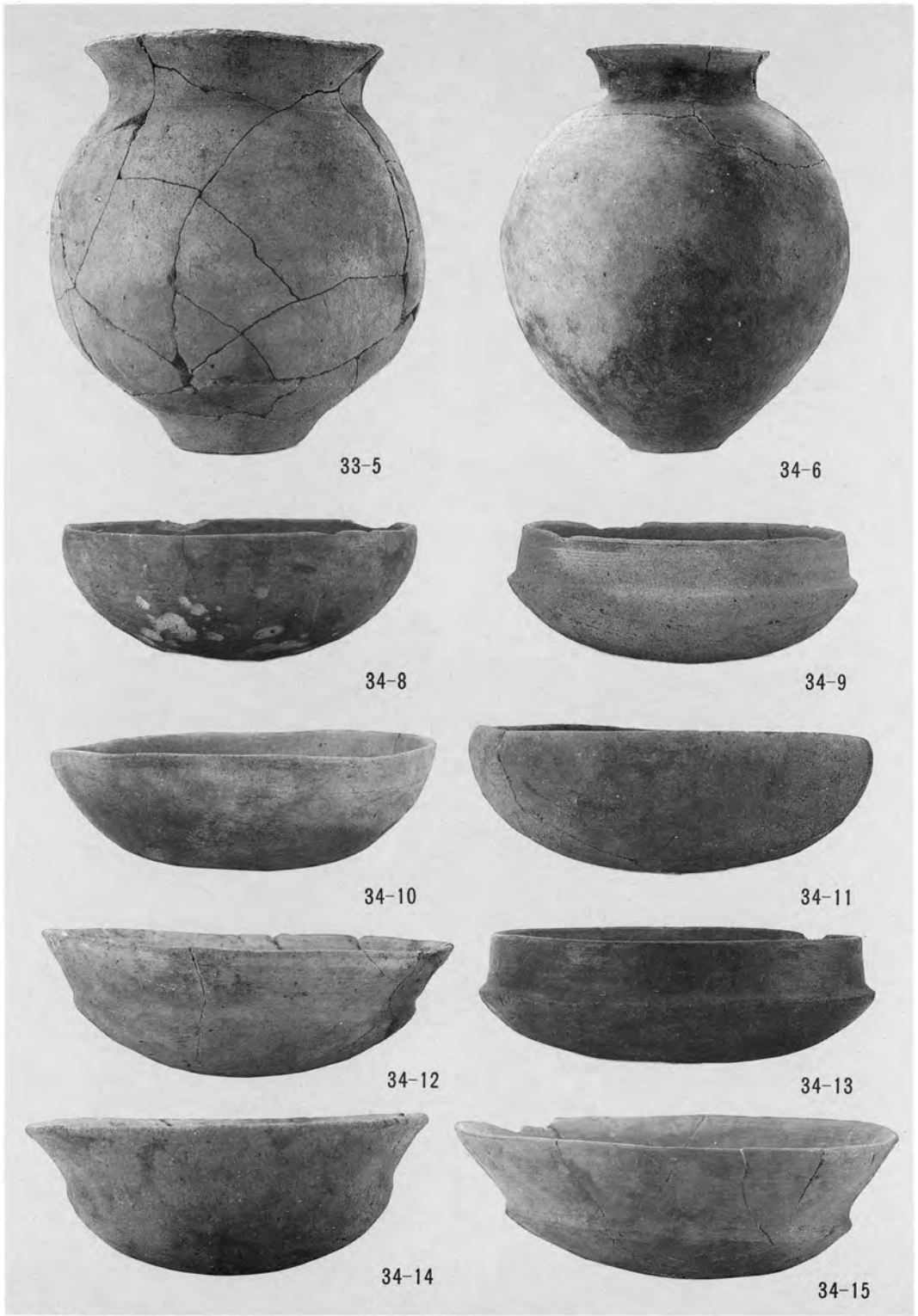
出土遺物(2)



出土遺物(3)

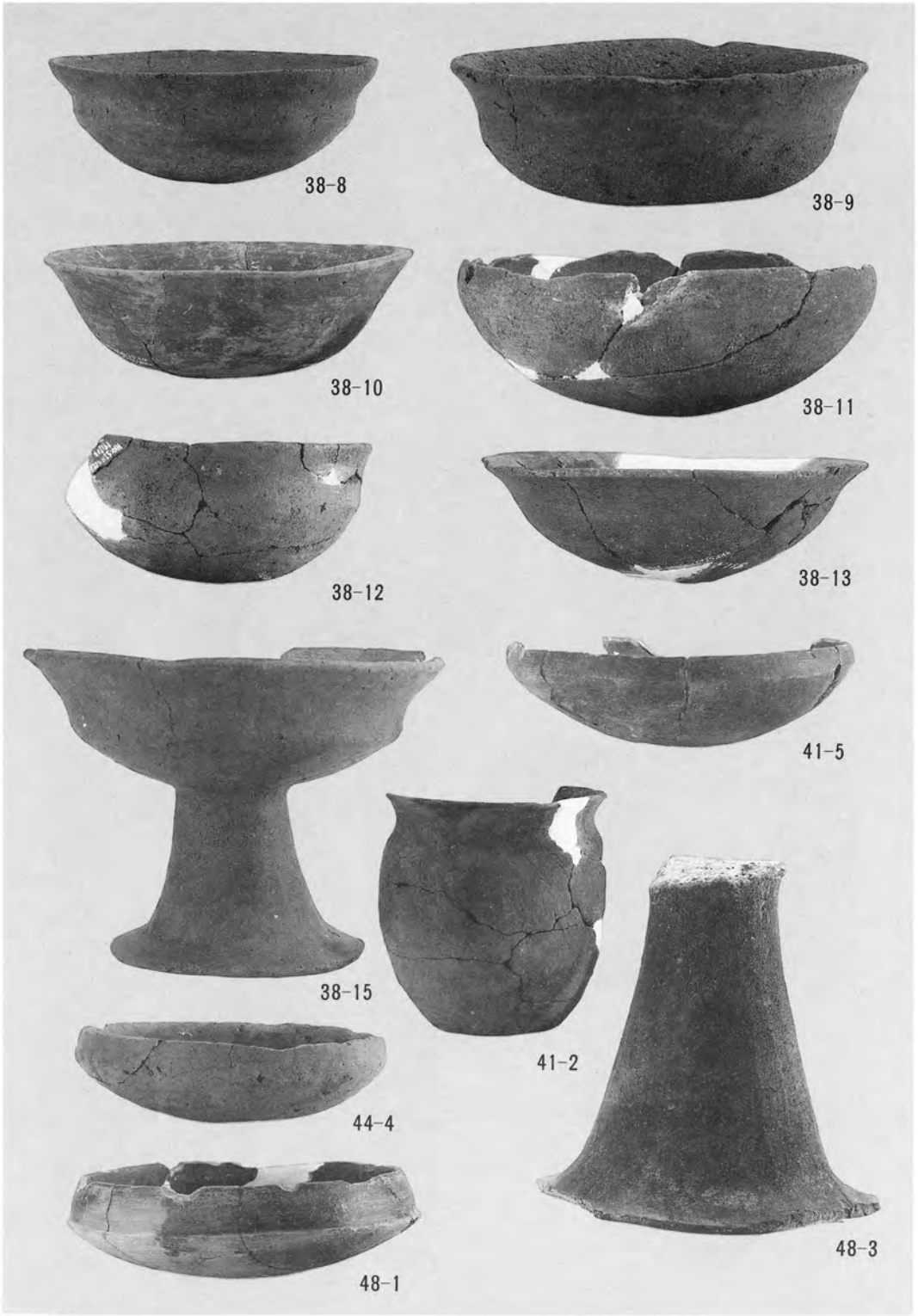


出土遺物(4)



出土遺物(5)

出土遺物(6)

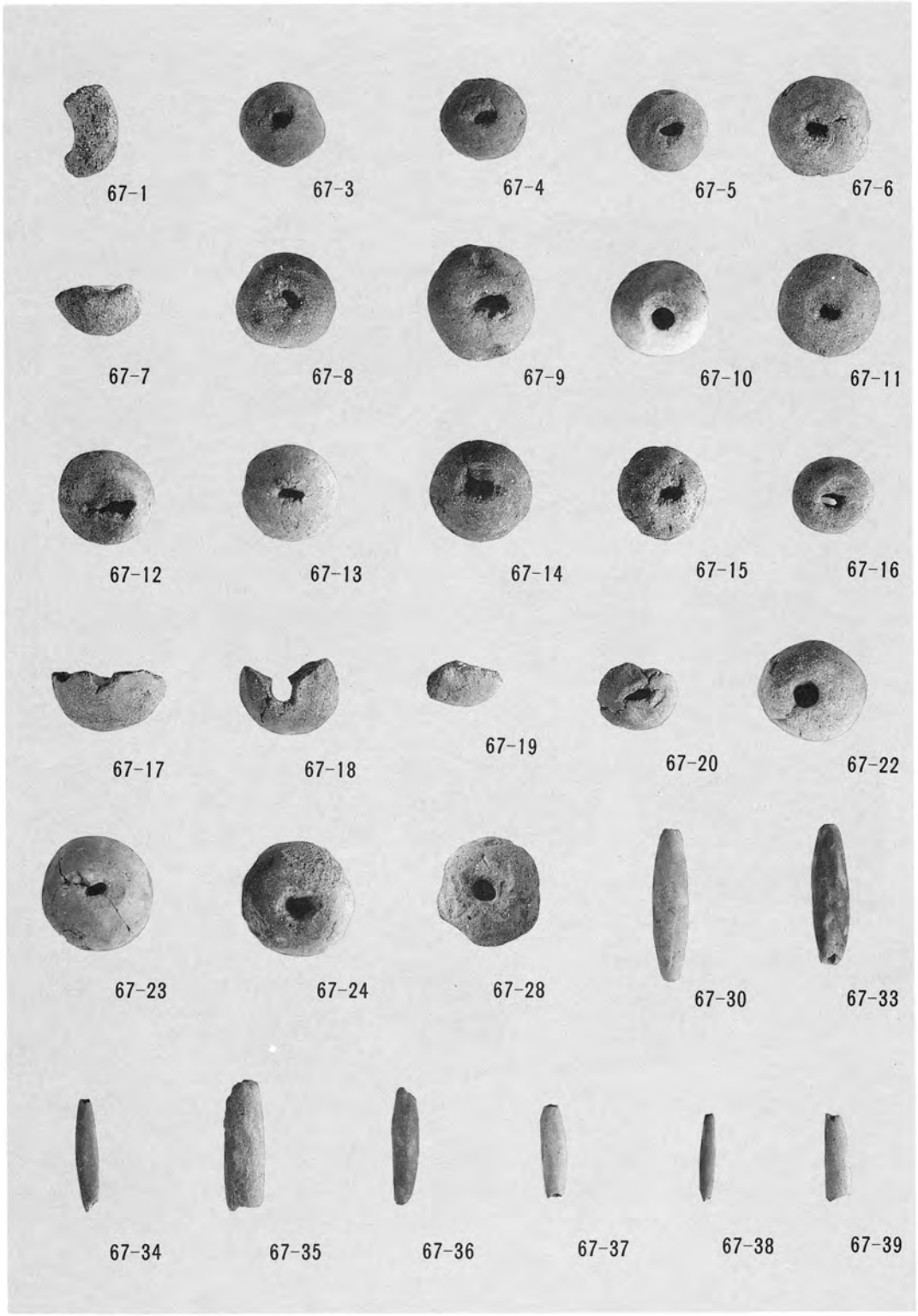


出土遺物(7)

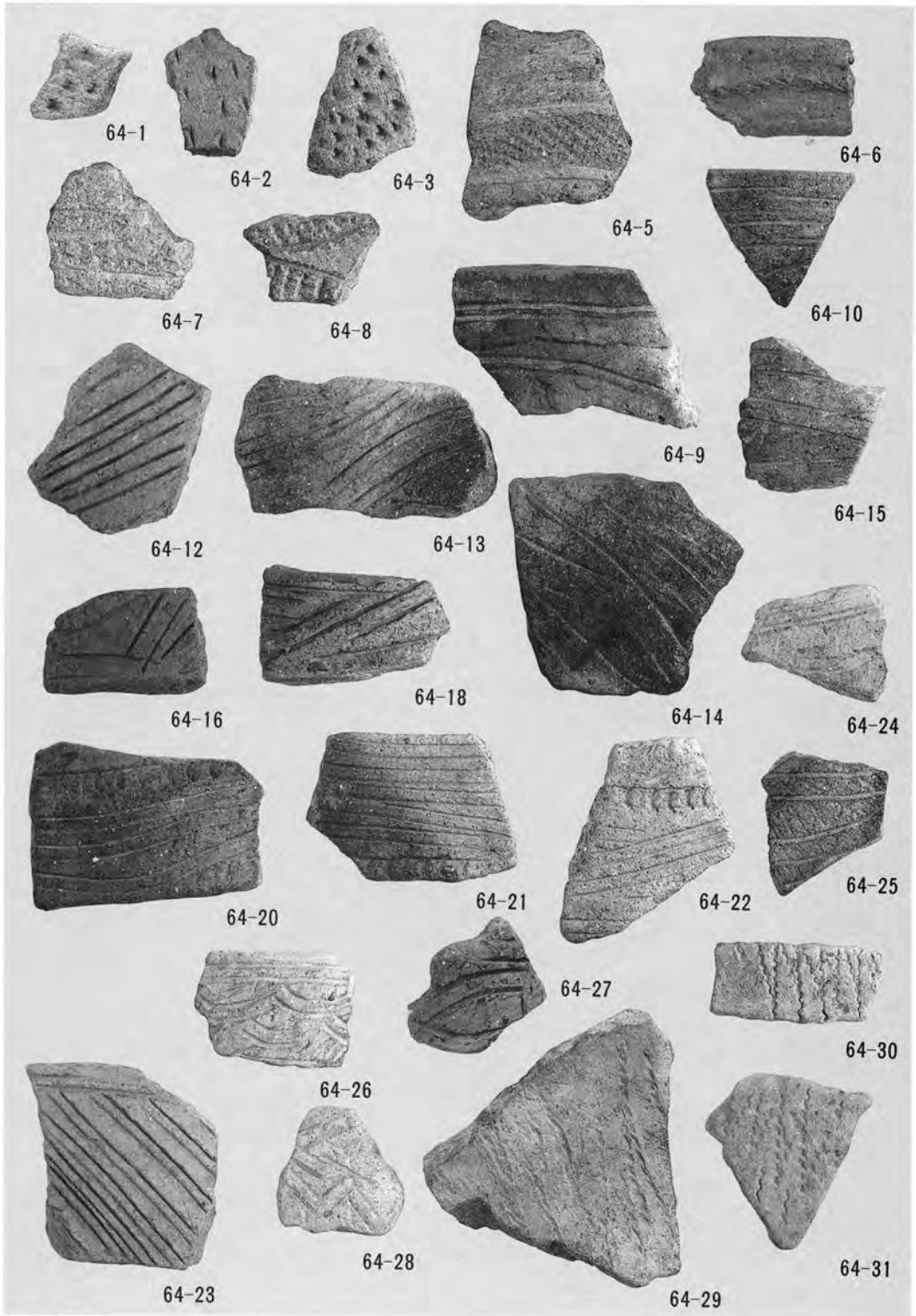
51-2

9-10
14-11
14-12
14-13
16-3
19-7
10-11
35-22
35-23
35-25
35-26
35-24
51-3
63-5
68-1

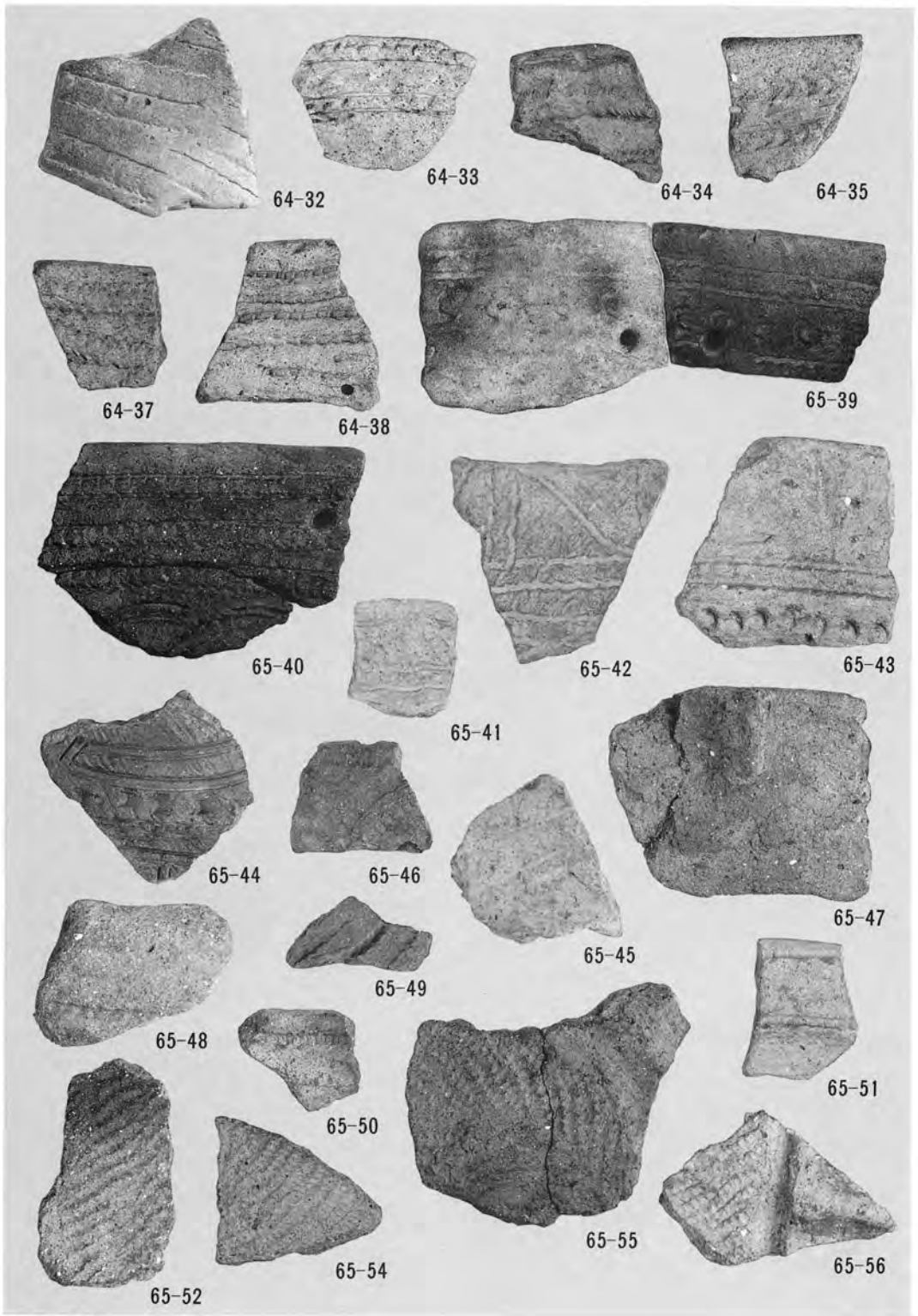
出土遺物(8)


67-1
67-3
67-4
67-5
67-6
67-7
67-8
67-9
67-10
67-11
67-12
67-13
67-14
67-15
67-16
67-17
67-18
67-19
67-20
67-22
67-23
67-24
67-28
67-30
67-33
67-34
67-35
67-36
67-37
67-38
67-39

出土遺物(9)

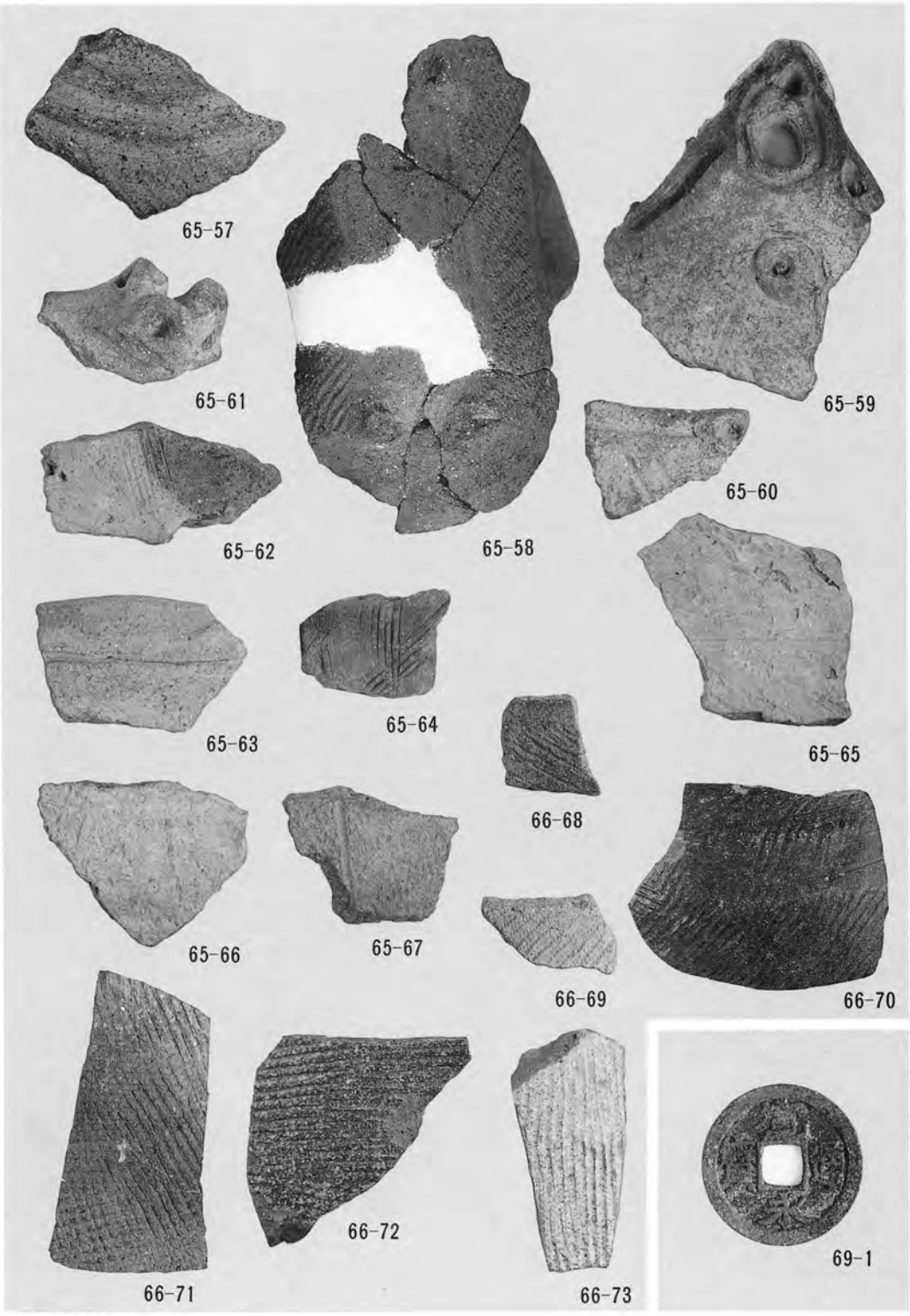

64-1
64-2
64-3
64-5
64-6
64-7
64-8
64-10
64-9
64-12
64-13
64-15
64-16
64-18
64-14
64-24
64-20
64-21
64-22
64-25
64-27
64-30
64-26
64-28
64-29
64-31
64-23

出土遺物(10)


64-32
64-33
64-34
64-35
64-37
64-38
65-39
65-40
65-41
65-42
65-43
65-44
65-46
65-45
65-47
65-48
65-49
65-50
65-51
65-52
65-54
65-55
65-56

出土遺物(11)

畑田川波遺跡



出土遺物(12)

第１号土坑

第７号土坑

第９号土坑

第11号土坑

第12号土坑

第15号土坑

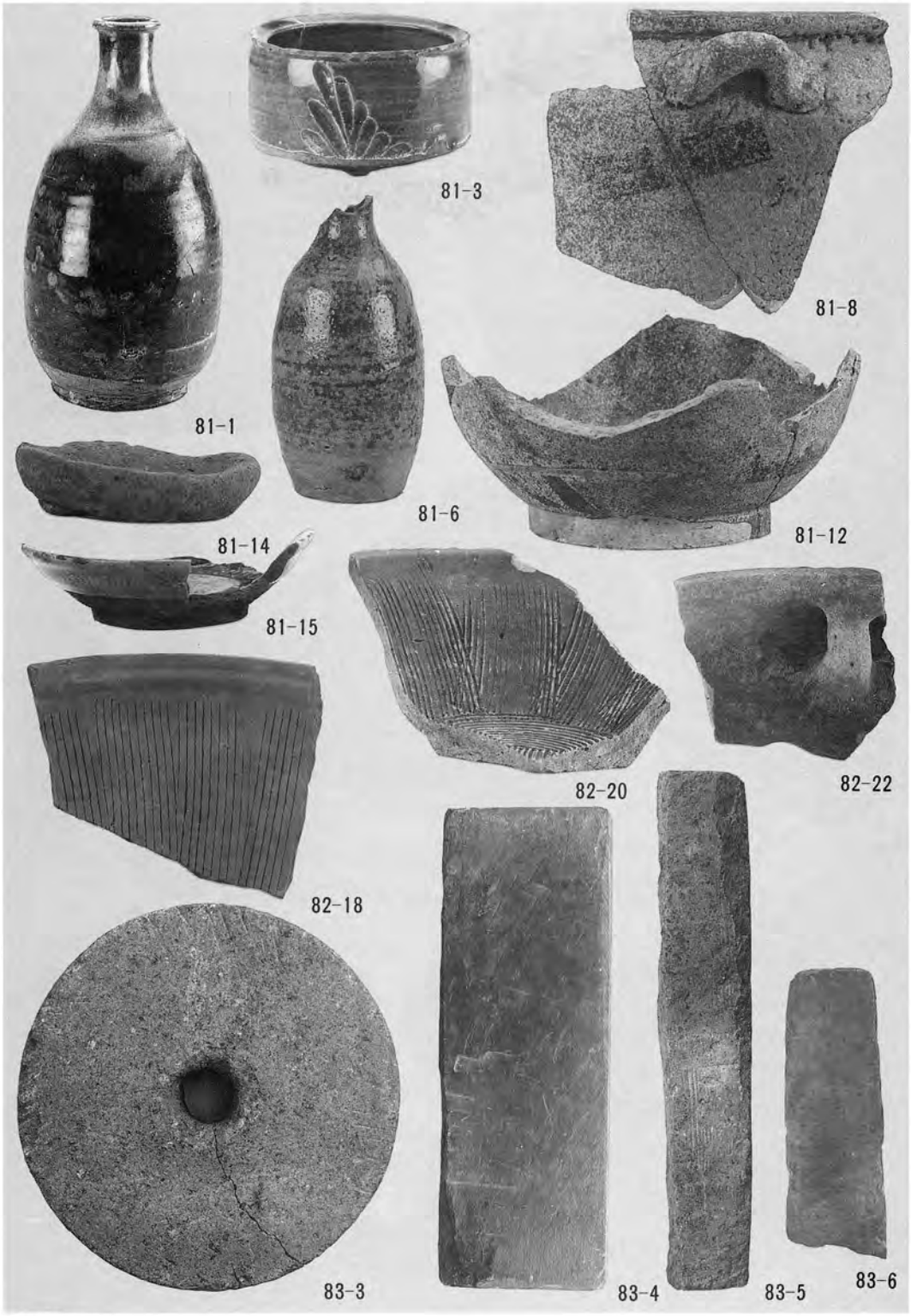
第16号土坑

第18～22号土坑

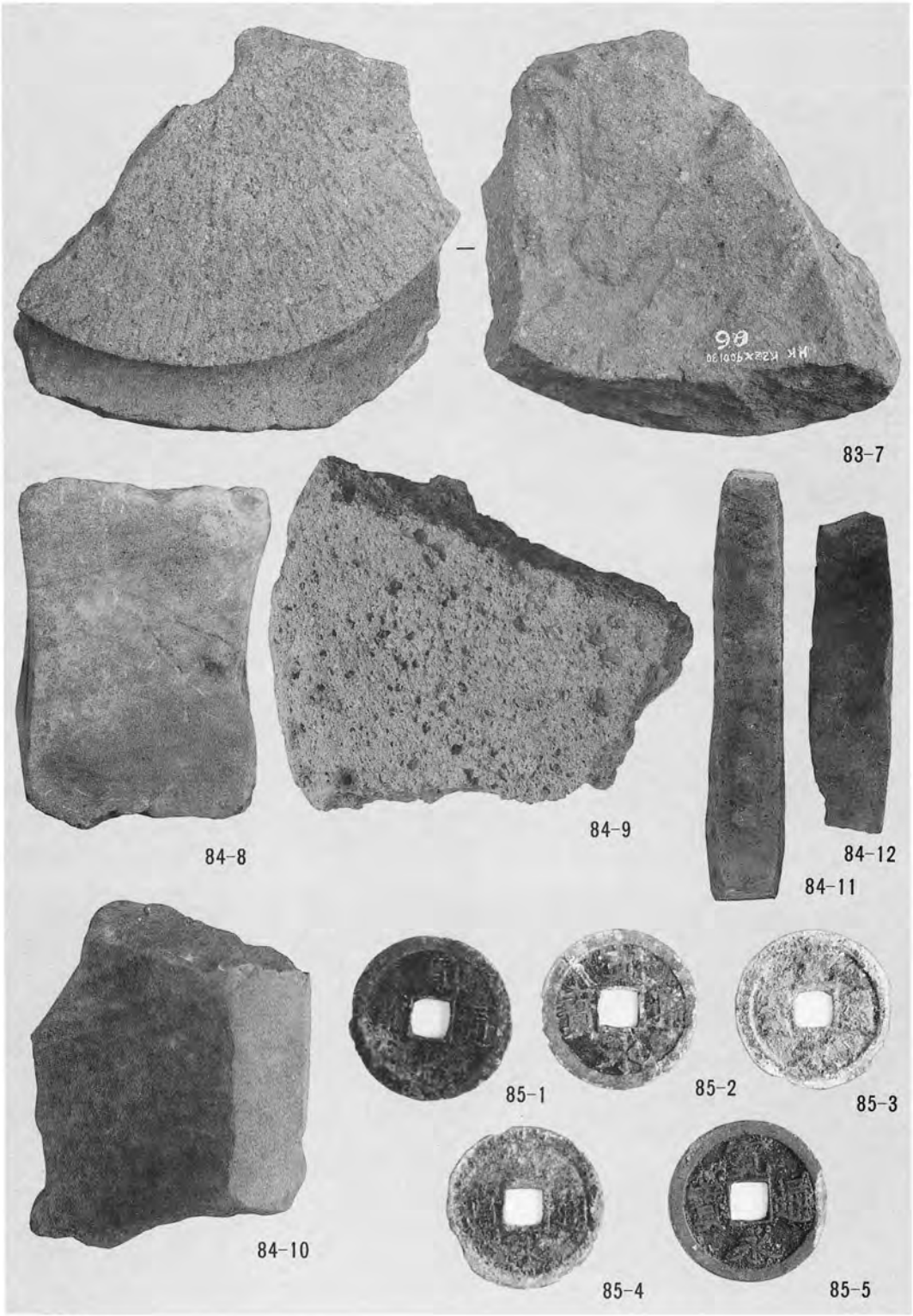
第1号溝
遺物出土状況

第3号溝

第1号堀



出土遺物(1)



出土遺物(2)

茨城県教育財団文化財調査報告第68集

都市計画道路3・4・2鉾田環状線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

畑田川波遺跡・畑田城跡

平成3年3月25日印刷
平成3年3月31日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
ＴＥＬ0292—25—6587

印刷　きど印刷株式会社
水戸市見川町2558—21
ＴＥＬ0292—41—2525